MOBILESUIT VARIATION

Federation Survey Service

RX
MOBILE SUIT

HANDBOOK

機動戦士ガンダム

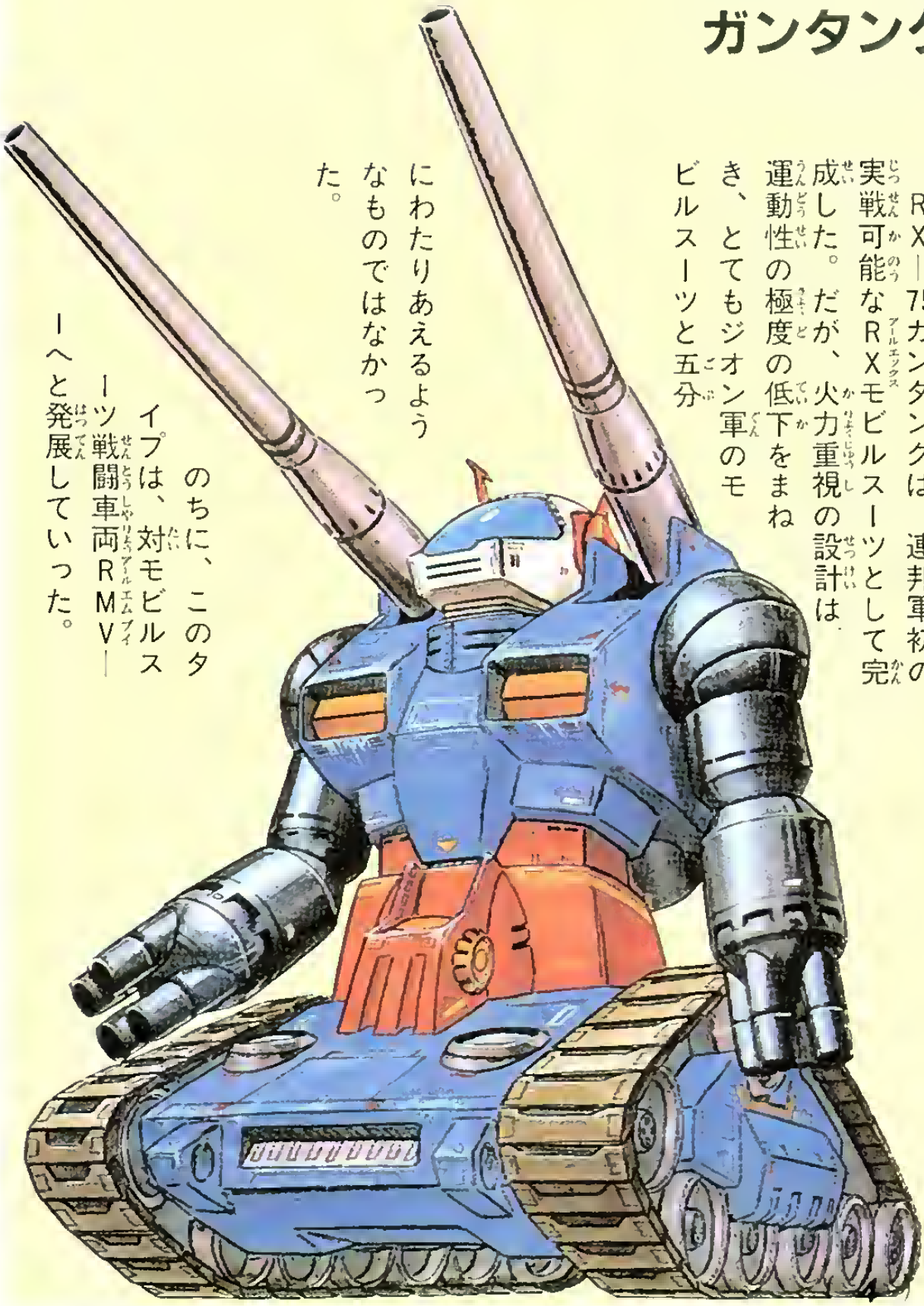
モビルスーツバリエーション③ 連邦軍編

RX—75 ガンタンク

（アールエックス）

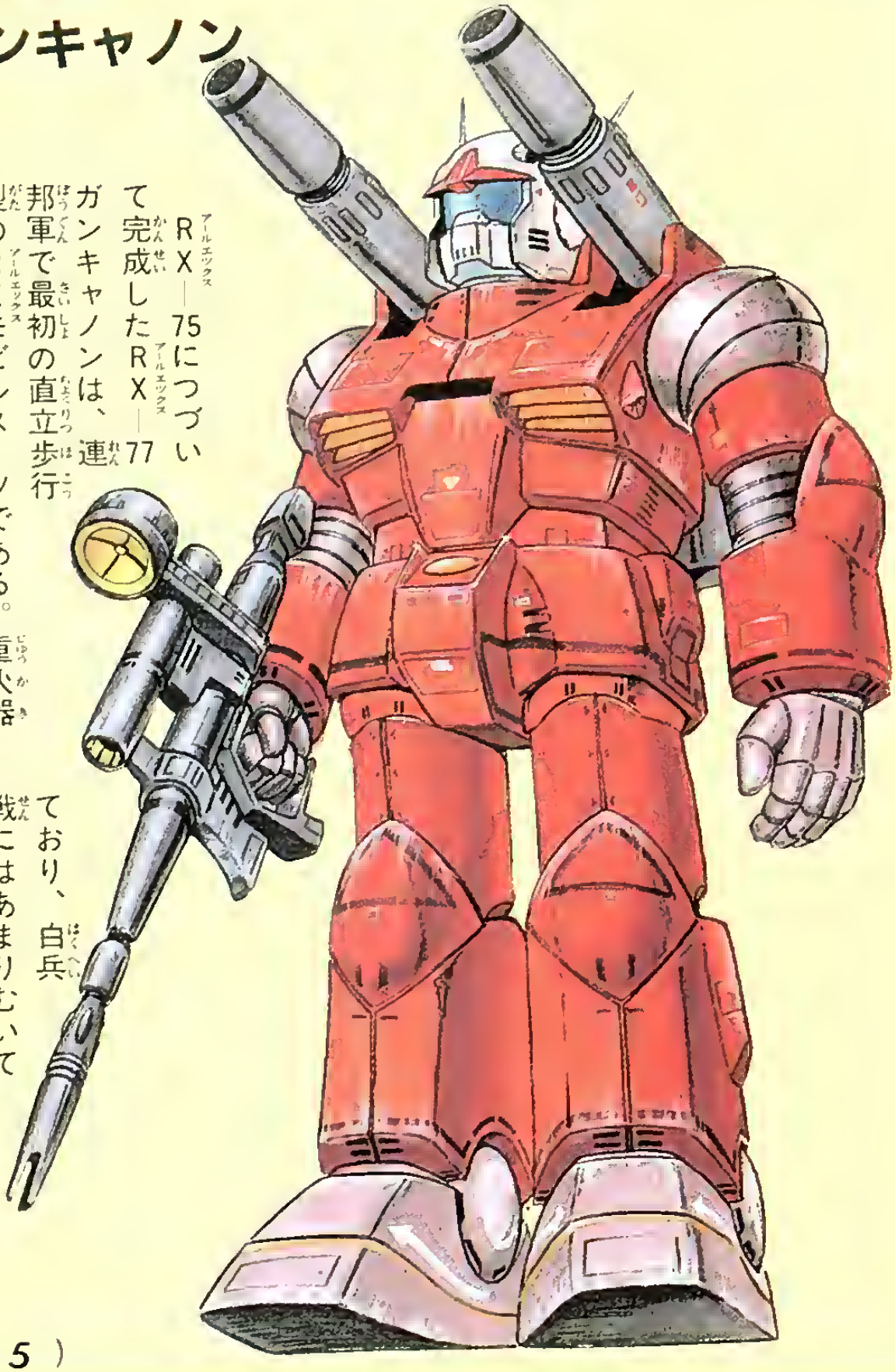
RX—75ガンタンクは、連邦軍初の実戦可能なRXモビルスーツとして完成した。だが、火力重視の設計は、運動性の極度の低下をまねき、とてもジオン軍のモビルスーツと五分にわたりあえるようなものではなかった。

のちに、このタイプは、対モビルスーツ戦闘車両RMV—Iへと発展していった。



RX—77—2
アールエックス

ガンキャノン



RX—75につづいて完成したRX—77ガンキャノンは、連邦軍で最初の直立歩行型のRXモビルスーツである。重火器による中距離攻撃を主目的につくられており、白兵戦にはあまりむいていない。

RX—77—3
ガンキャノン

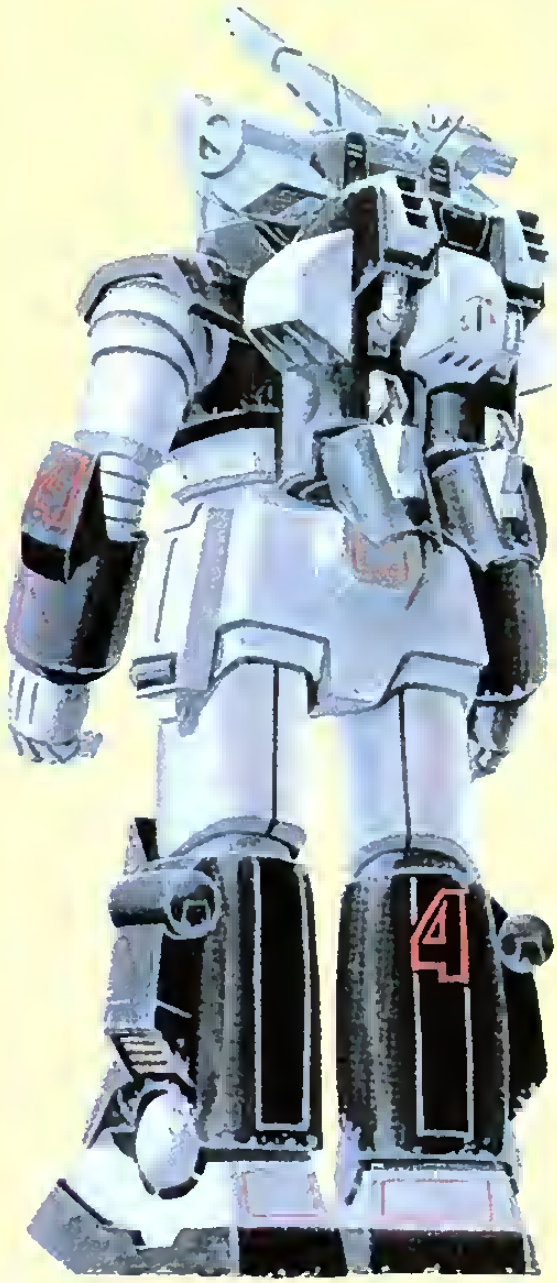
V作戦によって完成したRX—77タイプは、さまざまな改良をうけることとなり、やがてRGC—80GMキャノンへと発展していく。この途上でうまれたRX—77—3は、重装型とよばれるもので、装甲や搭載火器、射撃時の反動の問題などが改良されている。開発にあたって要求された点は、単独または同機種編成による集団戦が可能なことであった。だが、集団戦はまだしも、単独行動を可能たらしめるには改良の余地がかなりあった。

●モビルスーツバリエーション

MSV

ガンキャノンII

大戦中期に完成したRX―77―4ガンキャノンIIは、RX―77―3の発展型である。特徴は、ビームキャノンと精密照準システムを搭載したことである。キャノン砲は右肩に一門だけになったが、連射ができるようになった。また、重量の軽減とバーニヤの強化により、ジャンプ飛行が可能である。完成した機体は、実戦テストをかねて北アメリカ戦線に参加している。

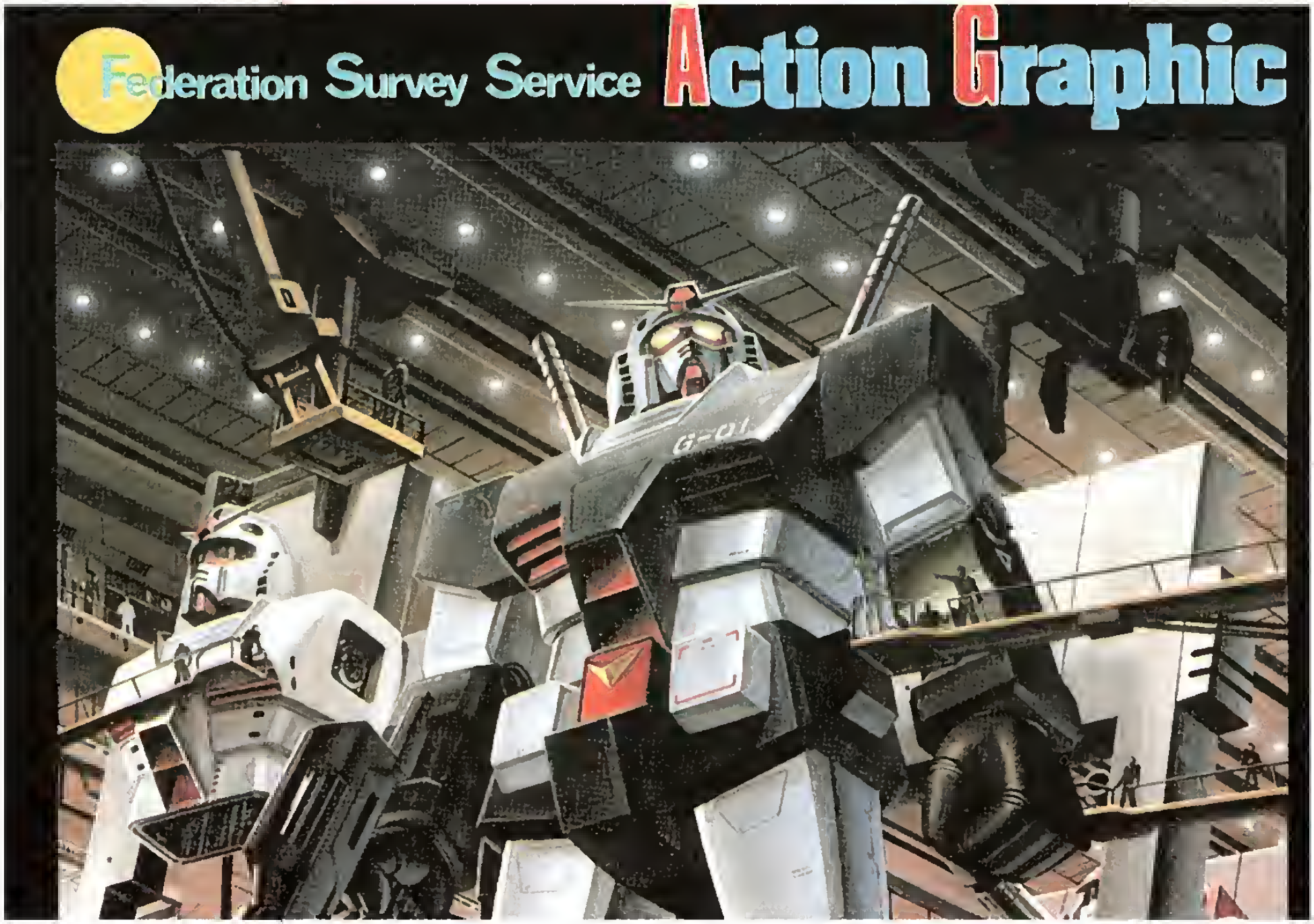


RX―77―4

アールエックス

Federation Survey Service

Action Graphic

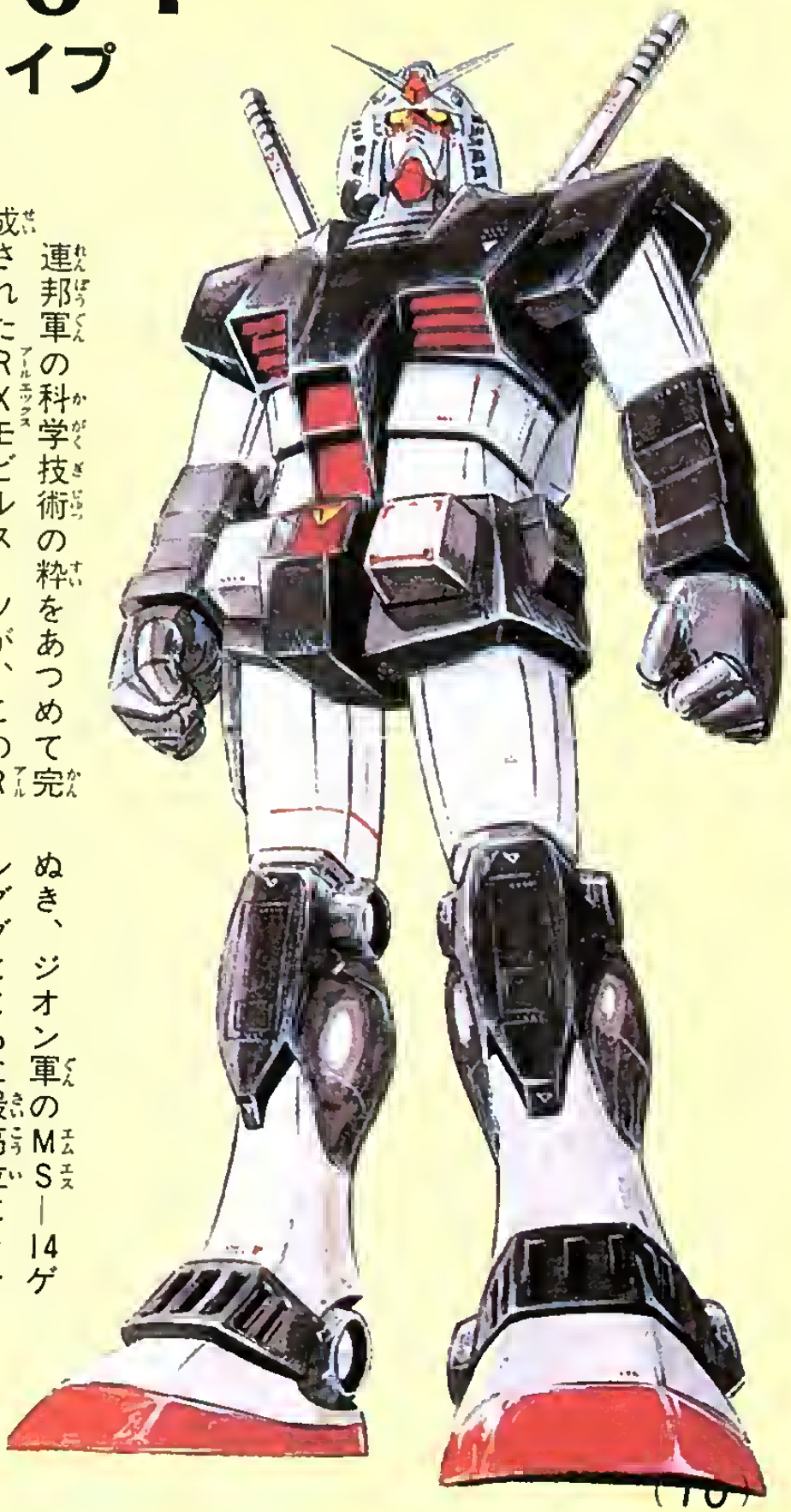


RX－78－1（アールエックス）プロトタイプガンダム

●解説（かいせつ）は、一七〇ページにあります。

アールエックス

RX—78—1
プロトタイプガンダム



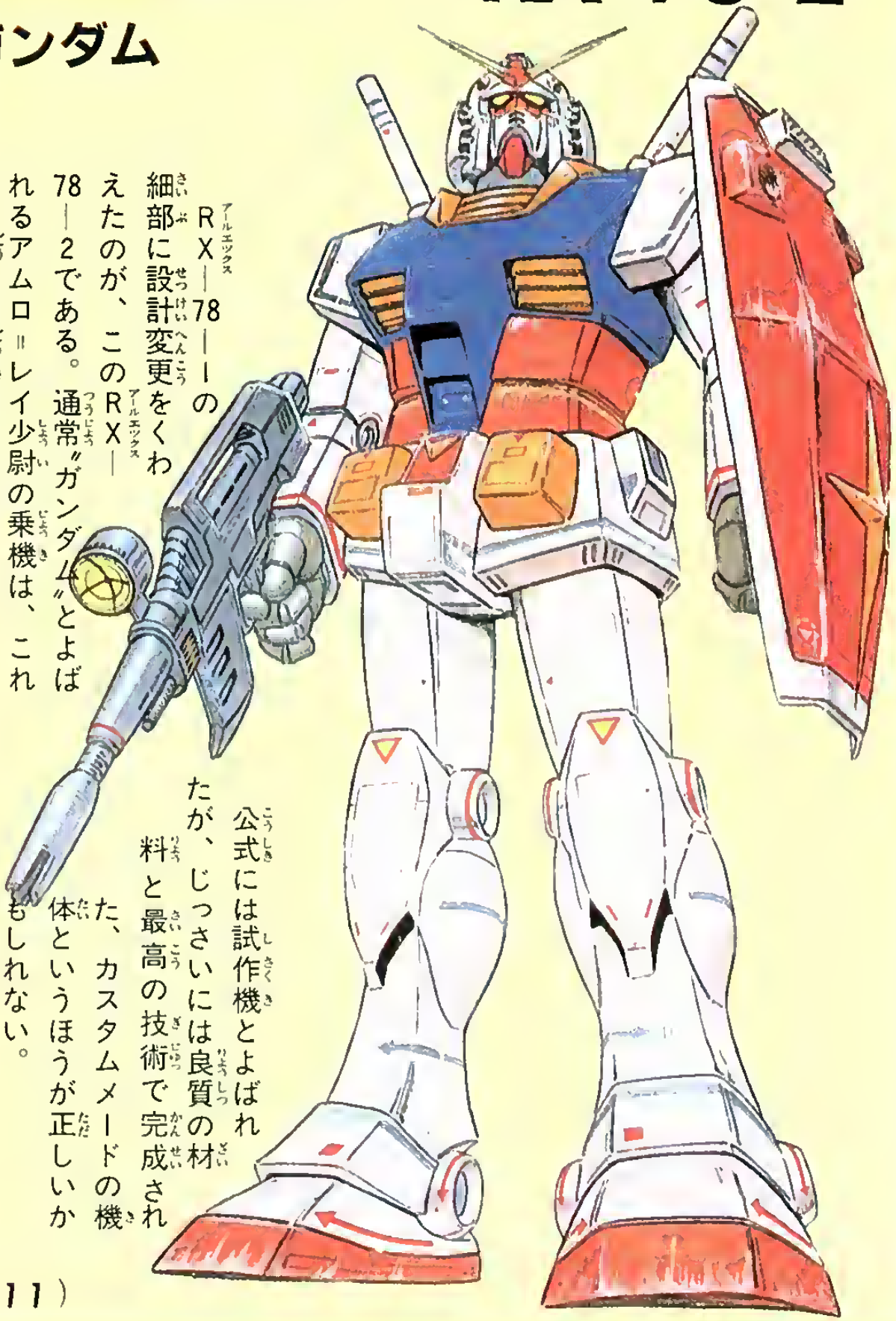
連邦軍の科学技術の粋をあつめて完成されたRXモビルスーツが、このRX—78タイプである。開発にあたっては、ジオン軍のモビルスーツ、とくにMS—06Fザク IIのデータを徹底的に研究している。完成度の高さは群をぬき、ジオン軍のMS—14ゲルググとともに最高位にランクされている。

なお、RXモビルスーツとは、連邦軍におけるモビルスーツの正式名称である。

●モビルスーツバリエーション

MSV RX-78

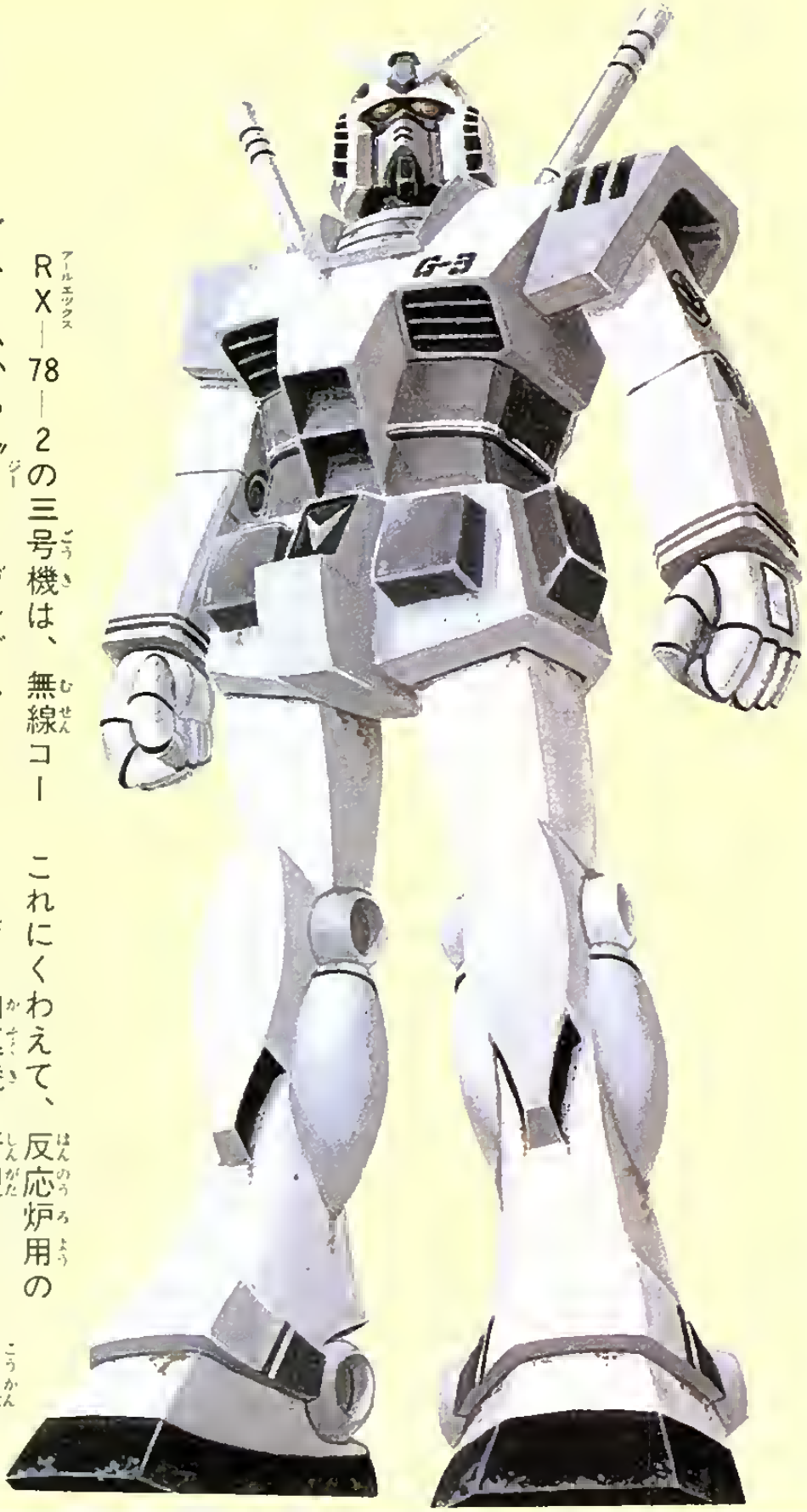
アールエックス
RX—78—2
ガンダム



アールエックス
RX—78—2の細部に設計変更をくわえたのが、このRX—78—2である。通常〝ガンダム〟とよばれるアムロ＝レイ少尉の乗機は、これの二号、三号機であった。

公式には試作機とよばれたが、じっさいには良質の材料と最高の技術で完成された、カスタムメードの機体というほうが正しいかもしれない。

G—3 ガンダム

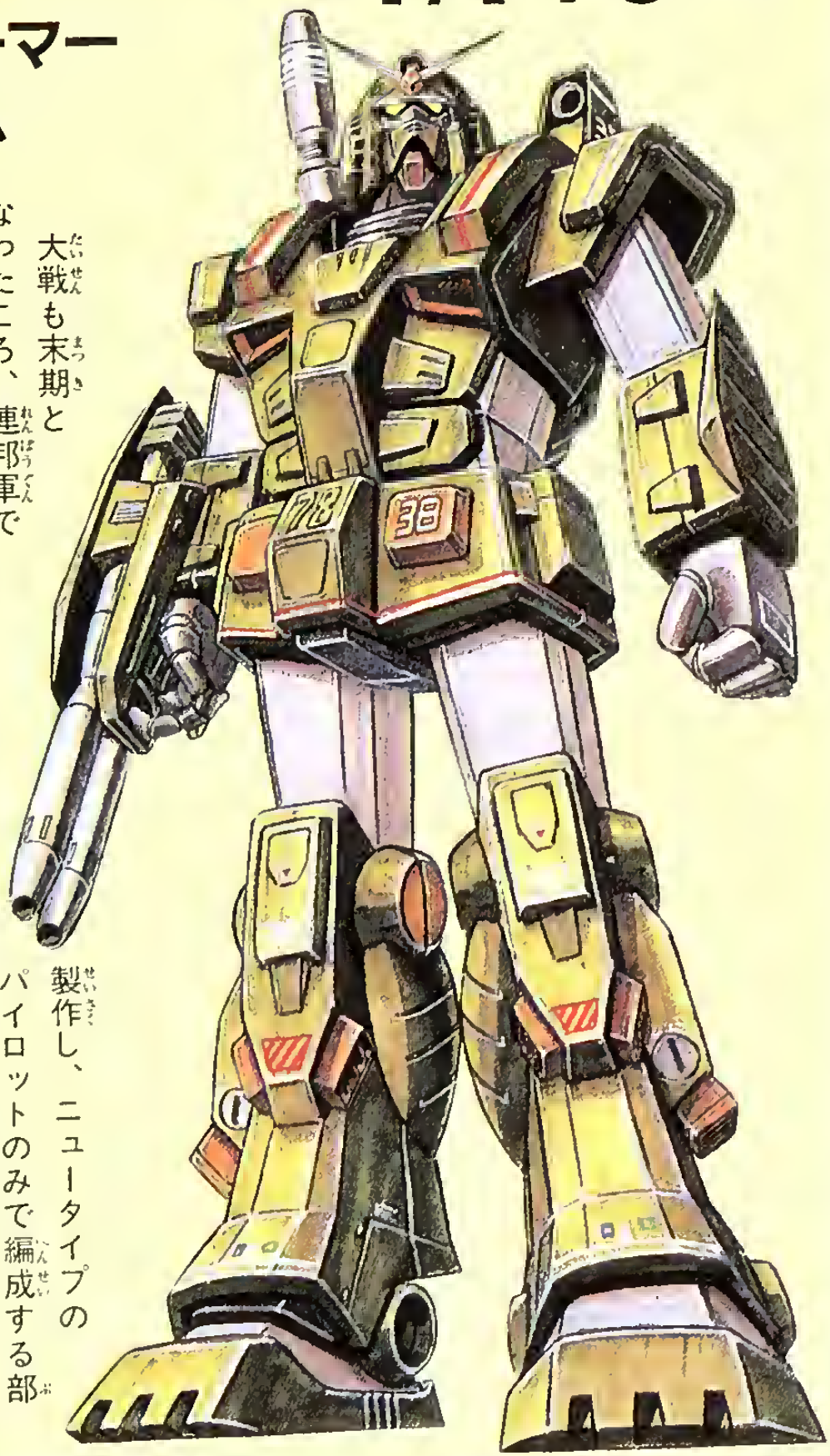


RX—78—2の三号機は、無線コードネームから〝G—3ガンダム〟とよばれた。この機体には、モスク＝ハン博士が完成させた理論にもとづき、各関節にマグネットコーティングがほどこされ、レスポンスが速くなっている。これにくわえて、反応炉用のレーザー加速機も新型のものに交換され、それまで実戦にあった二号機の二倍の運動性能をもつこととなった。このため、他機と区別した名称でよばれることとなったのである。

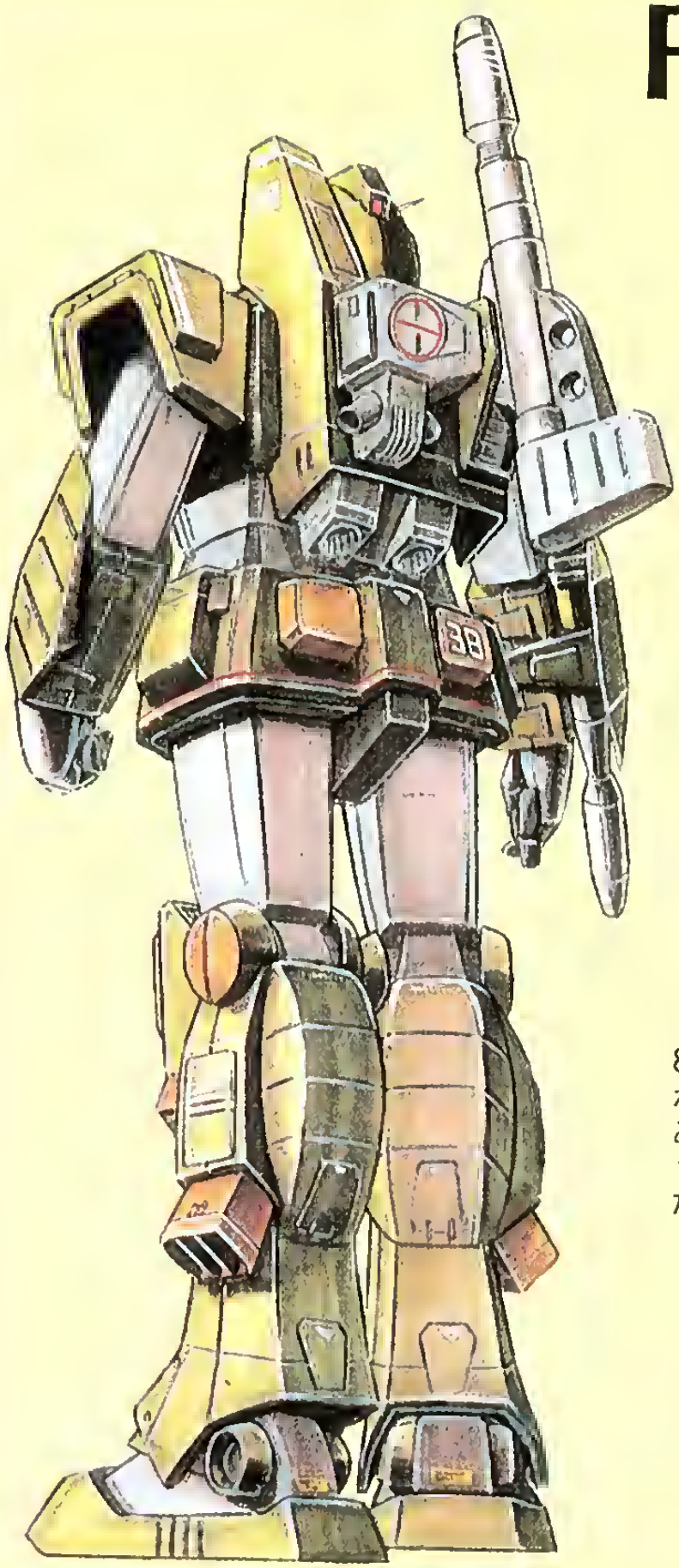
●モビルスーツバリエーション

MSV

FA—78—1 フルアーマーガンダム



大戦も末期となったころ、連邦軍ですすめられていたプランのなかに、RX—78用の増加ウェポンシステムの開発があった。それまでにつくられたRX—78の機数にあわせて増加武装を製作し、ニュータイプのパイロットのみで編成する部隊が使用するという内容であった。この計画はFSWSのコードネームでよばれ、増加武装したRX—78は、FA—78—1とよばれる予定であった。



FA-78-1 フルアーマーガンダム

FA-78-1は、機体各所に簡易装着式の増加装甲がとりつけられ、武装として、背部パーツに一体化したロケット砲と、右腕に二連装ビームライフルをもつ。また、オプションでビームサーベルが用意されており、肩とひざには、ミサイル発射装置があった。脚部に補助バーニヤが装備されたとはいえ、武装強化にともなう重量の増加が性能面にどのような影響をあたえたのかは、データ不足のためはっきりしていないが、このプランの延長上に、RX-81があった。

Federation Survey Service

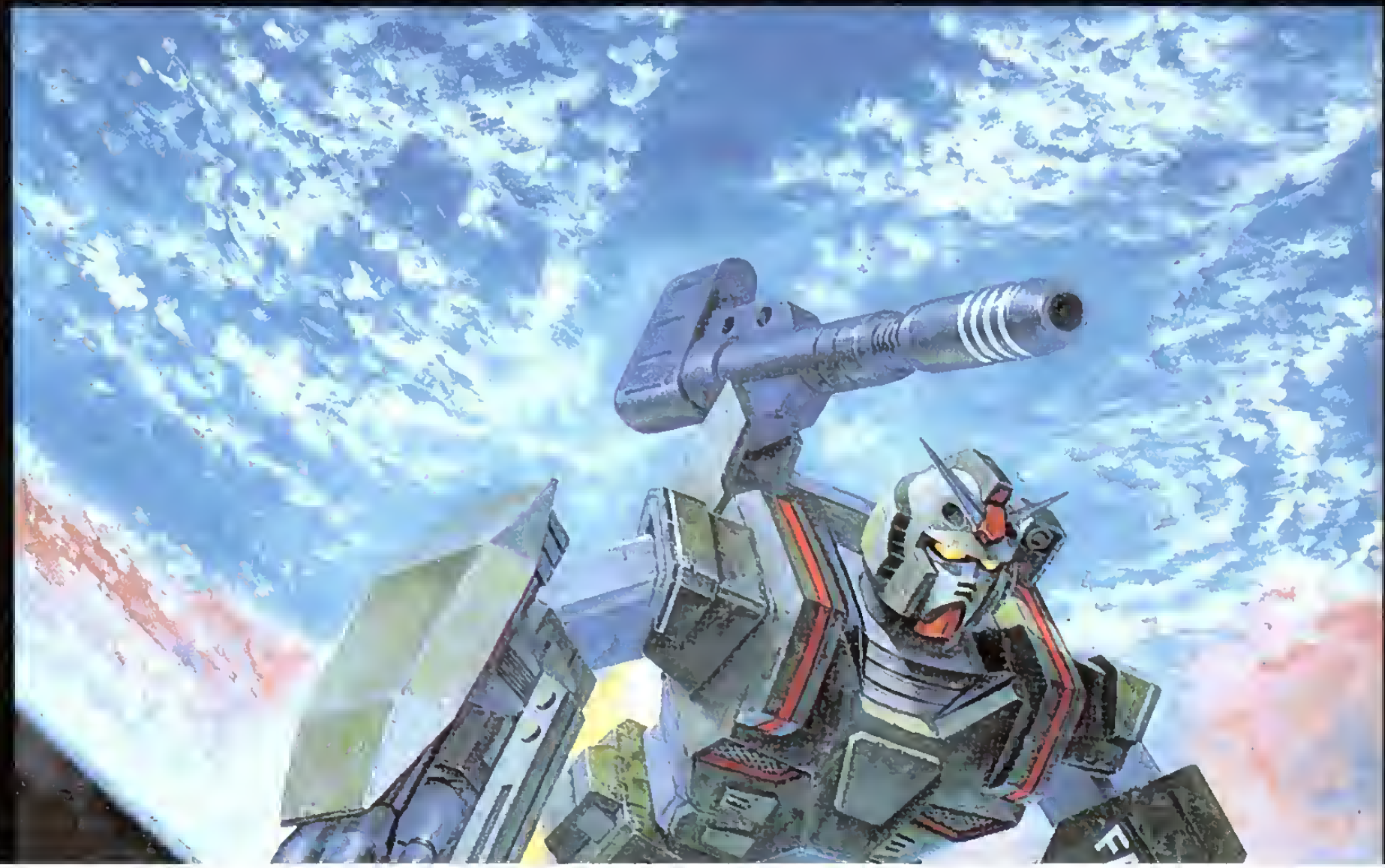
Action Graphic

FA-78-1 フルアーマーガンダム

●解説は、一七二ページにあります。

Federation Survey Service

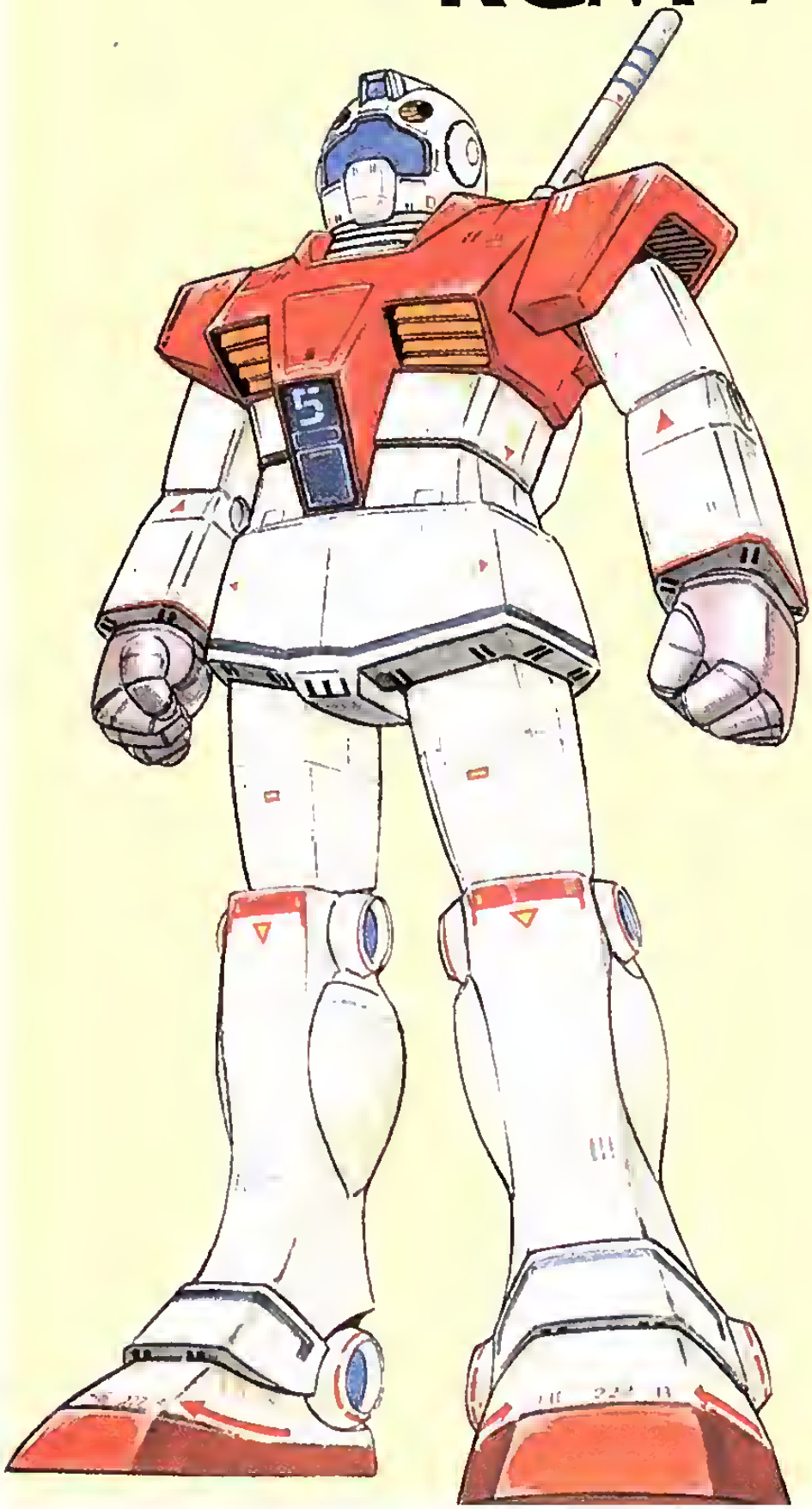
Action Graphic



FA—78—1 フルアーマーガンダム

●解説は、一七四ページにあります。

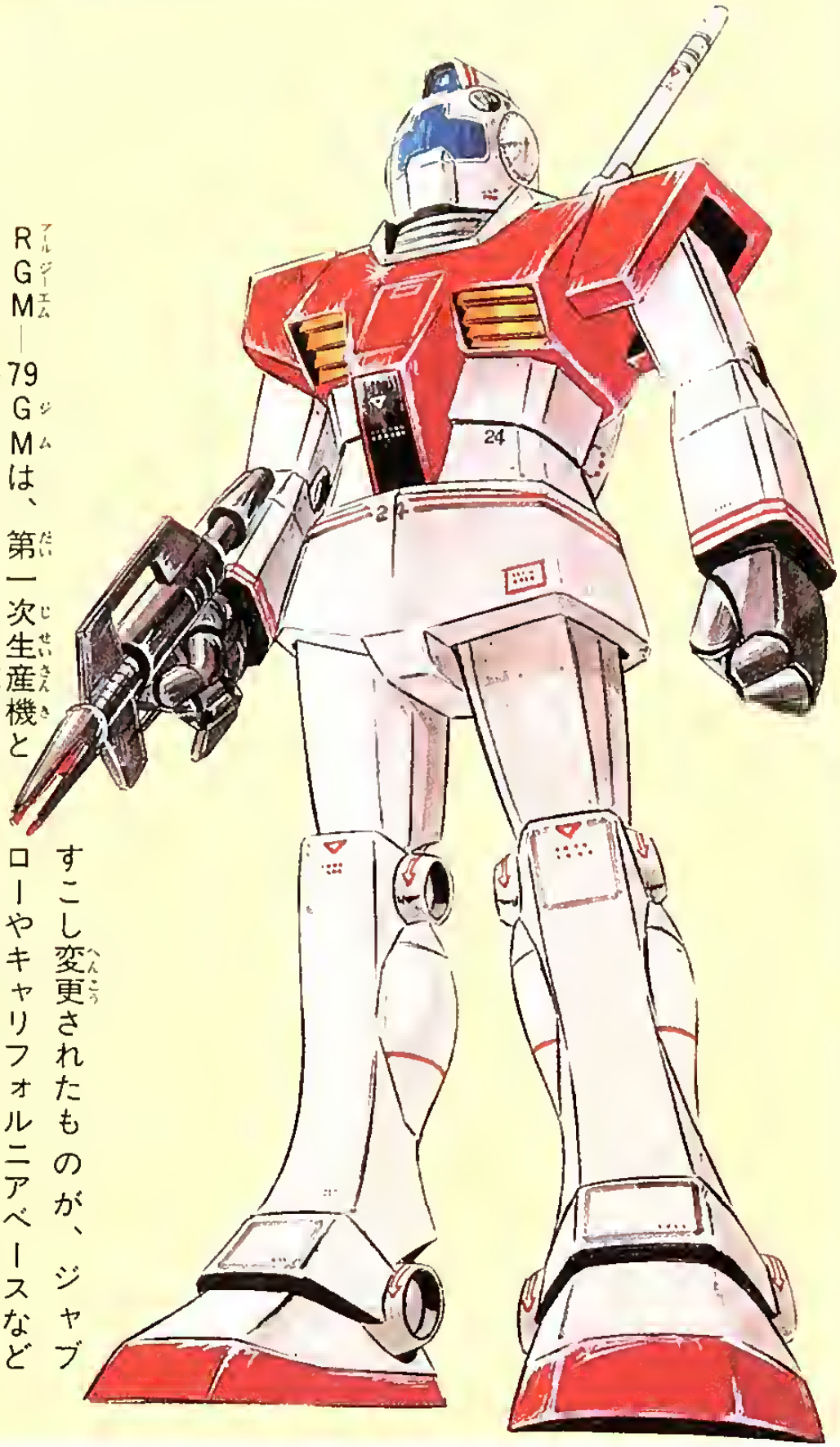
RGM—79 GM
アールジーエム　ジム



前期型
ぜんきがた

連邦軍初の量産型モビルスーツで、RX—78タイプから発展したものである。生産性向上のため、RX—78にくらべて、各装置が簡略化されている。とくに、コアブロックシステムは、操縦ブロックの機能のみをもつものに変更されている。武装も接近戦に主眼をおいたものとなり、単独行動より集団戦闘にむいたモビルスーツとなっている。

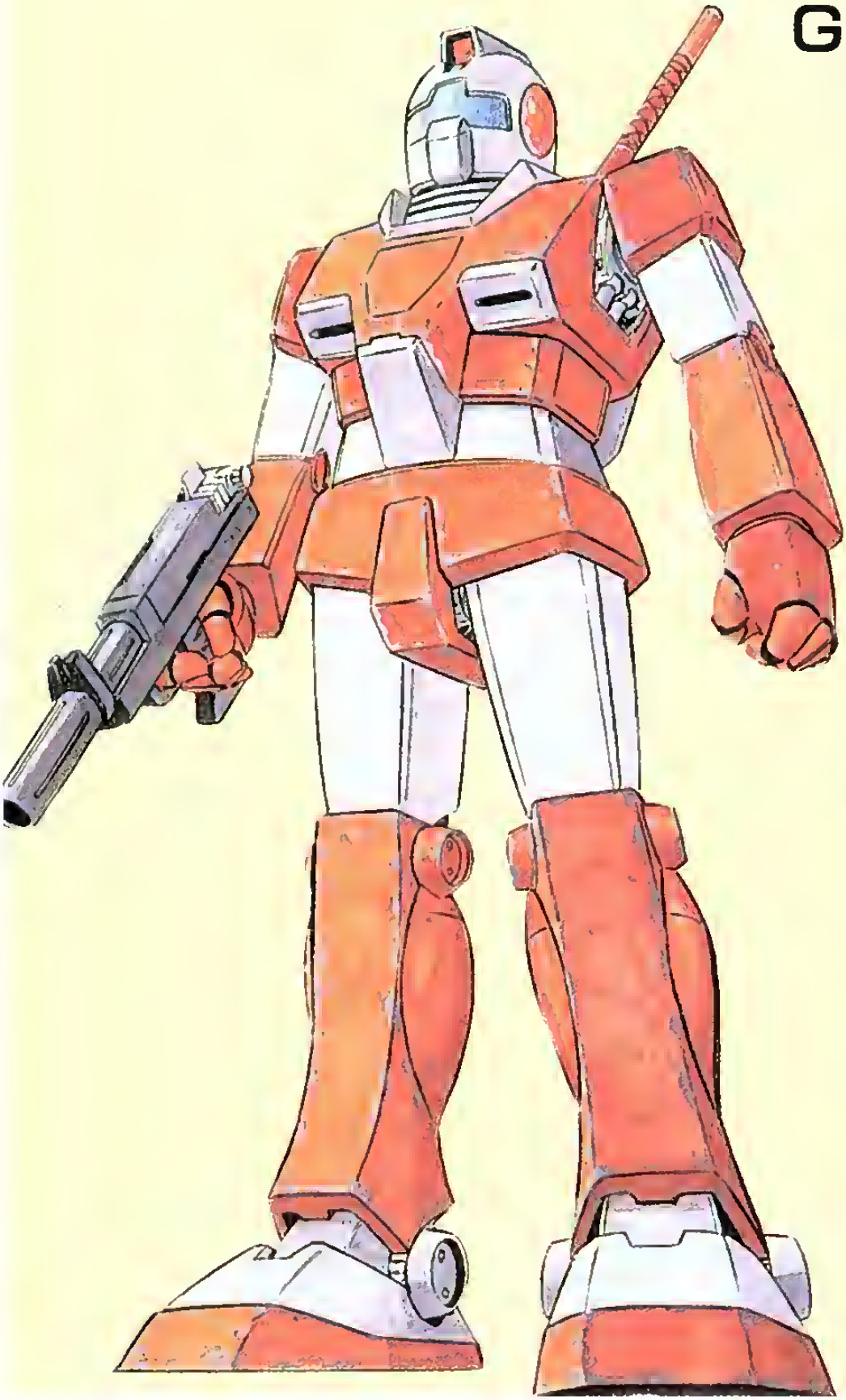
後期型



RGM―79GMは、第一次生産機として四十二機が、ジャブローで生産された。これらは、一般に前期型とよばれ、初期の部隊編成に使用された。

つづいて、装甲板の材質など細部がすこし変更されたものが、ジャブローやキャリフォルニアベースなど六か所の生産拠点で、終戦までに二百八十八機生産されている。こちらのほうは、後期型とか、実戦タイプとかよばれている。

RGM-79 GMライトアーマー

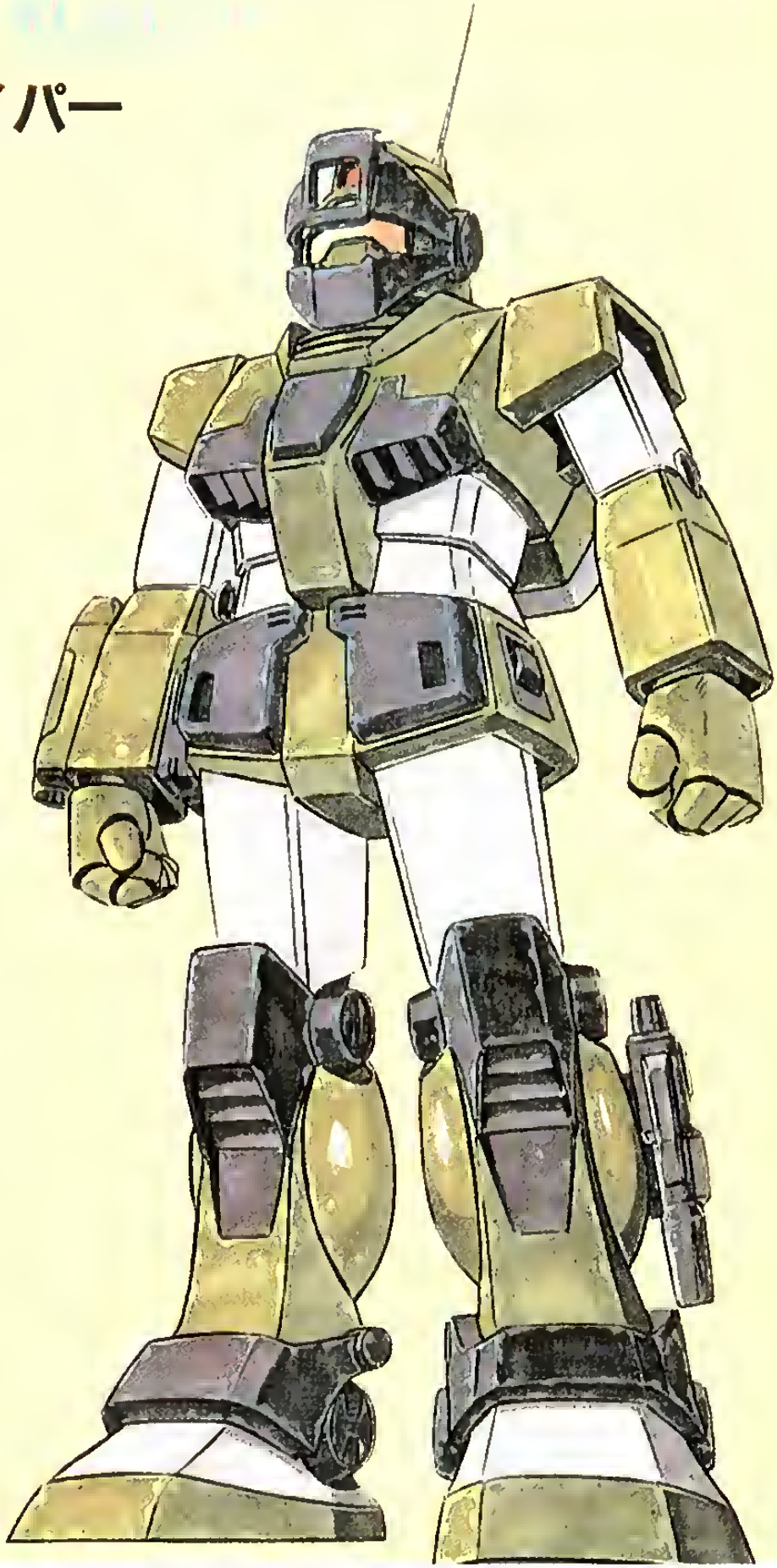


GMライトアーマーは、熟練パイロットむけに生産されたGMのバリエーションの一つである。高速一撃離脱戦ができるよう機動力を重視し、徹底的に軽量化がはかられている。このため、艦載空間戦闘機から機種転換したパイロットたちにも違和感がなく、愛用された。

●モビルスーツバリエーション

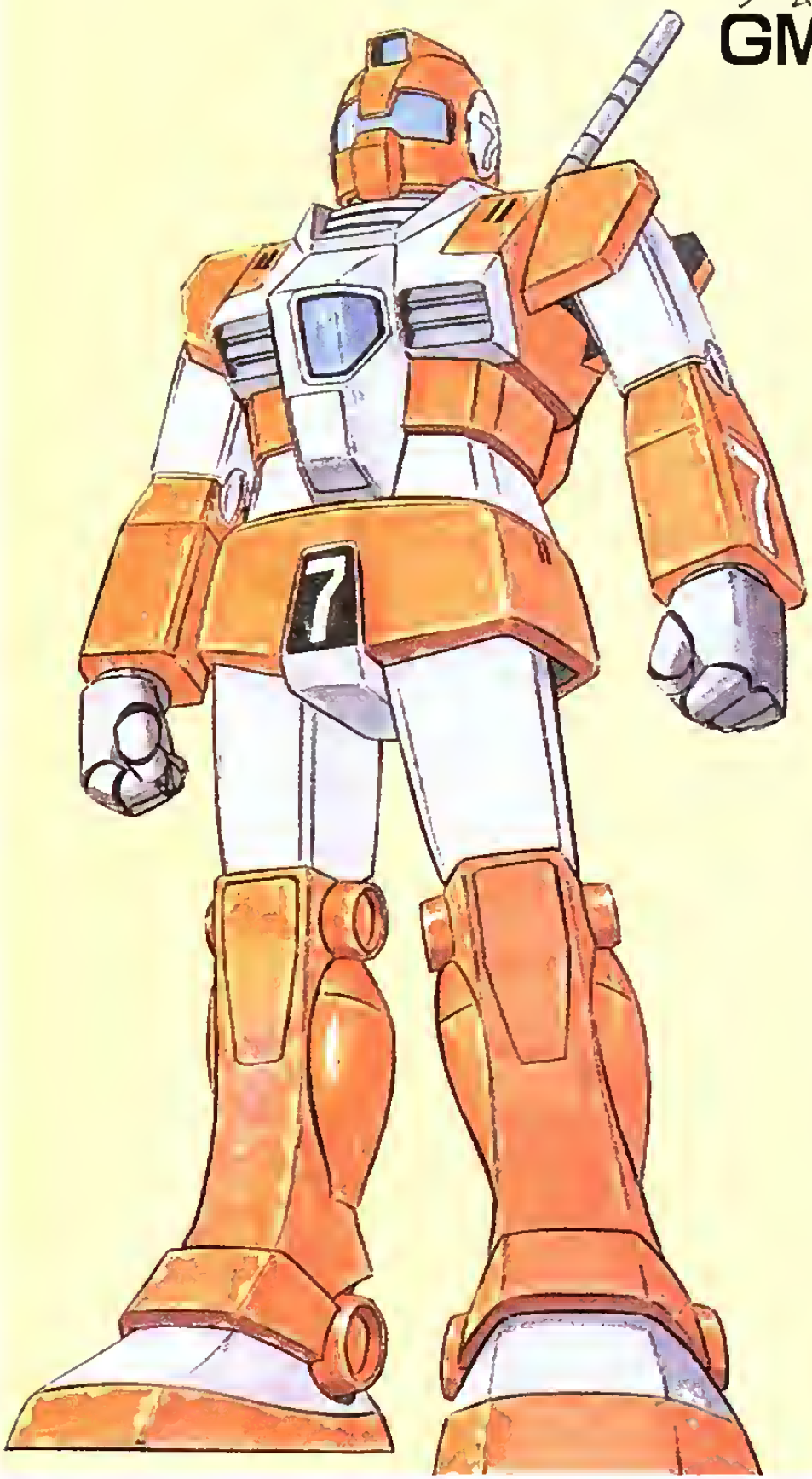
MSV

GMスナイパーカスタム



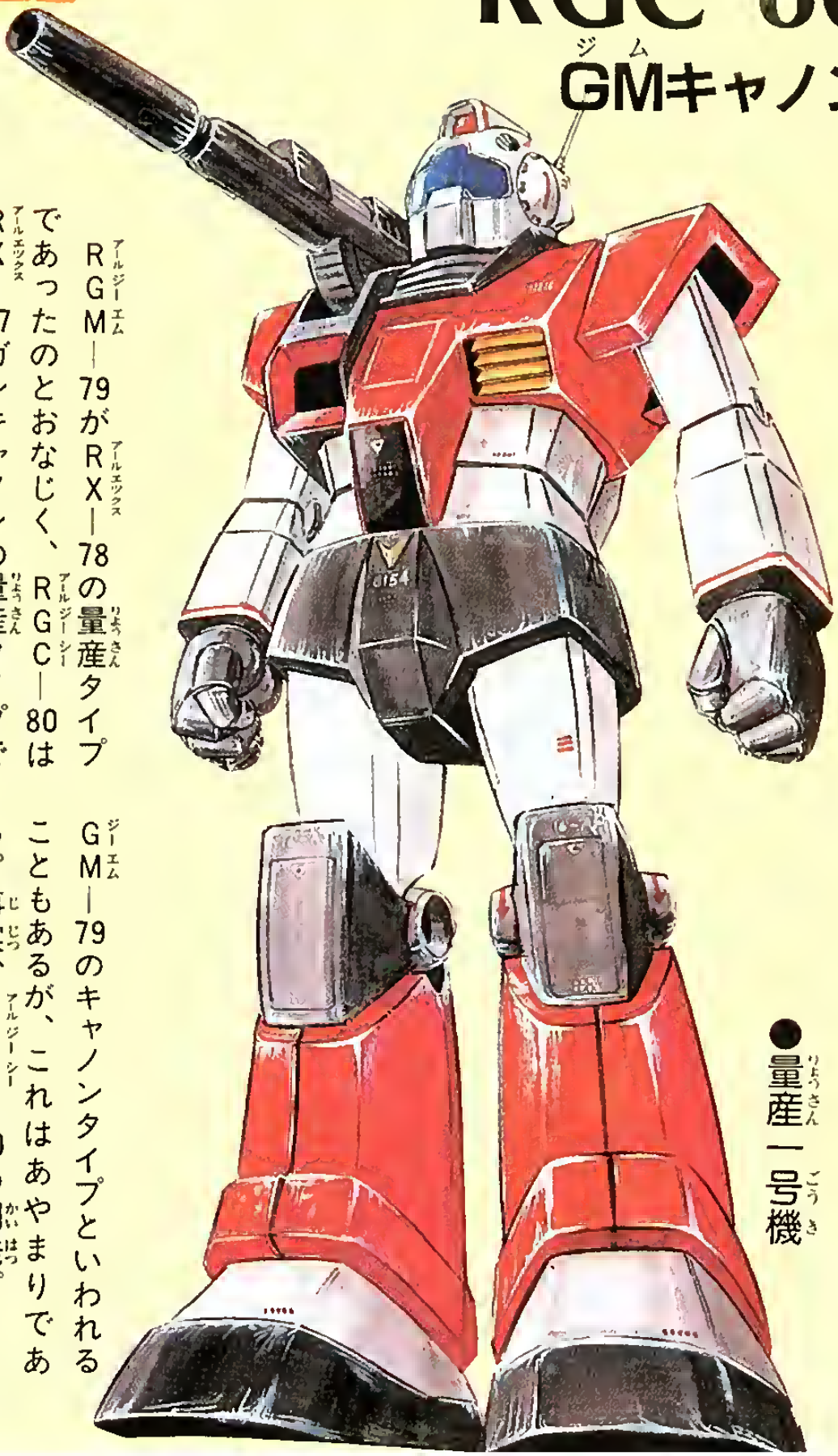
GMライトアーマー同様、練度の高いパイロットむけに生産されたカスタムタイプである。補助装甲と大推力バックパックが追加され、武装も強化されたほか、パイロットの素質にあわせて、各機が個別のチューンアップをうけている。GMスナイパーカスタムには、このほかにも数タイプあったらしいが、公表されたものはこのタイプだけである。

TGM-79
GMトレーナー



連邦軍のRXモビルスーツパイロット養成用につくられたモデルで、通常コクピットの上部に教官用コクピットが増設されたくらいで、構造的にはRGM-79とまったくおなじである。ただし、重量バランスこそおなじだが、装甲板は低コストのものがもちいられているため耐弾性が低く、実戦にはつかえず、操縦訓練以外では、一般作業にしかもちいられなかった。

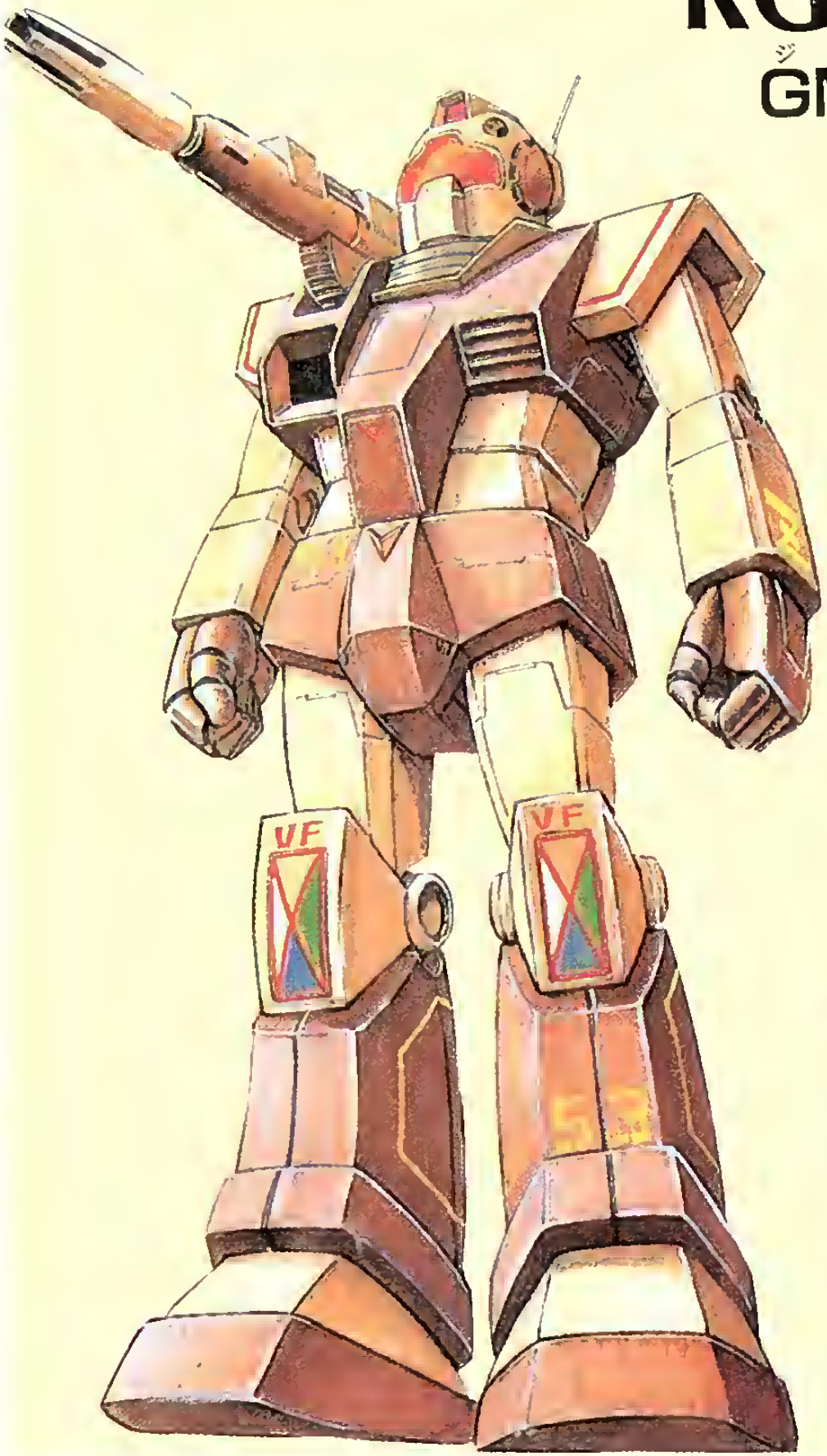
RGC-80 GMキャノン



●量産一号機

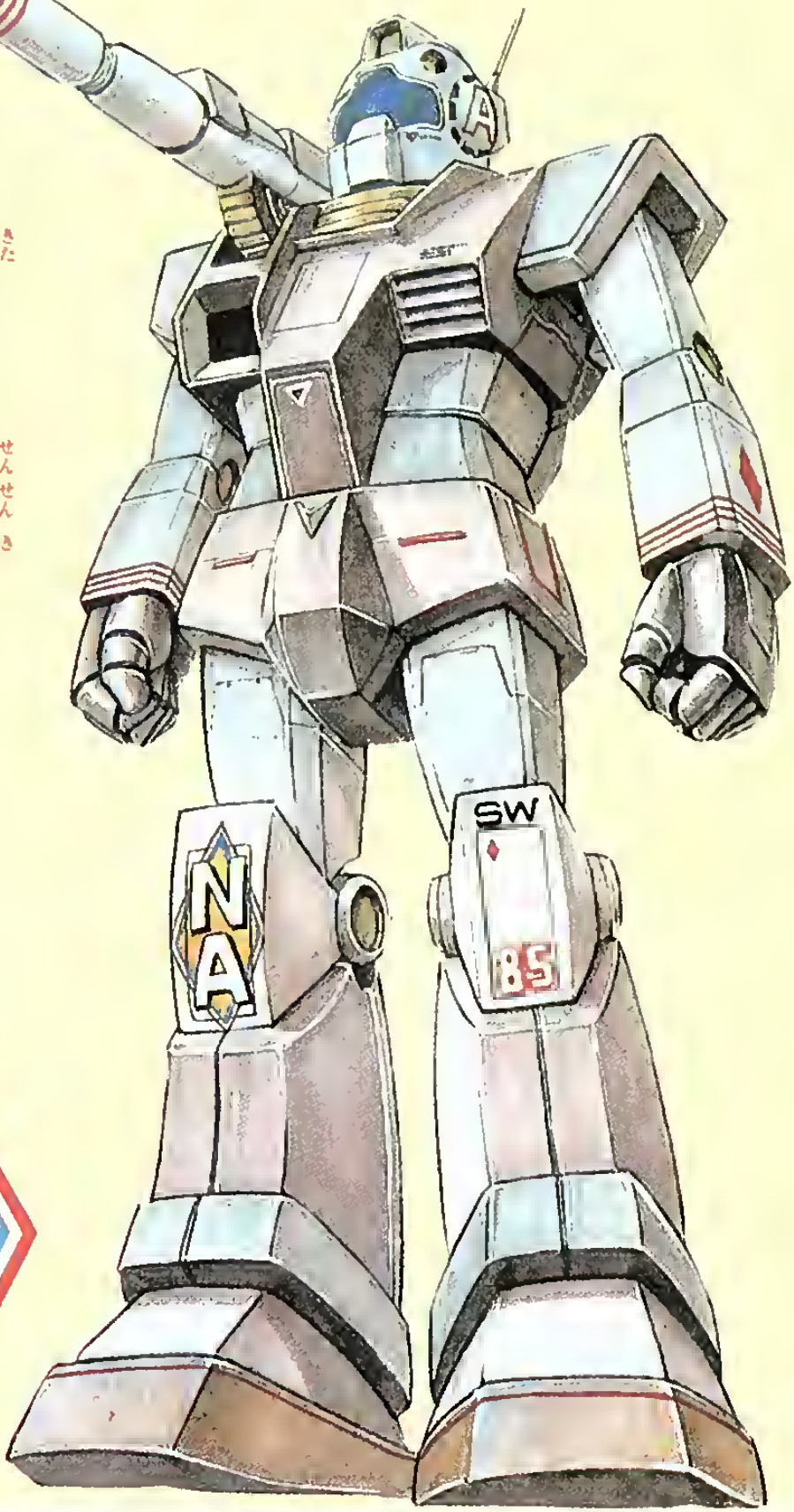
RGM-79がRX-78の量産タイプであったのとおなじく、RGC-80はRX-77ガンキャノンの量産タイプである。RGM-79との部品共用率が六十パーセントもあるため、一般に、RGM-79のキャノンタイプといわれることもあるが、これはあやまりである。事実、RGC-80の開発プランは、最初からRGM-79とはべつに進行していた。

RGC-80 GMキャノン



●アフリカ戦線機

GMキャノンがもっとも多く配備されたのは、アフリカ戦線であった。大戦末期のアフリカ大陸における反攻作戦には、北アメリカ戦線からまわされた機が多数参加している。GMキャノンは、ジオン軍のモビルスーツとことなり、特別な改造をしなくても、たいていの戦場で活躍できた。サンディーブラウンの濃淡が基本塗装である。



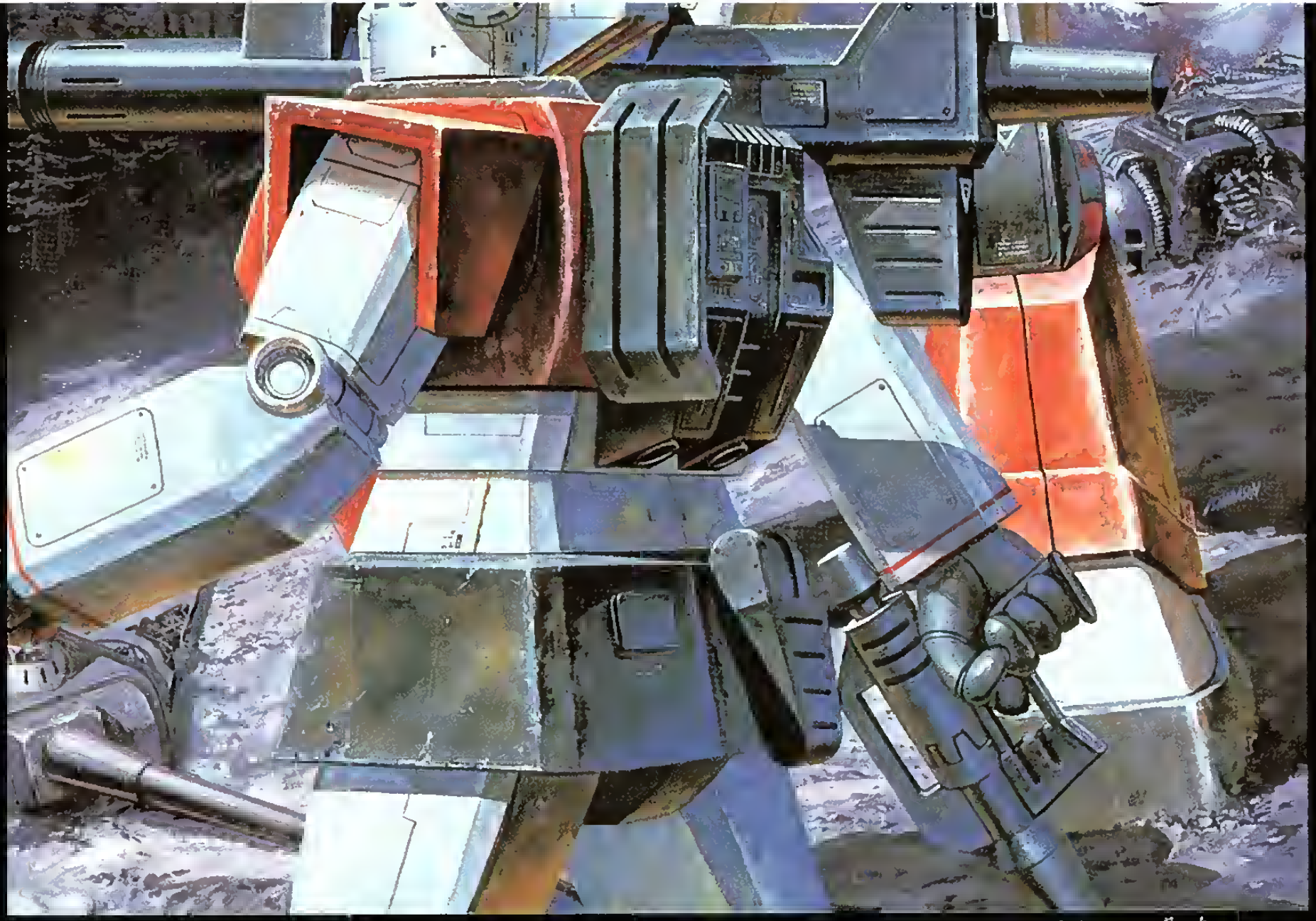
●北アメリカ戦線機

RGC—80GMキャノンがはじめて配備されたのは、北アメリカ戦線の南下ルート部隊であった。総数は六機だったが、RGM—79との共同作戦であげた戦果は、大きなものであった。

NA

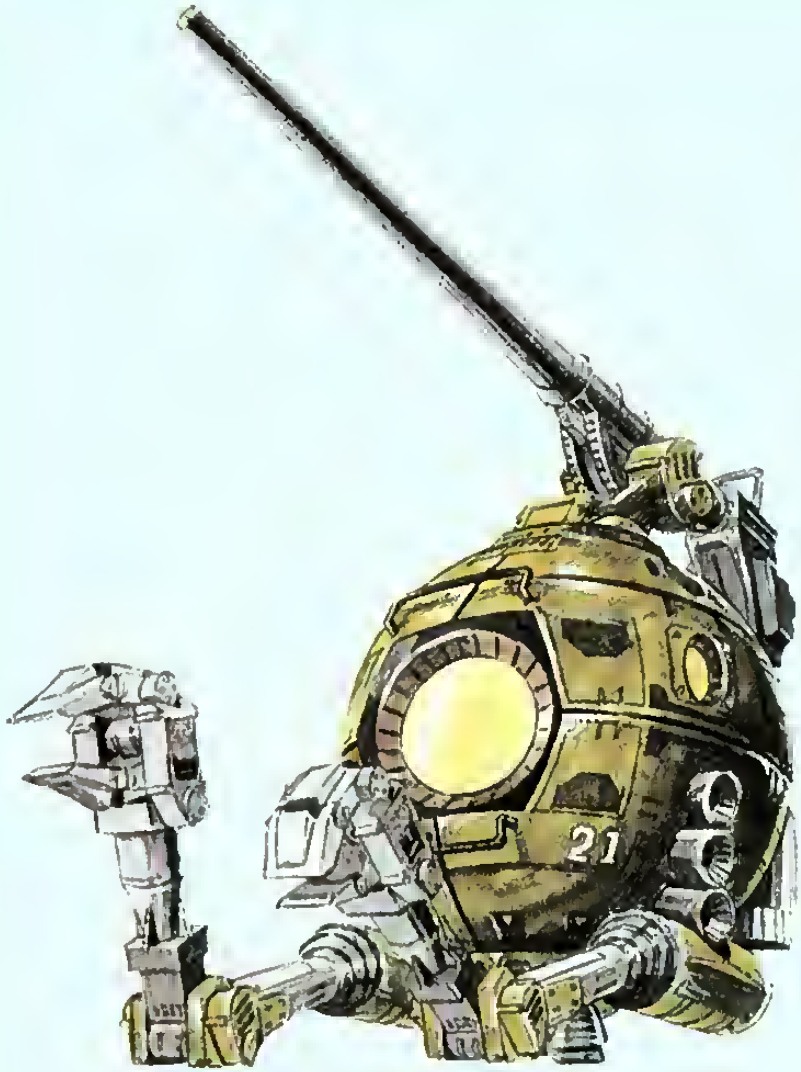
Federation Survey Service

Action Graphic



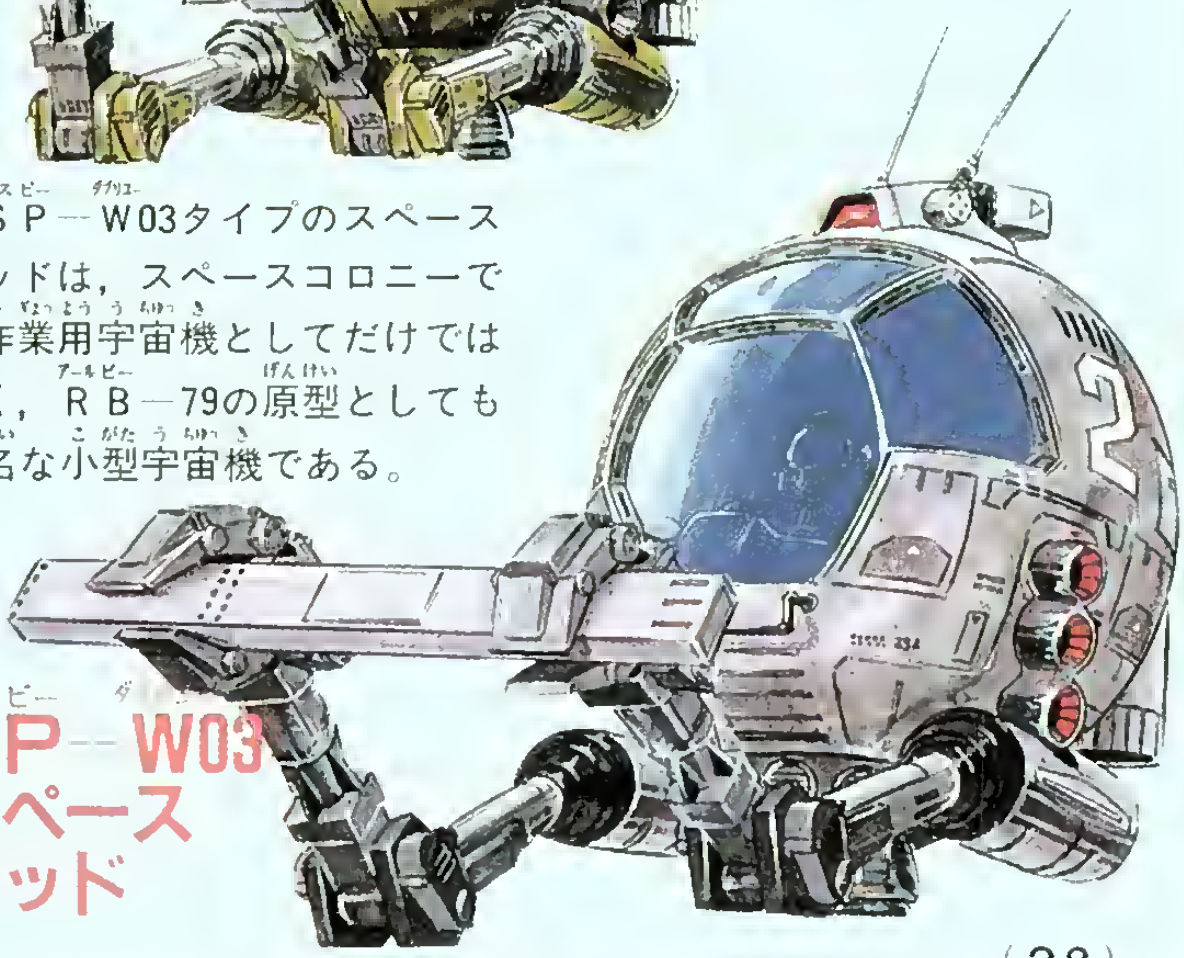
RGC-80 GMキャノン

●解説は、一七六ページにあります。



RB—79ボール

空間戦において，RGM—79GMの支援用に開発されたボールは，簡易型モビルアーマーといえるものだった。大戦末期に大量に戦線に投入されたが，どれほどの戦果をあげたかは不明である。



SP—W03 スペースポッド

SP—W03タイプのスペースポッドは，スペースコロニーでの作業用宇宙機としてだけではなく，RB—79の原型としても有名な小型宇宙機である。

●モビルスーツバリエーション

MSV

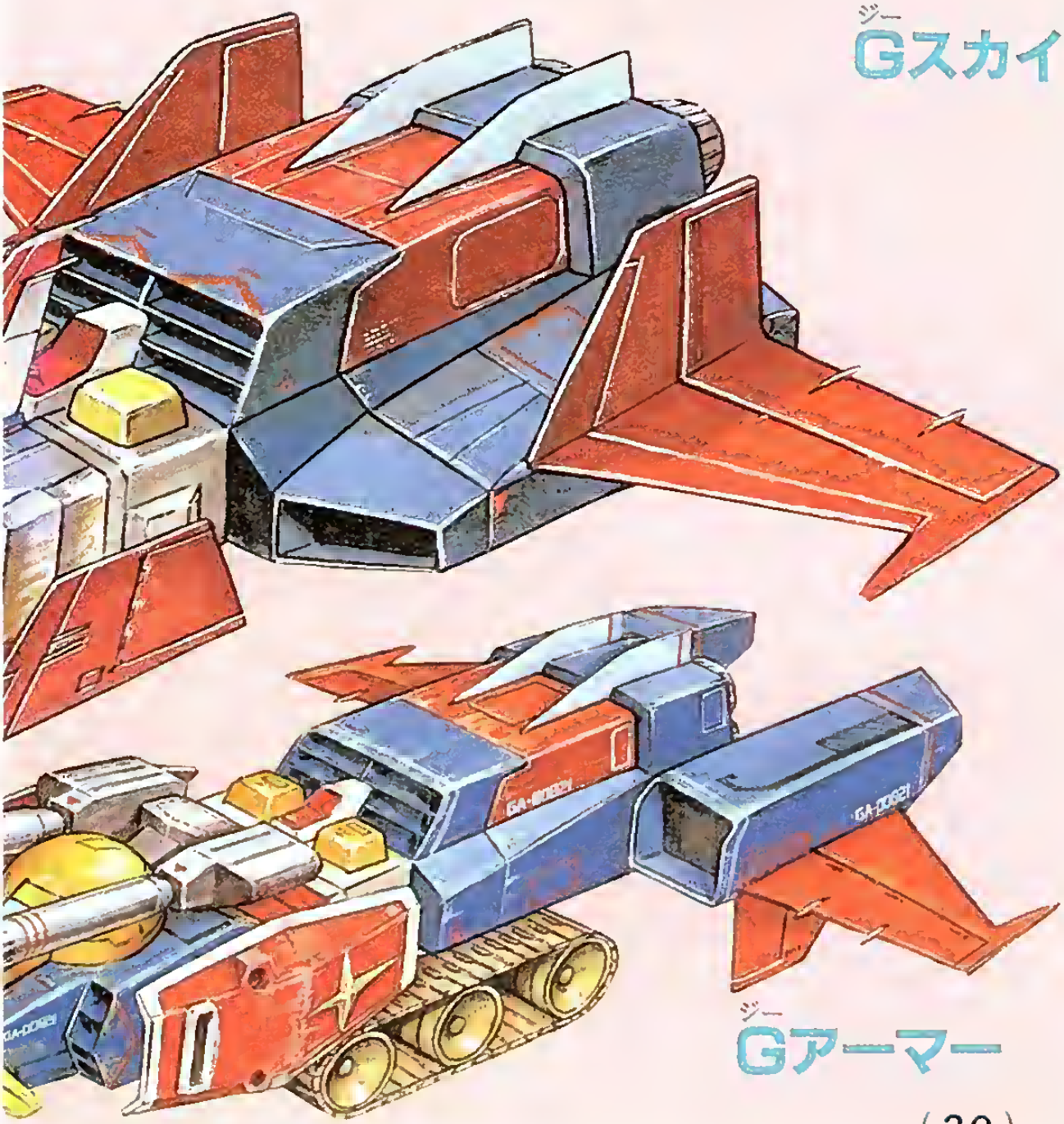
RMV-1 ガンタンクII

RTX-44を原点とする連邦軍の地上用RXモビルスーツは，RX-75をへて，RMV-1において完成の域にたっした。しかし，実戦配備が終戦直前だったため，戦闘には参加していない。

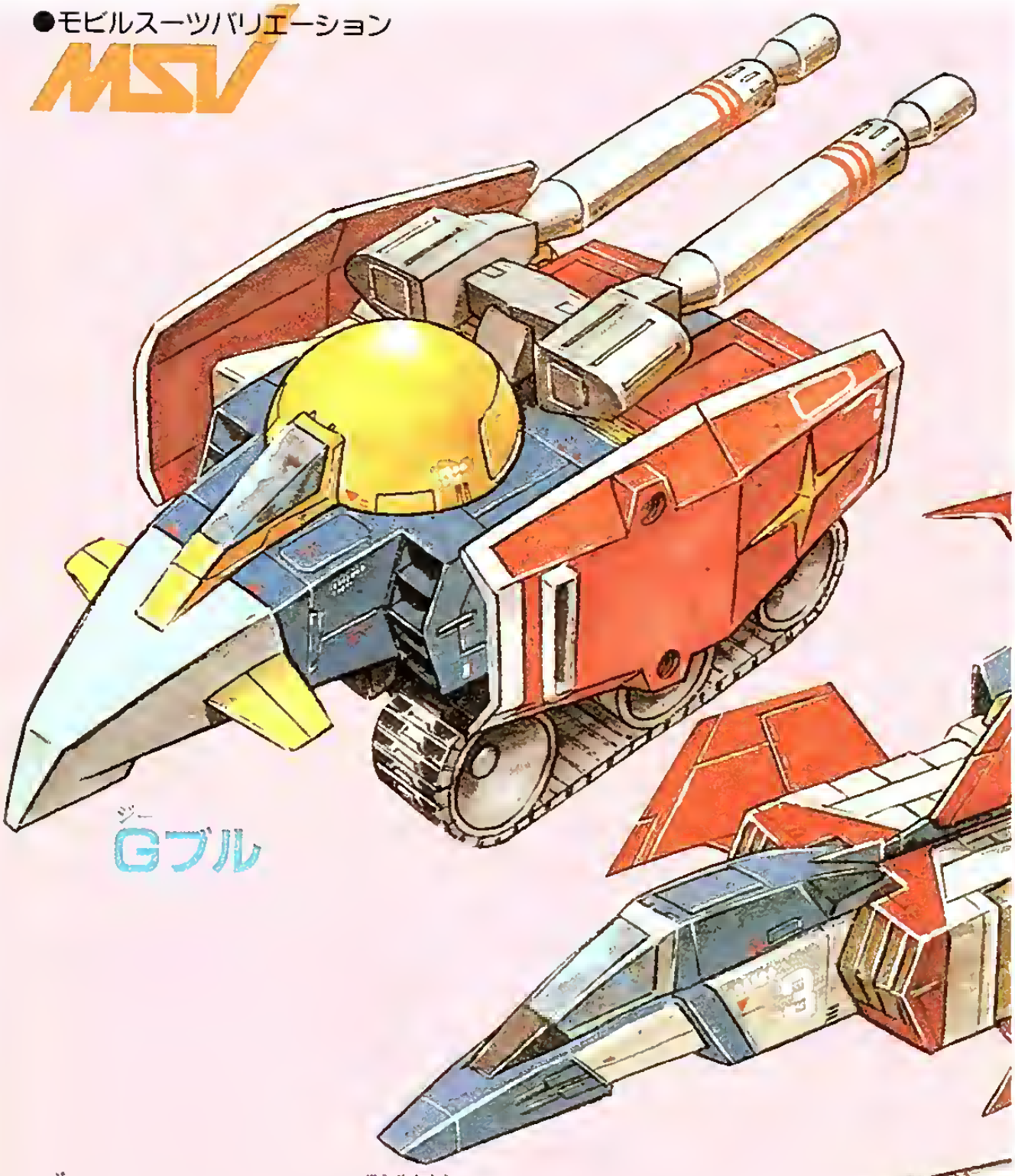
Gメカ

たまたま実戦参加することになったRX—78—2のために，いそいで開発されたのがGメカである。いわゆる〝ガンダム〟の支援メカで，使用方法により，五つの形態に変化した。

Gスカイ



Gアーマー



Gブル

Gメカは，ガンダムの増速用ブースター，あるいはコアファイターのブースターとしても使用できる。生産数は少なく，補修用パーツもふくめて3機分しかつくられなかった。

コアファイターバリエーション
FIGHTER VARIATION

FF—X7 コアファイター

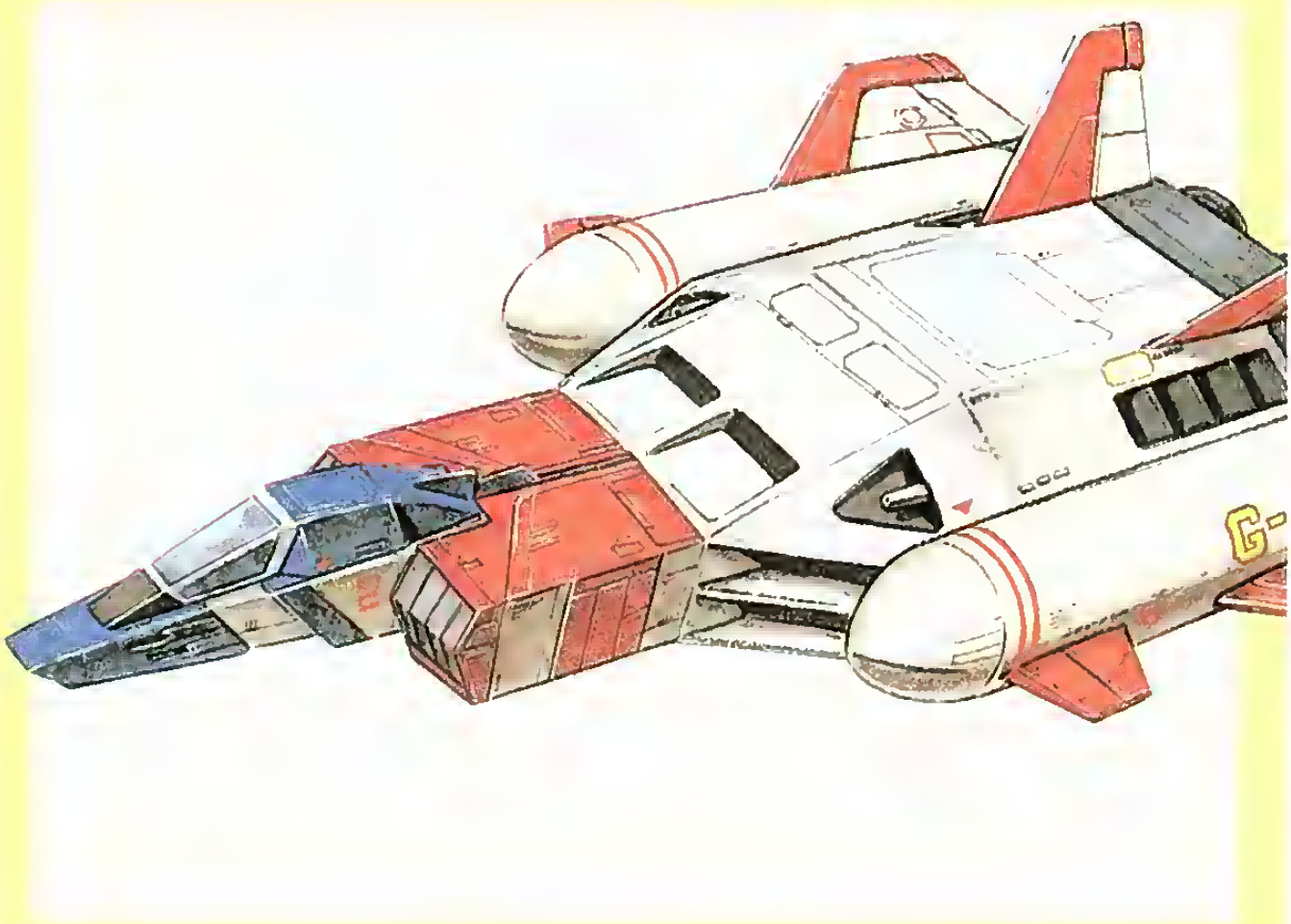
試作2号機

量産4号機

FF—X7は，RXモビルスーツに導入された新しい考え方，コアブロックシステムを具体化したものである。RXモビルスーツのコクピットであり，脱出システムであり，単独で軽戦闘機にもなる。

CORE

コアブースター



コアブースター

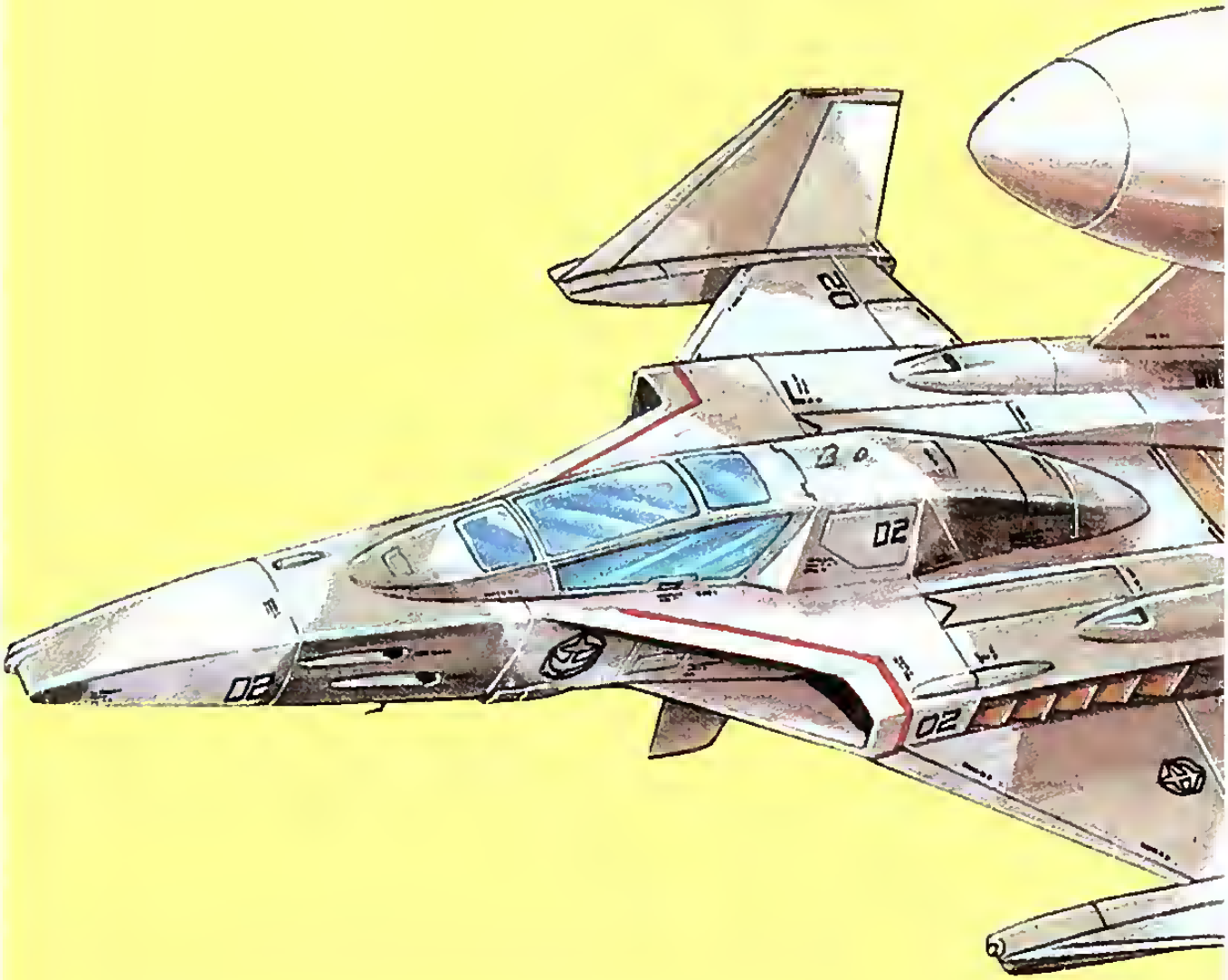
RXモビルスーツのメーンコンピューターを搭載するFF—X7は，ビーム砲つきブースターと合体させることにより，高性能空間戦闘機として使用することができた。ブースター装着状態のFF—X7は，一般にコアブースターとよばれていた。

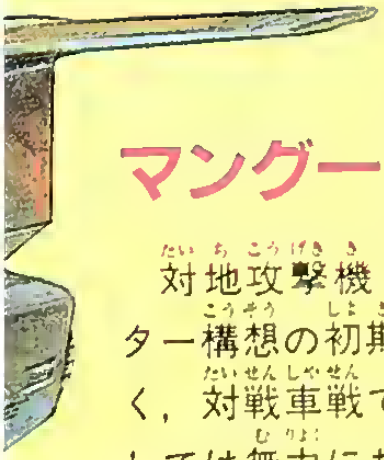
FF 6 TINコッド

局地防空戦闘用に開発されたTINコッドは，形式的にはFF－X7にいちばんちかい。空中戦能力が極限まで高められているが，武装のバリエーションや航続距離に制限があった。

フライダーツ

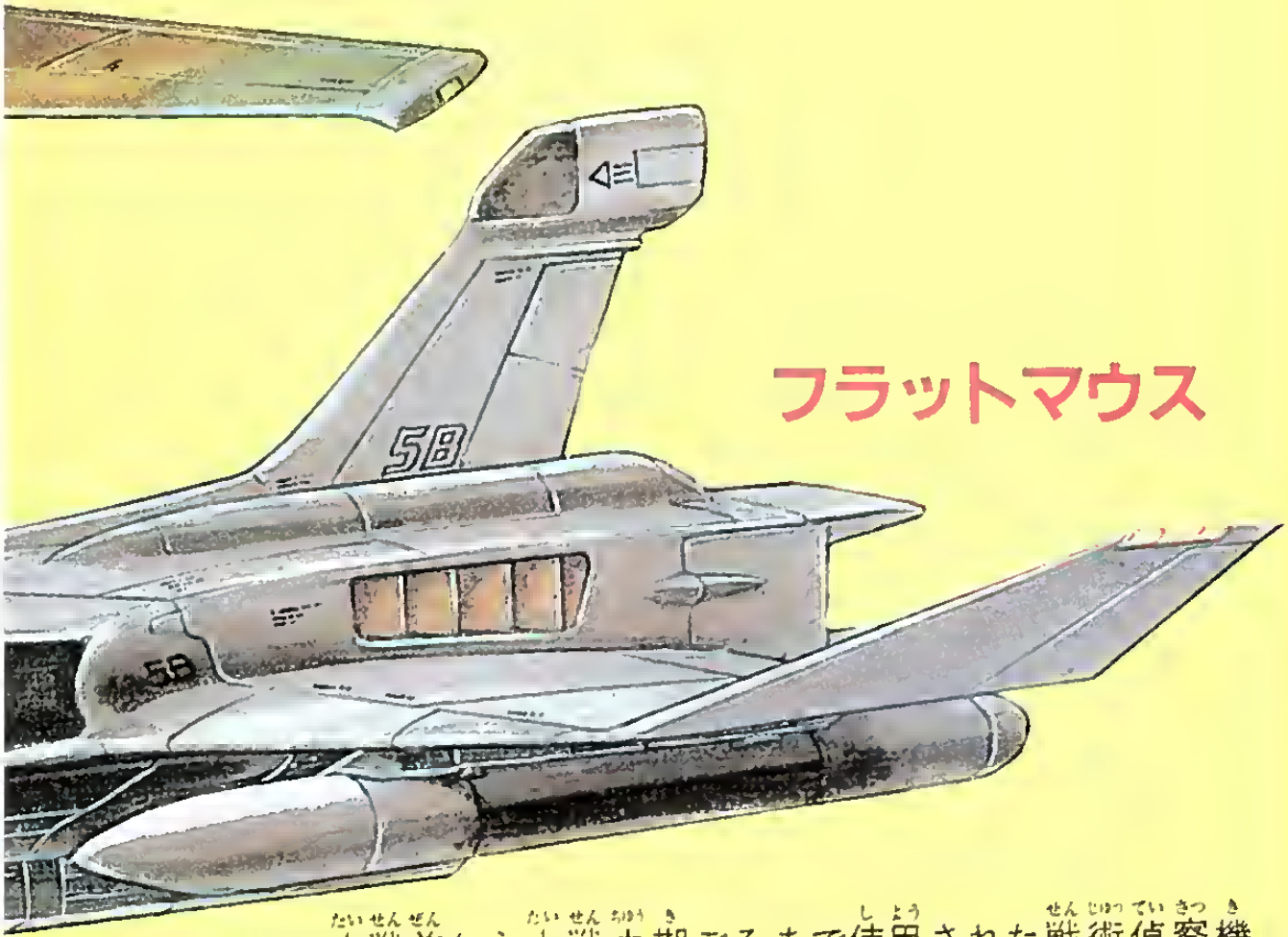
コアファイター構想にもとづいて，高高度迎撃機として開発された。大気圏内外を戦闘空域とし，ブースターで急速上昇する。





マングース

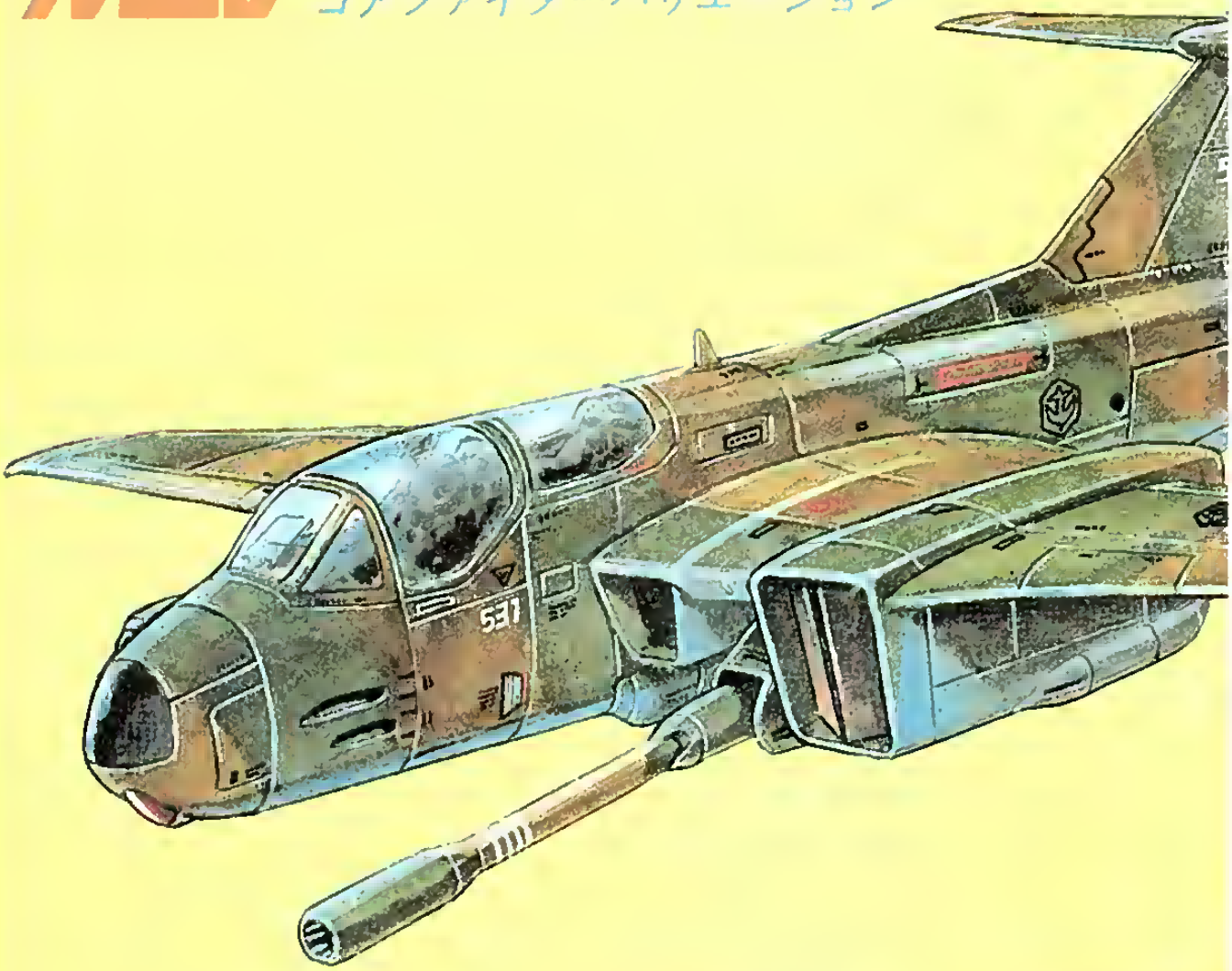
対地攻撃機として，大戦初期から使用された。コアファイター構想の初期につくられたもので，低空・低速での性能は高く，対戦車戦では大きな戦果がみられたが，モビルスーツに対しては無力にちかかった。

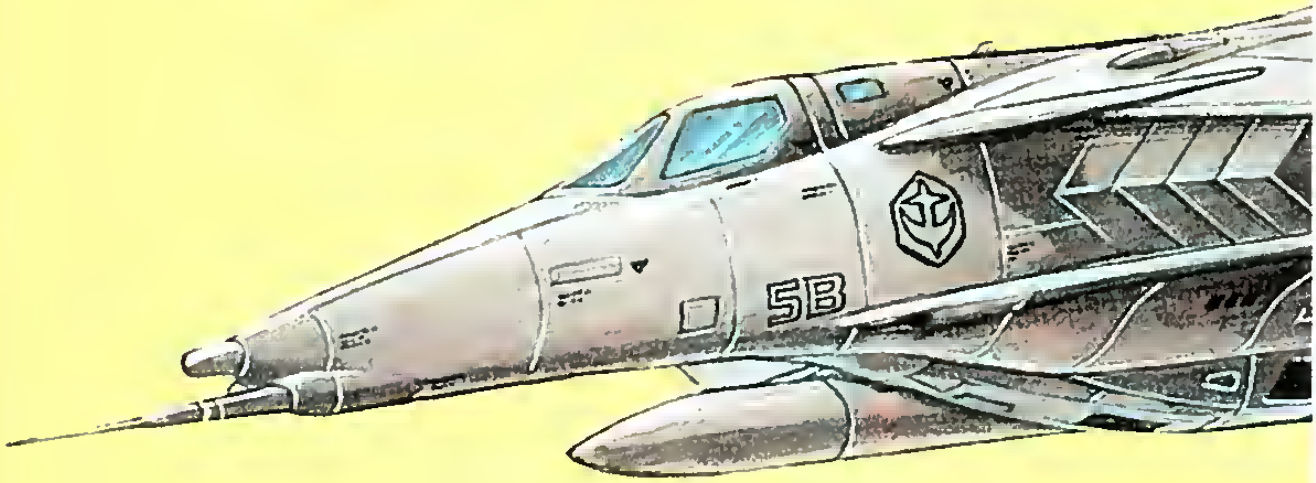


フラットマウス

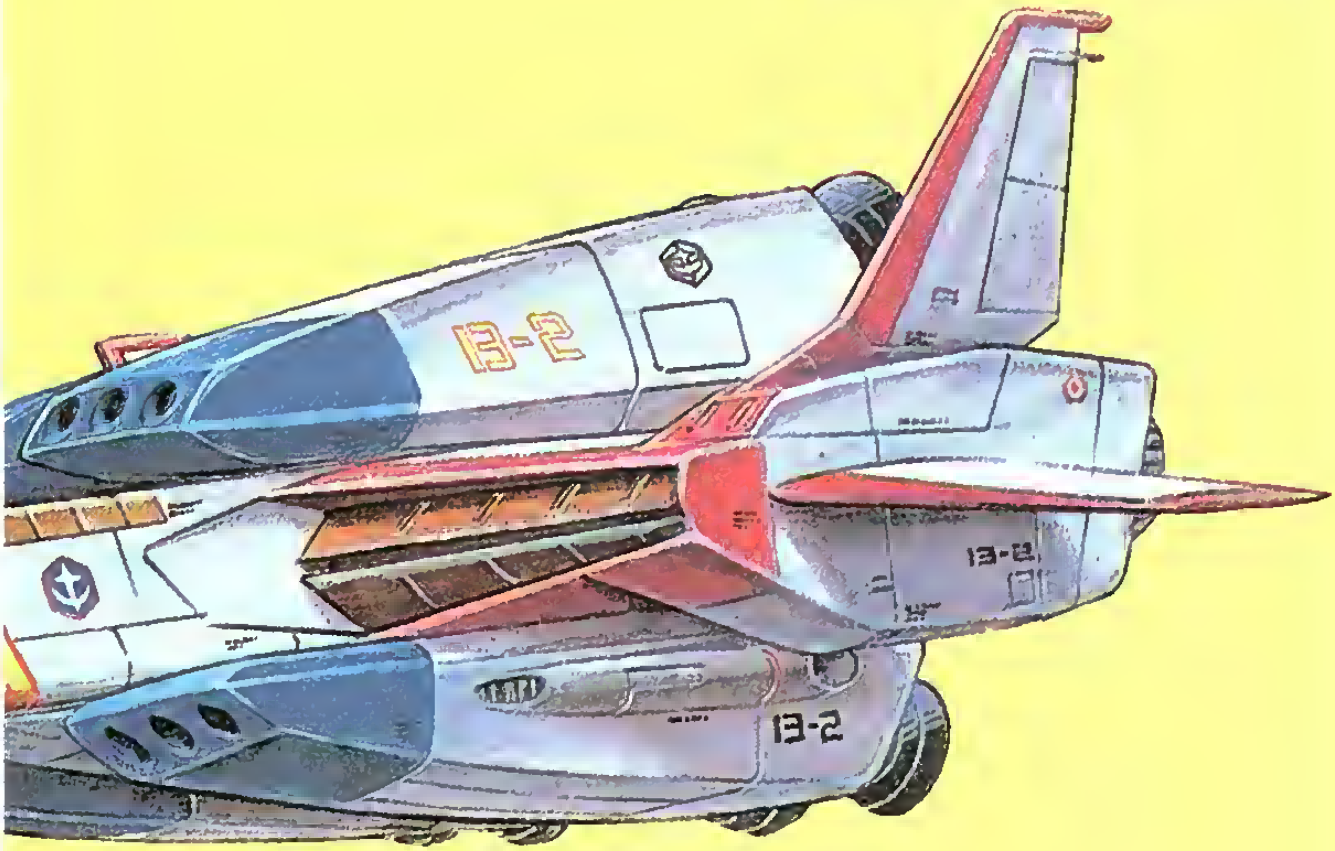
大戦前から大戦中期ごろまで使用された戦術偵察機で，20世紀後半に完成した高速機のデータのみで開発されたため，技術的に新しいものはみられない。一部の機は，電子兵器戦機として使用されたという記録もある。

コアファイターバリエーション





FF—S3
セイバーフィッシュ



コアファイターバリエーション中，もっとも完成が期待されていたのが本機である。大気圏内戦闘機のようなスタイルをしているが，れっきとした宇宙空間用の制空戦闘機である。機体上下に2基ずつあるブースターパックは，通常装備である。おもに，マゼラン級宇宙戦艦などの艦載機として実戦配備された。

MSV コアファイターバリエーション

RX MOBILE SUIT 3Dimension Models

アールエックス
RXモビルスーツ
スリーディー
3Dモデル

●RX—78—2
GUNDAM

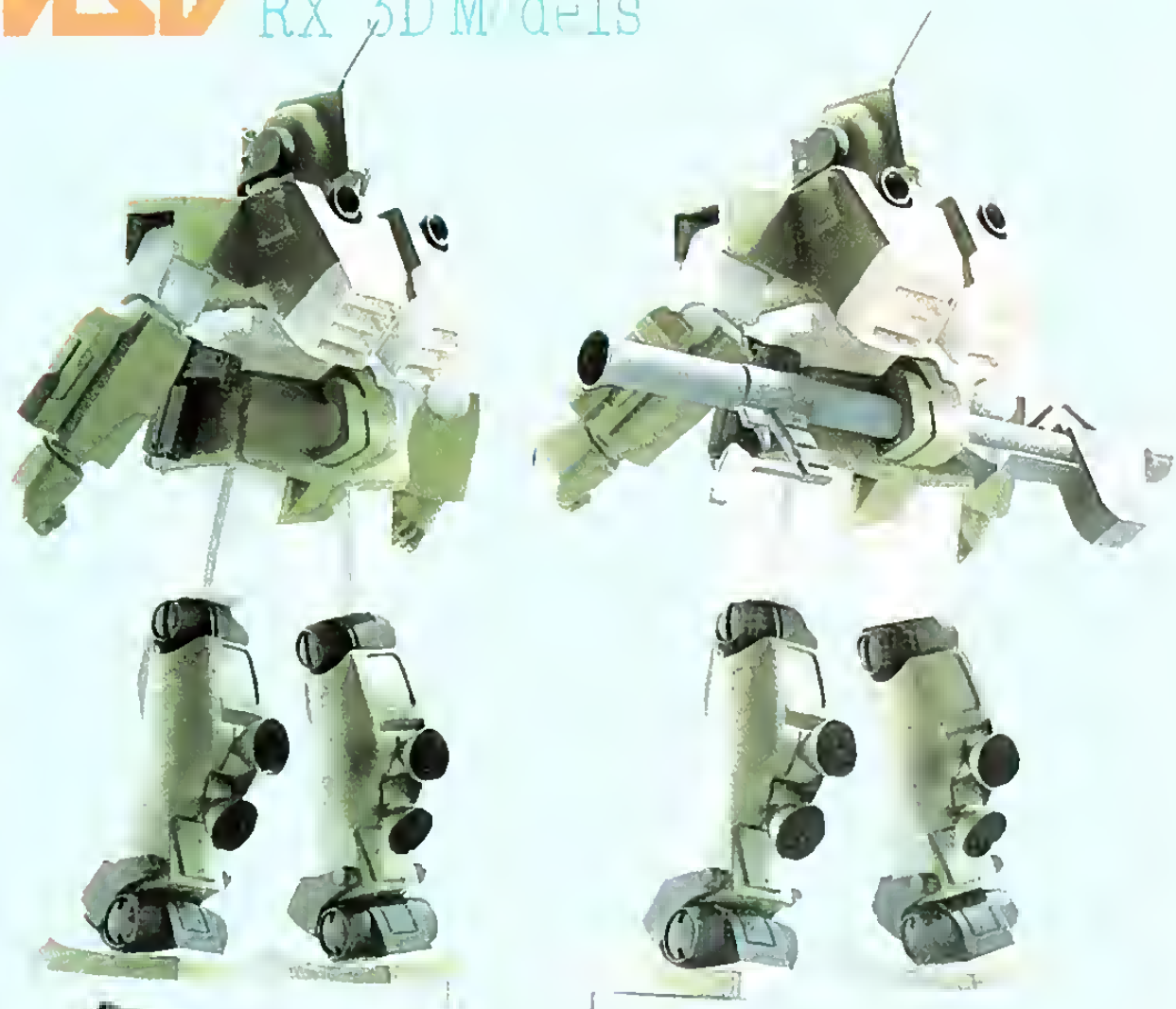
●RX—78—1
PROTOTYPE
GUNDAM

●FA—78—1
FULLARMOR
GUNDAM

●RGM—79
GM LIGHT
ARMOR

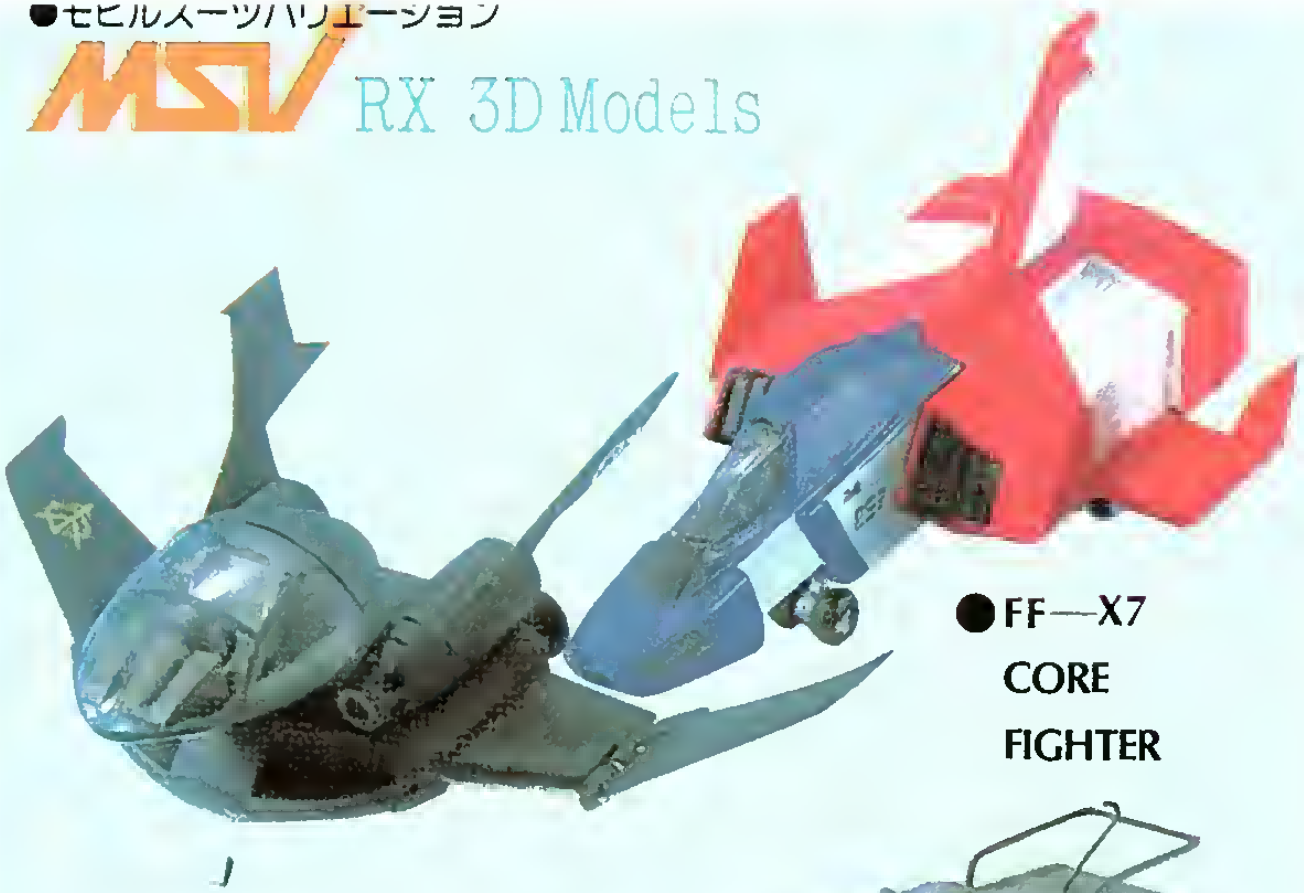
●TGM—79
GM
TRAINER

●RGM—79
GM SNIPER
CUSTOM



●RMV—1
GUNTANK II

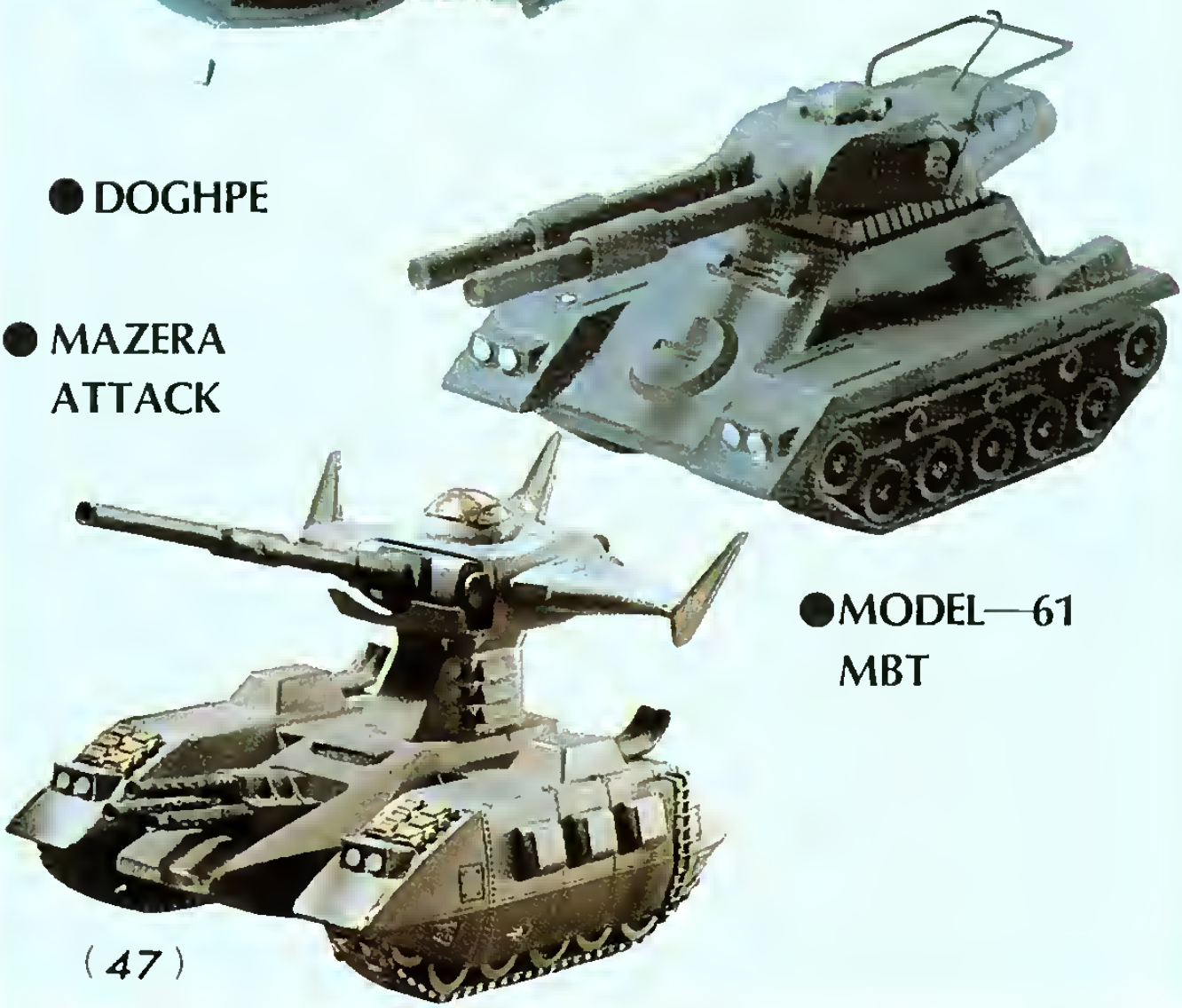
●RGC—80
GM CANNON



● FF—X7
CORE
FIGHTER

● DOGHPE

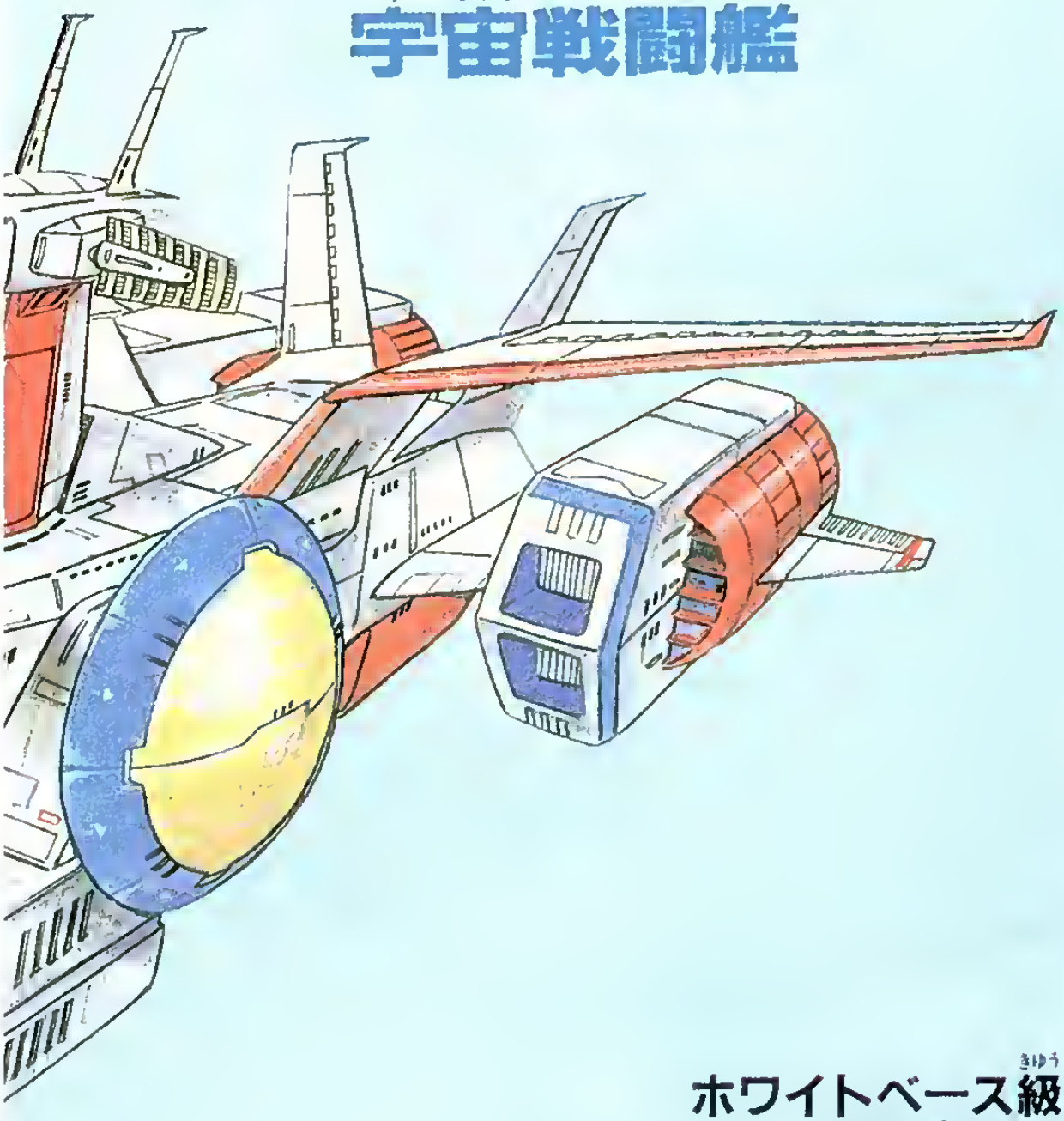
● MAZERA
ATTACK



● MODEL—61
MBT

STAR★SHIPS

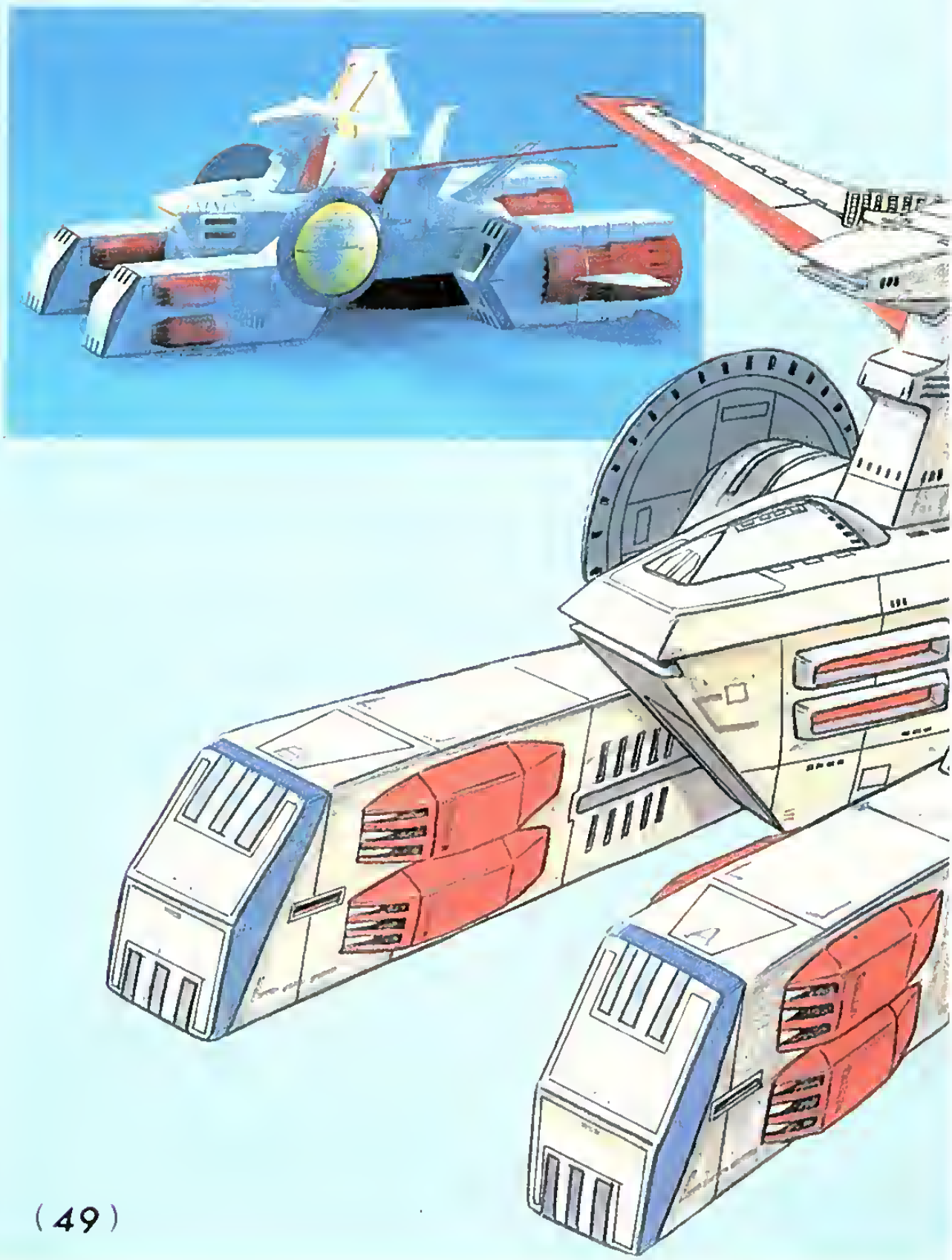
宇宙戦闘艦

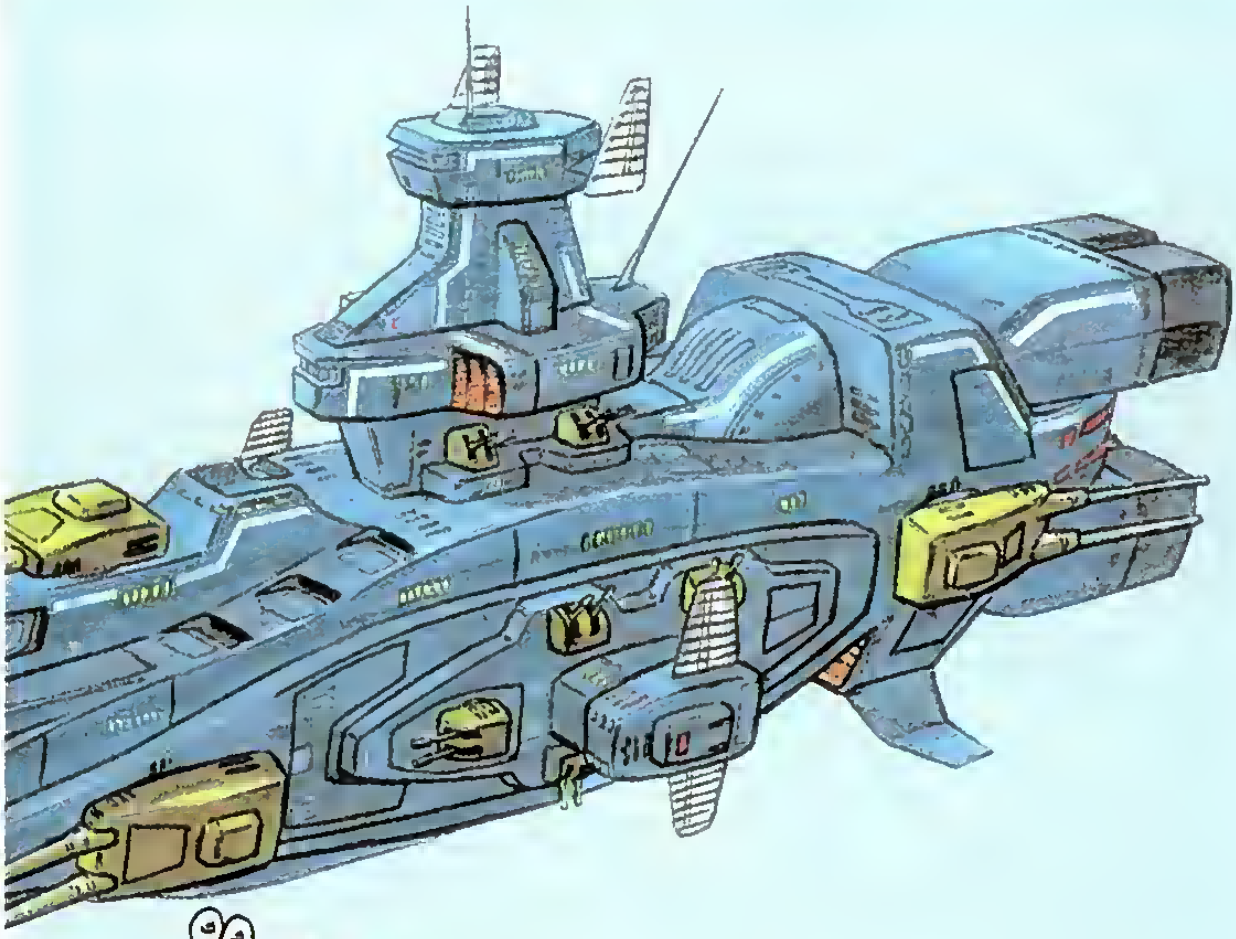


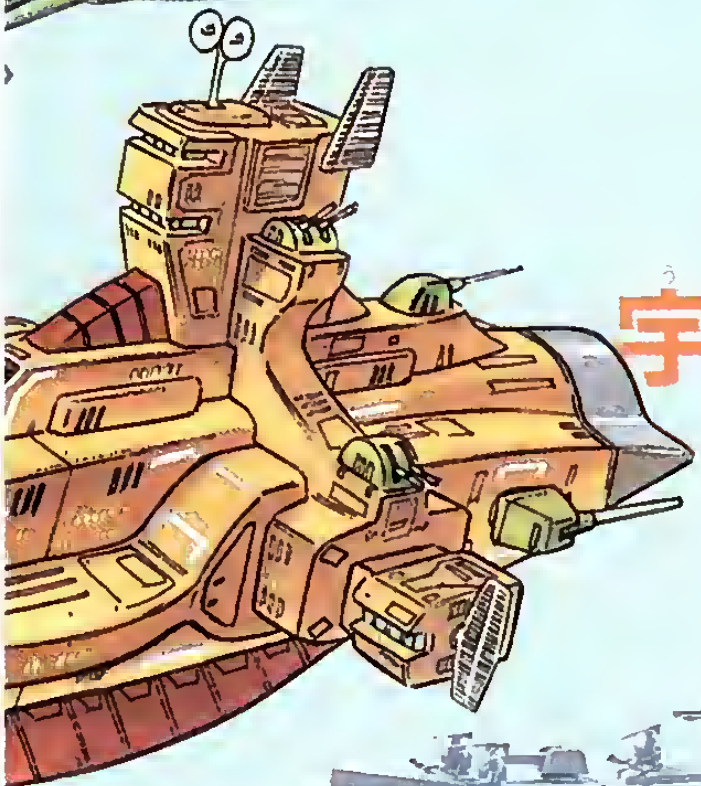
ホワイトベース級
宇宙攻撃空母

ホワイトベース

（48）



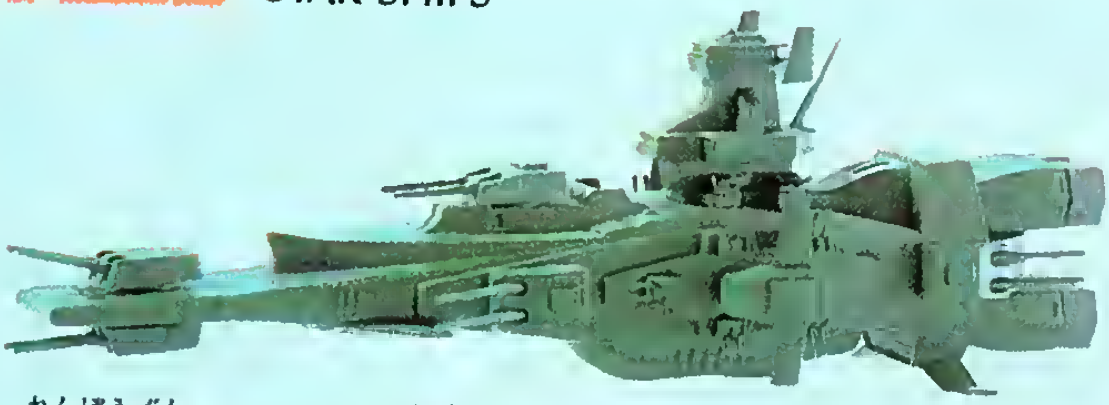




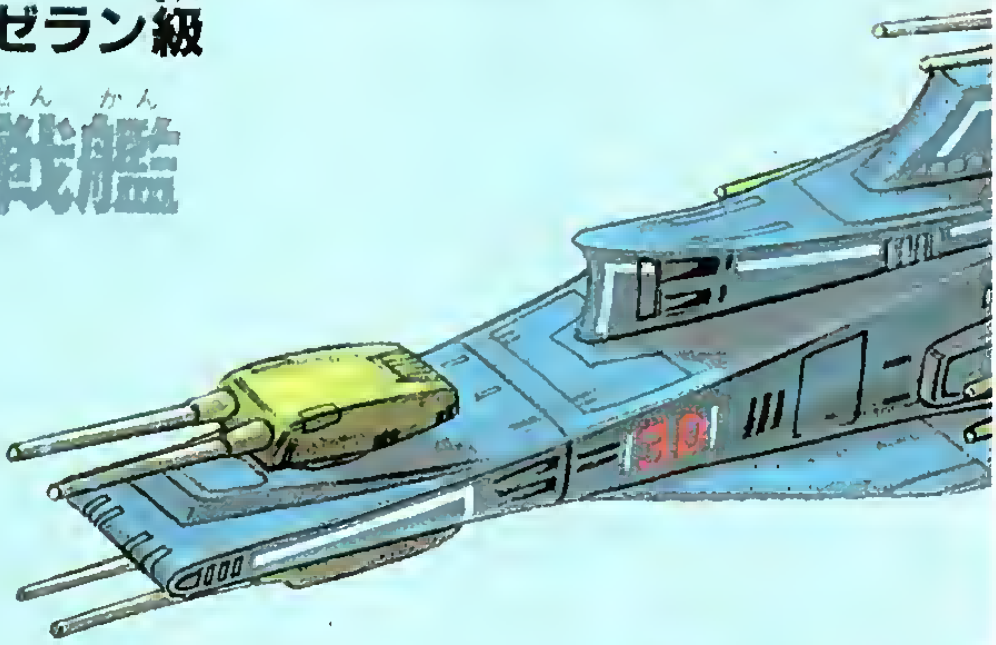
連邦軍サラミス級

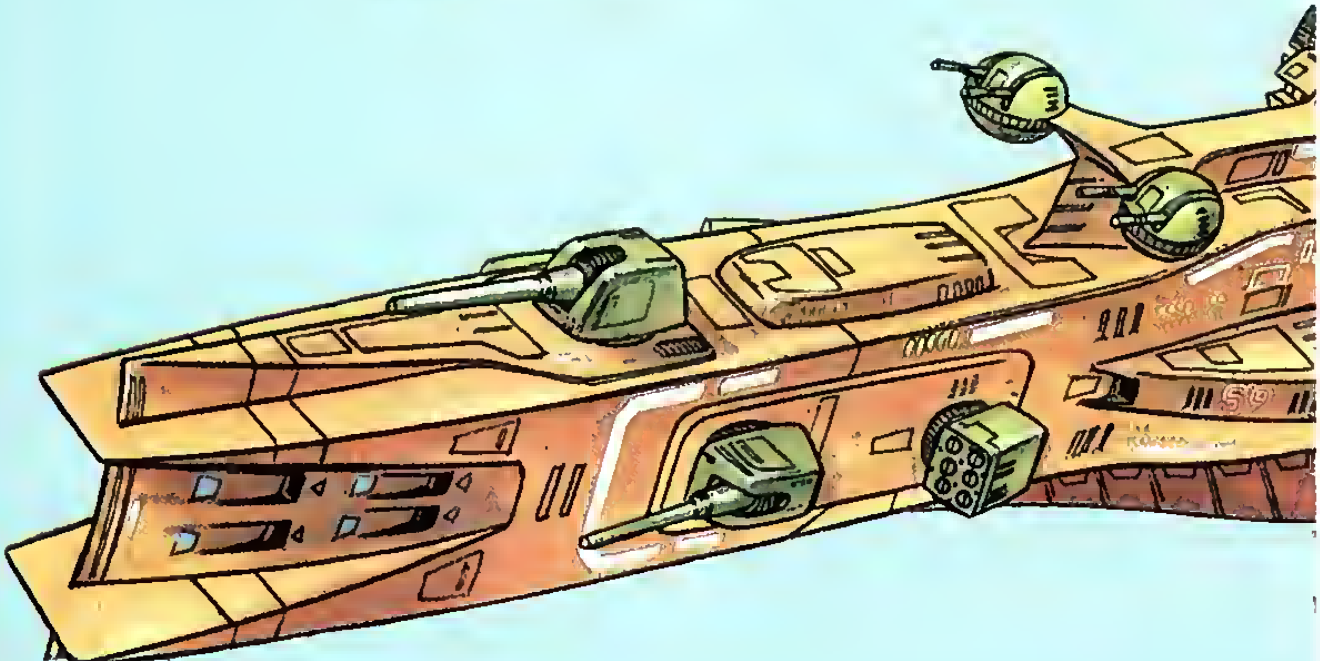
宇宙重巡洋艦

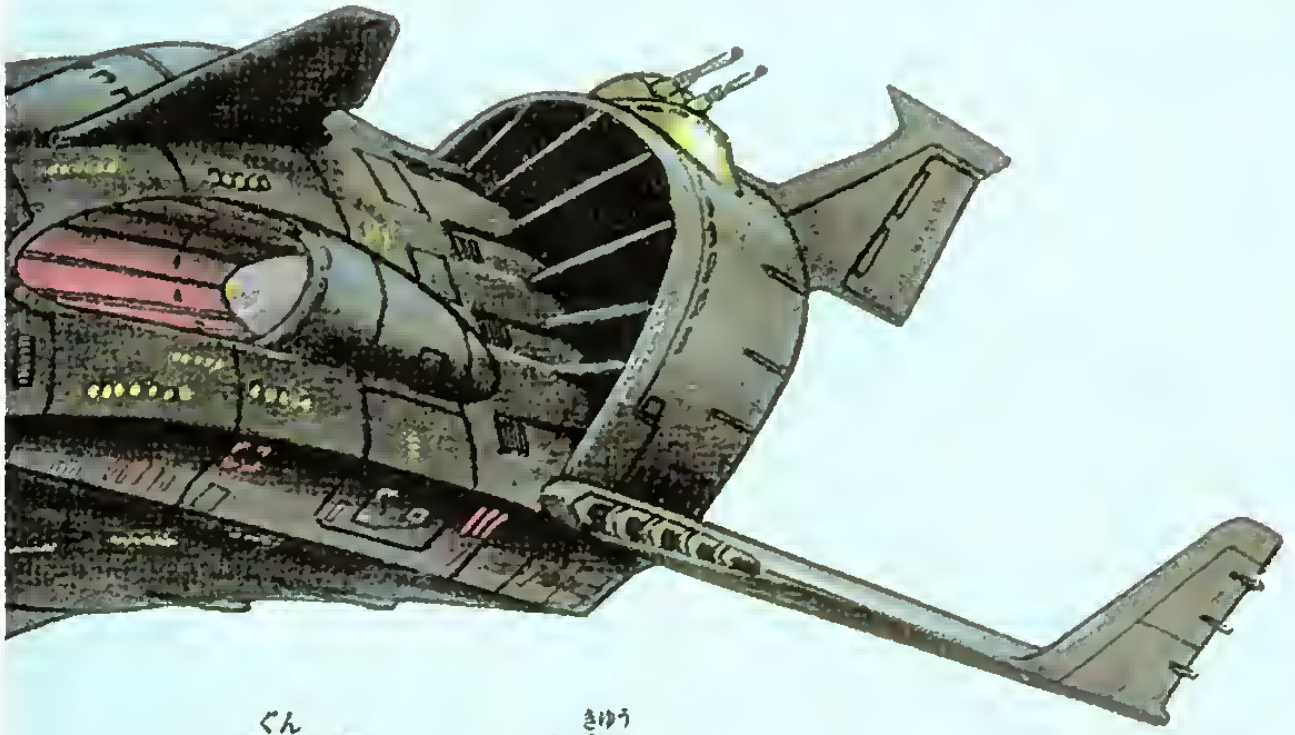
MSV STAR SHIPS



連邦軍マゼラン級 宇宙戦艦







ジオン軍ザンジバル級

機動巡洋艦

MSV STAR SHIPS

ジオン軍ムサイ級

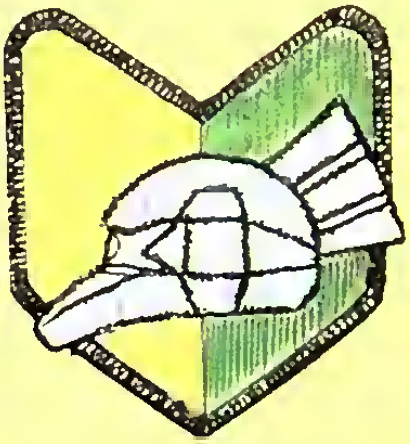
宇宙軽巡洋艦

ジオン軍

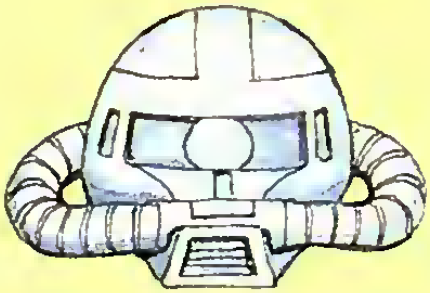
MILITARY COSTUME

●突撃服

●ノーマルスーツ
（モビルスーツ搭乗用）



●年少モビルスーツ
パイロット章



●モビルスーツパイロット章

●ジオン勲功大章

●熱帯地用
戦闘服

GMスナイパーカスタム

迎撃！

MSV ART COLLECTION

MS 06Fザク II

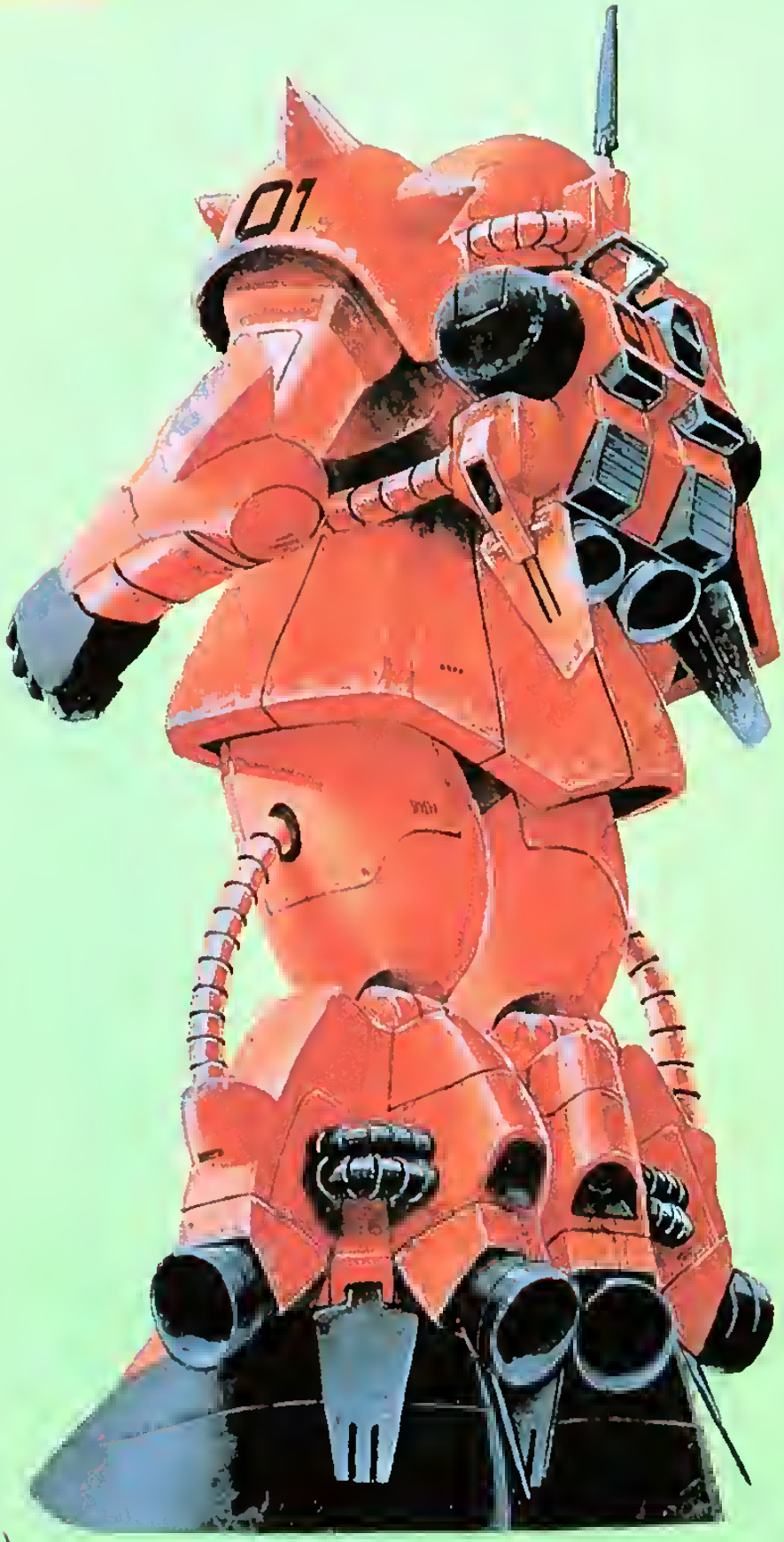
機雷敷設

NEW MOBILE SUIT
ニュー モビル スーツ

ジオン軍

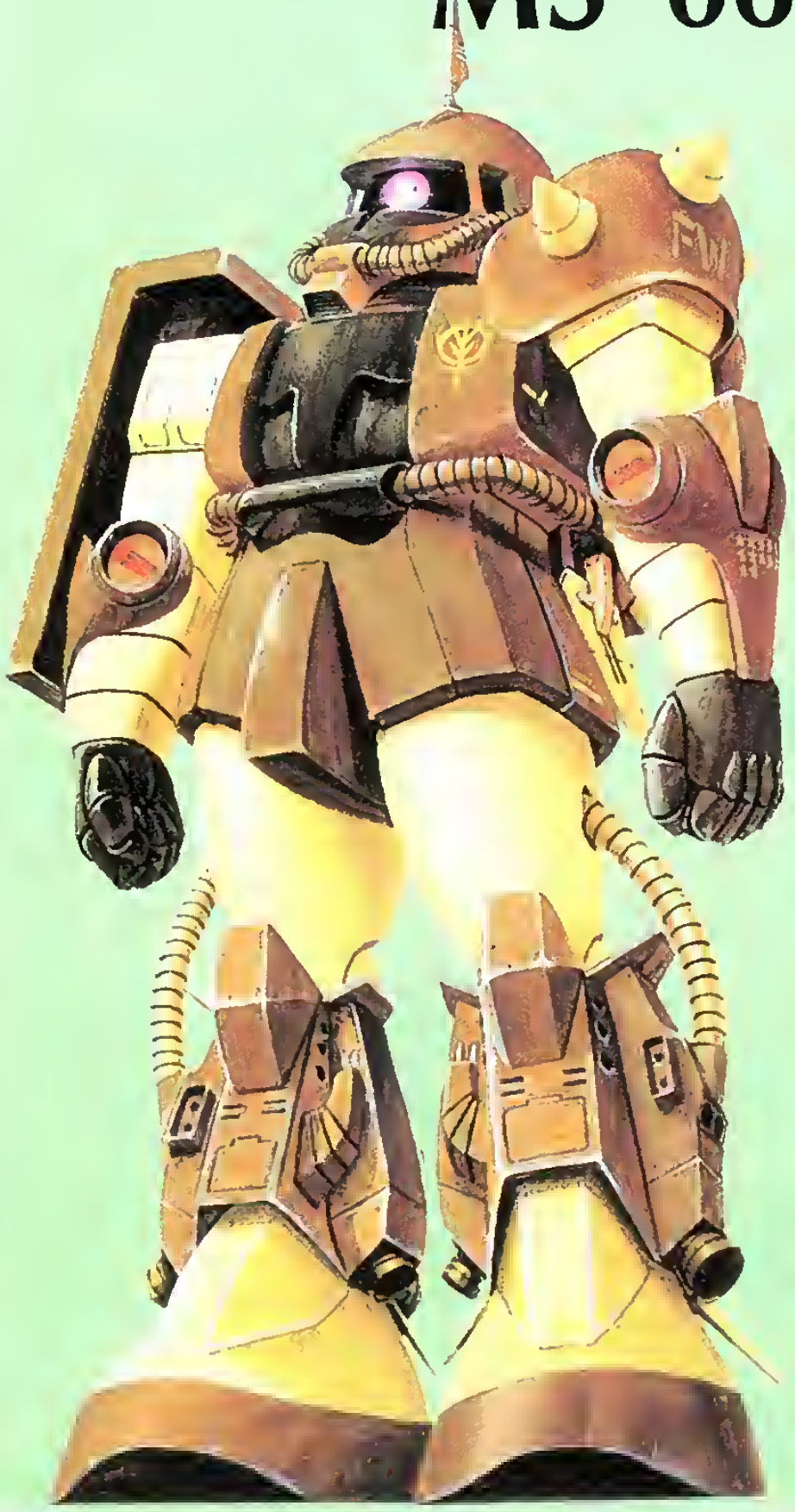
MS-06RP
エムエス アールピー

Fタイプ後期量産型を改修したRタイプの試作機は、RPタイプとよばれた。試作された二機は、月面のグラナダ基地へはこばれ、各種テストがおこなわれた。Fタイプとの相違点は、背部メーンロケット、脚部に新設されたサブロケット、ならびにインテグラルタンクの大容量化などである。試験飛行はエリオット＝レム少佐によっておこなわれ、好成績をのこした。


01

MS-06R-1A

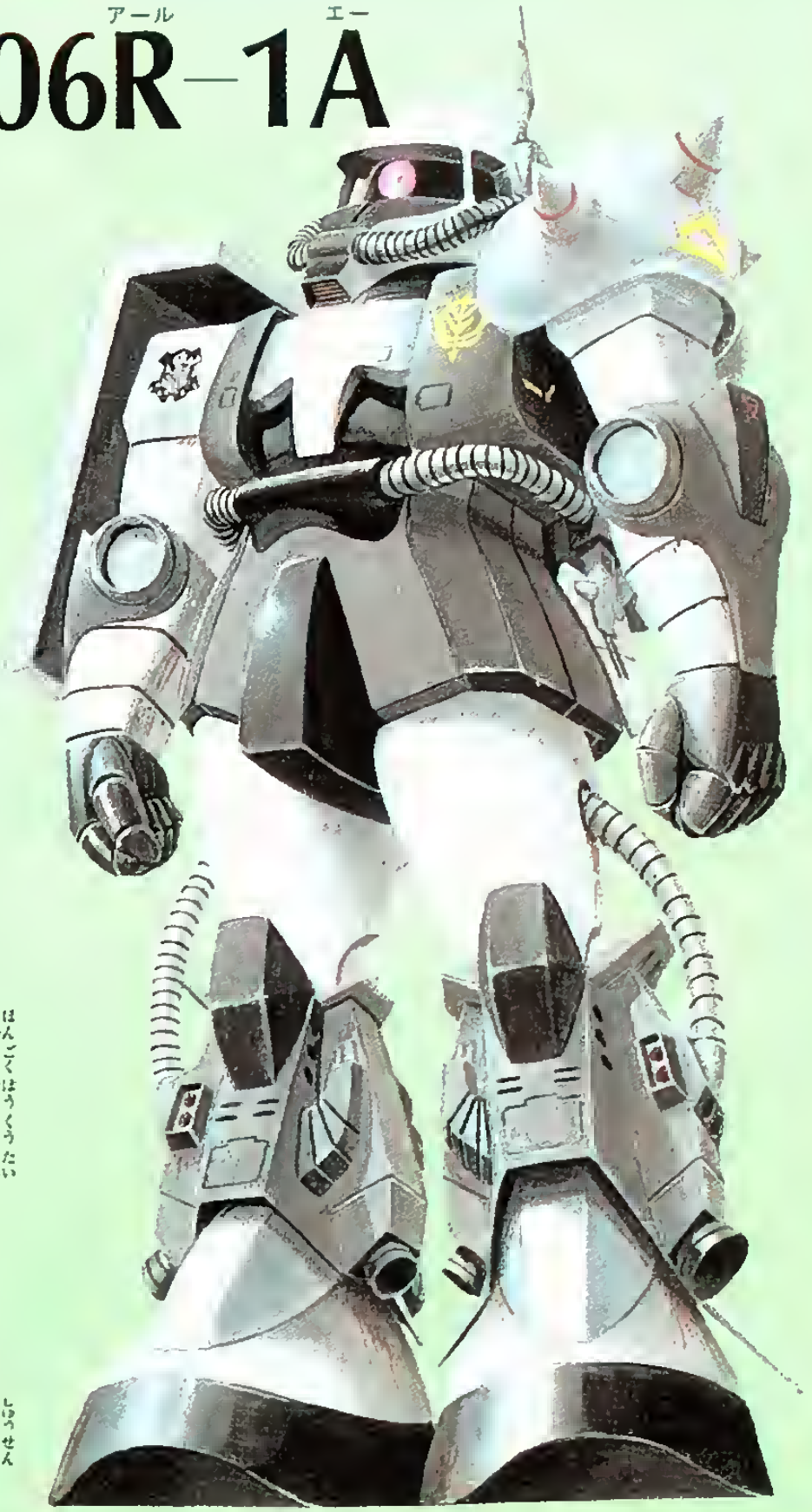
エム エス　アール　エー



ジオン軍の宇宙要塞ア＝バオア＝クーのEフィールド防空大隊に所属していた、マサキ＝ナカガワ中尉のMS-06R-1A。戦後に公表された格納庫内での写真では、茶系を基本とするパーソナルカラーで塗装された機体上部しかみえないため、迷彩塗装された地上用ザクIIと思われていたが、のちに脚部もうつった写真が発見され、Rタイプとわかった。

MSV NEW MOBILE SUIT

MS-06R-1A

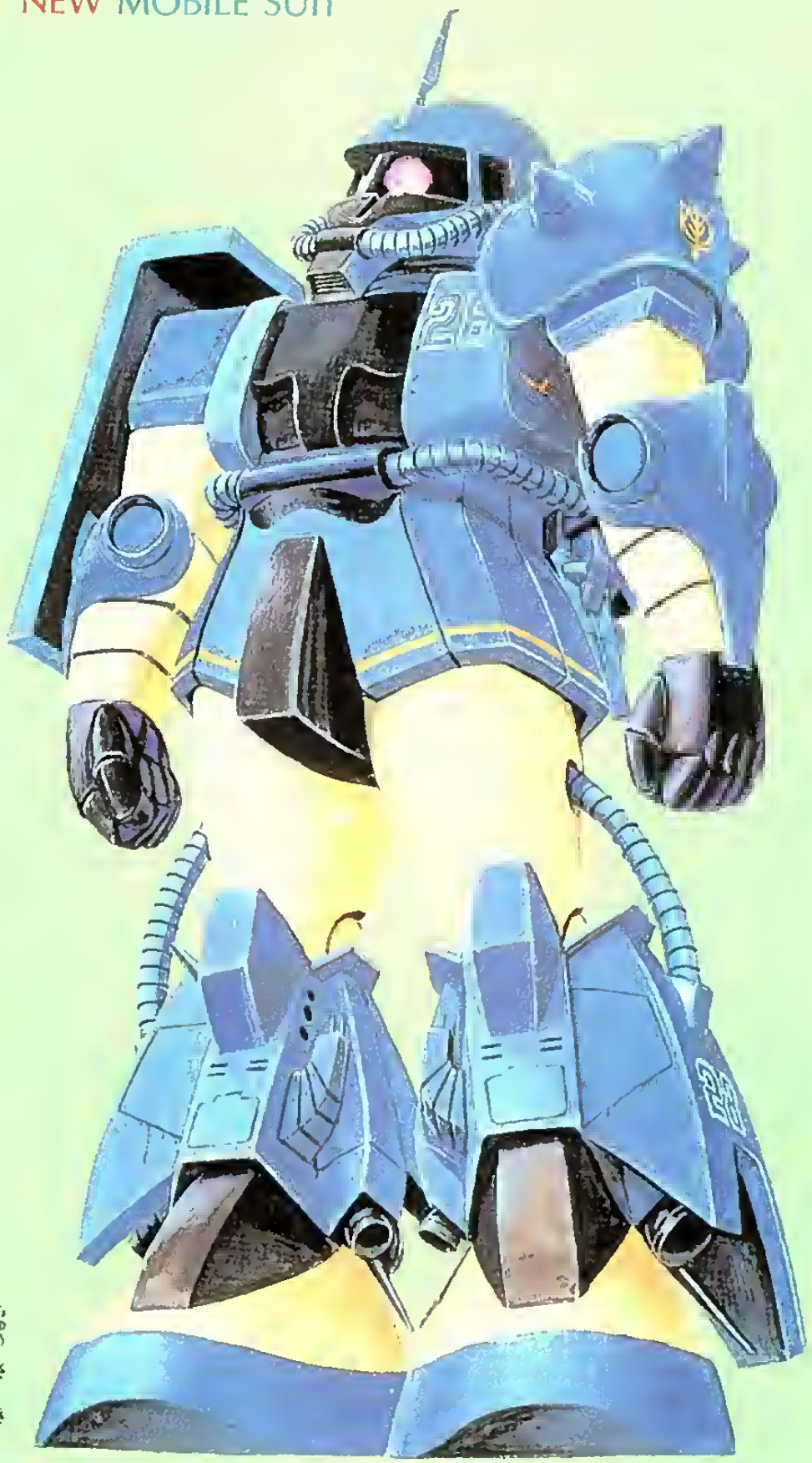


このMS-06R-1Aは、ギレン総帥直属のジオン公国防空本部に所属した、エリック＝マンスフィールド中佐の乗機である。エンブレムのグリフォンは本国防空隊のものだが、終戦直前にア＝バオア＝クー攻防戦で確認されていることから、ギレン総帥とともに本国から移動してきたものと思われる。

MS-06R-2
エム エス　アール

わずか四機の生産でおわったR-2タイプは、研究用の一機をのこしてすべて、熟練パイロット用に配備されている。なかでも、ジョニー＝ライデン少佐機は有名である。

●ロバート＝ギリアム大佐機

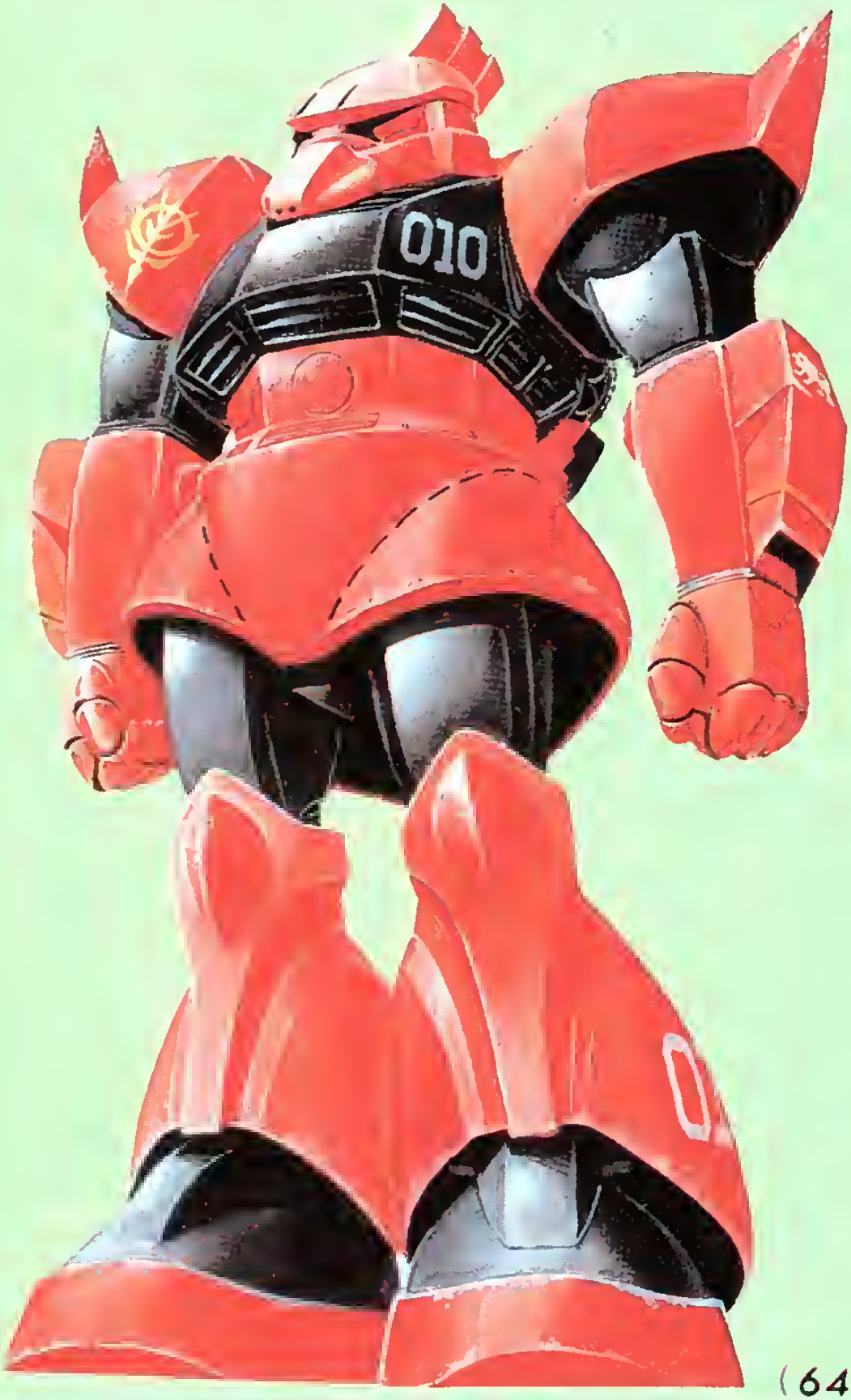


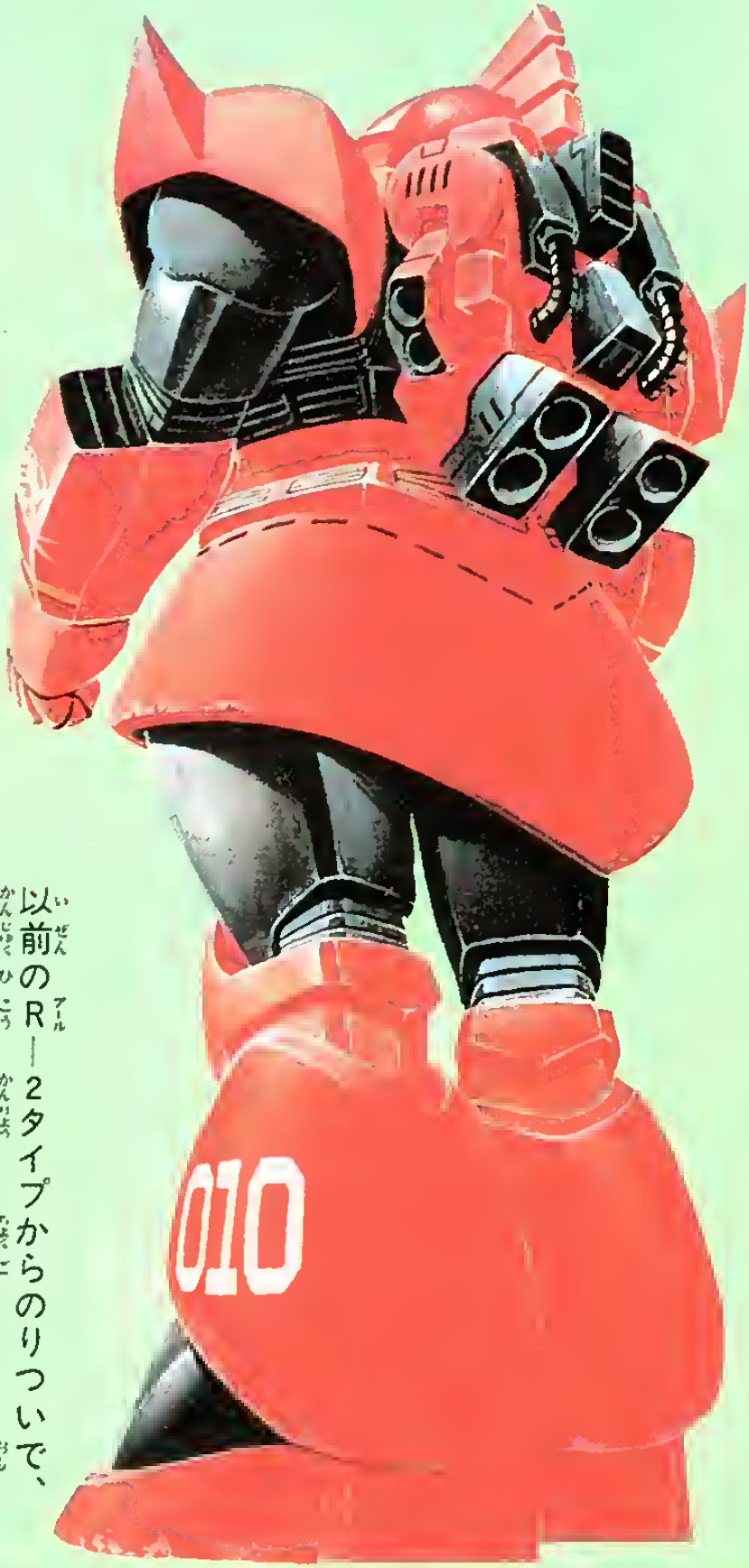
●ギャビー＝ハザード中佐機

R―2タイプのほかの二機については、正確な記録がみあたらないが、グラナダ周辺の戦力集結のさいに、この二機が確認されている。

MS-14B

エム エス ビー





〝真紅の稲妻〟ことジョニー＝ライデン少佐は、エース部隊時代にMS－14BとMS－14Cをのりついでいたが、乗機の全体写真はながらく公表されていなかった。このMS－14Bは、それ以前のR－2タイプからのりついで、慣熟飛行が完了した直後のものと思われる。赤に黒のアクセントのはいった塗装は、よく知られているバックパックのアップ写真と多少ことなっているが、チューニング終了後に再塗装されたものであろう。

MSV

ART COLLECTION

MS—06R—2ザクII

真紅の稲妻

MOBILESUIT VARIATION

RX MOBILESUIT HANDBOOK

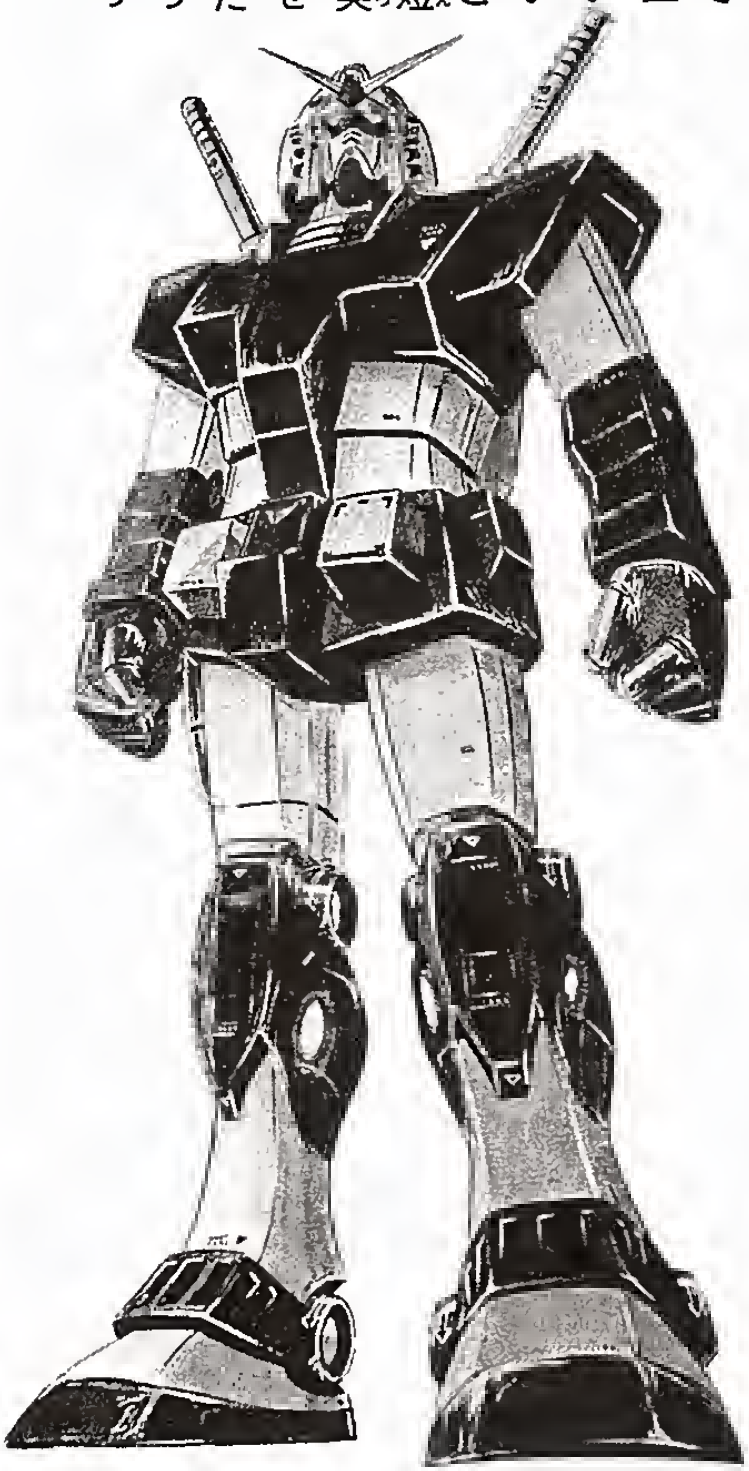
もくじ

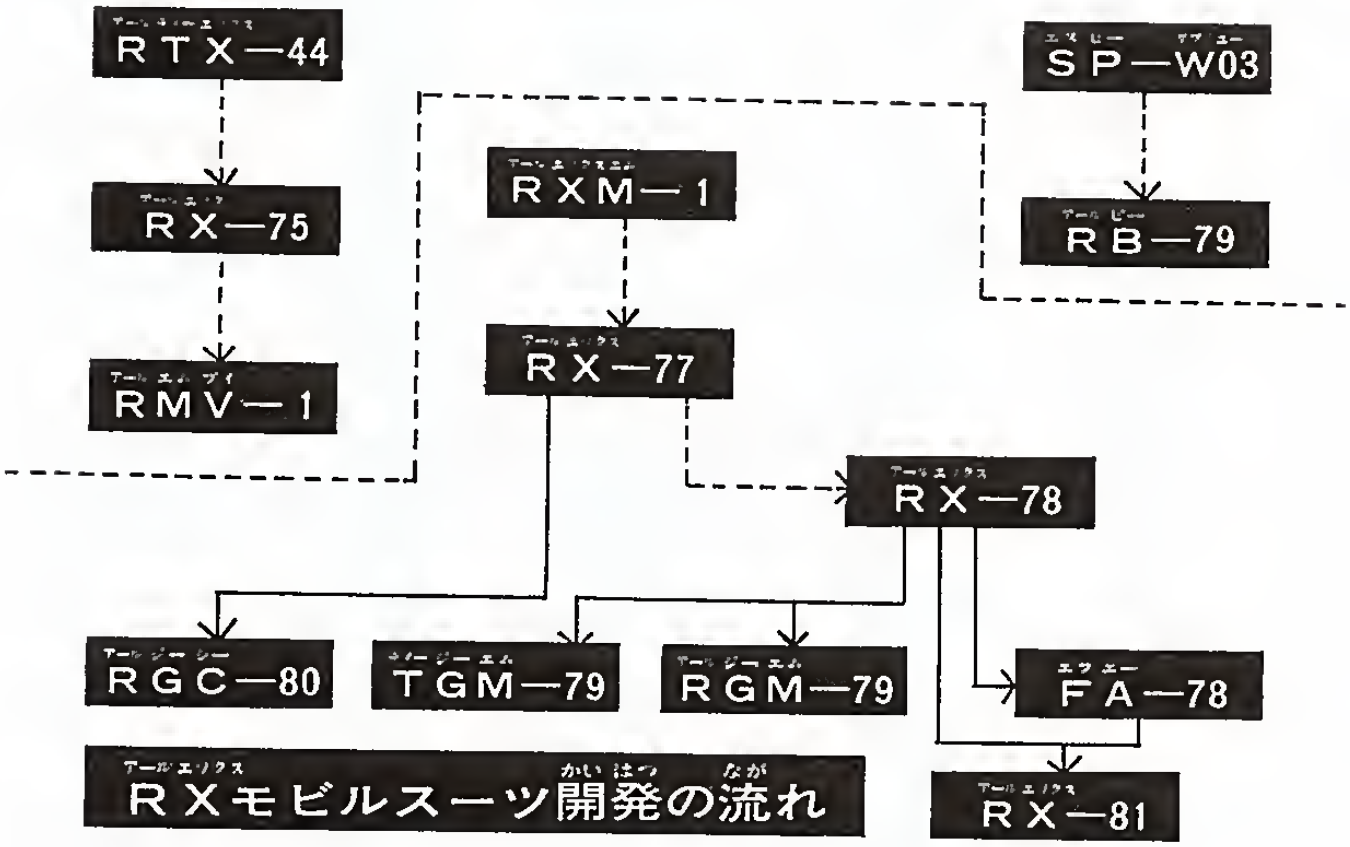
RXモビルスーツ開発史‥68・102
RX—75‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥4・70
RX—77シリーズ‥‥‥‥‥‥‥‥5・73
RX—78シリーズ‥‥‥‥‥‥‥‥10・80
FA—78—1‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥13・88
RGM—79シリーズ‥‥‥‥‥‥18・90
TGM—79‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥22・94
RGC—80‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥23・96
RB—79，SP—W03‥‥‥28・100
RMV—1‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥29・99

コアファイターバリエーション
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥32・104
Gメカ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥30・118
ホワイトベースストーリー‥‥129
ジオン公国独立戦争史‥‥‥‥‥146
連邦軍アクショングラフィック
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥8・15・26・169
連邦軍対ジオン軍戦力比較‥‥156
ミリタリーコスチューム&
スモールアームズコレクション
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥54・179

連邦軍RXモビルスーツ開発史(1)

連邦軍のRXモビルスーツの開発は、開戦の直後からスタートされていた。だが、実用機たるRX－77タイプやRX－78タイプがロールアウトしたのは、開戦から約八か月がすぎたころであった。ジオン軍が実用モビルスーツを完成させるまでに約五年の歳月をついやしたのにたいし、連邦軍がこれほどまでに短期間で高度な実用機を完成させることができたのには、いくつかの原因があった。その大きなものとしては、以前から汎用技術としての歩行メカをはじめ、モビルスーツに必要な技術や、それをささえる経済力にすぐれていたことである。また、戦争に反対したジオン軍のモビルスーツ技術者の何人か





RXモビルスーツ開発の流れ

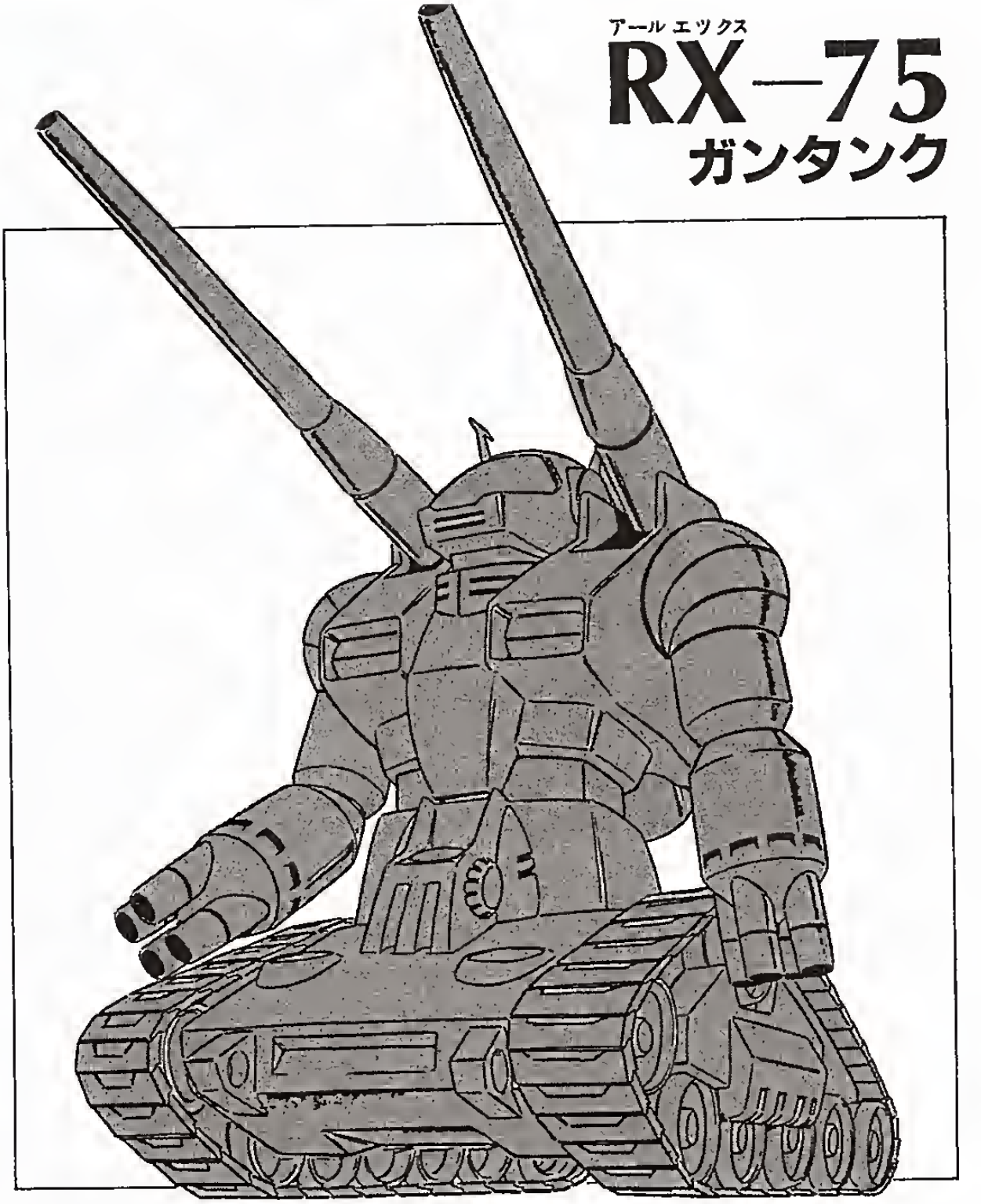
が、地球連邦に亡命したことも、大きな原因であった。

亡命技術者の協力のもと、対モビルスーツ戦闘車両RTX—44（試作）の全面リファインによりRX—75を完成。つぎにフルスケールテストタイプビーグルRXM—1へと発展していった。このころ、ジオン軍は地球侵攻作戦を開始、戦いは宇宙から地球へとうつっていた。

さて、連邦軍がはじめて開発した対モビルスーツ兵器RTX—44は、戦闘車両であり、モビルスーツではなかった。形は通常の戦車とおなじで、二百四十ミリ砲二門、対空ロケット砲四門という重武装で、総重量は九十七トンもあった。このため、機動性は極度に低く、兵器というよりは巨大な鉄塊とでもよぶべきものであった。

（一〇二ページにつづく。）

RX—75 ガンタンク

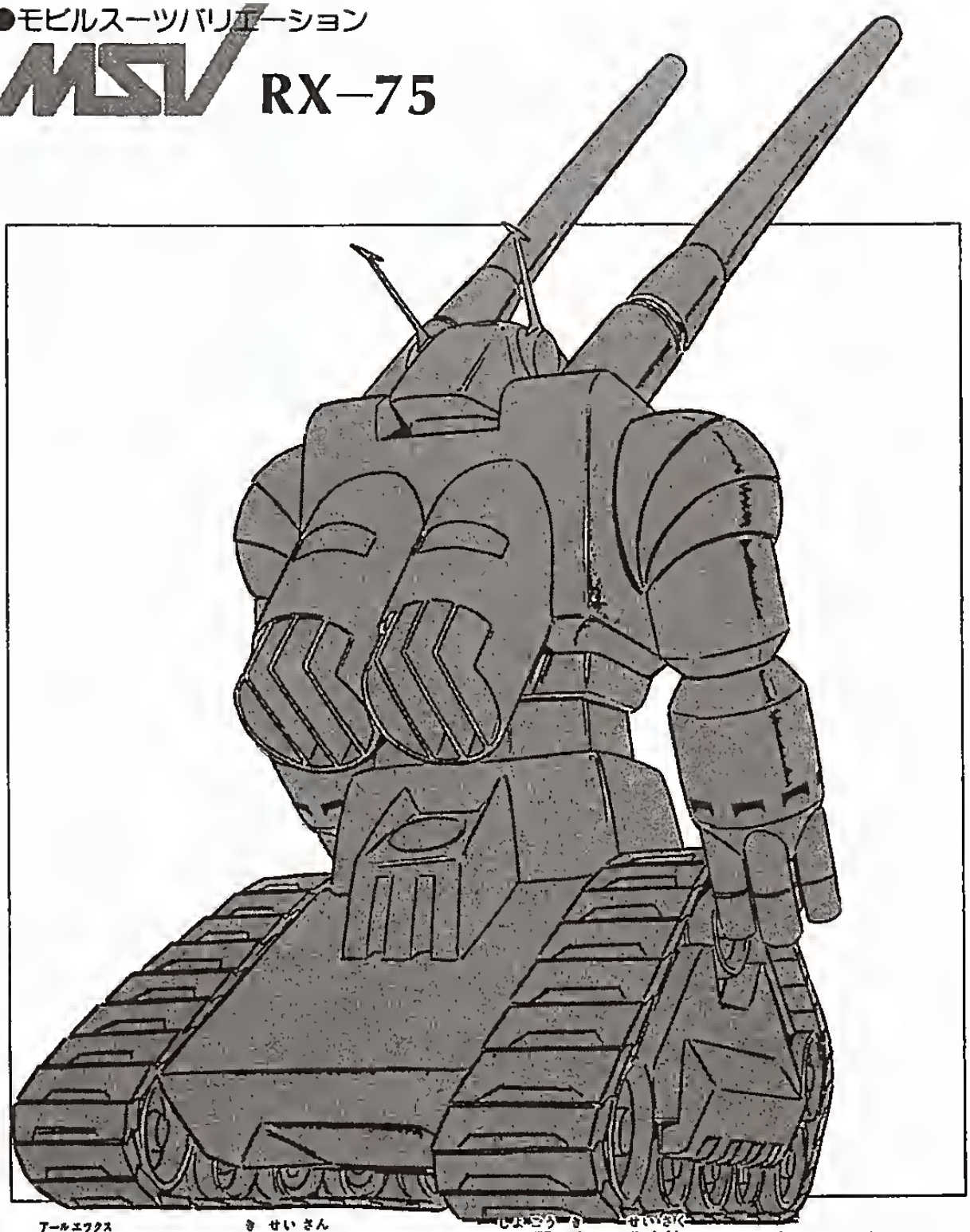


RX—75ガンタンクは，連邦軍初のRXモビルスーツであり，両軍をつうじても，初のキャタピラ式モビルスーツである。原型は宇宙世紀79年3月20日に完成したRTX—44で，これにコアブロックシステムや反応炉動力システムをくわえ，全面再設計したものである。

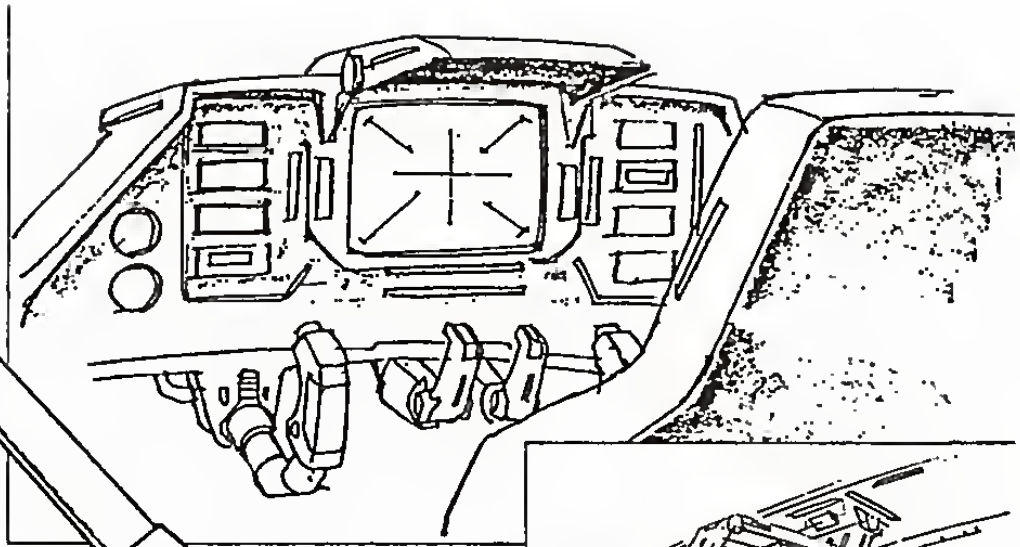
●モビルスーツバリエーション

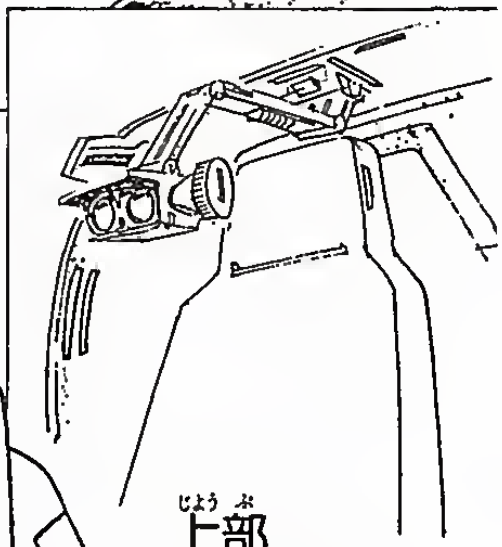
MSV

RX—75



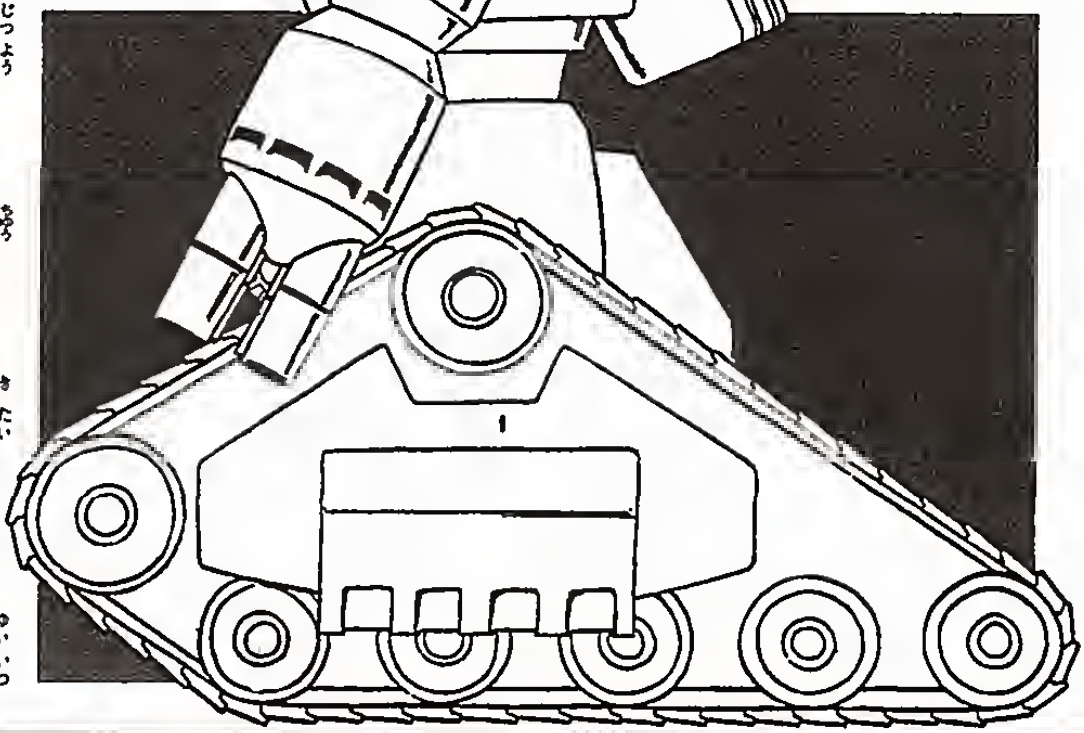
RX—75は4機生産されたが，初号機は製作スケジュールのつごうにより，コアブロックシステムが省略されている。武装は，120ミリキャノン砲2門，40ミリ4連装ボップミサイルランチャー2基をもつ。各種ミサイルランチャーも用意されるはずであったが，計画だけにおわっている。



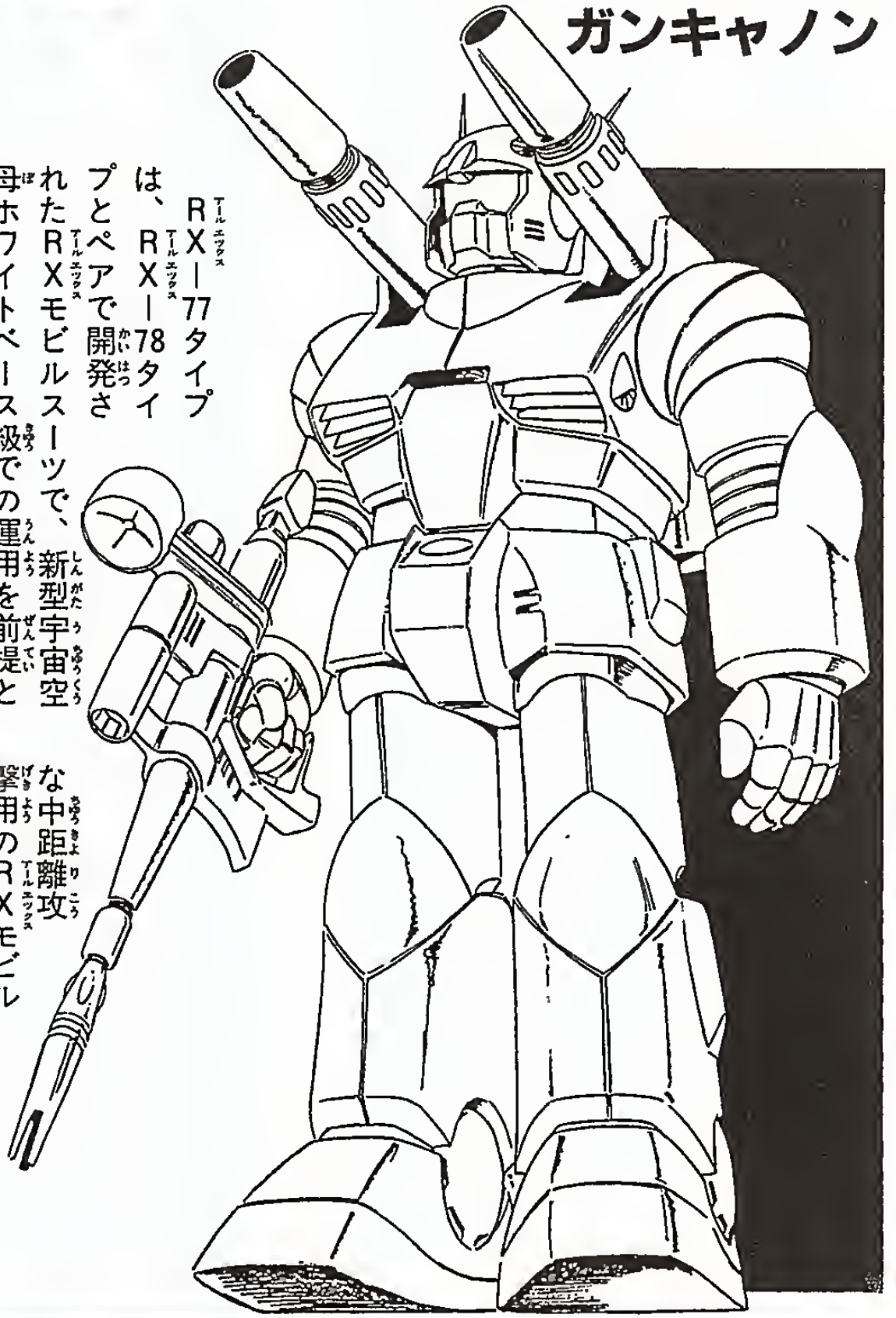


上部
コクピット

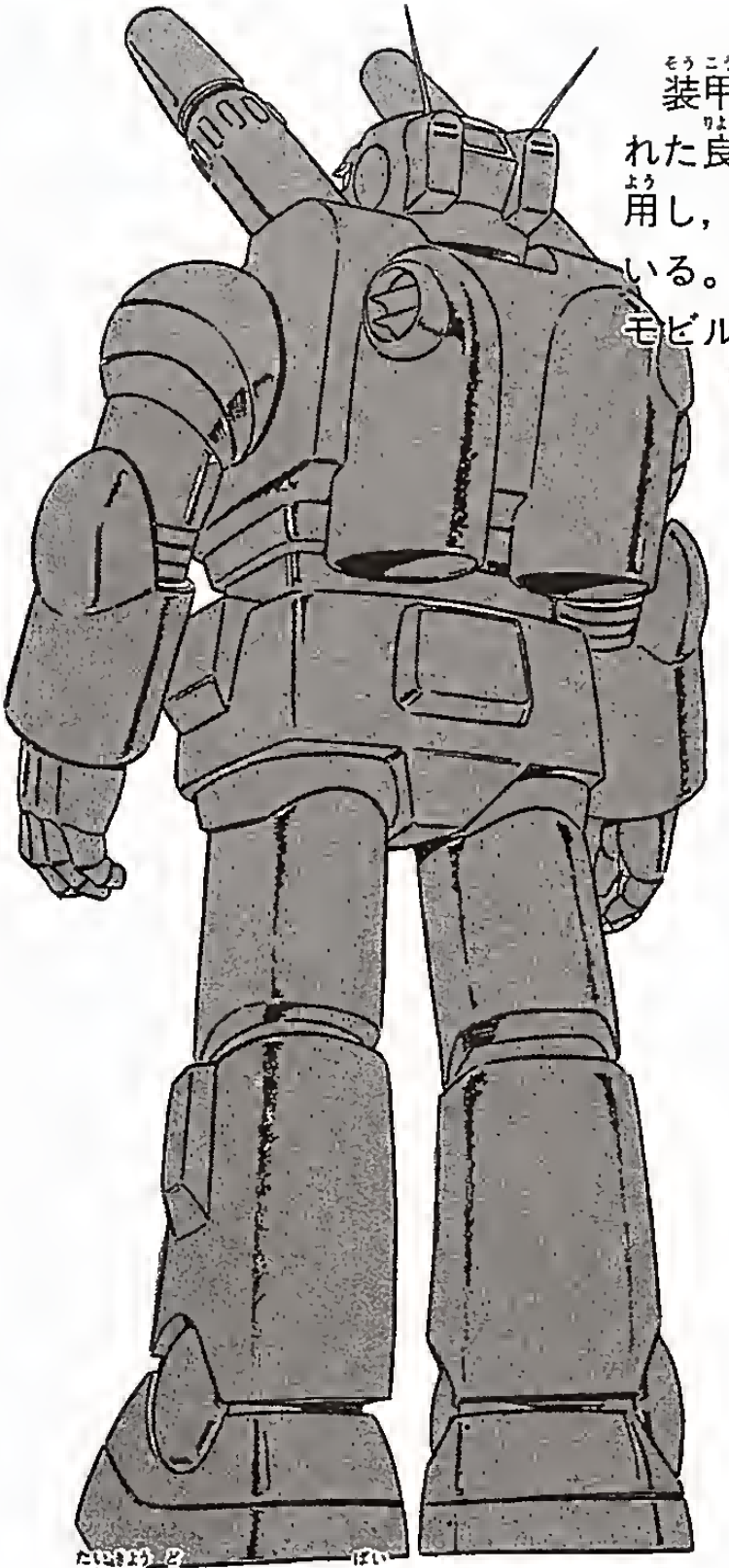
RX－75（アールエックス）の初号機は、操縦用と戦闘用の二つのコクピットをもつものだったが、二号機からは、コアブロックですべてをコントロールできるように改修された。なお、本機の実戦参加は、サイド7で実用テスト中だった機体のうち、唯一の残存機である三号機の一例のみで、それも短期間だった。



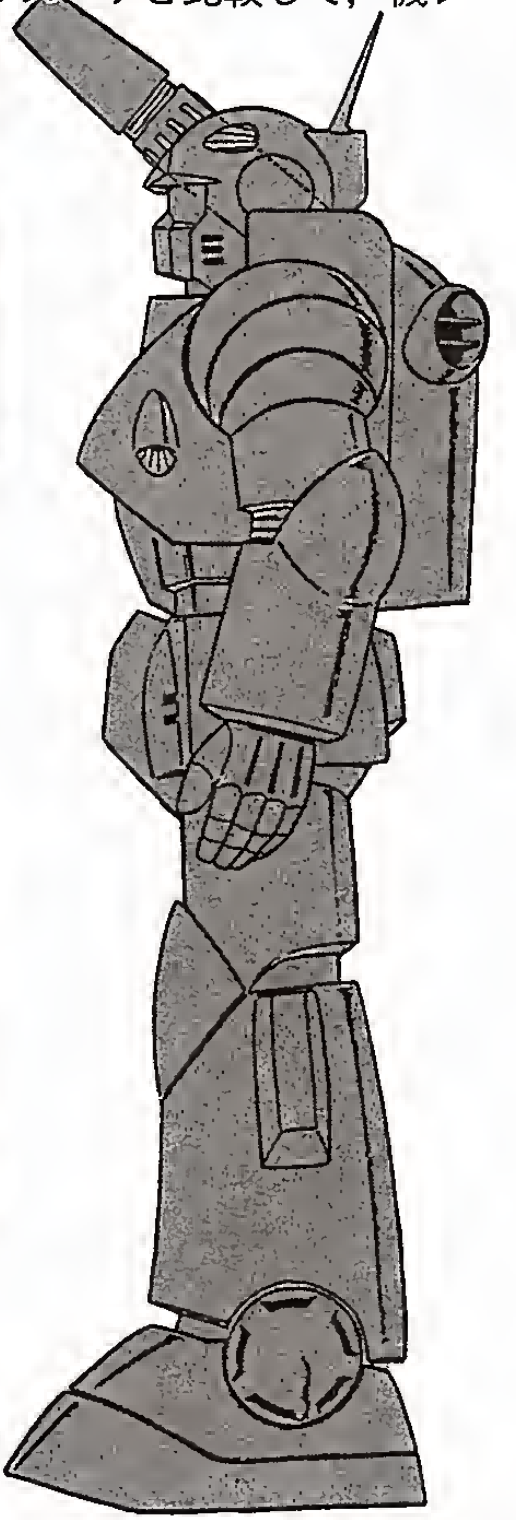
RX—77—2
ガンキャノン



RX—77タイプは、RX—78タイプとペアで開発されたRXモビルスーツで、新型宇宙空母ホワイトベース級での運用を前提としていた。RX—77は、接近戦も可能な中距離攻撃用のRXモビルスーツとしてつくられている。

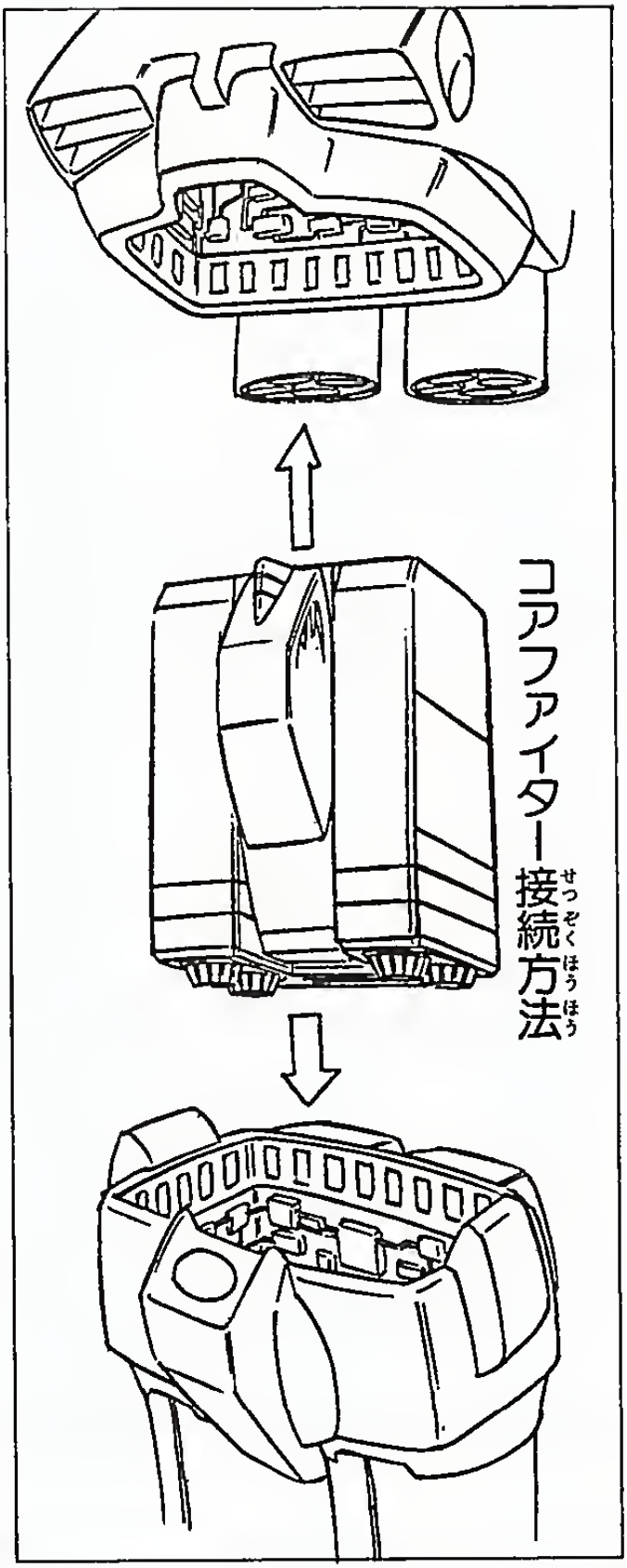


装甲には，ルナツーで採掘された良質のルナチタニウムを使用し，ザク以上の厚さをもっている。これにより，ジオン軍のモビルスーツと比較して，機↙



↙体強度は５～６倍にはねあがっている。この考え方は，他の量産タイプＲＸモビルスーツにもうけつがれている。

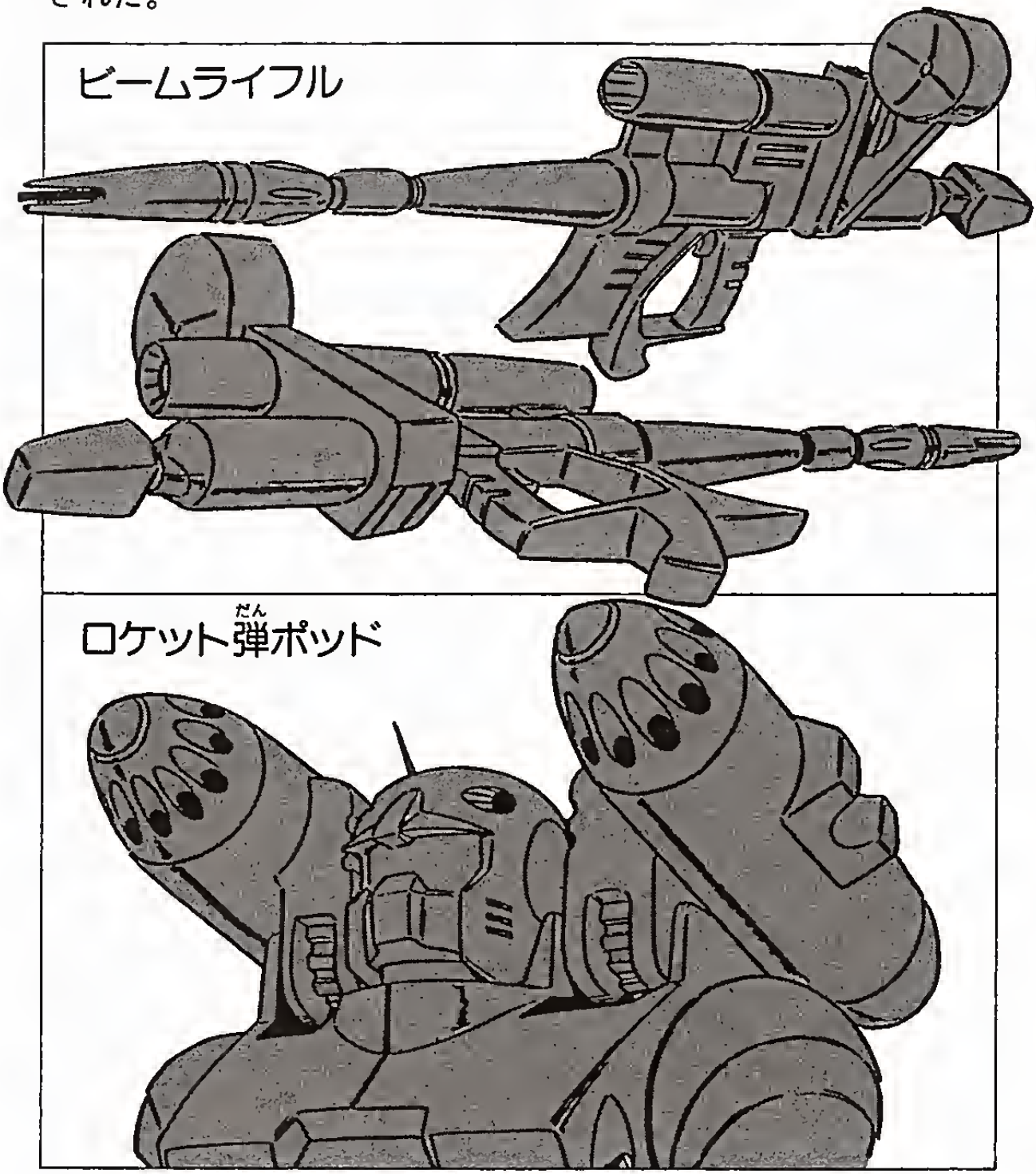
MSV RX−77



コアファイターとRXモビルスーツとの組みあわせ、すなわちコアブロックシステムは、モビルスーツ開発でおくれをとった連邦軍の苦肉の策といえる。モビルスーツの数でおとる連邦軍では、パイロットの生存と戦闘データの収集は至上命令であった。そのために、RX−75からRX−78までのすべての機体にコアブロックシステムが採用された。だが、製造コストは非常に高いものとなり、RX−77タイプでザクの四倍、RX−78にいたっては七倍以上という、戦術兵器としては史上まれにみる高価なものとなった。つづく量産タイプには、かなり簡略化されたコアブロックシステムを搭載している。

ガンキャノンの武装

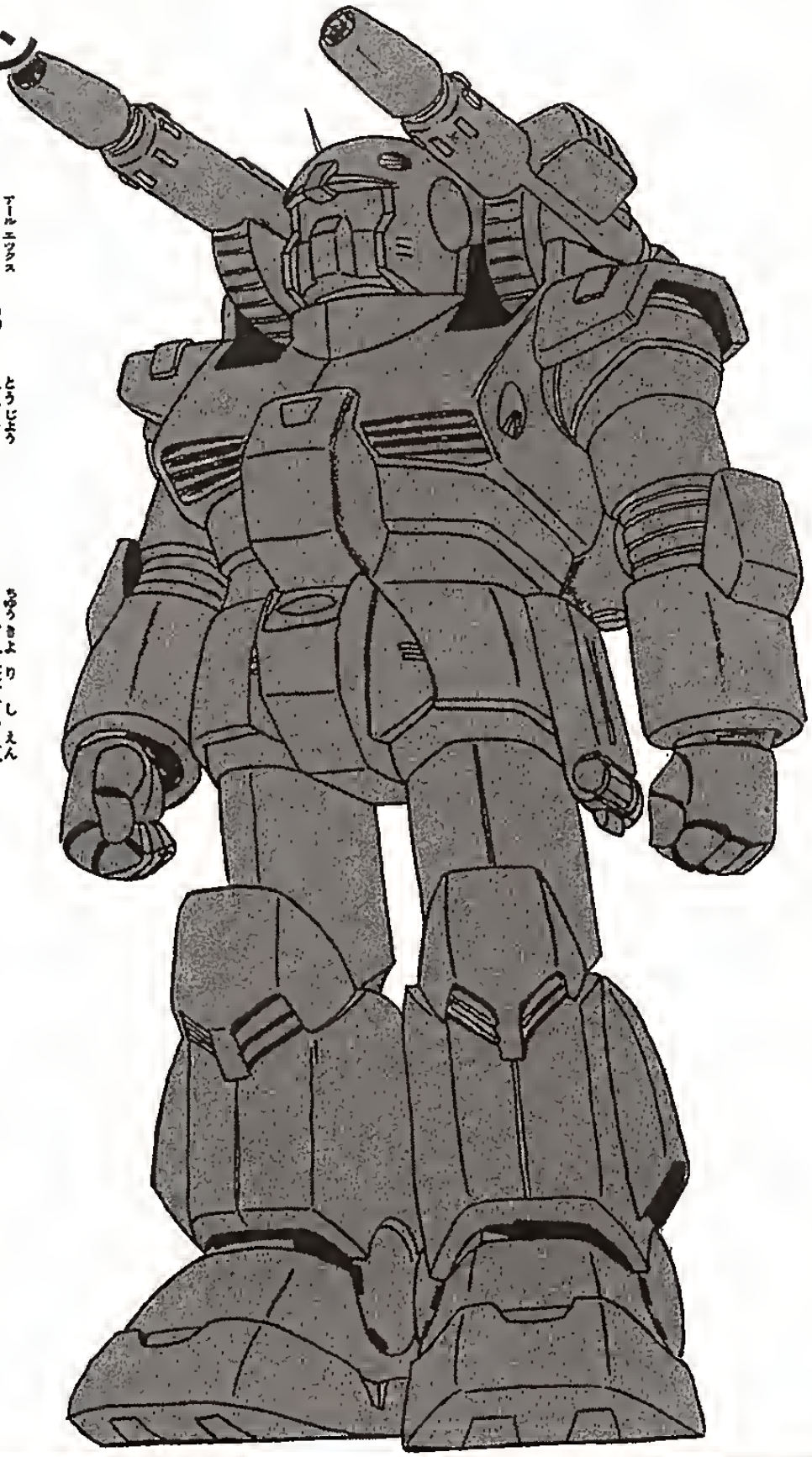
RX—77タイプの接近戦には，射程距離の長いビームライフルがよく使用された。



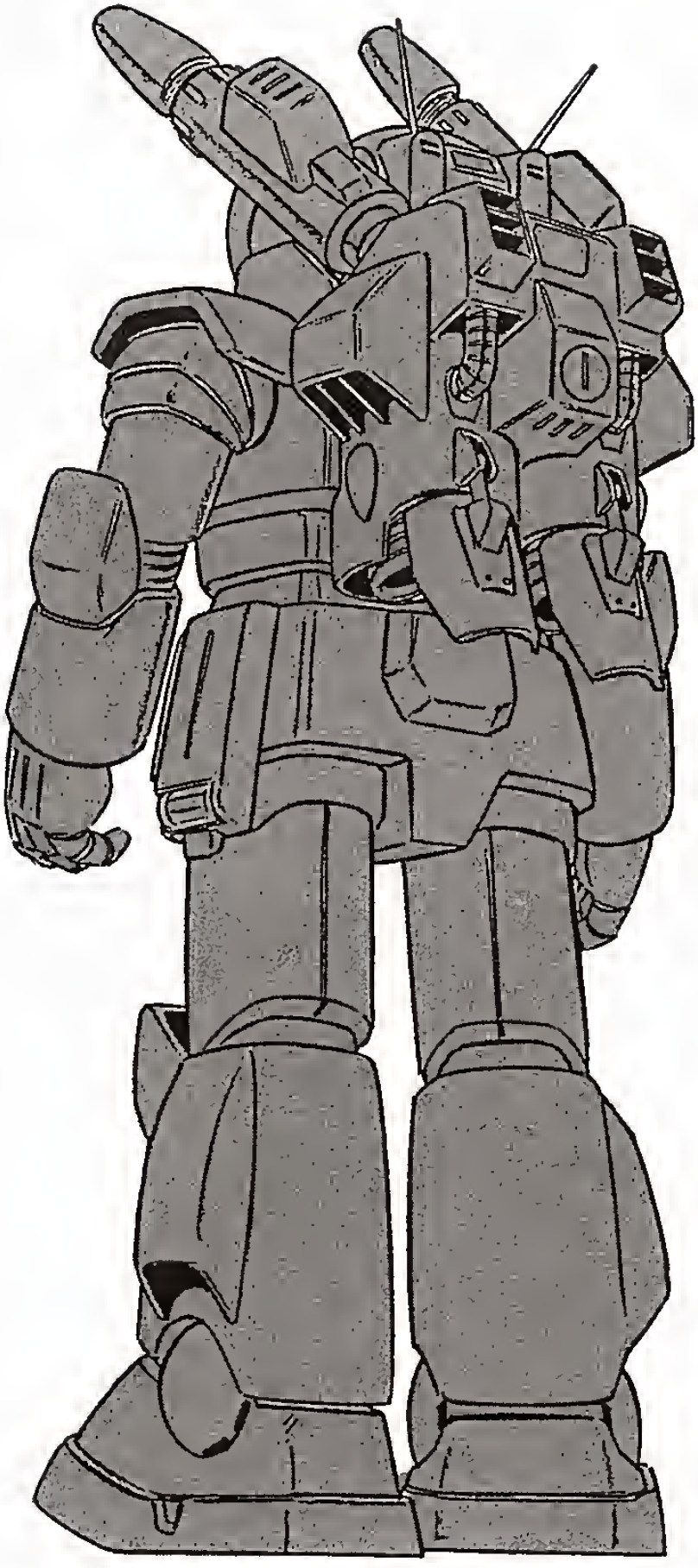
試作段階まで開発がすすんだ武装に，12連装ロケット弾ポッドがあった。これは接近戦用だったが，なぜか実用化されなかった。

RX—77—3

ガンキャノン重装型



RX—78の登場により、中距離支援用RXモビルスーツとしての地位を確立したRX—77は、量産タイプのRGC—80の開発がはじまってからも研究がつづけられた。RX—77—2の実戦データをもとに、単独戦および同機種編成による集団戦用として、武装強化がほどこされることとなった。これがRX—77—3である。

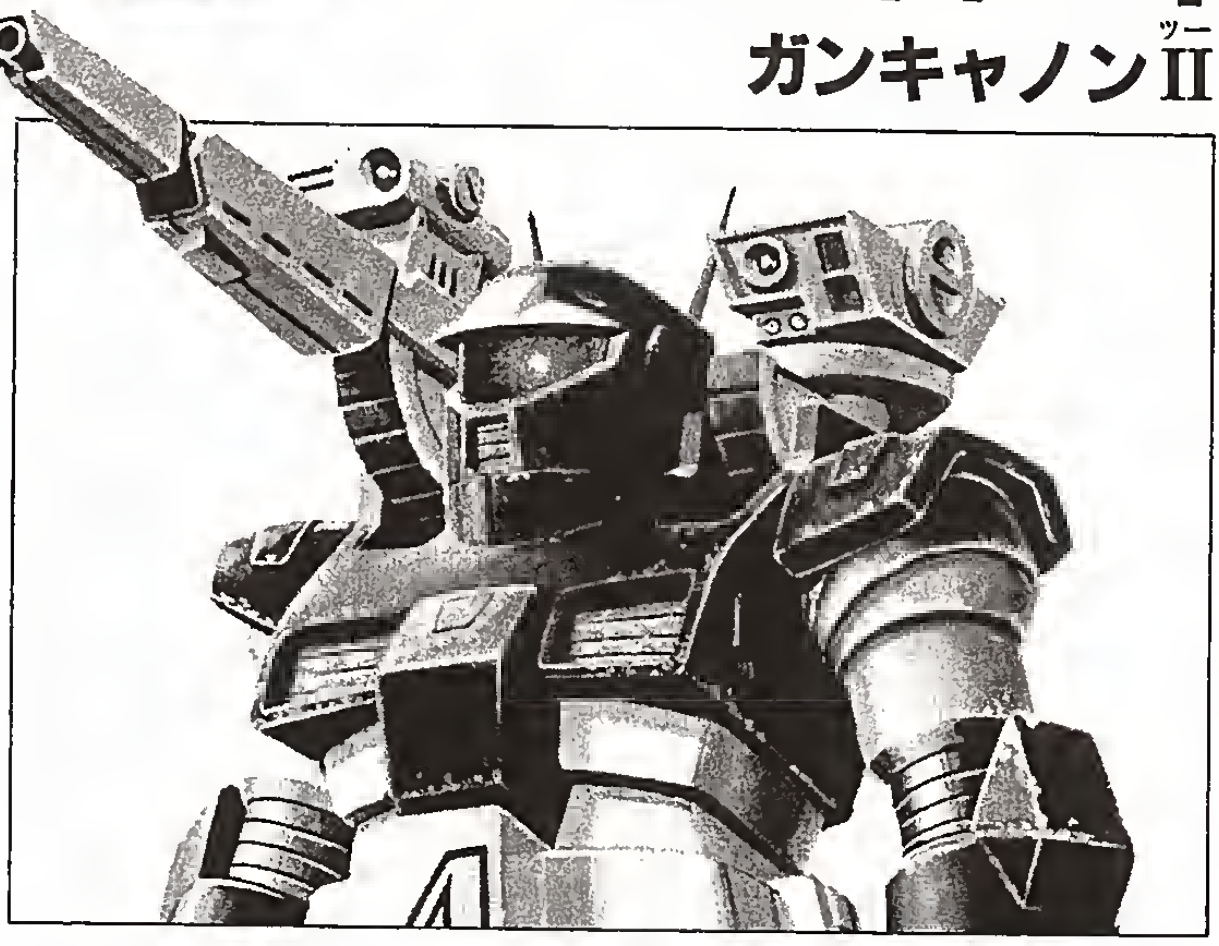


重装型ガンキャノンは、いぜんとしてRX－77－2とおなじ火薬式のキャノン砲を装備していたため、射撃時の反動やバランスに多少の問題をかかえていた。といっても、MS－06Kザクキャノンほどひどいものではなく、実用上、大きなネックになるようなものではなかった。しかし、問題点を完全に解決するため、同機のキャノン砲をビームキャノンに換装したテスト機が製作され、実験がおこなわれている。

●モビルスーツバリエーション

MSV

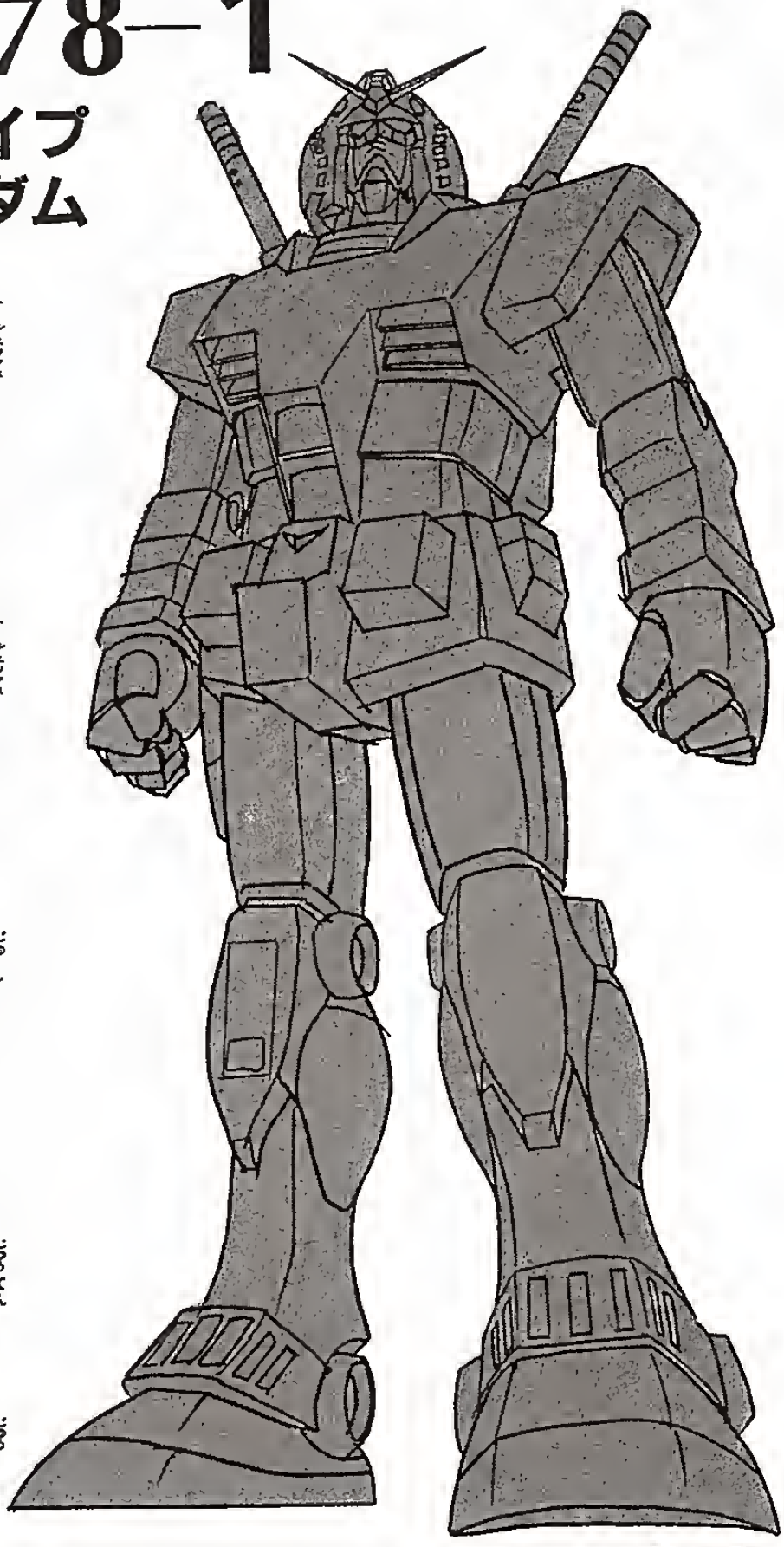
RX—77—4 ガンキャノンII



RX—77の最終型であるタイプ4は、それまでのタイプ2、タイプ3での各種データをとりいれて設計されている。それまで二門装備されていた火薬式キャノン砲は、右肩のビームキャノン一門のみとなり、左肩にはビームキャノンと連動する多目的精密照準システムが新設された。それまで背部にあったキャノン砲の排煙器をとりのぞき、かわりに推進システムをふくむランドセルが装着された。これにより、短距離ジャンプ飛行が可能となった。

同機は大戦末期に復興なったキャリフォルニアベースで完成し、若干機が実用テストをかねて、北アメリカ大陸で実戦参加している。これ以外のRX—77タイプの実戦参加例は、ホワイトベースなどに配備された三機のRX—77—2があるのみである。

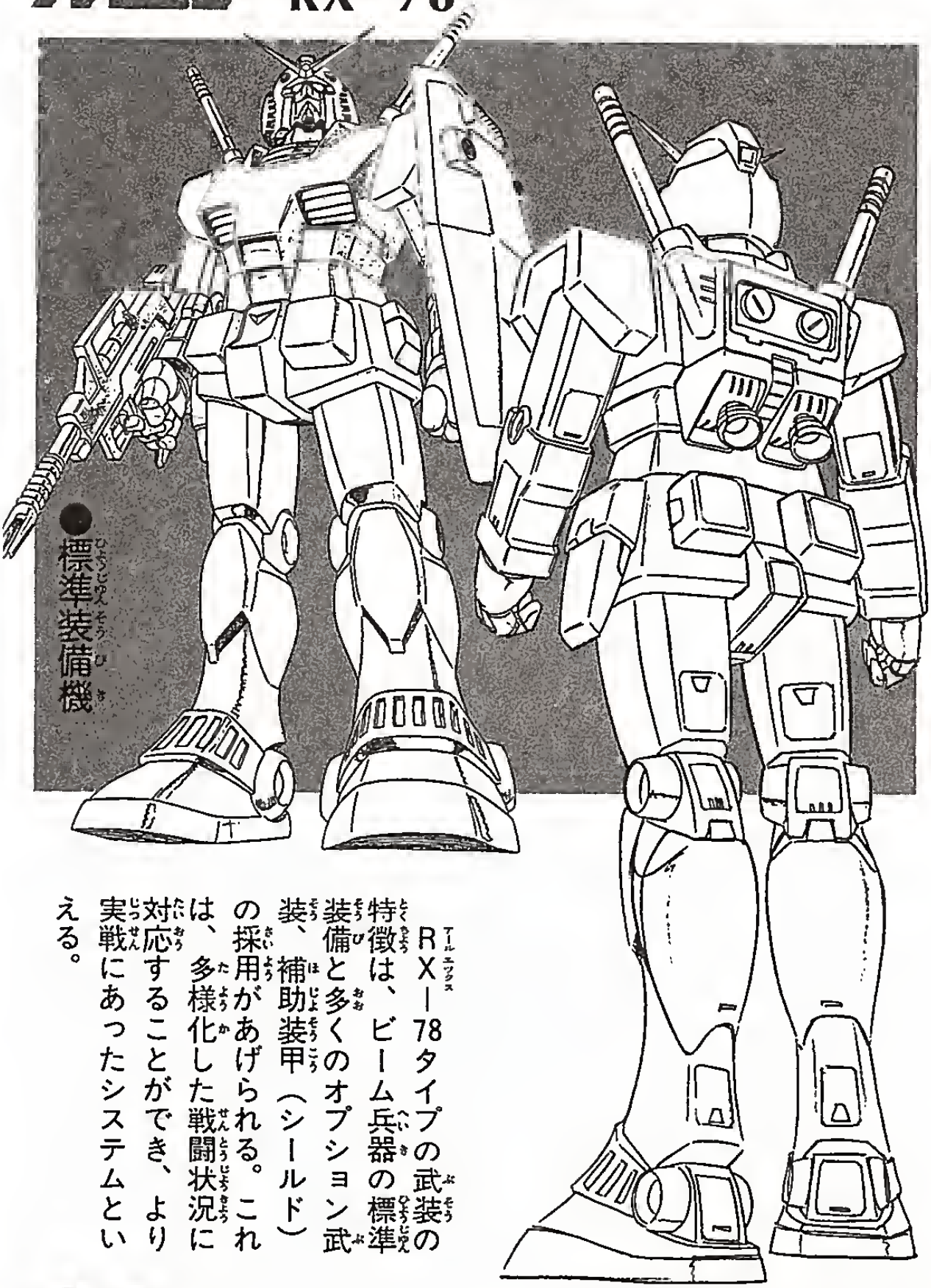
RX—78—1
プロトタイプガンダム



RX—78シリーズのRXモビルスーツは、ジオン軍の一連のモビルスーツに単一機種で対抗できるように設計されていた。機体は、RX—77タイプとおなじルナチタニウムを使用し、特殊樹脂やセラミックを充填した三重のハニカム構造の装甲でおおわれ、強化と軽量化の両立に成功している。このほかにも、コアブロックシステムなど、数多くの新技術が投入されている。

●モビルスーツバリエーション

MSV RX－78



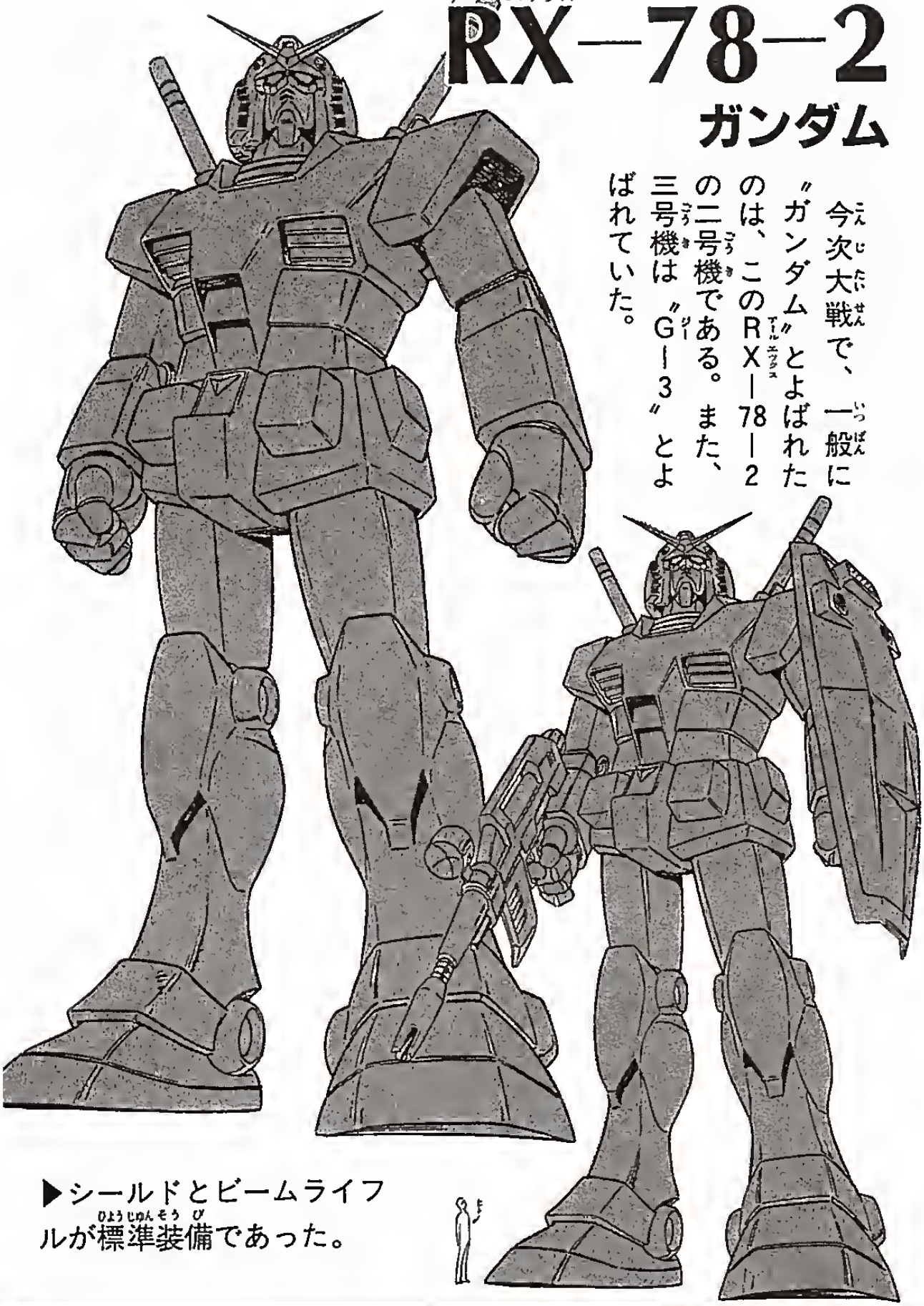
●標準装備機

RX－78タイプの武装の特徴は、ビーム兵器の標準装備と多くのオプション武装、補助装甲（シールド）の採用があげられる。これは、多様化した戦闘状況に対応することができ、より実戦にあったシステムといえる。

RX—78—2 ガンダム

（アールエックス）

今次大戦で、一般に〝ガンダム〟とよばれたのは、このRX—78—2の二号機である。また、三号機は〝G—3〟とよばれていた。

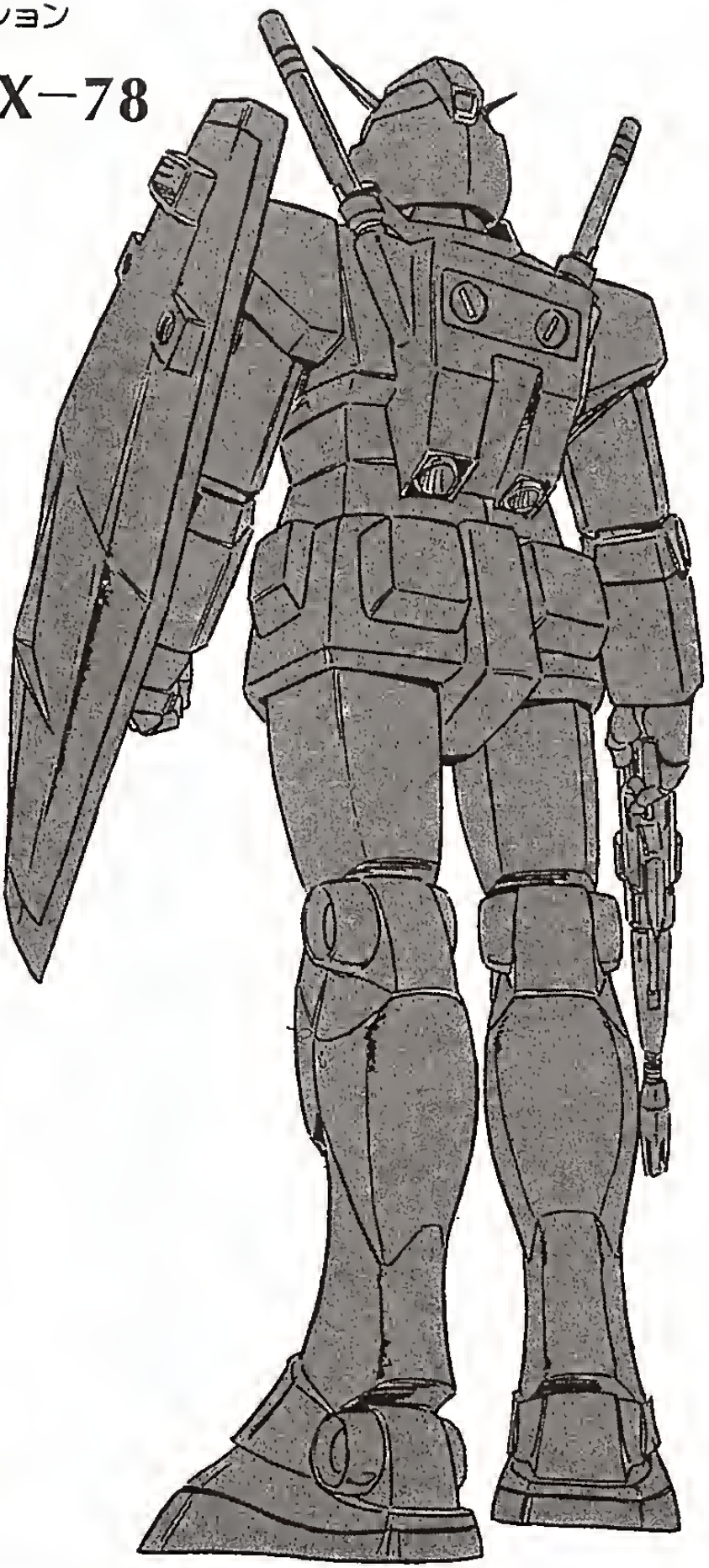


▶シールドとビームライフルが標準装備であった。

●モビルスーツバリエーション

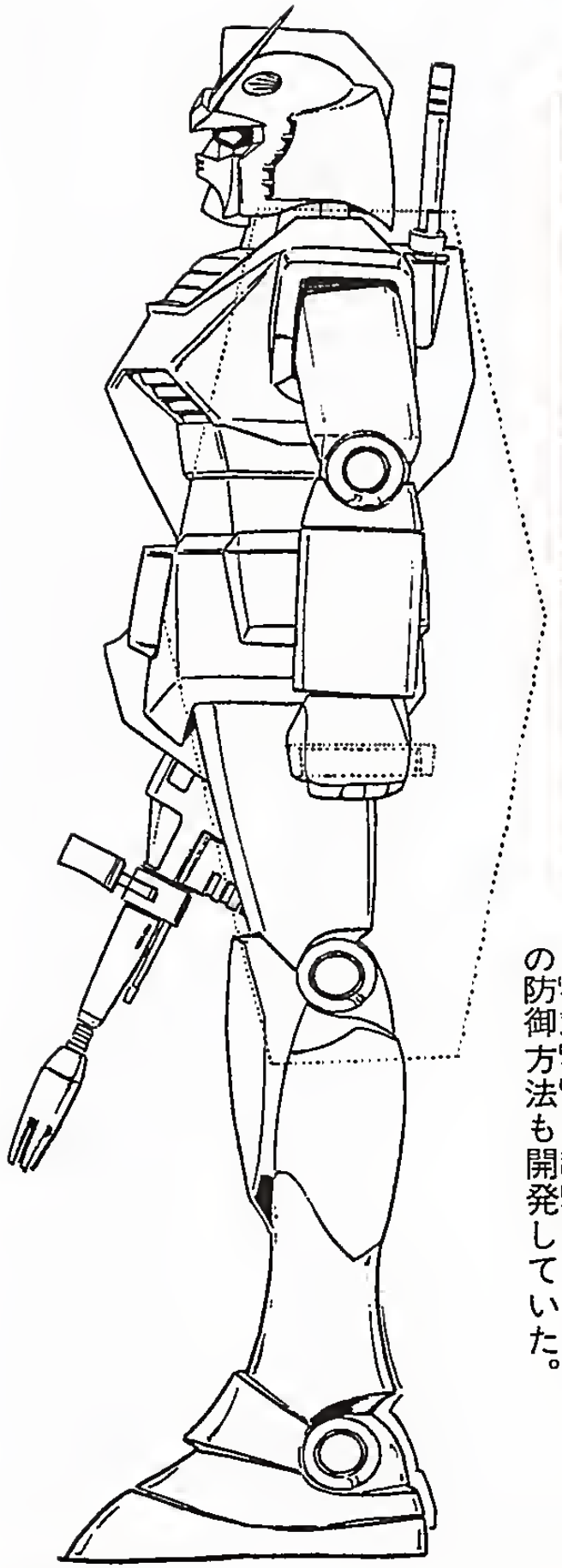
MSV

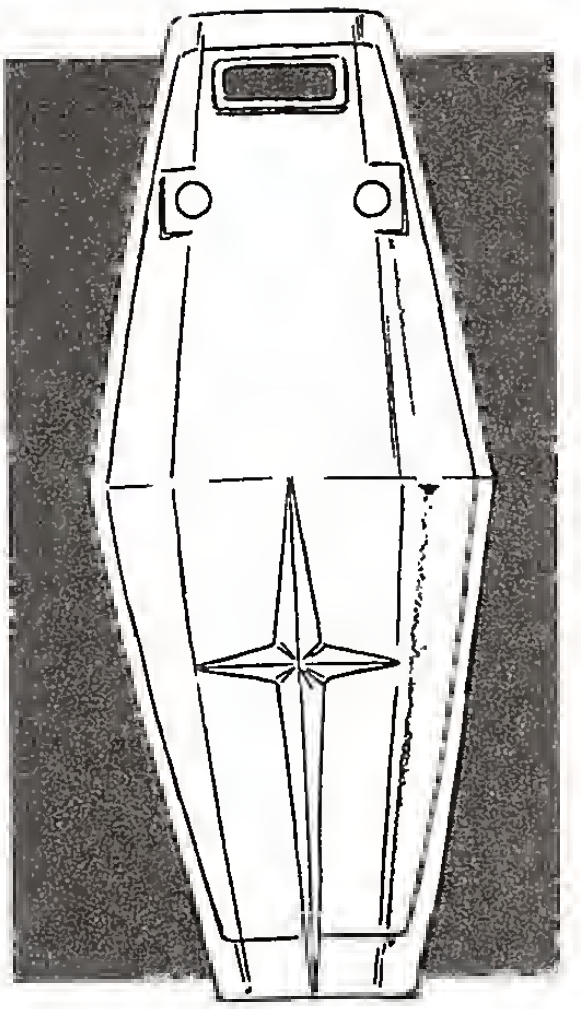
RX－78



RX－78－1の駆動系と装甲を改良したのが、このRX－78－2である。試作機ではあったが、簡略化された量産型RGM－79GMより、はるかに強大な戦闘力をもっていた。パイロットによっては、ザククラスのモビルスーツ五機に匹敵するといわれ、量産化がまちのぞまれていた。だが、量産化を前提にした実用的な設計がなされていたとはいえ、製作コストがあまりにも高く、実戦参加したのは、試作の二号機と三号機のみにとどまった。

シールド



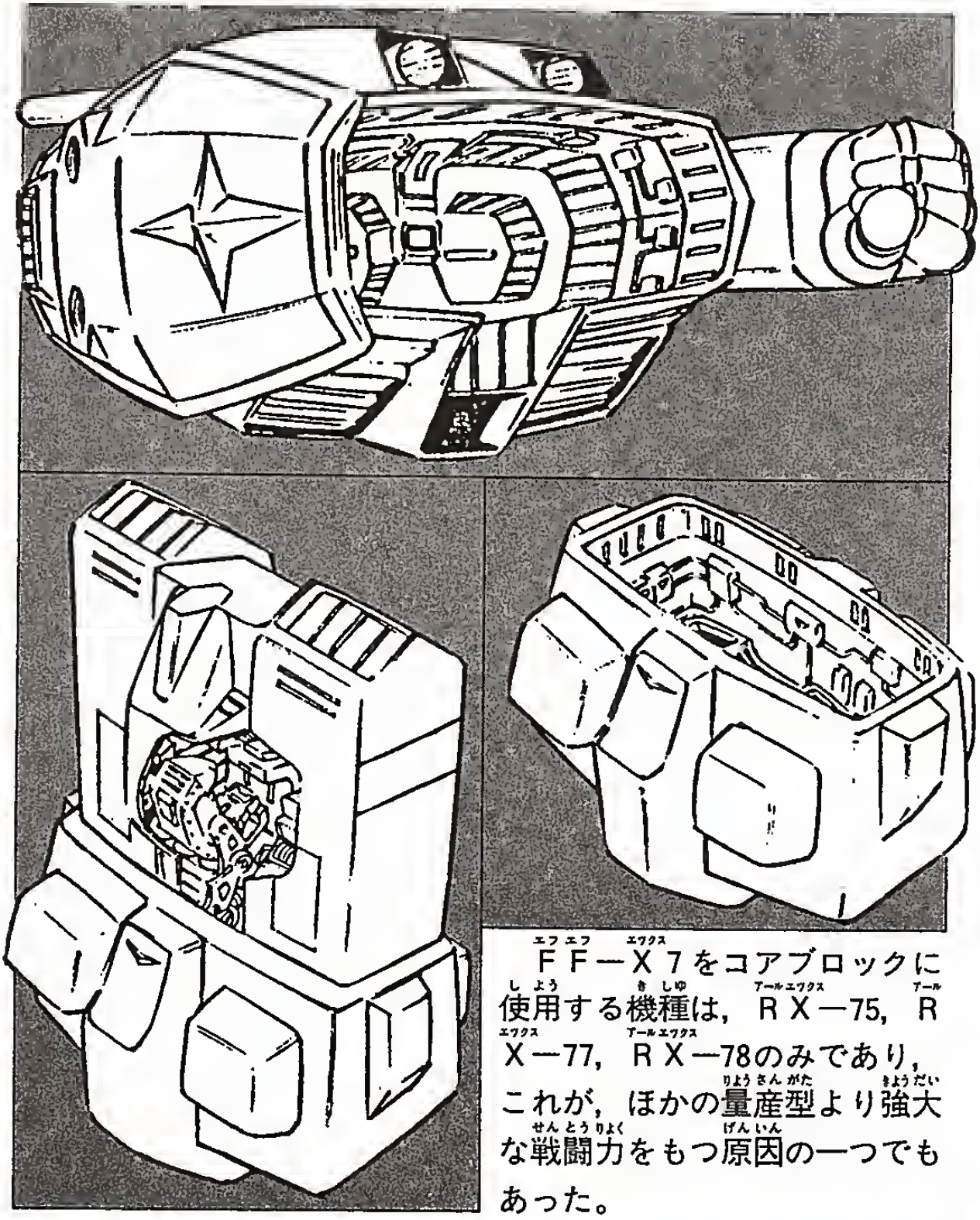


RX－78は、対モビルスーツ戦を目的として設計されていた。これは、ジオン軍のモビルスーツが多目的汎用宇宙機だったのと、大きくことなる点である。もう一つのことなる点は、ビーム兵器の標準装備である。ライフルとサーベルの二種類が開発されたが、これはジオン軍より四か月はやかった。また、同時に連邦軍は、対ビーム兵器の防御方法も開発していた。

●モビルスーツバリエーション

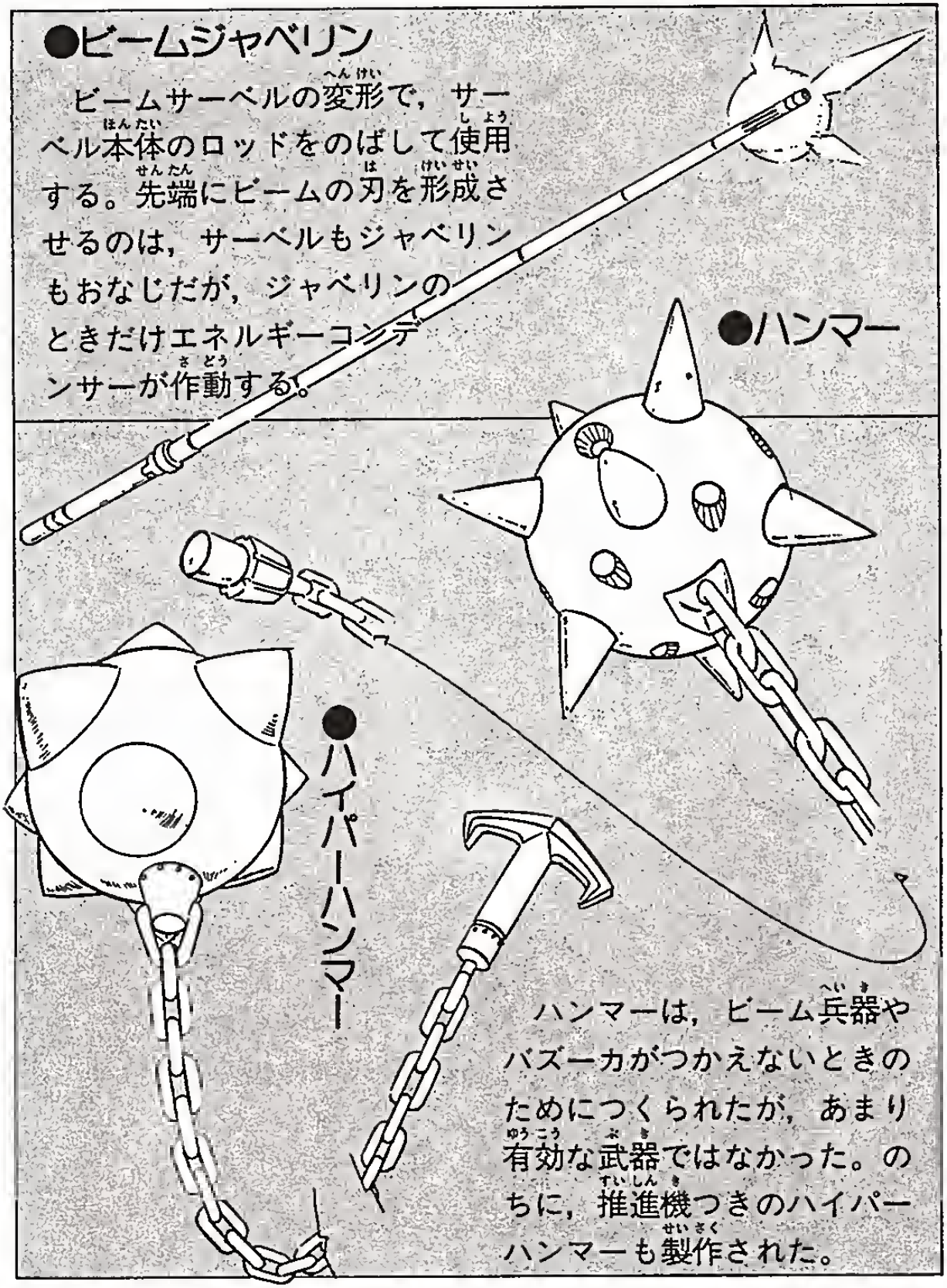
MSV RX-78

コアブロックシステム



FF-X7をコアブロックに使用する機種は，RX-75，RX-77，RX-78のみであり，これが，ほかの量産型より強大な戦闘力をもつ原因の一つでもあった。

オプション武器



●ビームジャベリン

ビームサーベルの変形で，サーベル本体のロッドをのばして使用する。先端にビームの刃を形成させるのは，サーベルもジャベリンもおなじだが，ジャベリンのときだけエネルギーコンデンサーが作動する。

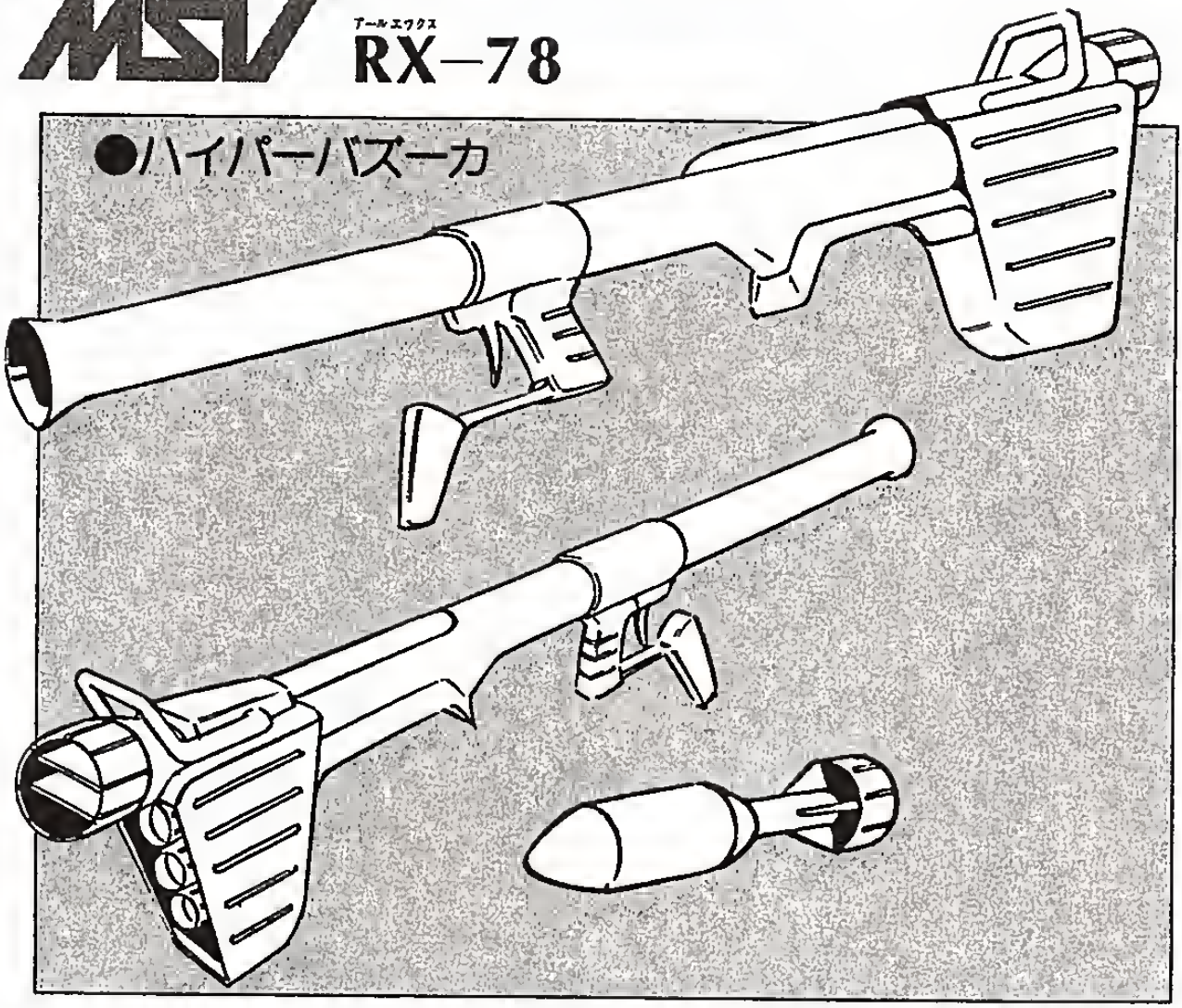
●ハンマー

●ハイパーハンマー

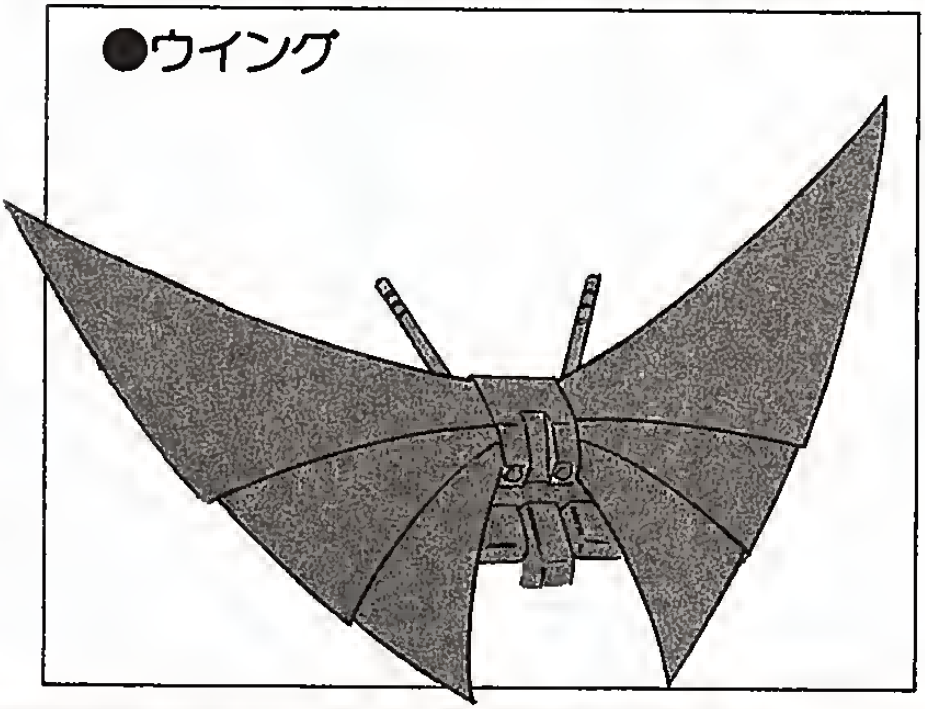
ハンマーは，ビーム兵器やバズーカがつかえないときのためにつくられたが，あまり有効な武器ではなかった。のちに，推進機つきのハイパーハンマーも製作された。

RX-78（アールエックス）

●ハイパーバズーカ

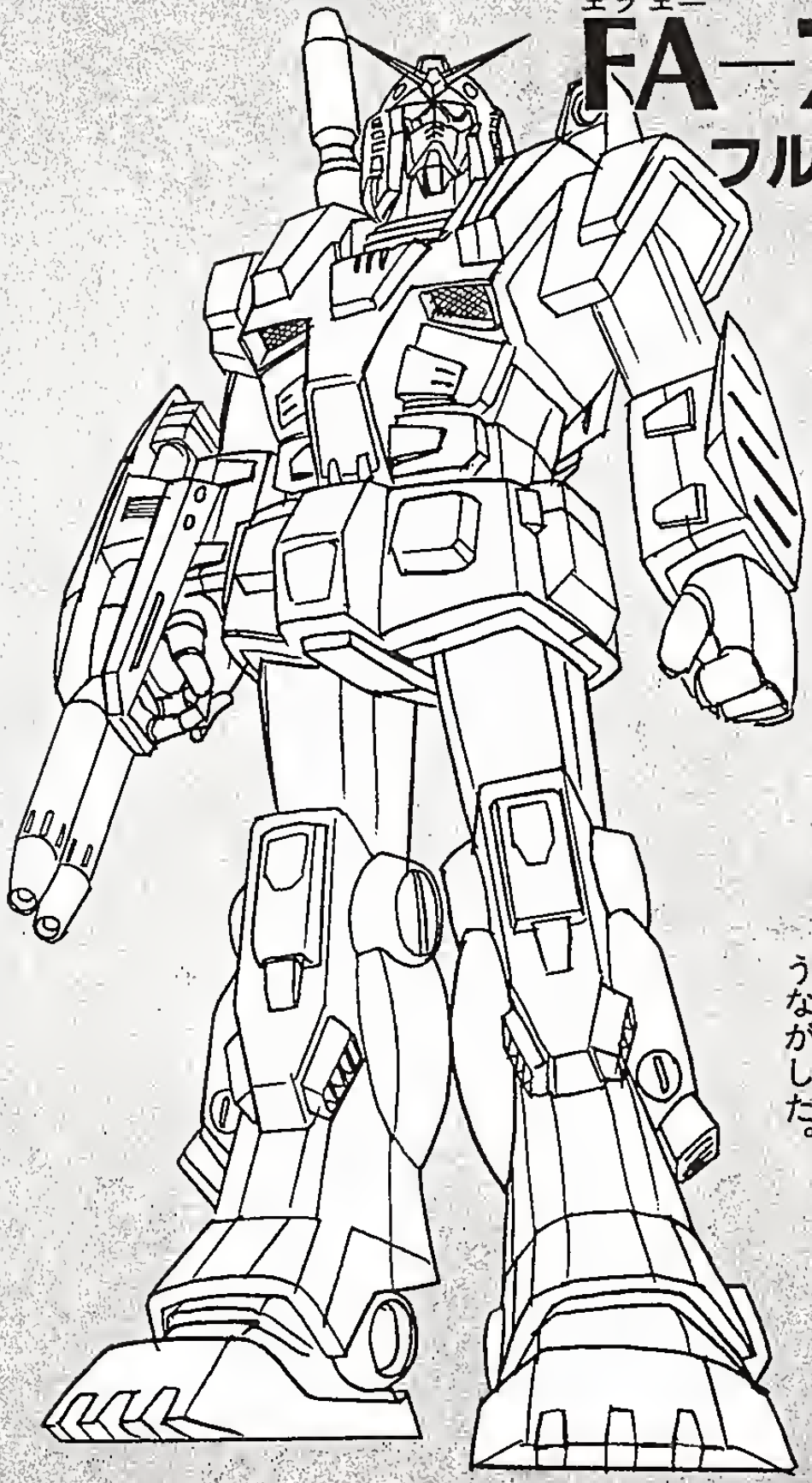


●ウイング



地球上での移動力強化のため、RX-78の設計段階で、折りたたみ式ウイングが研究されたが、けっきょく、このプランは中止となった。

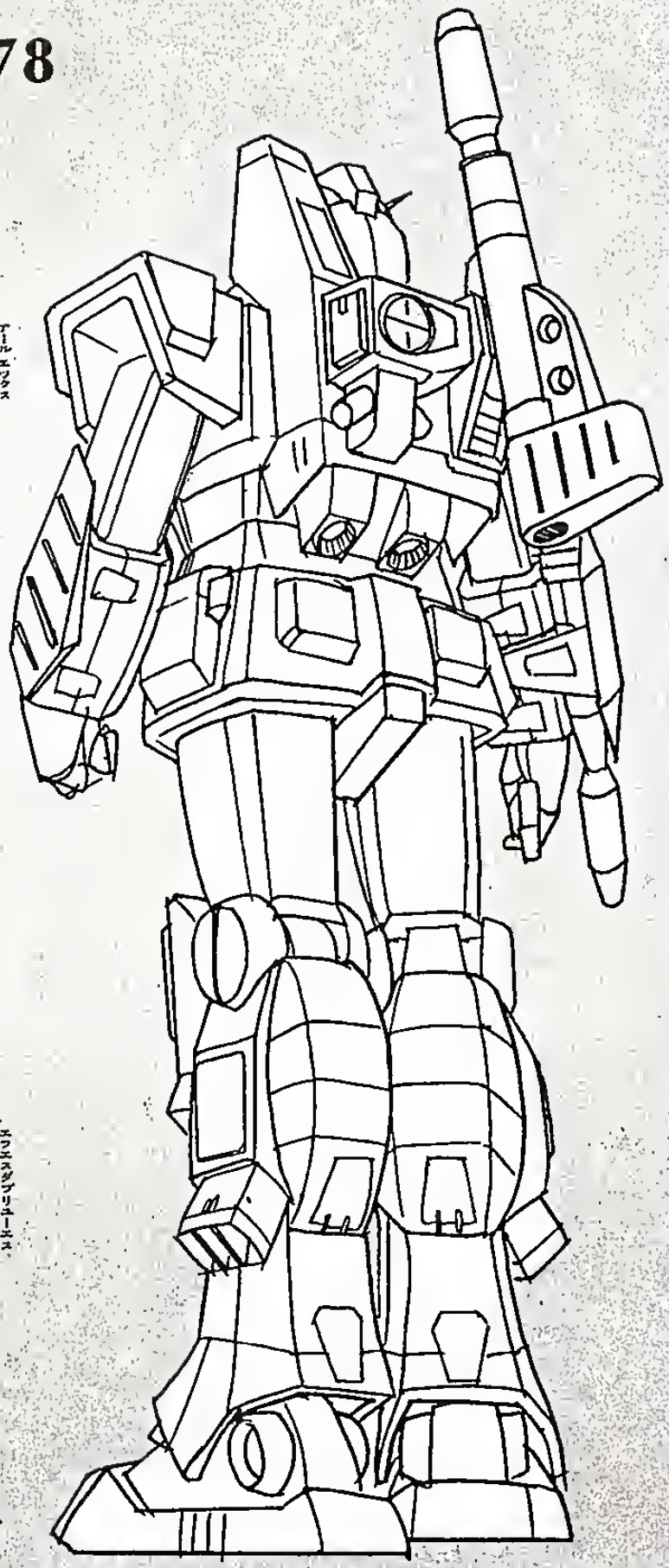
FA(エフエー)—78—1
フルアーマーガンダム



連邦軍のRX(アールエックス)モビルスーツは、あらゆる戦闘状況に対応できるようにつくられるはずであった。しかし、開発開始から完成まで異常なほどの急ピッチですすめられたため、一部の機能が省略されるなど、状況にそぐわないところもでてきた。また、ニュータイプの出現は、RX(アールエックス)モビルスーツの再検討をうながした。

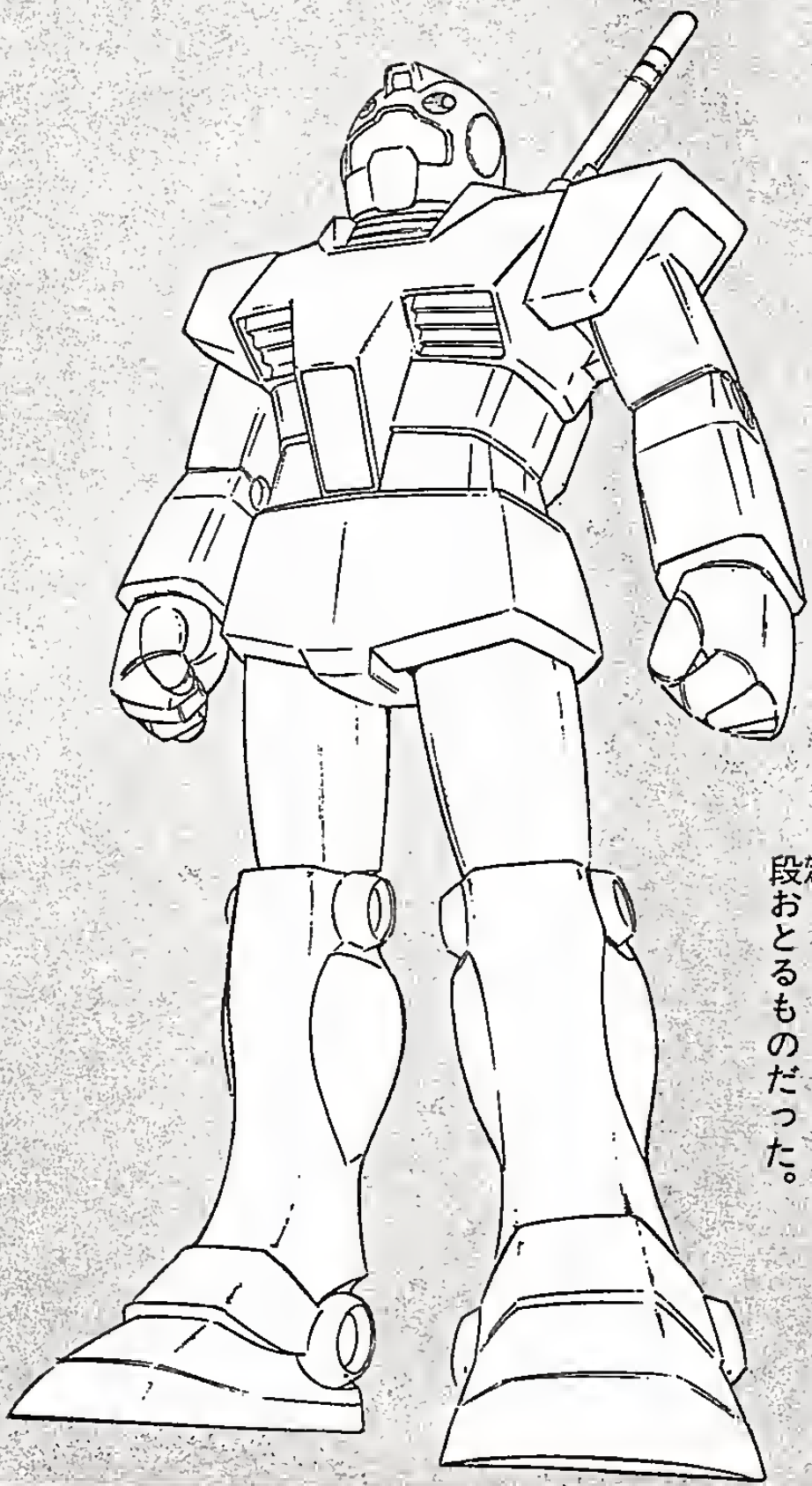
●モビルスーツバリエーション

MSV FA-78



RXモビルスーツのみなおしによって、RX-78タイプを、ニュータイプのパイロット用に性能アップさせる計画が立案された。計画内容は、現存するRX-78を母体に、装甲、武装、補助推進システムを増加するというものだった。各部はユニット化され、かんたんに着脱できた。この増加ウェポンシステムはFSWSのコードネームでよばれ、フル装備のRX-78はFA-78-1の正式名称があたえられるはずであった。ほかにも、脚部にコアブースターなみのエンジンを装着するなどのプランもあった。いずれのプランも、完成にいたらず、机上のものにおわってしまった。

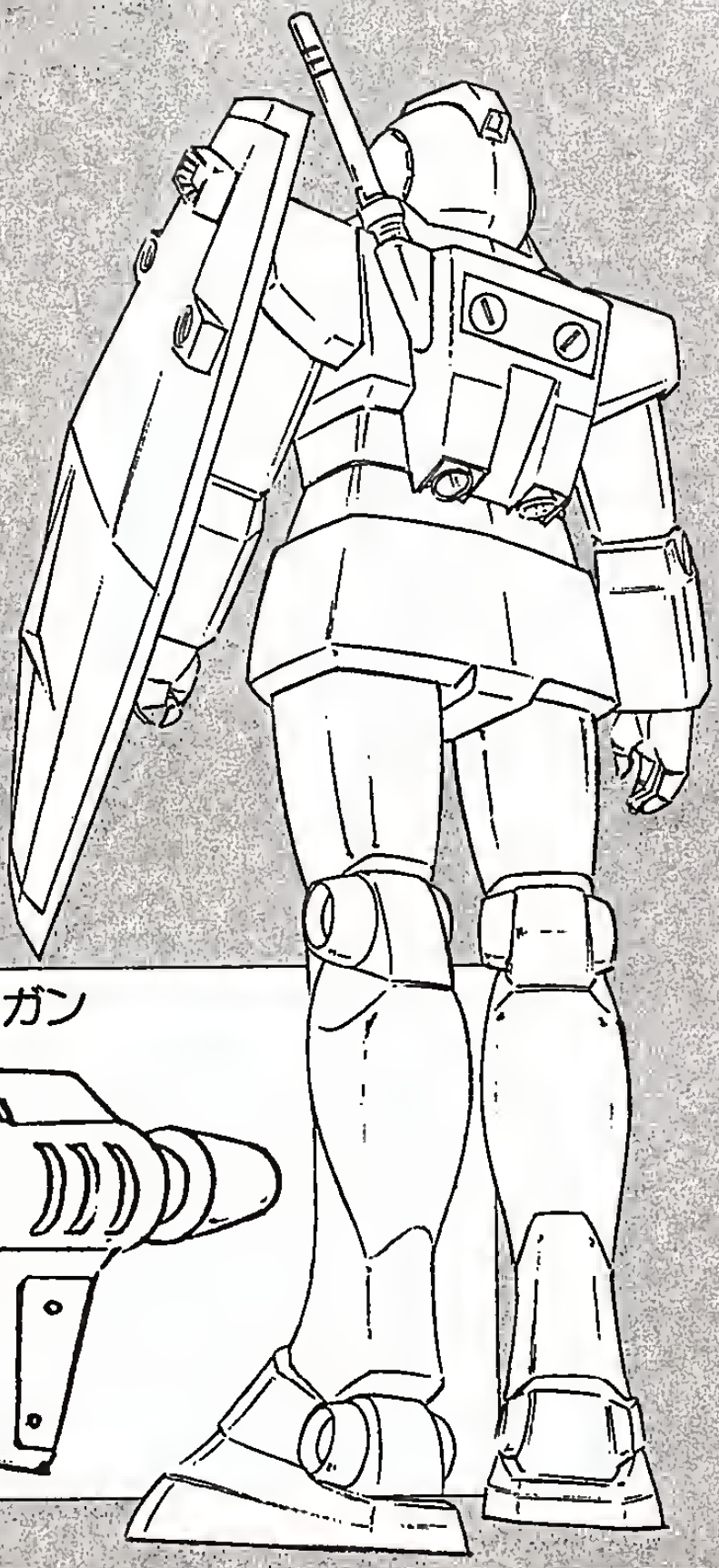
RGM—79 GM



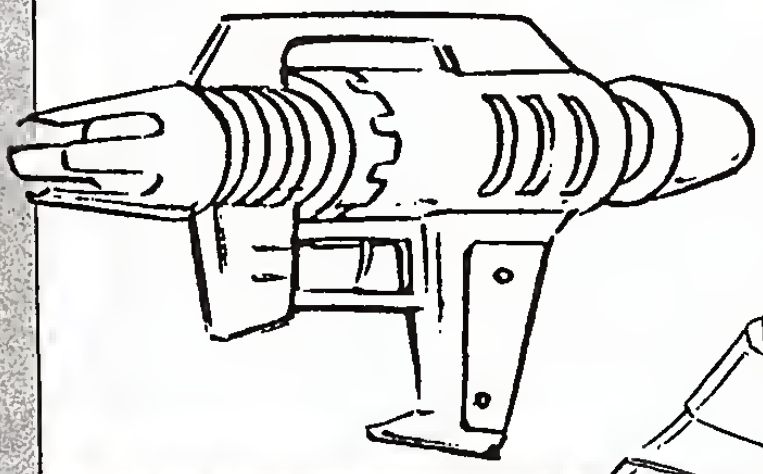
RX—78タイプは、量産を前提として設計されてはいたが、一機あたりの生産単価があまりにも高すぎることや、生産時間がかかりすぎるなどの問題があった。そこで連邦軍は、RX—78より簡略化された設計のRXモビルスーツ、RGM—79GMを生産ラインにのせることとなった。これが今次大戦で、連邦軍の主力モビルスーツとなったが、性能面ではRX—78より数段おとるものだった。

MSV RGM-79

GMは武装についても簡略化がおこなわれ、予備サーベルをなくし、ビームライフルより射程の短いビームスプレーガンを採用している。コアブロックシステムも、コアファイターではなく、操縦機能のみをもつ装置となった。

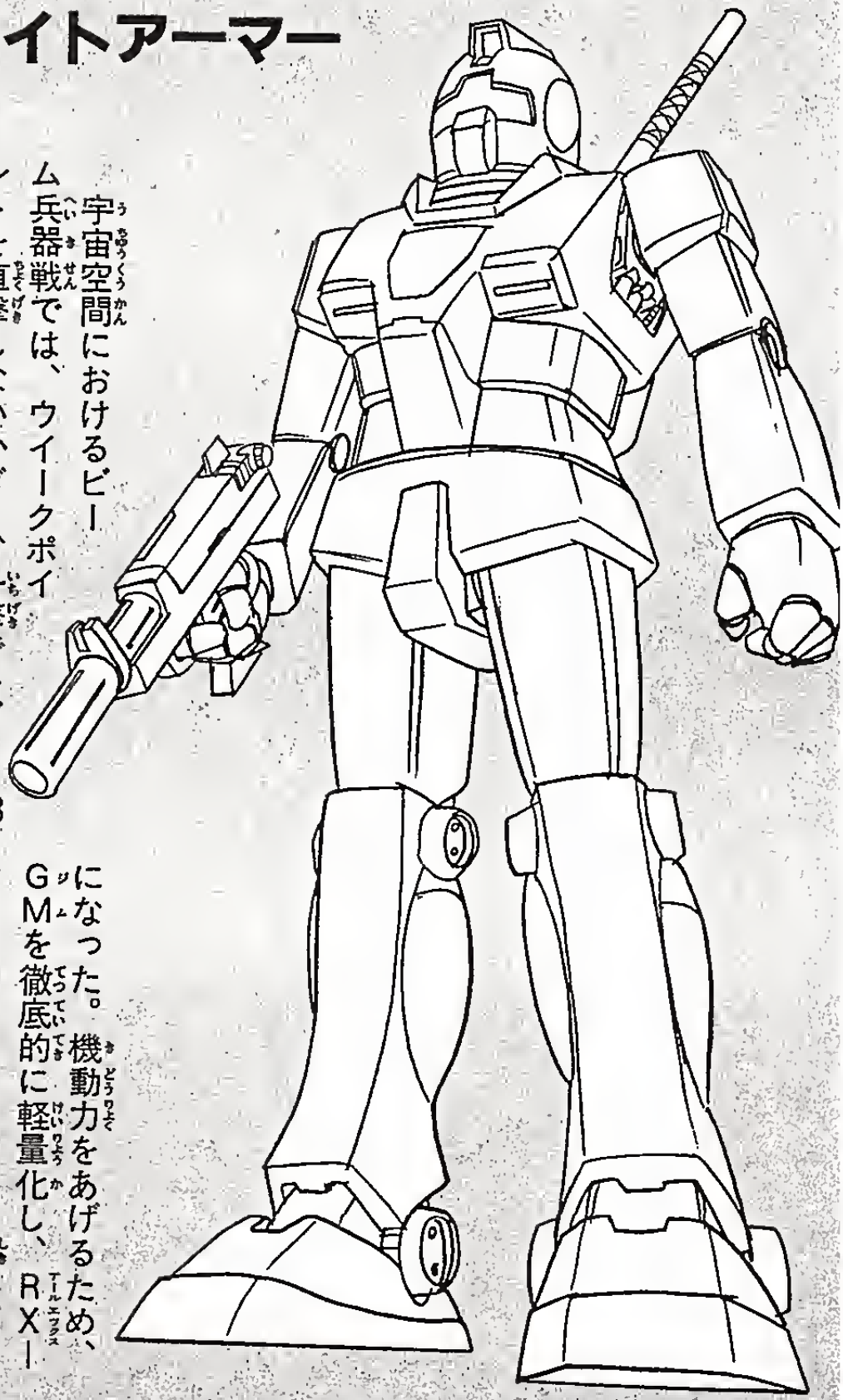


●ビームスプレーガン



RGM—79

GMライトアーマー

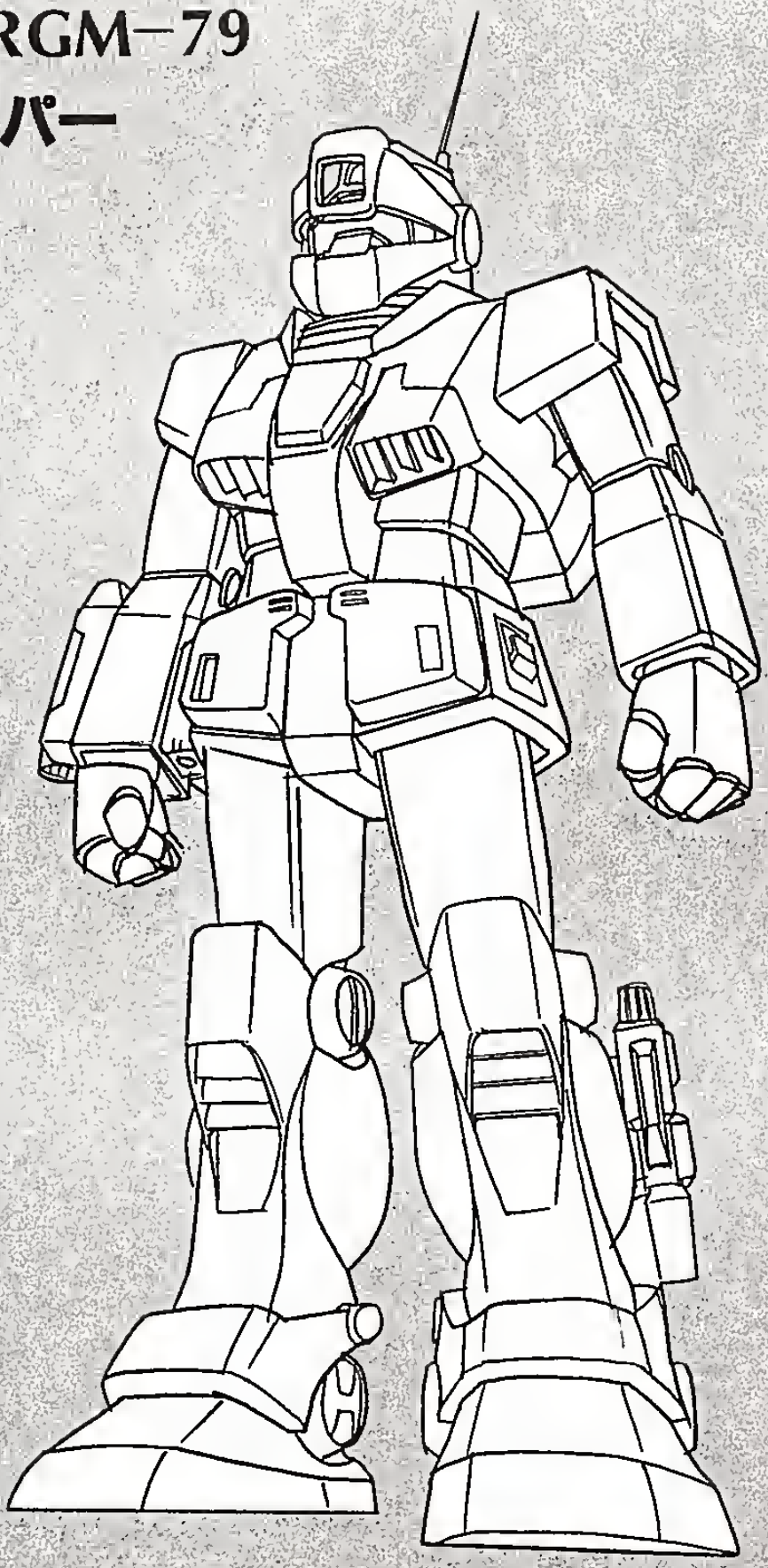


宇宙空間におけるビーム兵器戦では、ウイークポイントを直撃しないかぎり、一撃でモビルスーツをおとすことはむずかしかった。そこで、熟練パイロットにむけて、一撃離脱戦用機がつくられることになった。機動力をあげるため、GMを徹底的に軽量化し、RX—78とおなじエナジーキャップ式のビームライフルをもたせてある。武装はほかに、グリップに特殊ホールド加工をほどこしたビームサーベルをもつ。

●モビルスーツバリエーション

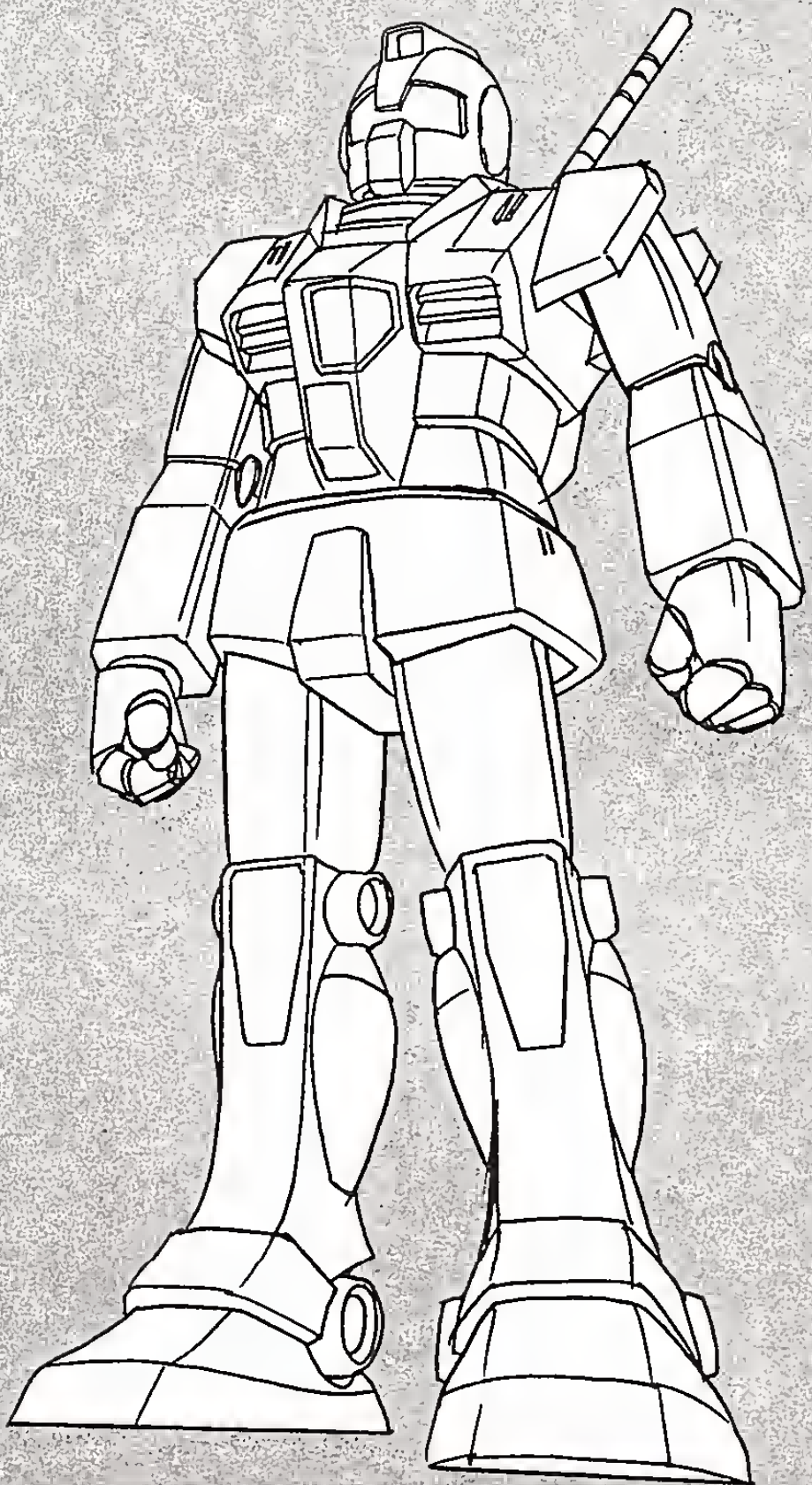
MSV

RGM-79 GMスナイパーカスタム



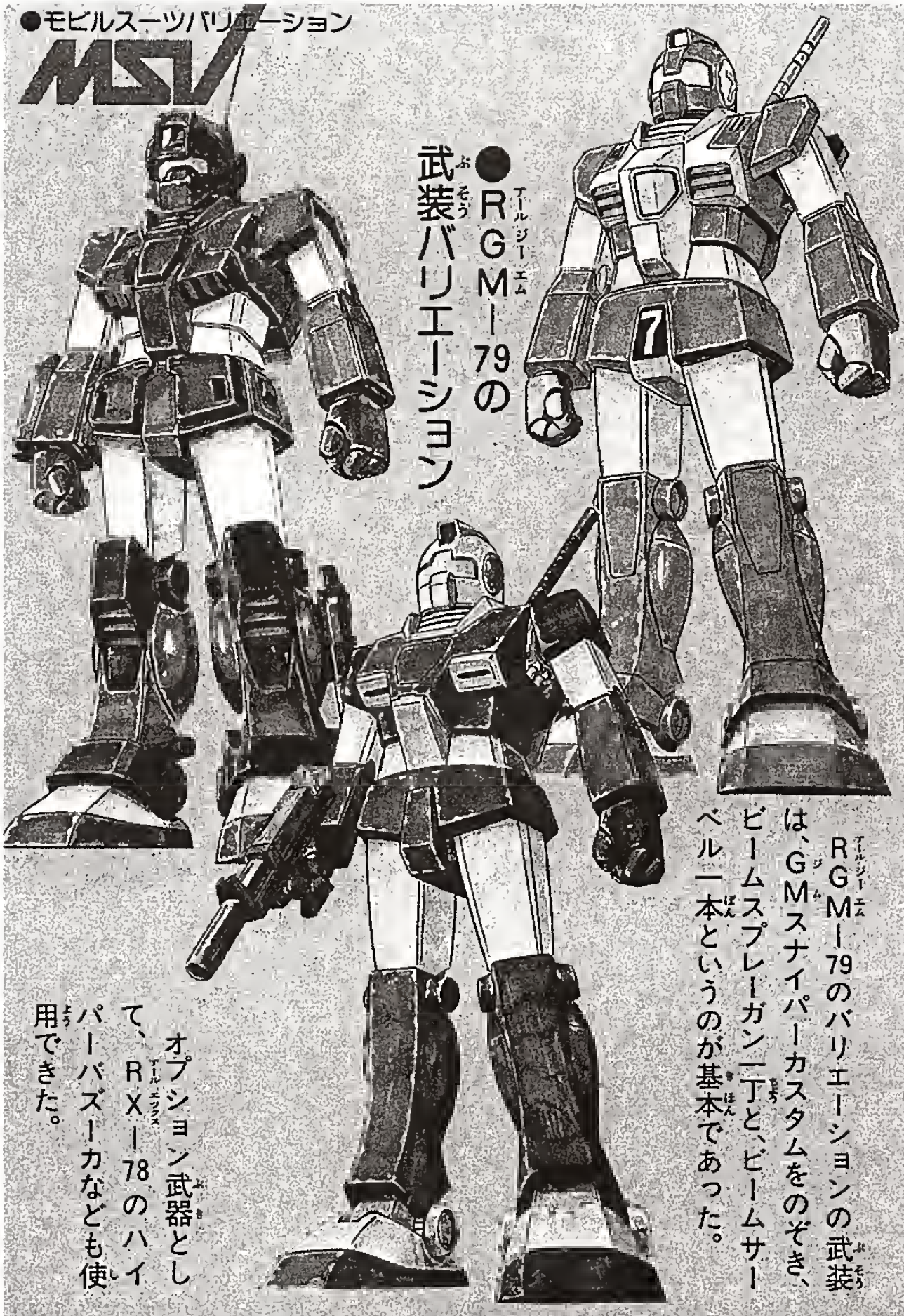
GMスナイパーカスタムは、基本的にGMの総合性能向上タイプで、照準バイザーと大推力バックパックの装着、冷却ユニットの強化、脚部補助ロケットの追加などがおこなわれている。また、武装も強化され、RX-78と同程度の火力をもつ。GMライトアーマーと同様に、熟練パイロットむけにつくられ、母艦護衛や特務部隊による作戦行動に活躍した。

TGM—79 GM トレーナー



連邦軍のRXモビルスーツ練習機で、RGM—79に教官用コクピットを新設してある。基本的にはGMとおなじだが、練習機ということで、装甲はコストが安く耐弾性の低いものを使用しており、性能面ではGMとおなじだが、実戦能力はない。とはいえ、演習のため、武装はGMと同一だった。本機は、操縦実習のほかに、後方部隊の作業用機としても使用されていた。

●RGM-79の武装バリエーション

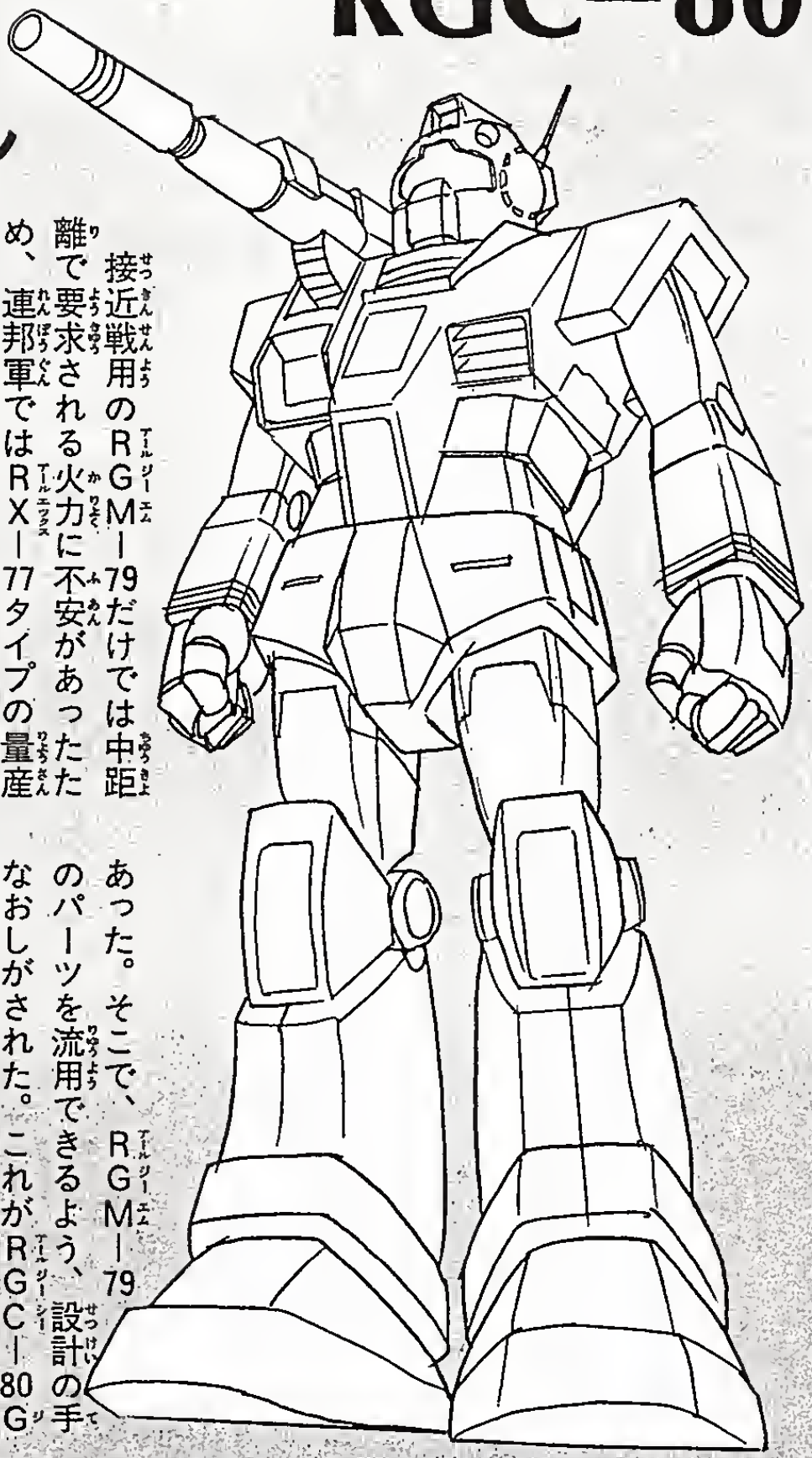


RGM-79のバリエーションの武装は、GMスナイパーカスタムをのぞき、ビームスプレーガン一丁と、ビームサーベル一本というのが基本であった。

オプション武器として、RX-78のハイパーバズーカなども使用できた。

RGC—80

GM キャノン

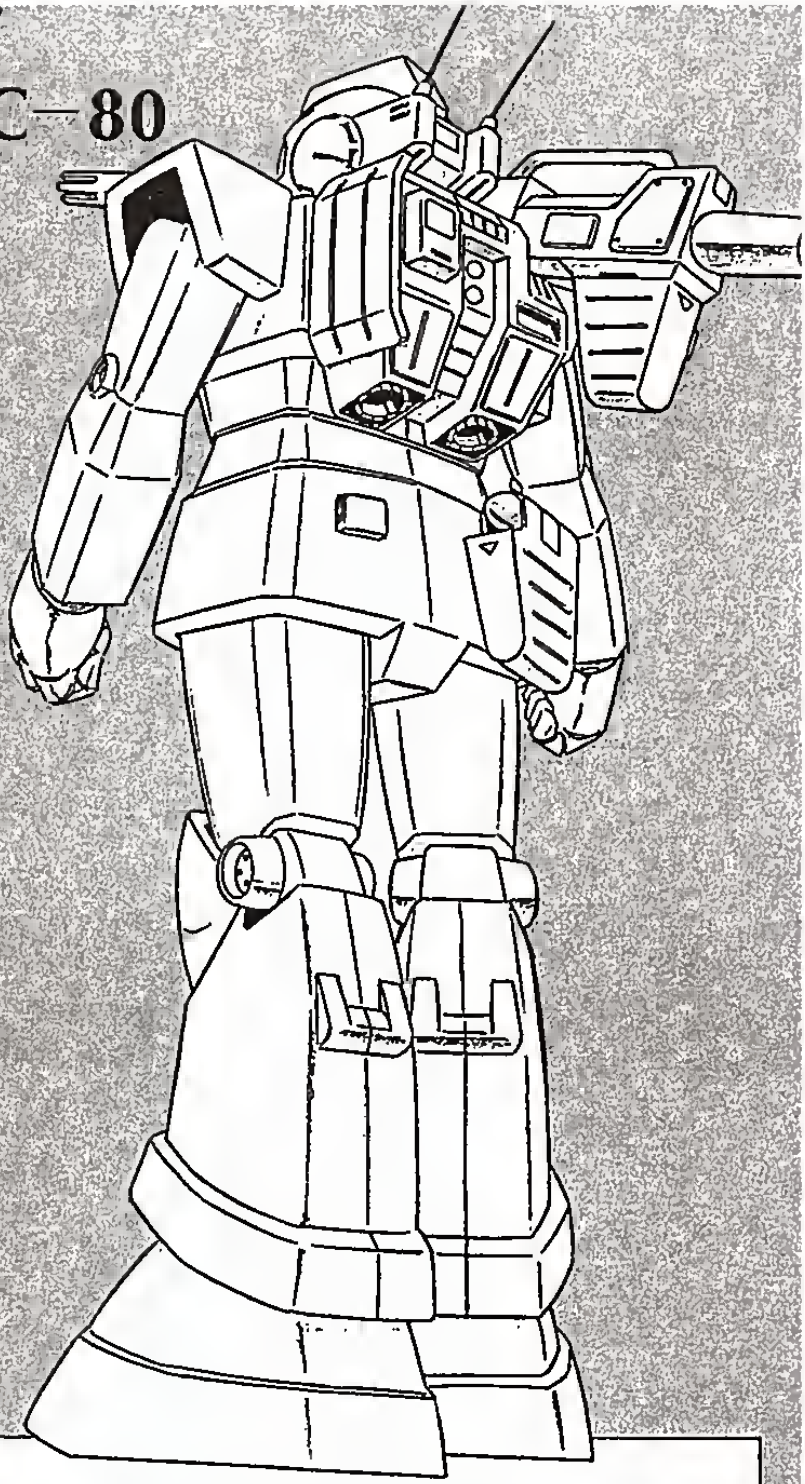


接近戦用のRGM—79だけでは中距離で要求される火力に不安があったため、連邦軍ではRX—77タイプの量産化を決定した。しかし、いくら工業生産能力のある地球連邦とはいえ、まったく別タイプのRXモビルスーツの生産ラインを組むのはたいへんなことであった。そこで、RGM—79のパーツを流用できるよう、設計の手なおしがされた。これがRGC—80GMキャノンである。一号機は宇宙世紀七九年十月にロールアウトしたが、テストの結果、キャノン砲発射時のバランスに問題があることがわかった。

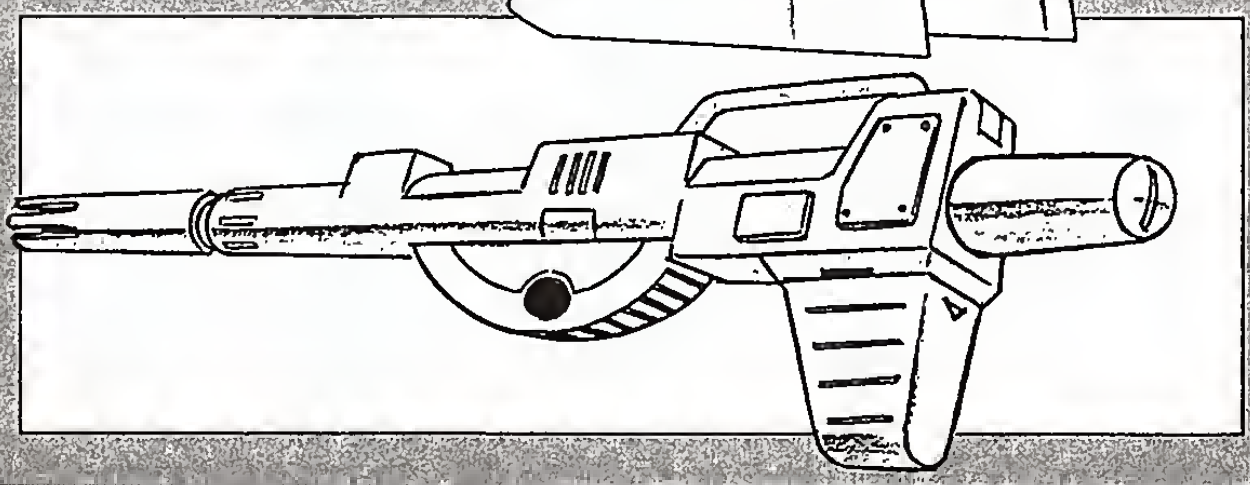
●モビルスーツバリエーション

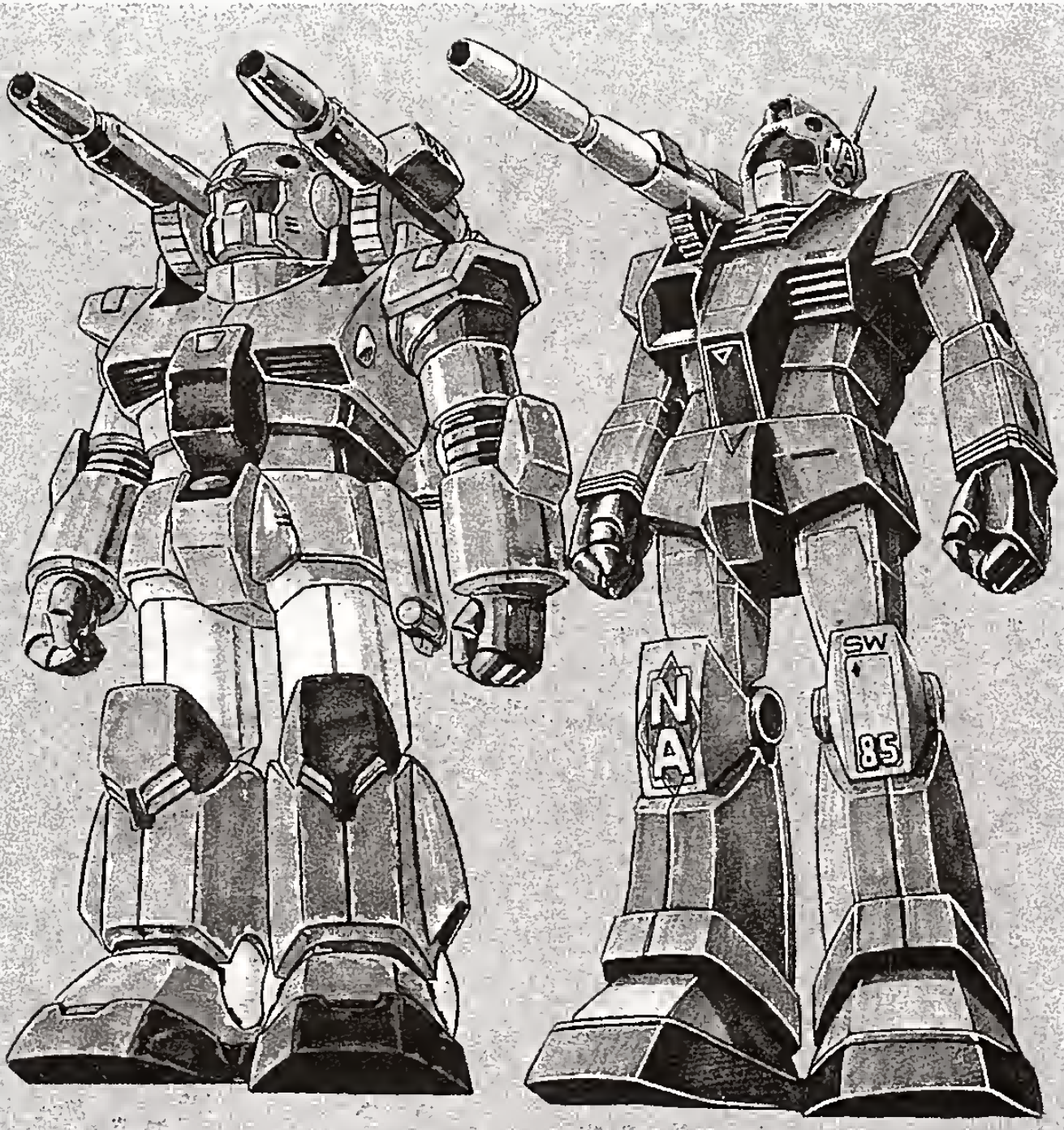
MSV RGC-80

バランスの問題は、機体の重心をさげることにより改善され、さらに砲をロケット砲にかえて、反動も軽減された。武装はほかに、ビームスプレーガンやバルザック式三百八十ミリバズーカなども使用された。総生産数は五十八機で、テアンムおよびレビル艦隊に十四機、北アメリカ戦線に六機、アフリカ戦線に十九機、ジャブロー防衛に九機が配備されている。



●キャノンパーツ





RX—77とRGC—80

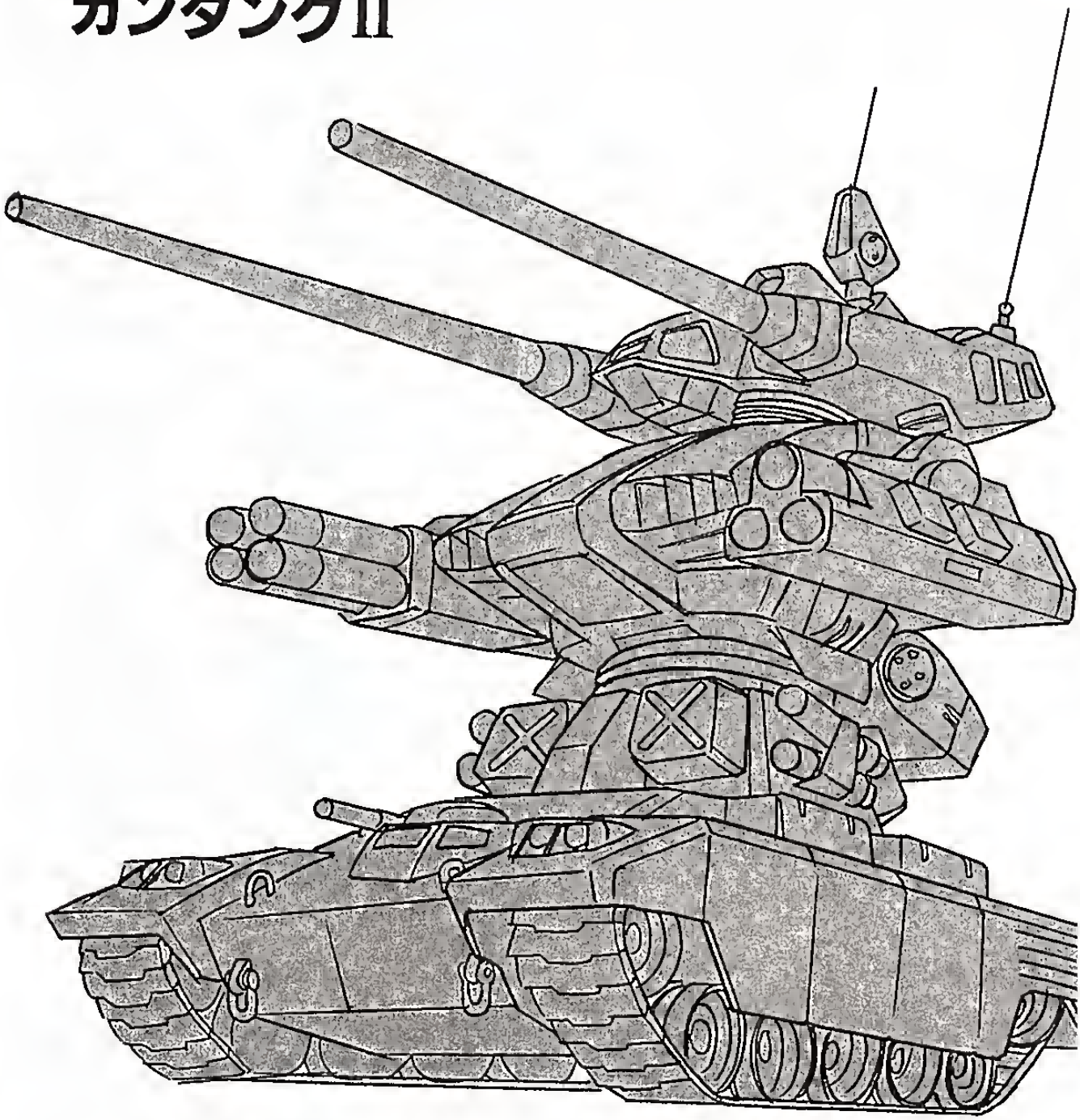
RGC—80は，主要装甲や内部機構の60パーセントをRGM—79と共用しており，一見，RGM—79のキャノンタイプにみえる。だが，これは戦時中の生産事情からこのスタイルになったのであって，本来ならば，RX—77を多少手なおししたかたちで量産されるはずであった。

●モビルスーツバリエーション

MSV

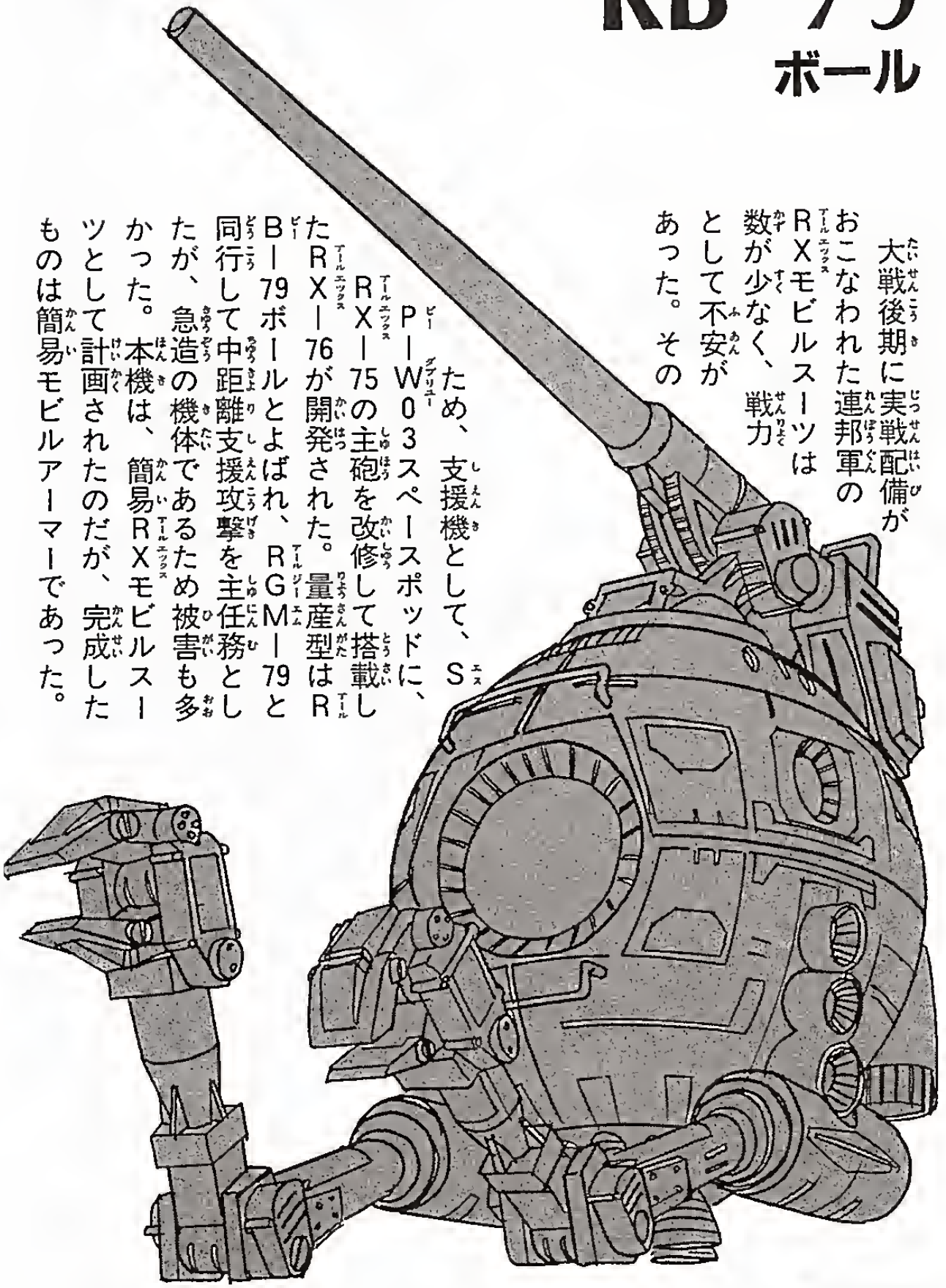
RMV—1

ガンタンクII



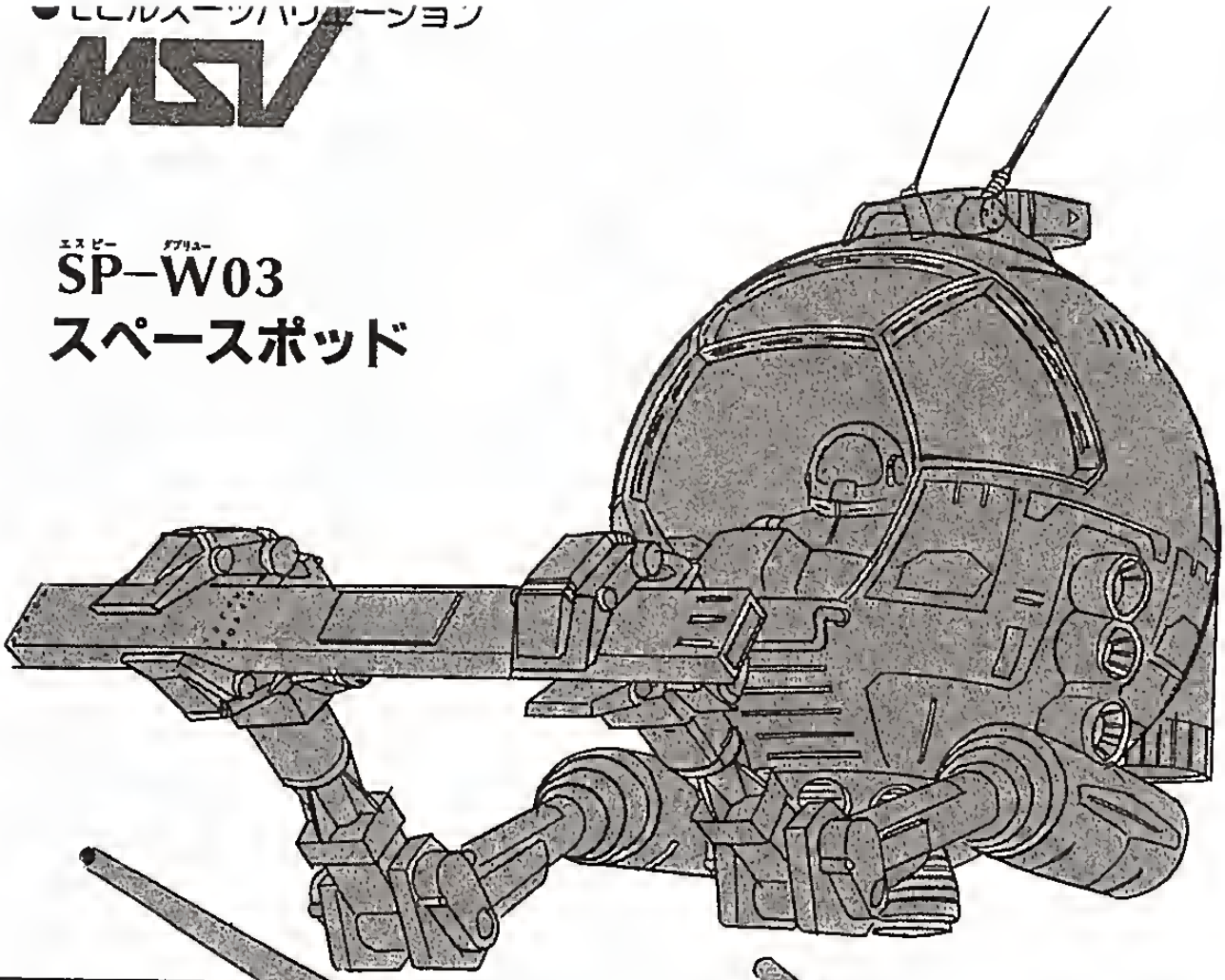
開発中止同様だったRX—75プランを，局地防衛用戦闘車両として再スタートされたものがRMV—1である。戦闘車両に徹したことで問題点も少なく，ただちに量産が決定された。

RB—79 ボール

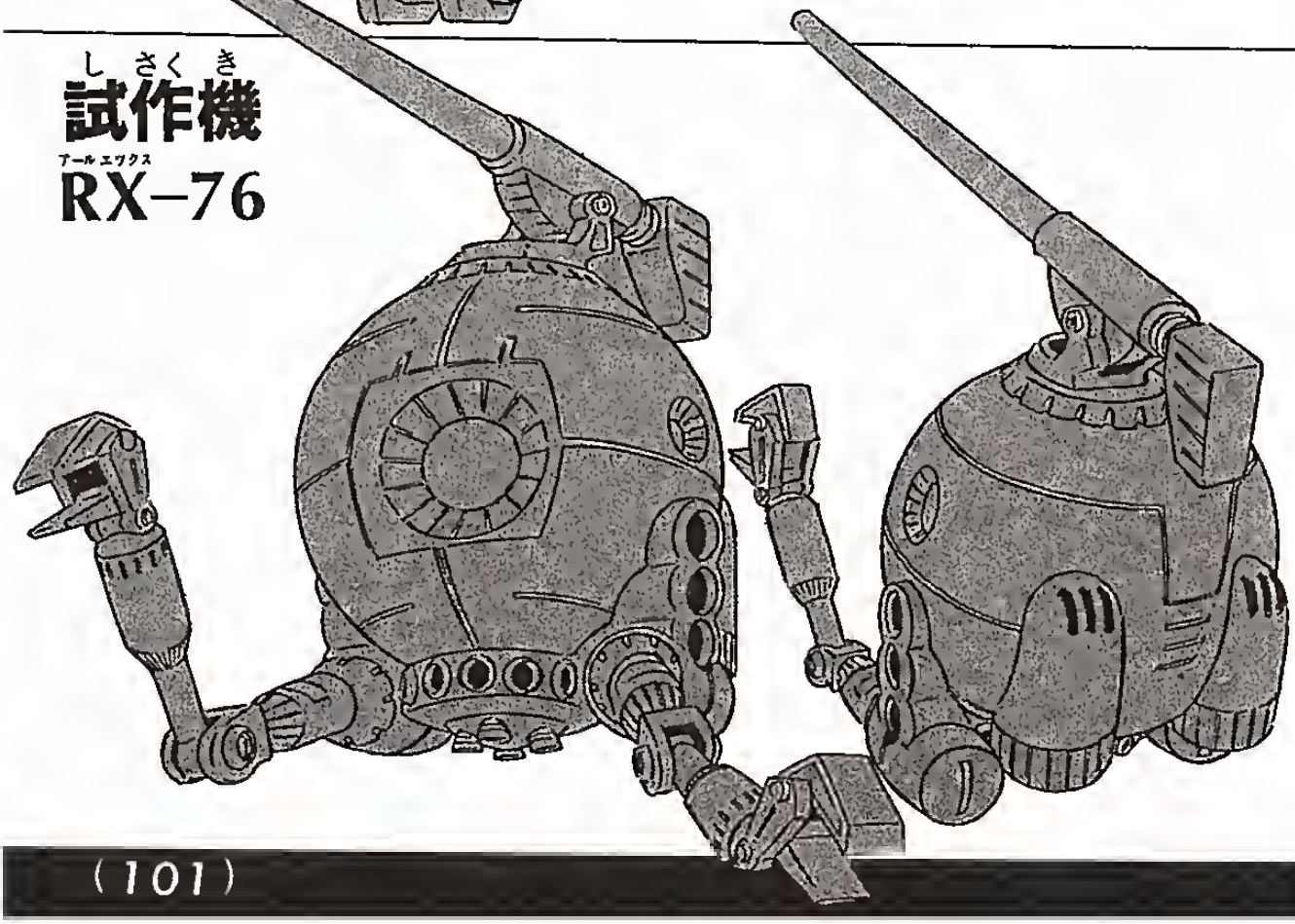


大戦後期に実戦配備がおこなわれた連邦軍のRXモビルスーツは数が少なく、戦力として不安があった。そのため、支援機として、SPW03スペースポッドに、RX—75の主砲を改修して搭載したRX—76が開発された。量産型はRB—79ボールとよばれ、RGM—79と同行して中距離支援攻撃を主任務としたが、急造の機体であるため被害も多かった。本機は、簡易RXモビルスーツとして計画されたのだが、完成したものは簡易モビルアーマーであった。

SP-W03（エスピー ダブリュー）
スペースポッド



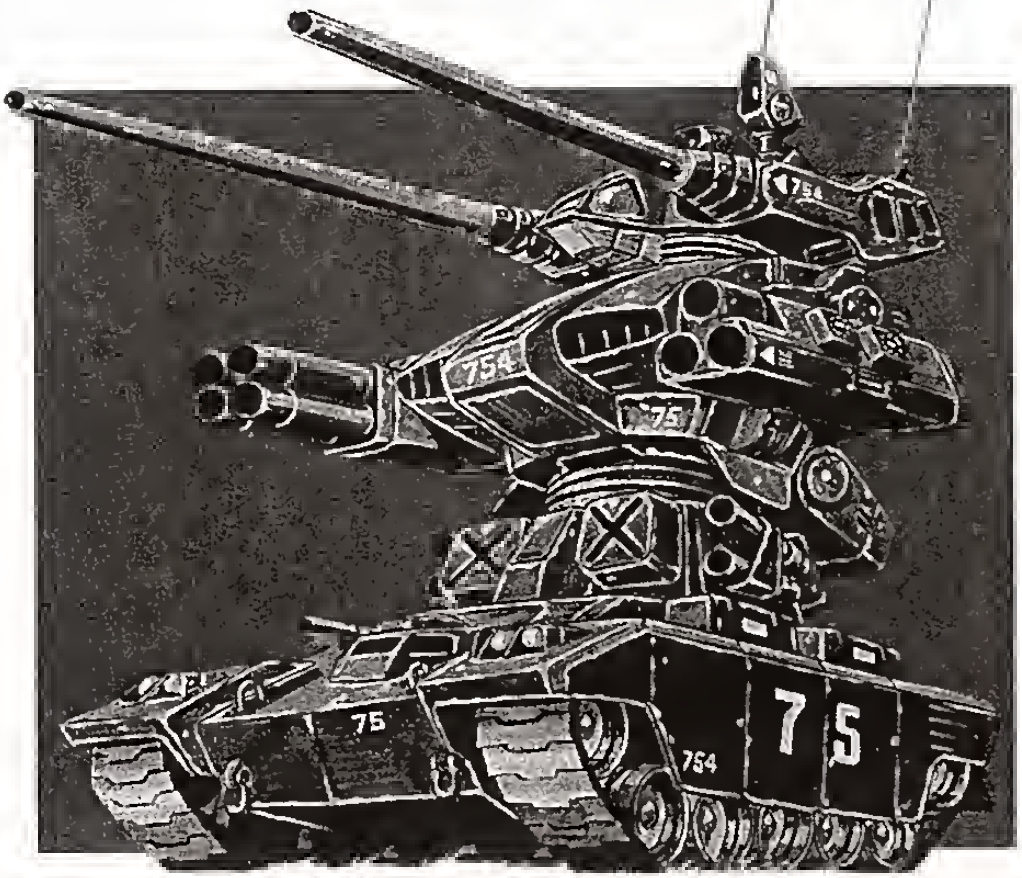
試作機（しさくき）
RX-76（アールエックス）

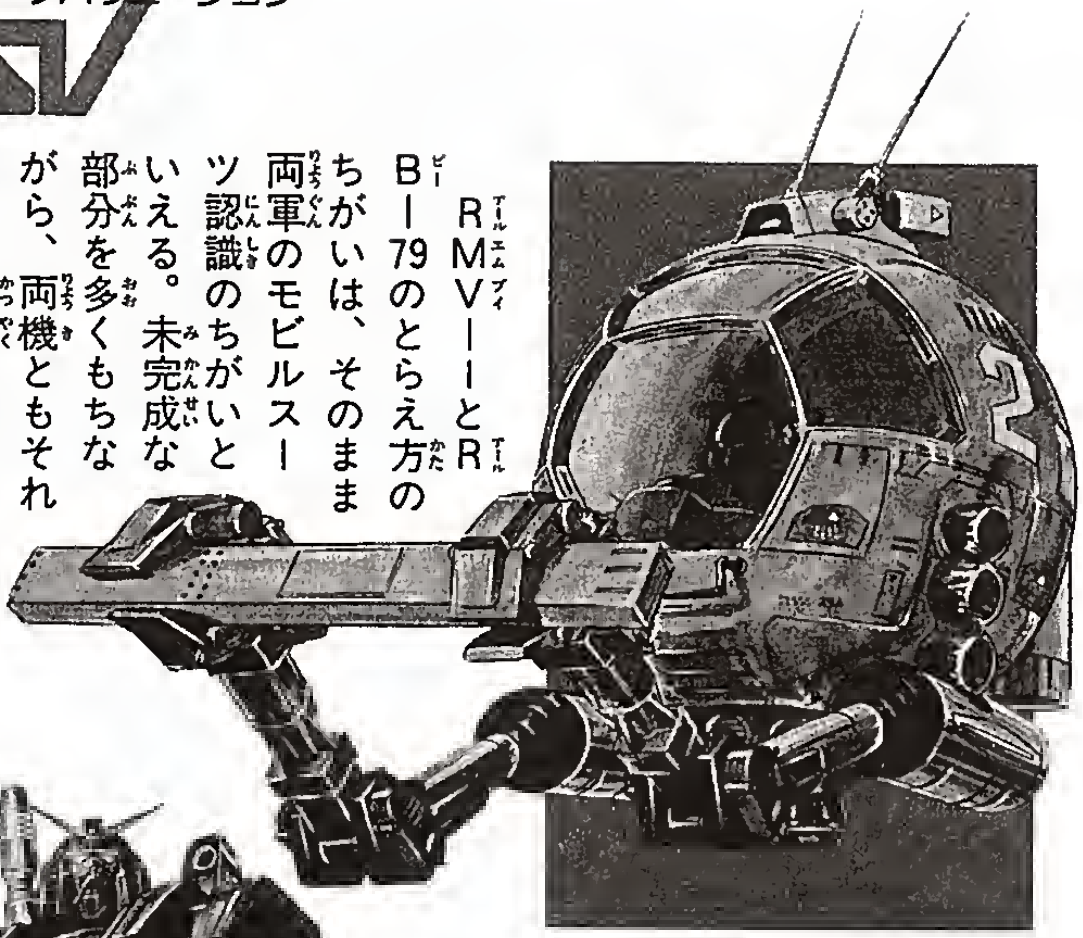


連邦軍RXモビルスーツ開発史(2)

RXモビルスーツの二つの流れ

連邦軍のRXモビルスーツは、開発当初から二つの流れにわかれていた。一つは、RX－77、RX－78をはじめとする二脚歩行ユニットをもつタイプ、もう一つは、RX－75にはじまる歩行ユニットのかわりにキャタピラやバーニヤで移動するタイプである。これは、モビルスーツ開発におくれをとった連邦軍が、可能性を模索したあらわれといえる。そのなかでうまれたのが、RMV－1とRB－79であった。この二つは、ジオン流にいうと、陸戦用モビルアーマーと空間戦用簡易モビルアーマーであるが、連邦軍では、両機ともRXモビルスーツに分類していた。





RMV－1とRB－79のとらえ方のちがいは、そのまま両軍のモビルスーツ認識のちがいといえる。未完成な部分を多くもちながら、両機ともそれなりに活躍できたのは、モビルスーツによる兵器体系や戦術論が確立するまえに登場したからである。

RX－78からRX－81へ

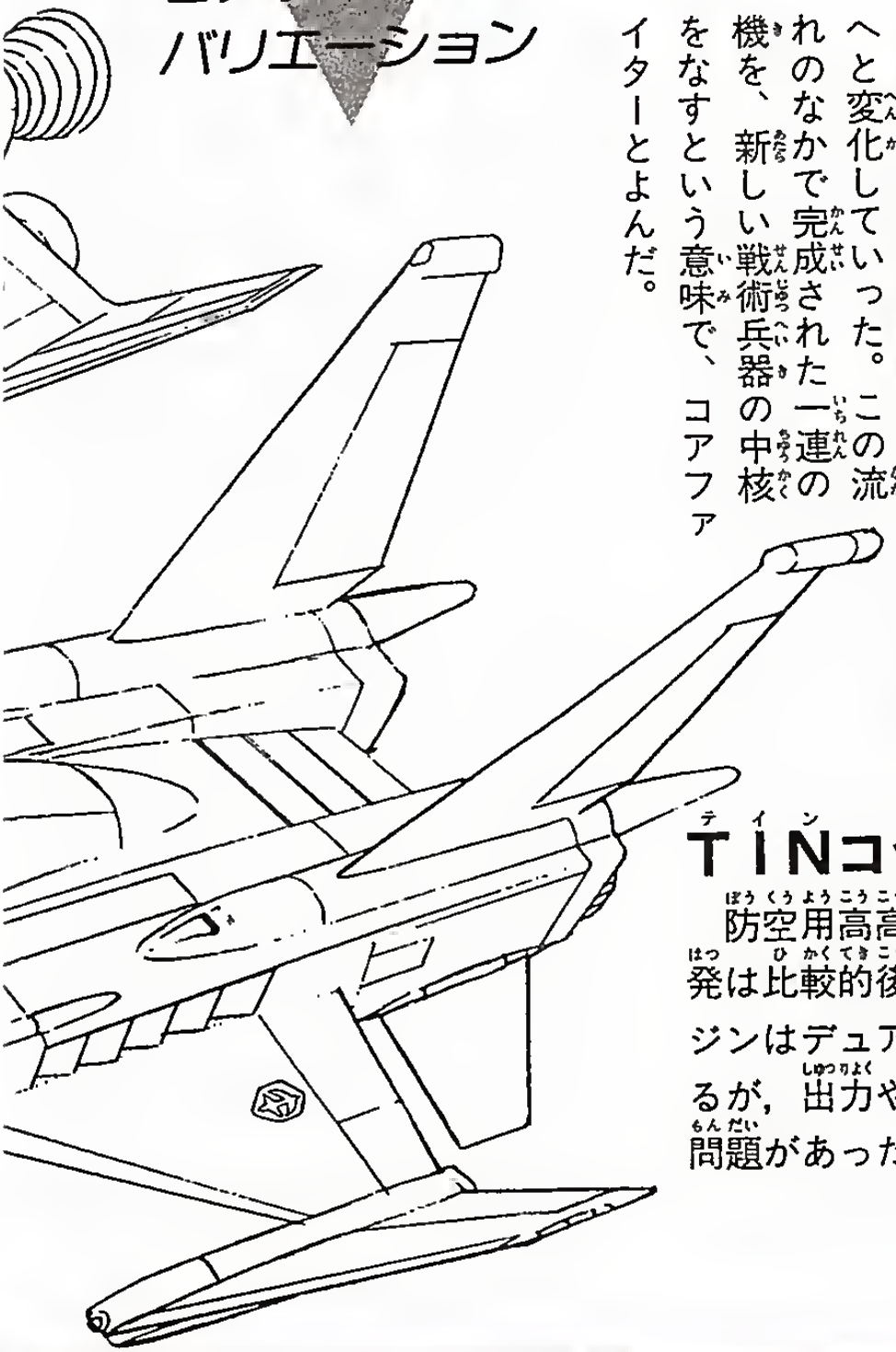
RX－78は、十分な開発時間があたえられないうちに、量産型のRGM－79として戦場にでることとなった。つまり、ある意味では、RGM－79も未完成な機だったのである。連邦軍開発部では、RX－78の問題点を解決し、一機で戦艦以上の戦力をもつRX－81を計画していた。同プランについての正式発表はないが、完成すればRX－78の完全量産型になっていただろう。

CORE FIGHTER VARIATION

コアファイター
バリエーション

コアファイター

二十世紀末にはじまった宇宙への軍備拡張により、空軍体系も宇宙空間をふくみ、空間戦闘機、高高度戦闘機などもあわせた新構想へと変化していった。この流れのなかで完成された一連の機を、新しい戦術兵器の中核をなすという意味で、コアファイターとよんだ。

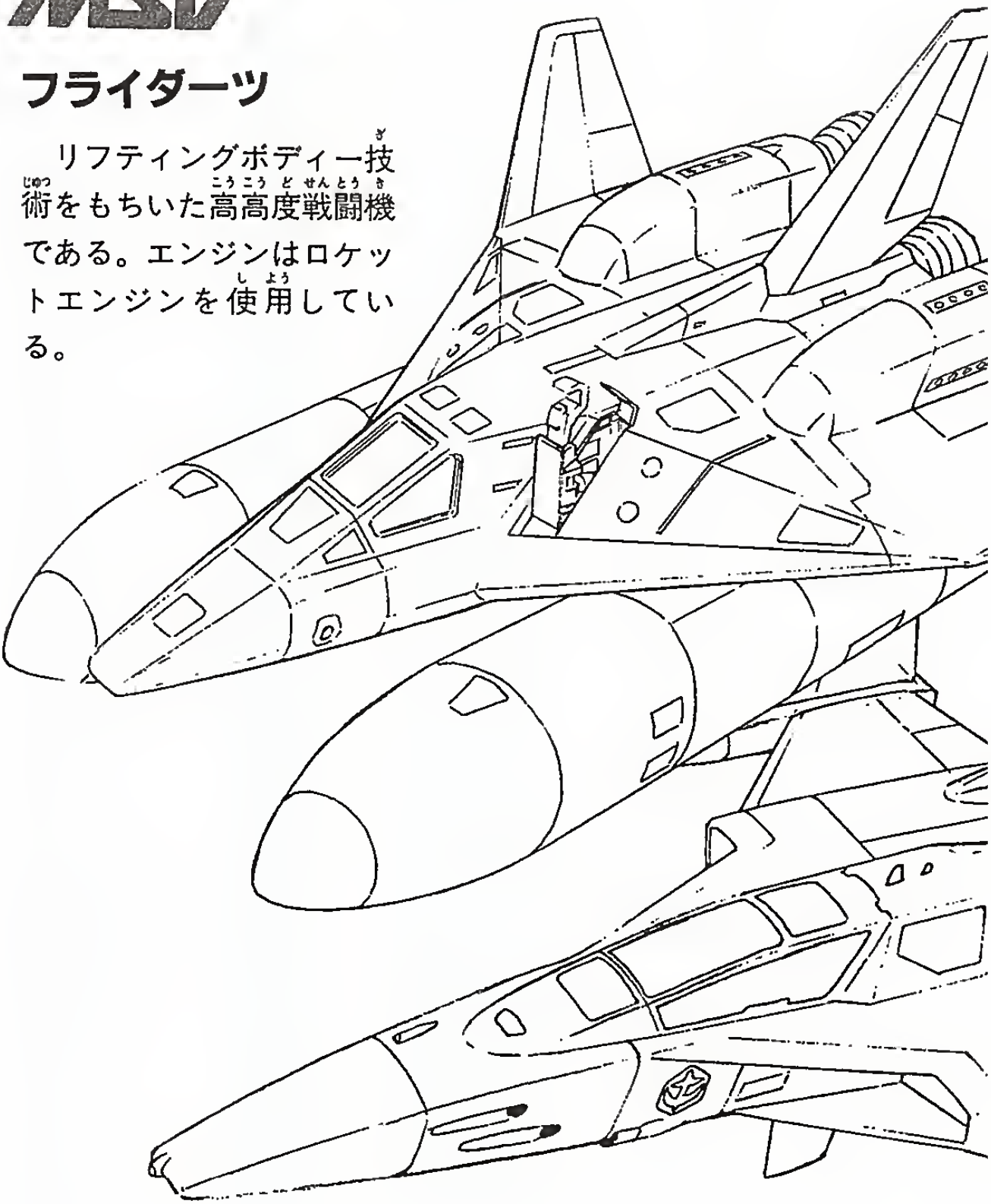


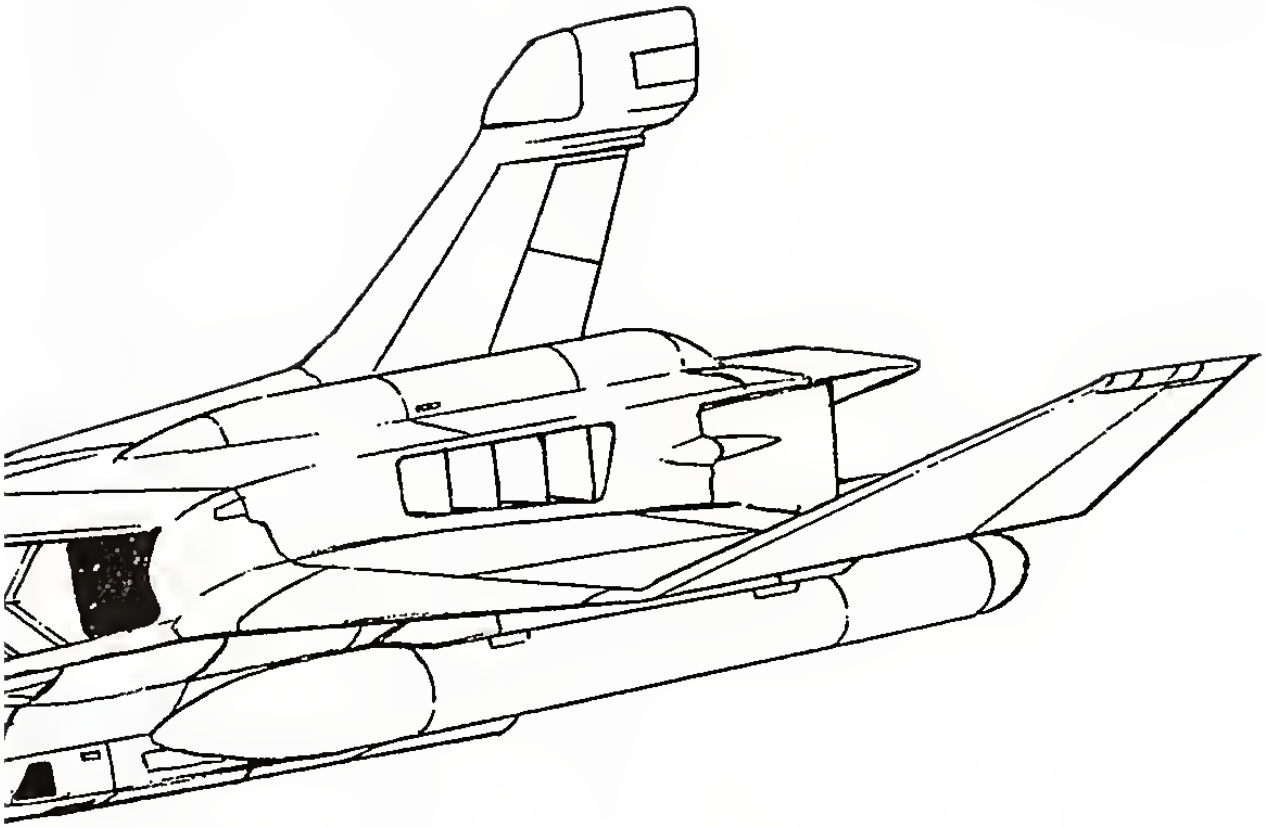
TINコッド

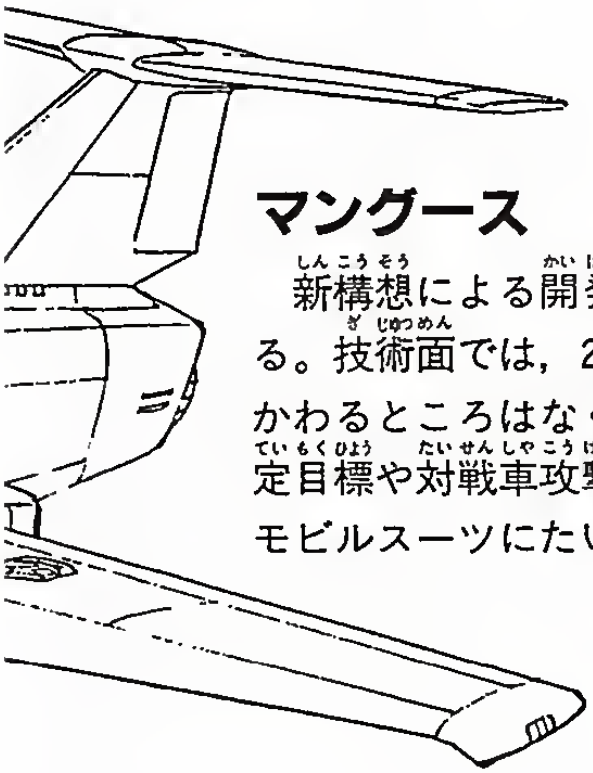
防空用高高度戦闘機で，開発は比較的後期である。エンジンはデュアルターボ式であるが，出力や信頼性に大きな問題があった。

フライダーツ

リフティングボディー技術をもちいた高高度戦闘機である。エンジンはロケットエンジンを使用している。





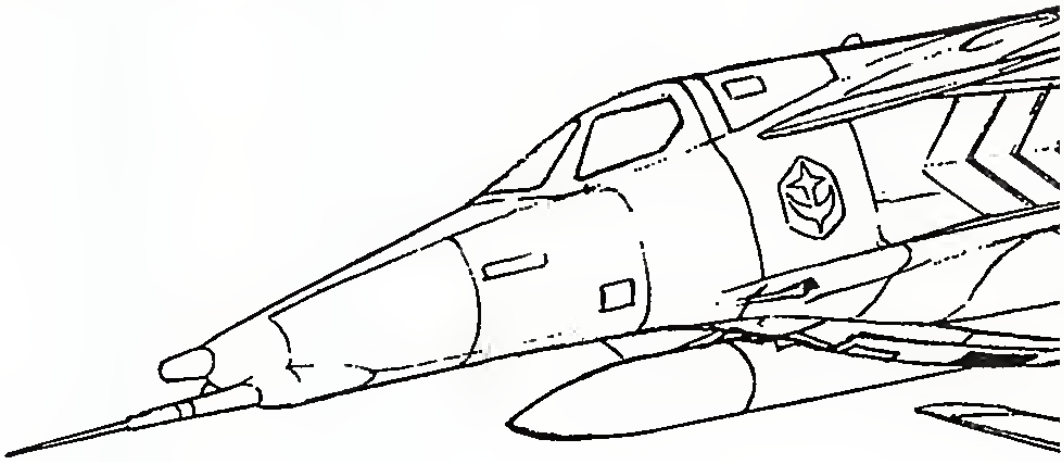


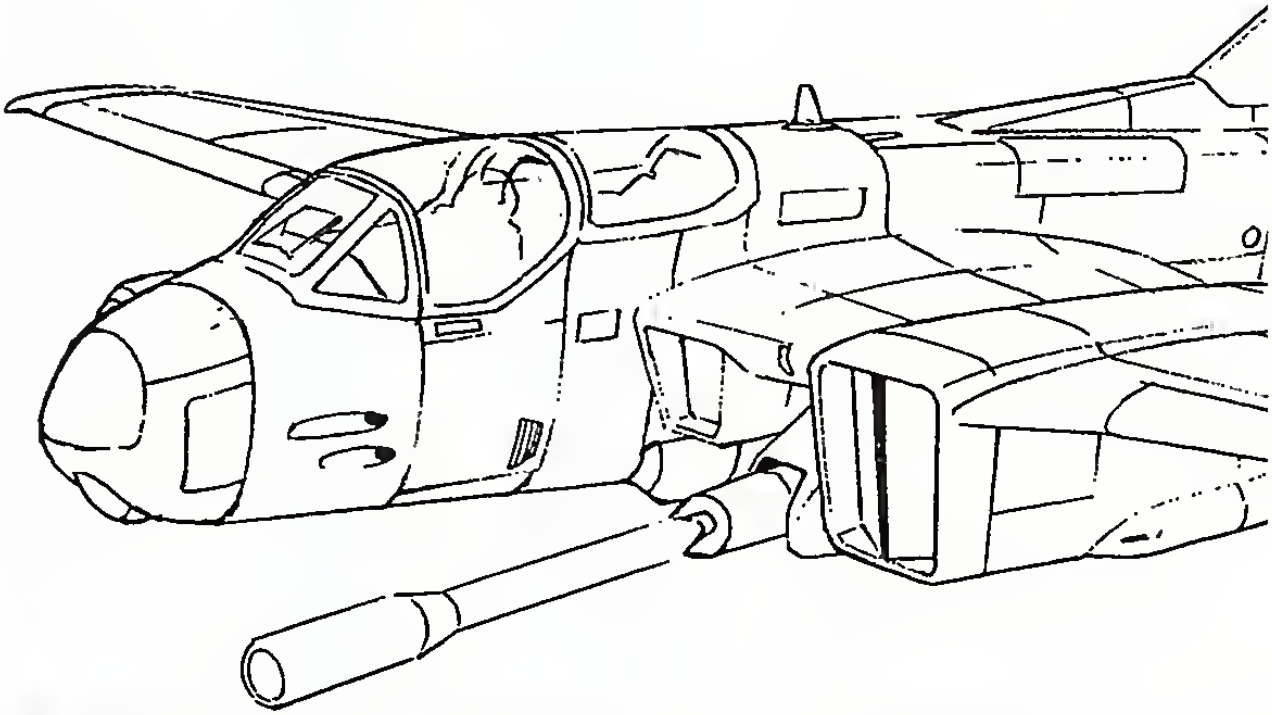
マングース

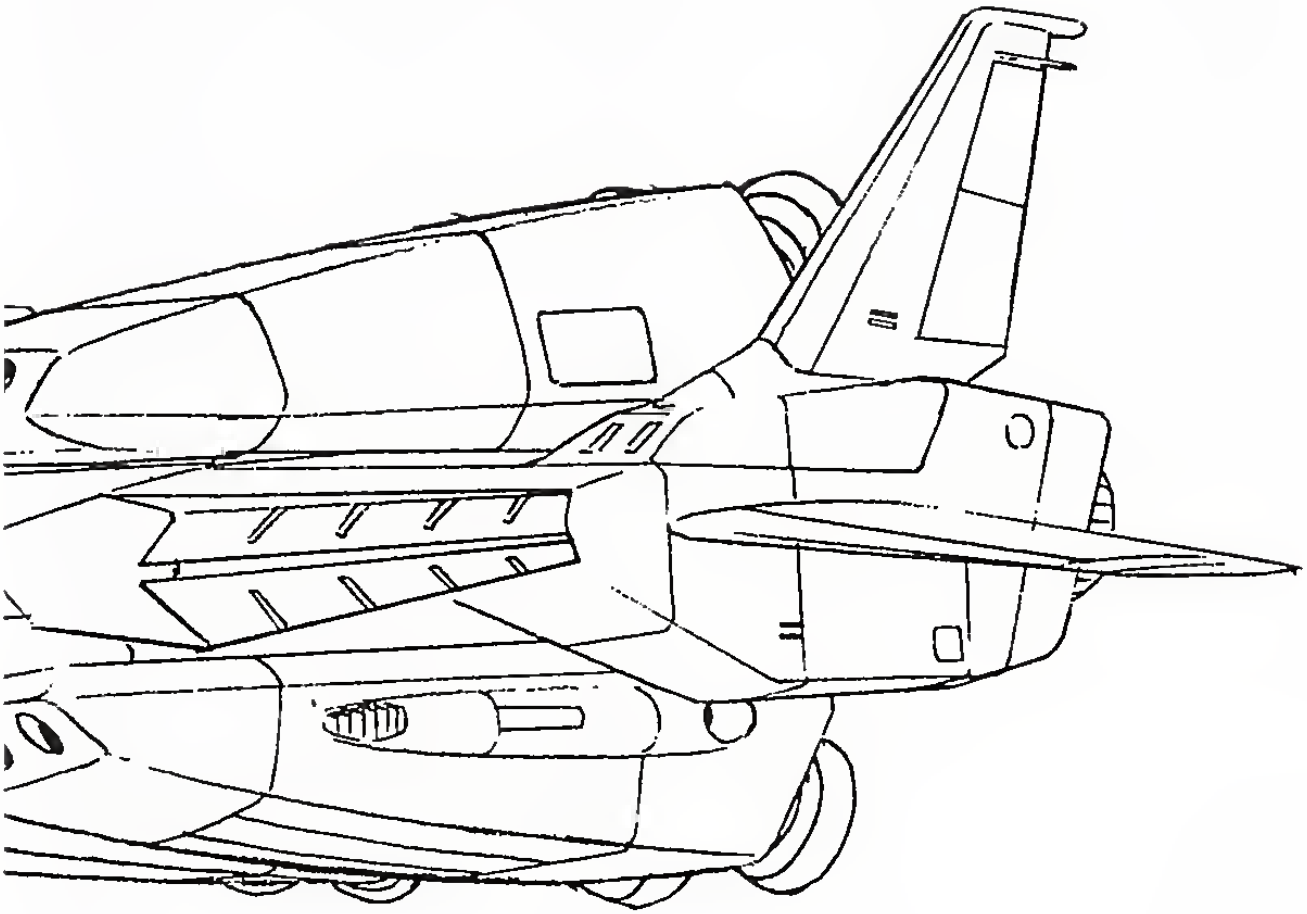
新構想による開発の初期の機種で，対地攻撃機である。技術面では，20世紀後半に使用された対地攻撃機とかわるところはなく，開発・生産ともに順調だった。固定目標や対戦車攻撃を主目的にしており，機動力のあるモビルスーツにたいしての攻撃能力はもっていない。

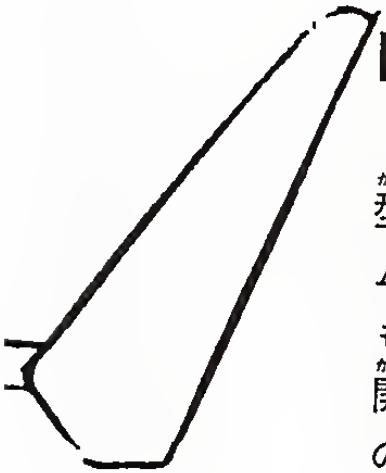
フラットマウス

20世紀後半の高速機技術を応用し，開発された強行偵察機。ターボファン＝ラム混合ジェットエンジンを使用したスーパークルーザーだが，開発中に過熱の問題が発生した。量産機には，冷却剤タンクが装備された。







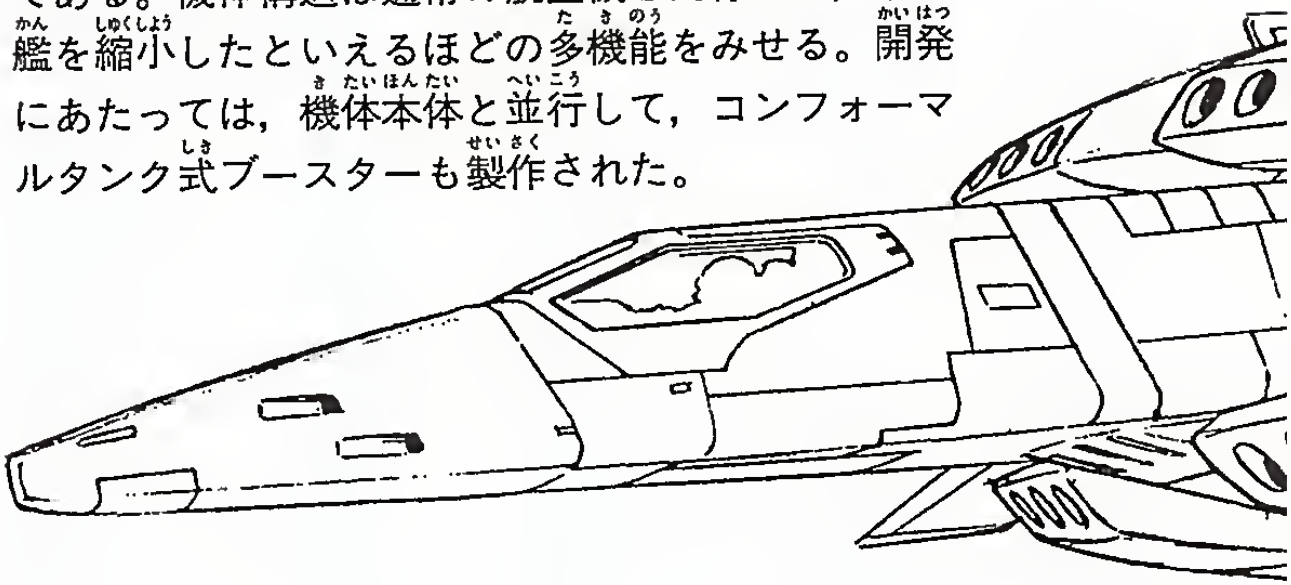


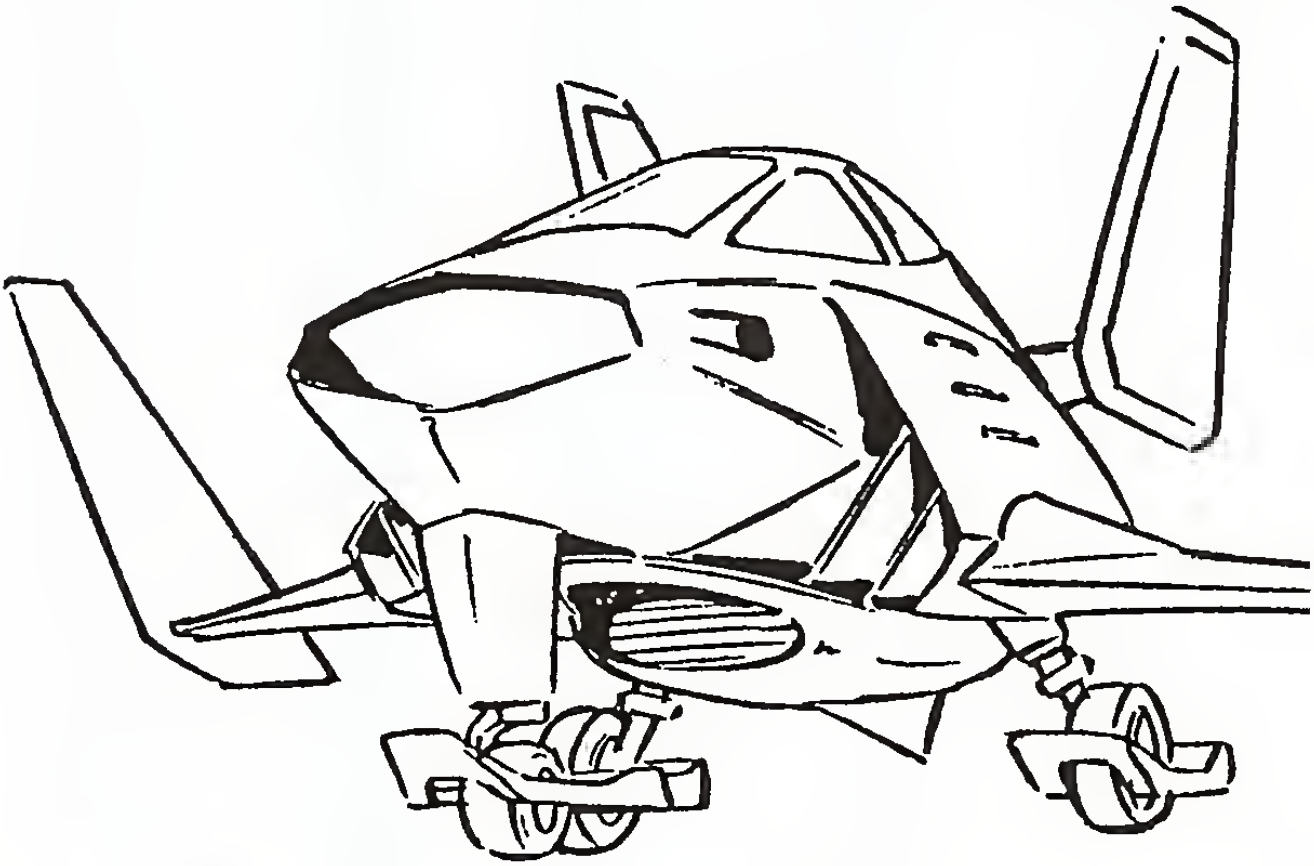
トリアーエスＦＦ－４

ＦＦ－Ｓ３と同様の空間戦闘機で，基地用の小型機である。開発時の問題は少なく，比較的スムーズに実戦配備がおこなわれた。配備先は，おもにルナツーや各サイド駐留部隊である。また，開発されたのがＦＦ－Ｘ７と同時期のため，多くの共通点がみられる。

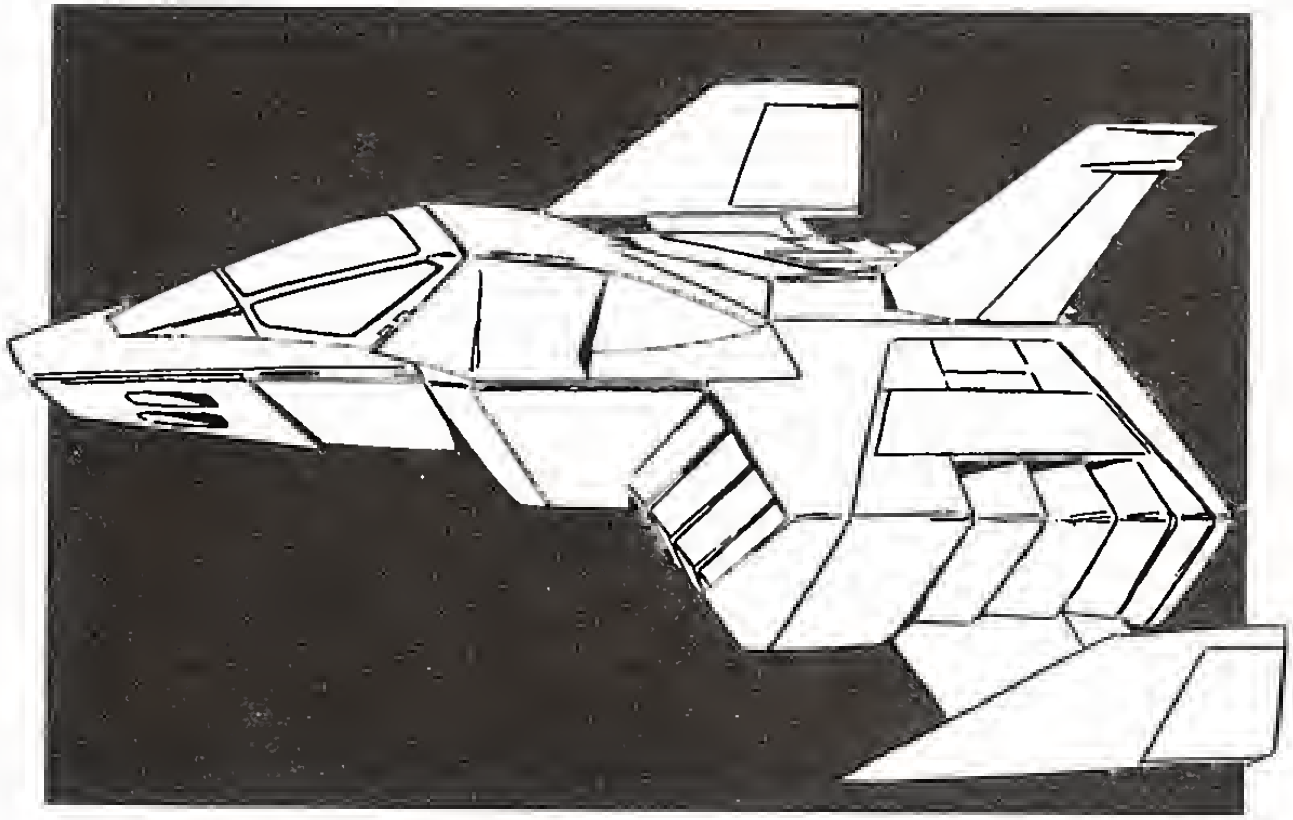
FF－S3セイバーフィッシュ

新構想のなかで開発された空間戦闘機で，艦載機である。機体構造は通常の航空機と同様だが，宇宙艦を縮小したといえるほどの多機能をみせる。開発にあたっては，機体本体と並行して，コンフォーマルタンク式ブースターも製作された。





FF—X7
コアファイター

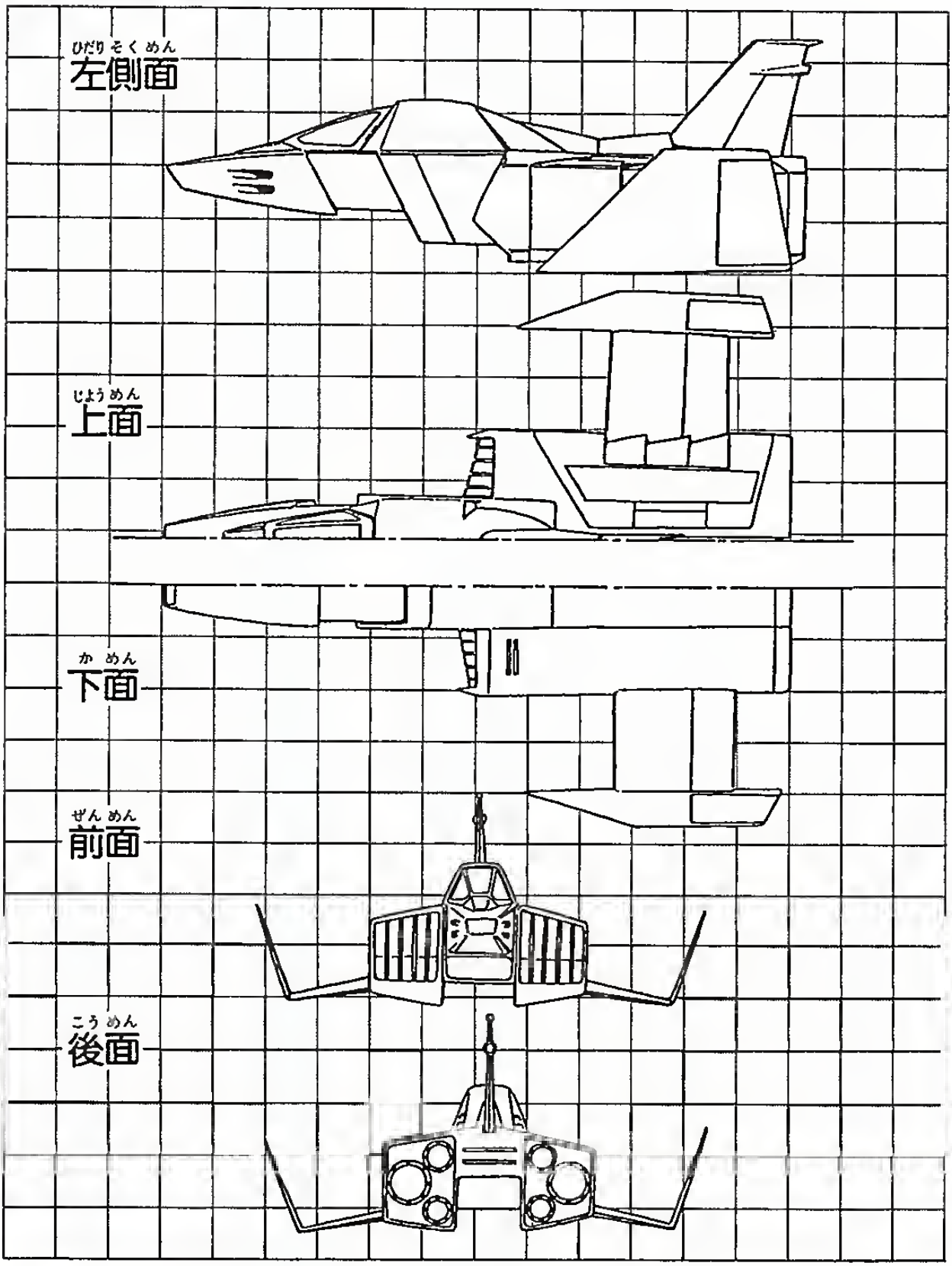


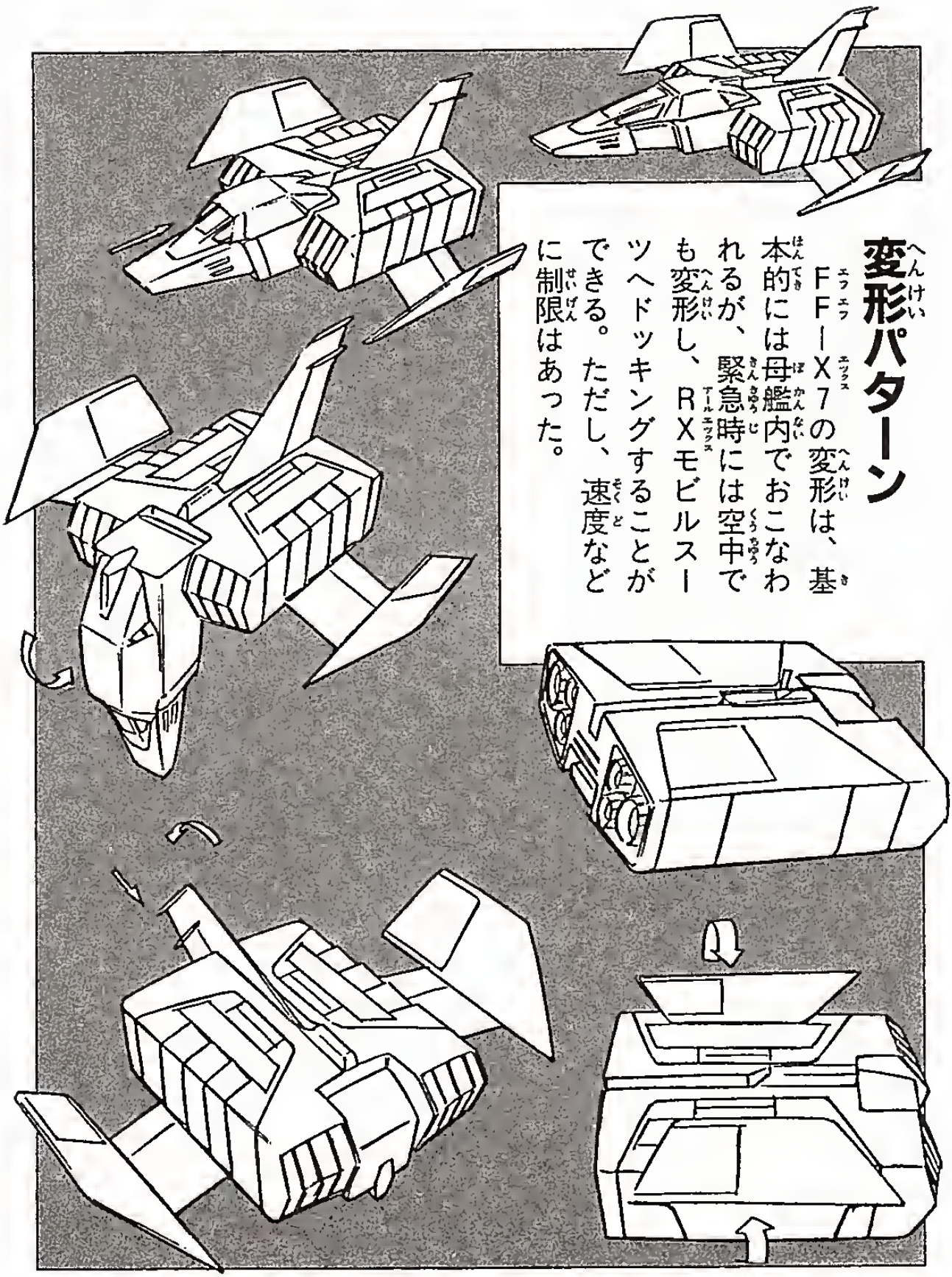
FF—X7

RXモビルスーツ開発にあたって、パイロット保護のため、コクピットモジュールには脱出カプセルとしての機能があたえられていた。のちに、新構想導入や、研究スタッフが航空機部門から特別開発部門へと独立したこともあり、このカプセルは多目的軽戦闘機としても使用できるものへと変化していった。こうして完成した機体は、RXモビルスーツの、文字どおり核となるもので、FF—X7コアファイターと命名された。バーニヤ内蔵の安定翼とコクピットを展開して戦闘機の形状となり、コアブロックに変形してRXモビルスーツのコクピットとなる。高性能機ではあったが、機体のサイズから、燃料や弾薬の積載量に制約があった。

●モビルスーツバリエーション

MSV COREFIGHTER VARIATION





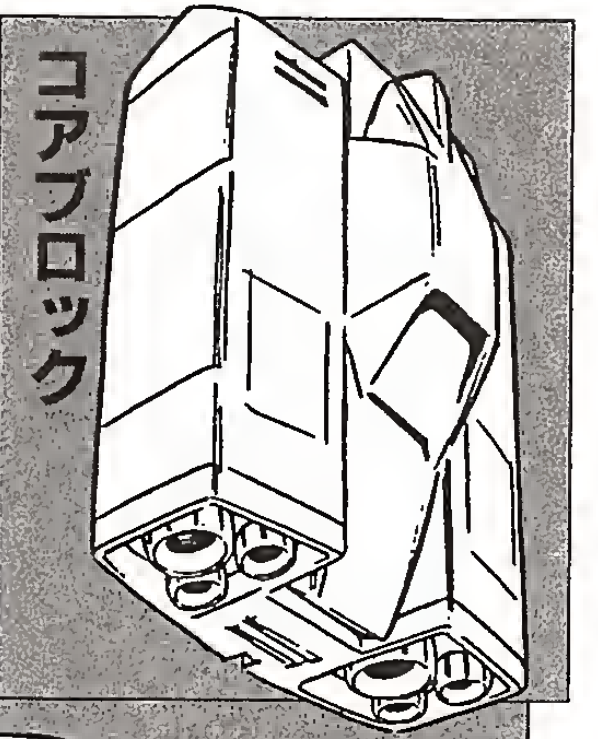
変形パターン

FF－X7の変形は、基本的には母艦内でおこなわれるが、緊急時には空中でも変形し、RXモビルスーツへドッキングすることができる。ただし、速度などに制限はあった。

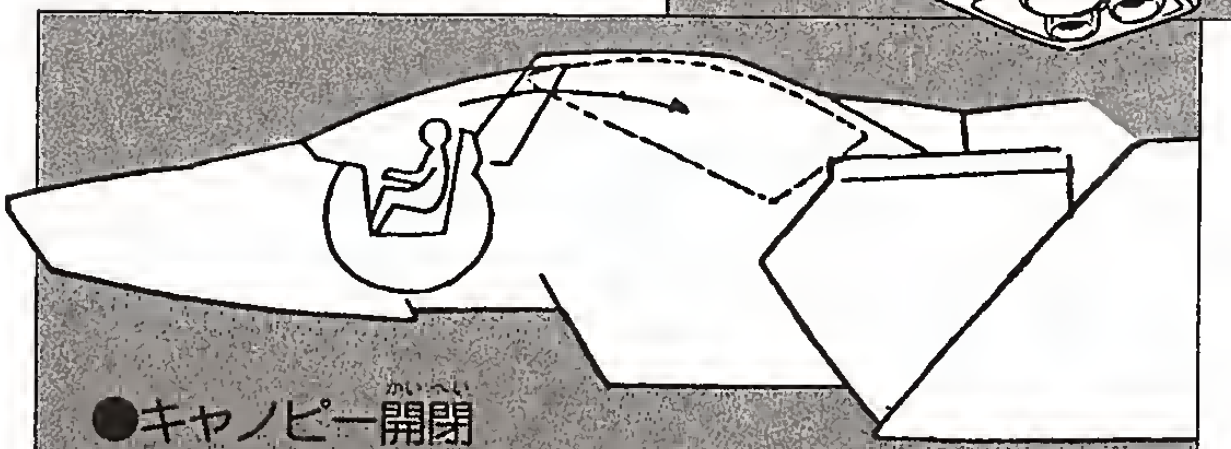
●モビルスーツバリエーション

MSV COREFIGHTER VARIATION

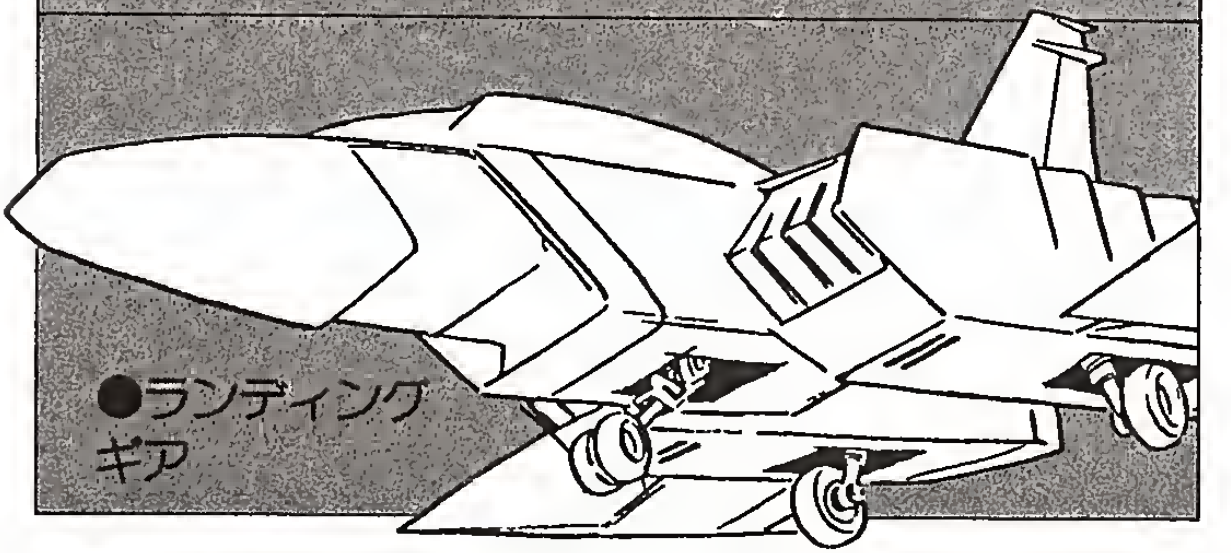
コアブロック



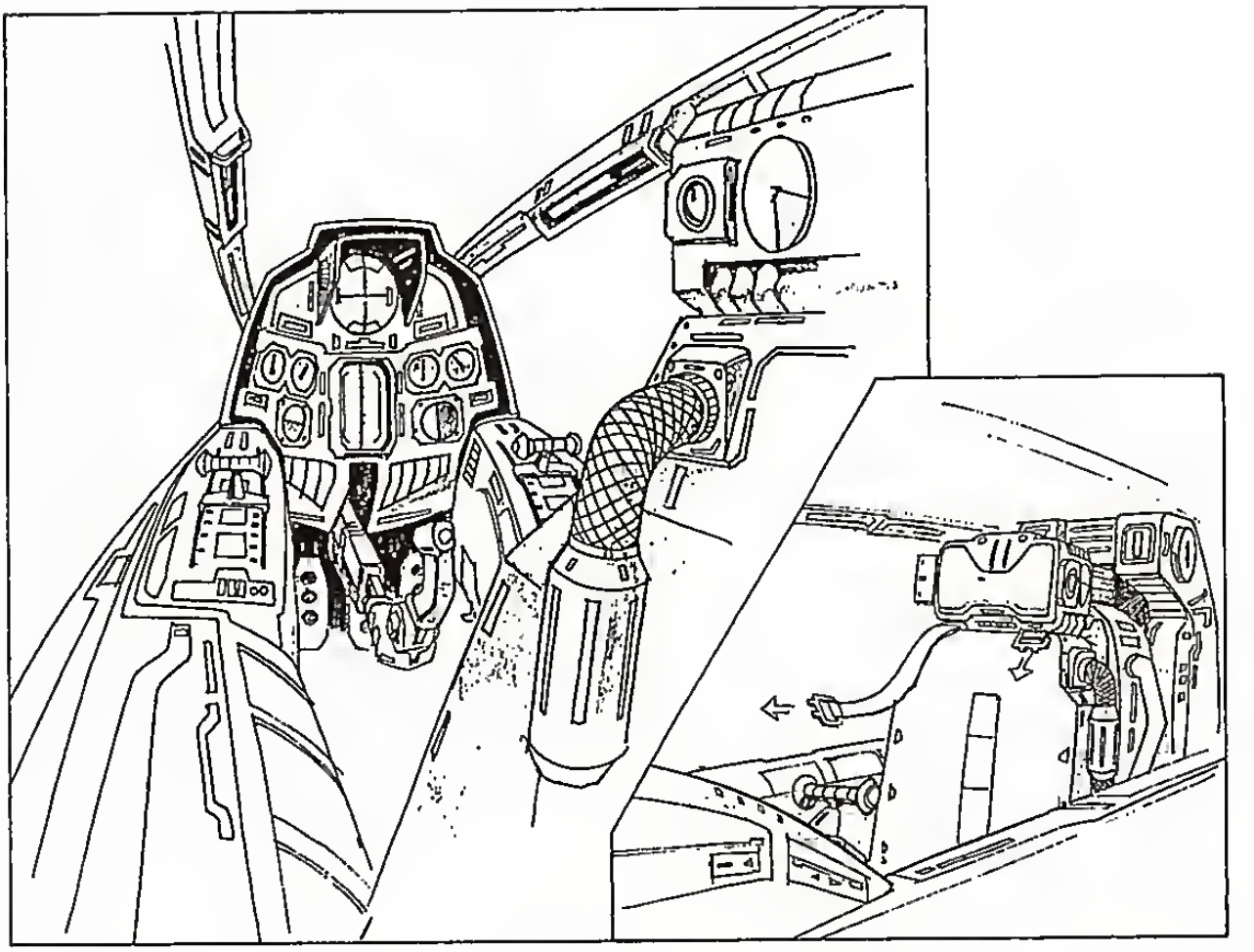
コアブロックとは、RXモビルスーツのコクピットモジュール状態のFF－X7の名称である。コアブロックは、RX－75、77、78の共通ユニットとして互換性をもつ。機能のことなるRXモビルスーツにたいし、互換性を確保するには、けたはずれの高性能コンピューターが必要で、FF－X7は非ノイマン式自己学習型のものを装備している。



●キャノピー開閉



●ランディングギア



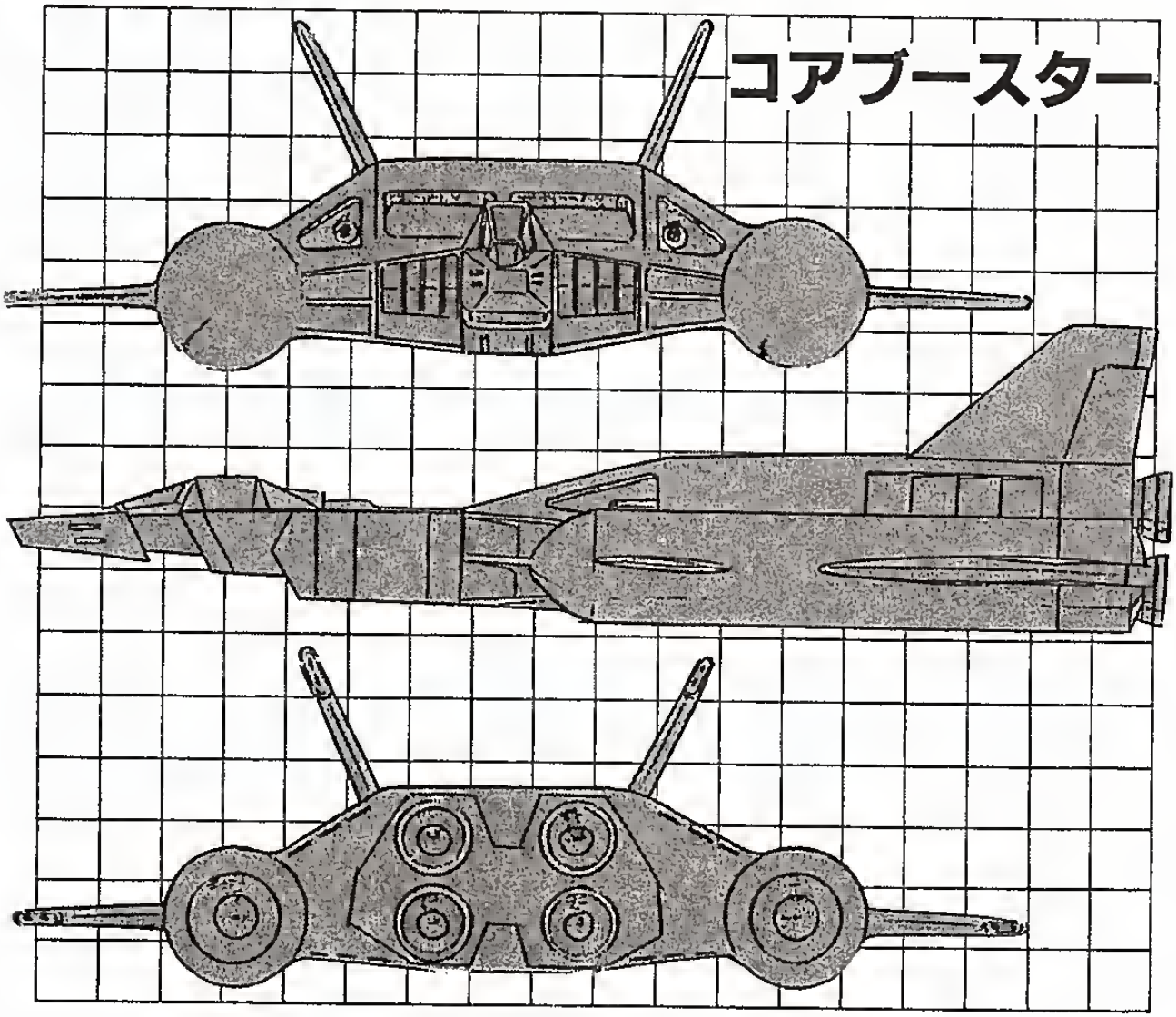
コクピット

FF－X7のコクピットは、戦闘機とモビルスーツの二つの状態に適合するために、数々の機構をそなえている。その代表例が、ロール機構をもつドラムモジュールである。これは機体の使用状況にあわせ、コクピットの水平をたもちながら機能を変換する。

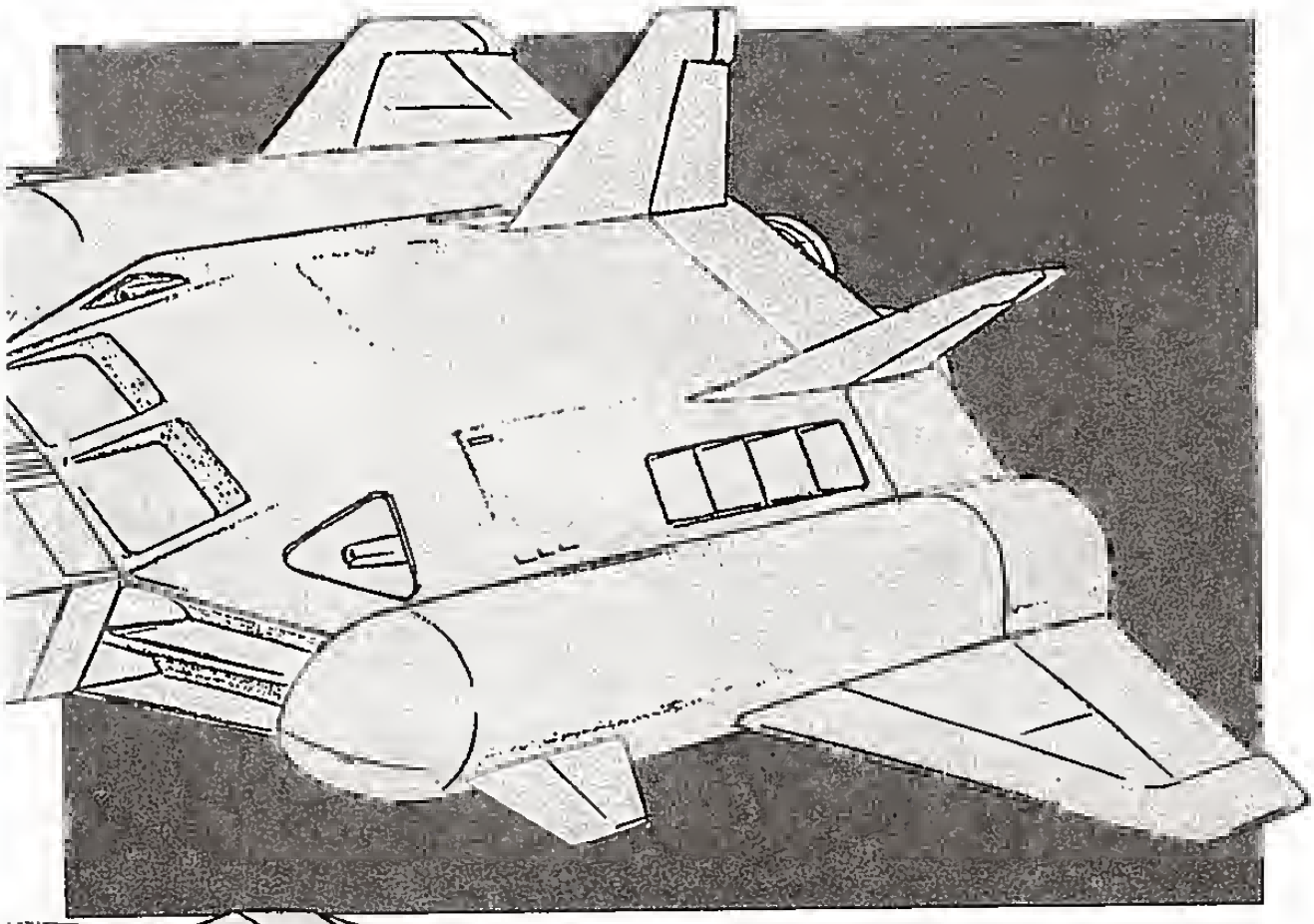
コクピット内部のレイアウトは、基本的に航空機とおなじである。モビルスーツと航空機という異質の操縦系をあわせもつので、メーンコンソールには共通事項しか表示されない。それ以外の表示には、ヘッドアップディスプレーやメーンスクリーンを使用する。

コントロールスティックは二種類あり、戦闘機時は中央のものを、モビルスーツ時には左右にあるサイドスティックを使用する。

コアブースター

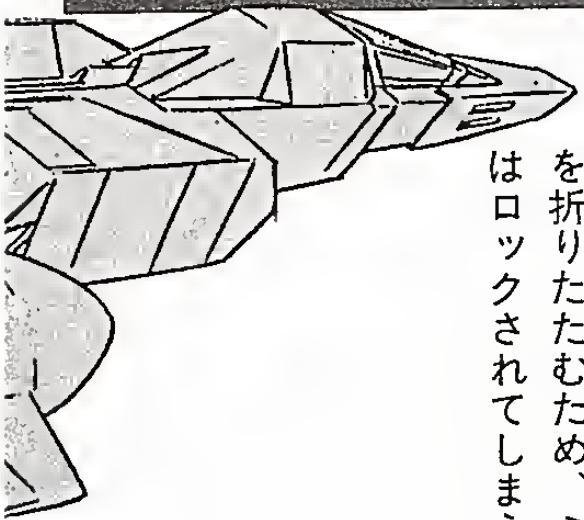


コアファイターは，戦闘能力において高性能をみせただけでなく，多目的戦闘機としての汎用性も高かった。これは，メーンコンピューターが，他の航空機に搭載されているものより10倍以上の処理能力をもっていたからである。だが，機体の小さいことからくる制約はいかんともしがたく，基本設計であたえられた潜在能力を十分にいかしきれなかった。そこで計画されたのが，コアファイターに装着するコアブースターである。これにより，コアファイターの最大の弱点である，武装の貧弱さと積載燃料の少なさがカバーされることとなった。



武装

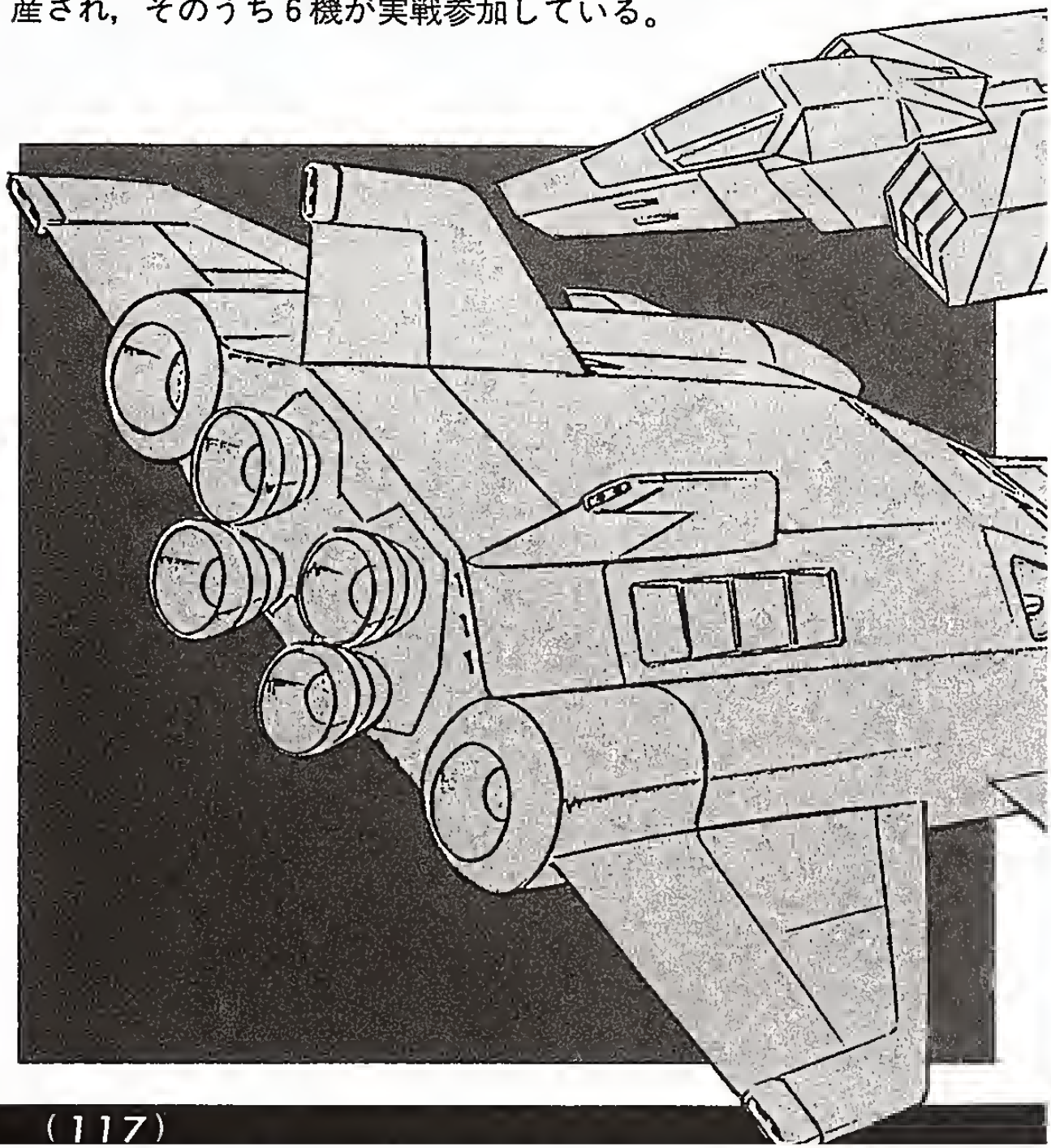
コアファイターには、固有の武装として、機首に二十五ミリ機関砲を四門と、左右のエンジンユニット上部にそれぞれ四発のペンシル形空対空ミサイルがある。さらに、ブースターには、動力源である反応炉を利用したビーム砲があり、合体時にはかなりの重武装となる。もっとも、ブースターと合体するときは、コアファイターの安定翼を折りたたむため、ミサイルベイはロックされてしまう。



●モビルスーツバリエーション

MSV COREFIGHTER VARIATION

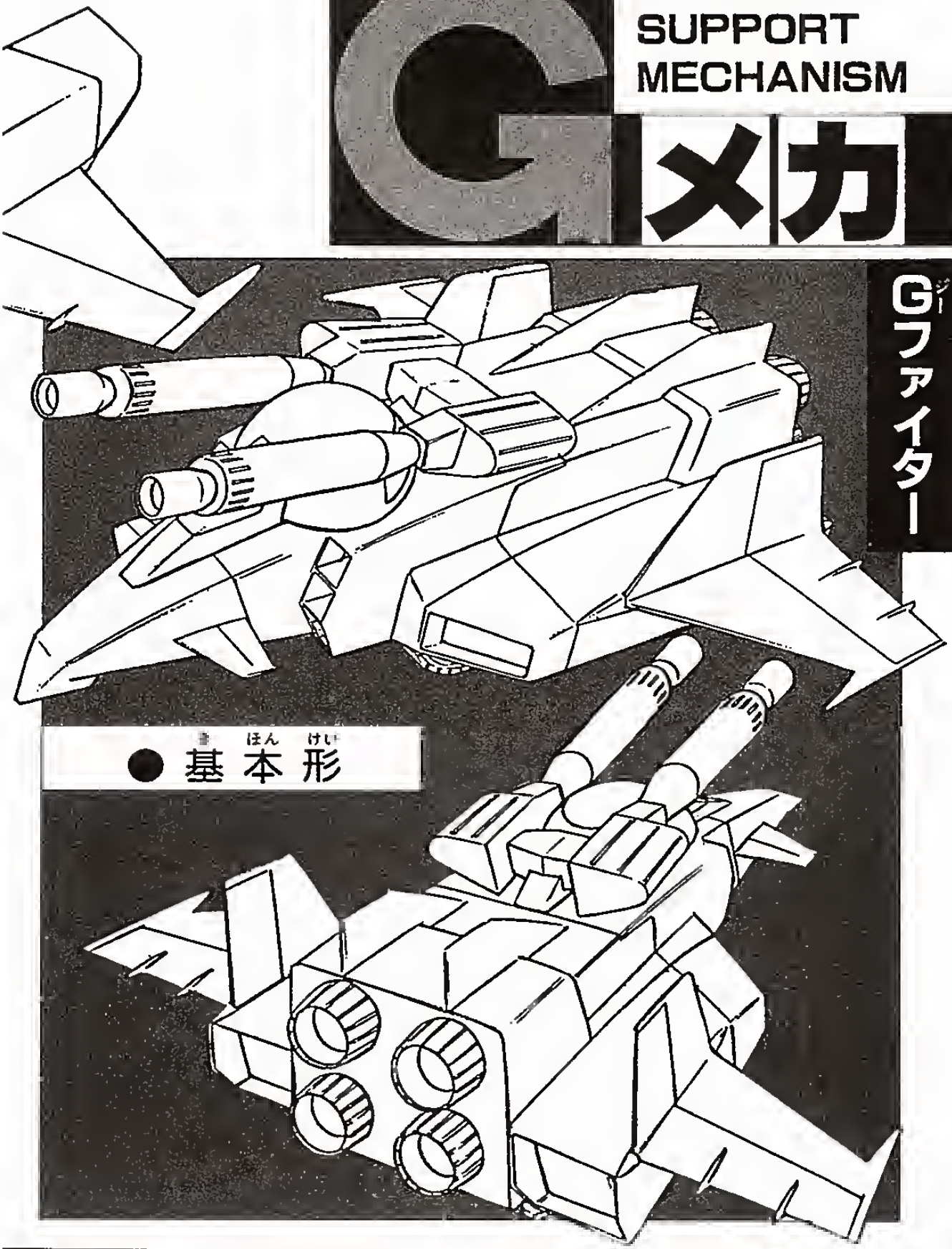
ブースターユニットの開発にあたっては，ホワイトベースに搭載されたGメカのうち，GスカイとGスカイイージーのデータが参考にされた。Gスカイは支援戦闘爆撃機だったが，コアブースターは純粋な戦闘機にしあがっている。性能は，宇宙空間，大気圏内ともに良好であった。コアブースターは，終戦までに16機生産され，そのうち6機が実戦参加している。



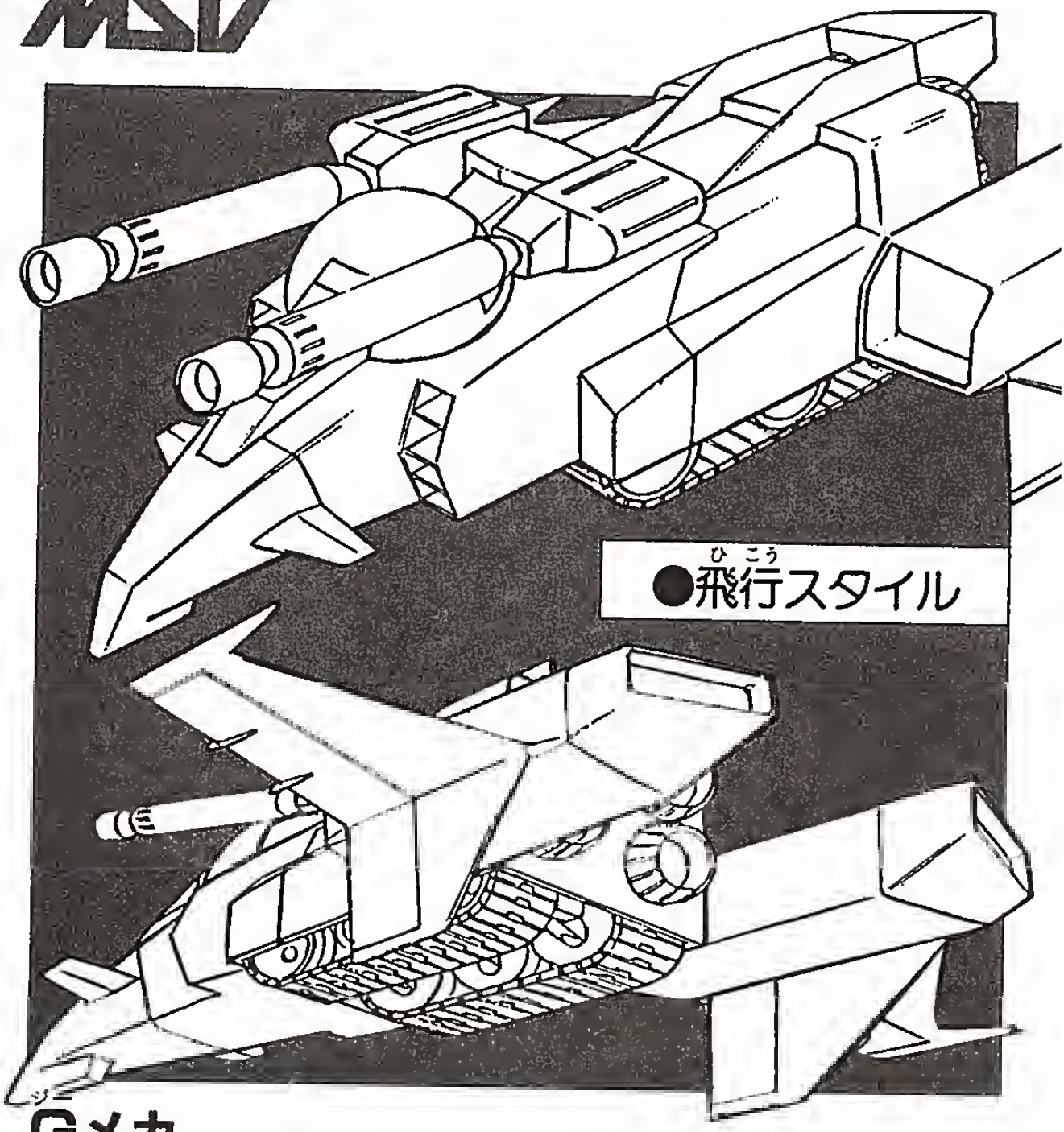
GUNDAM SUPPORT MECHANISM

Gメカ

Gファイター



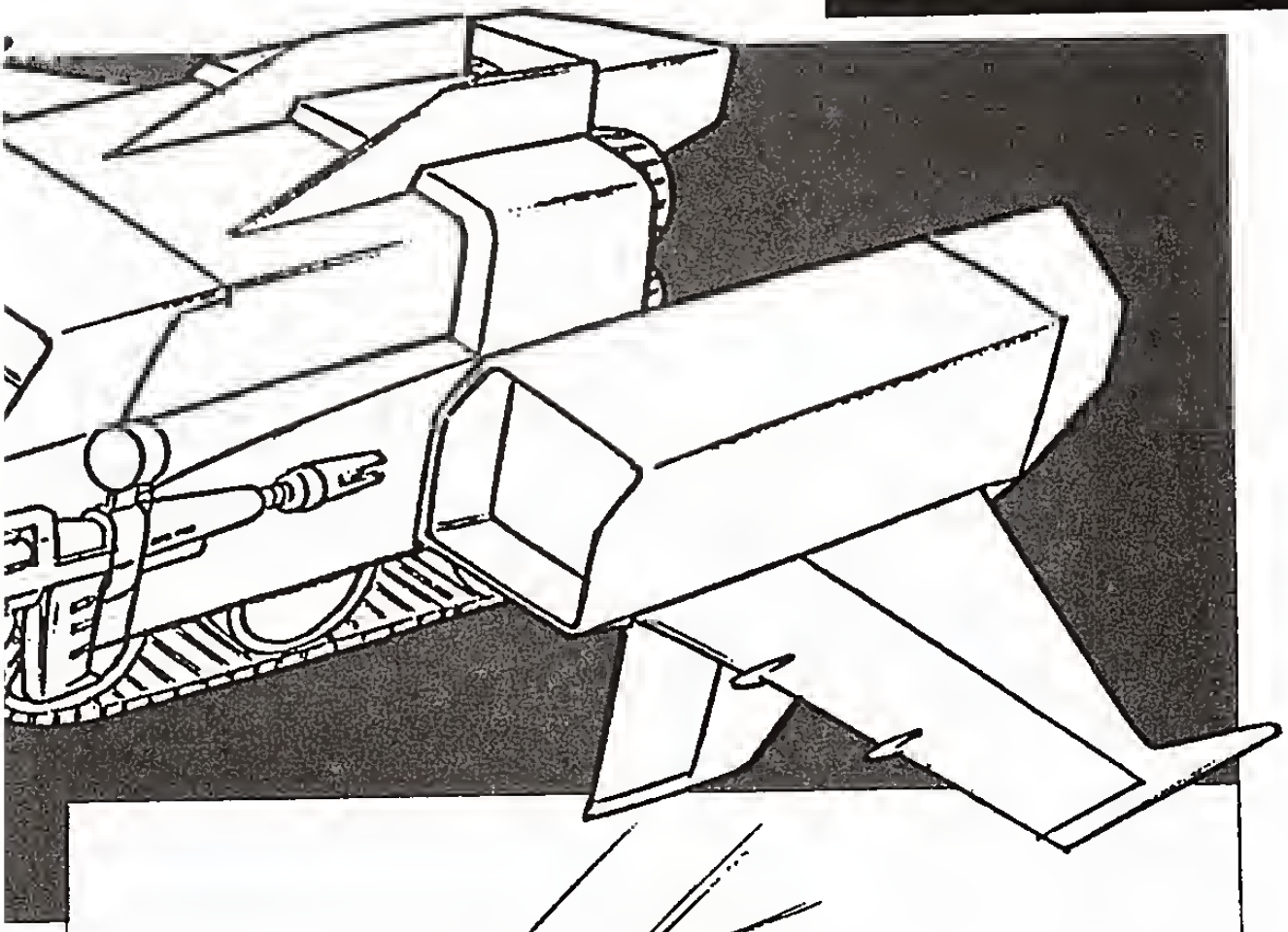
● 基本形

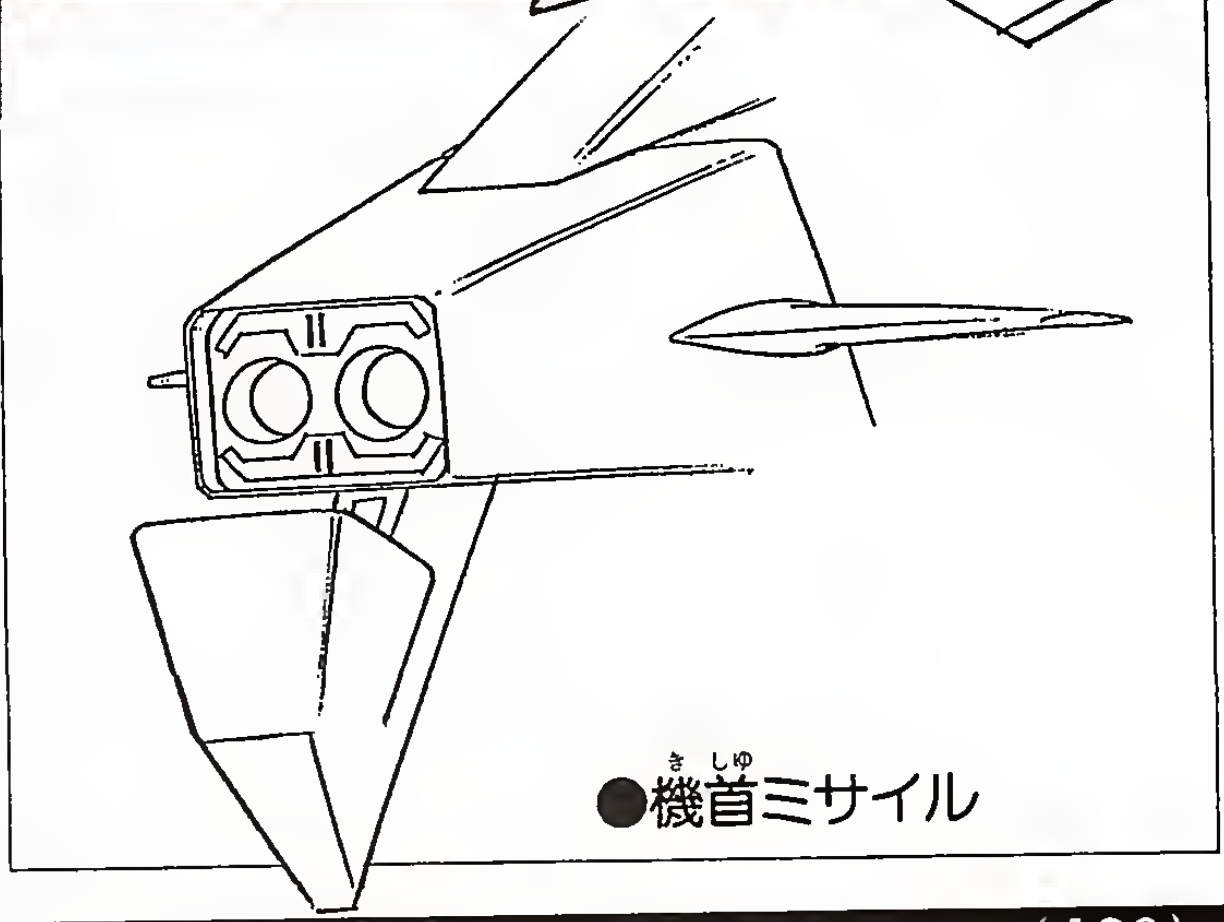


Gメカ

Gメカは，大戦後期にのこっていたRX—78のサポートメカシステムとして製作された。開発は，RXモビルスーツにコアブロックシステムの採用が決定した時点からはじめられたといわれるが，確認されてはいない。Gメカにかぎらず，RX—78には未発表の部分が非常に多い。

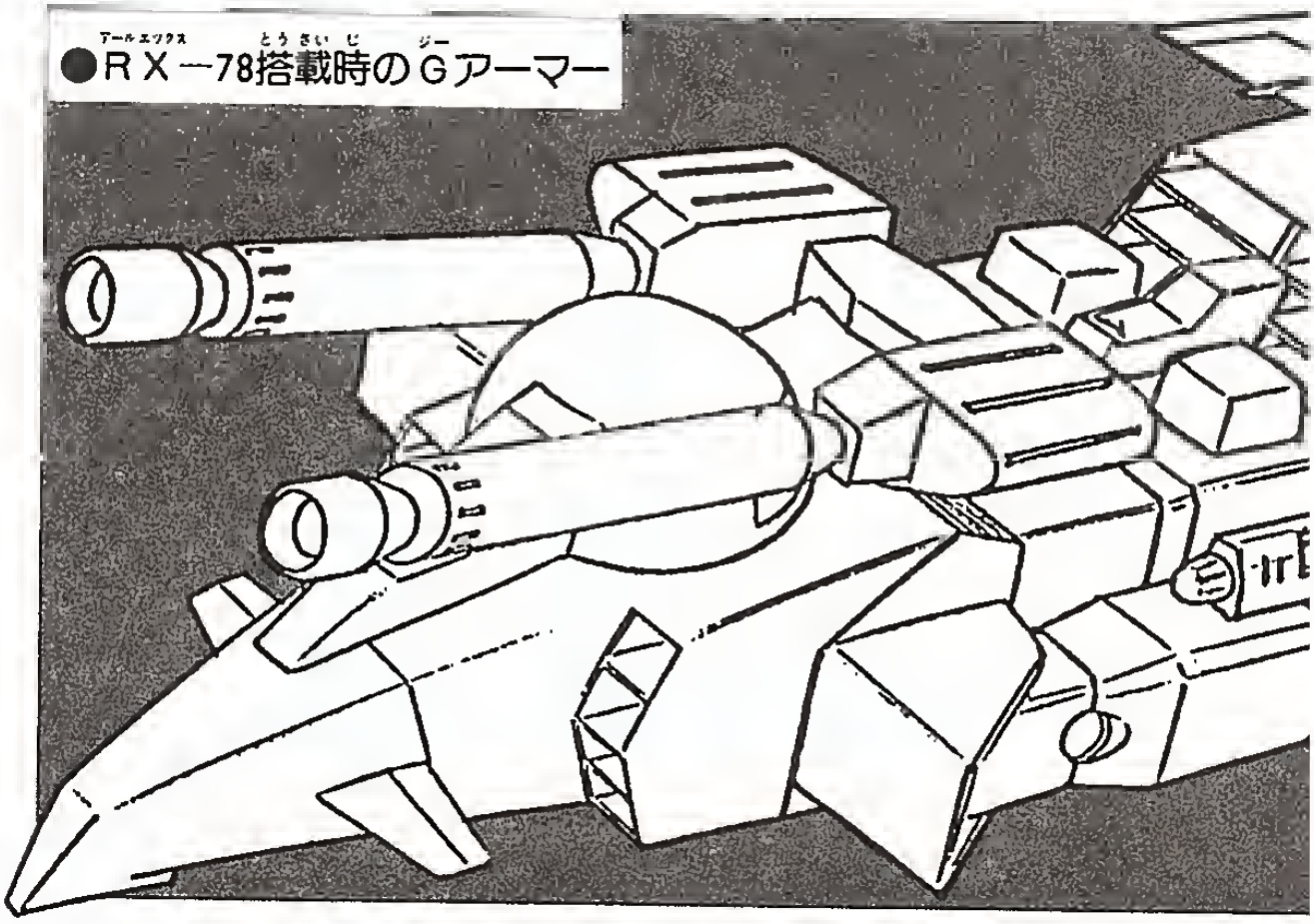
Gアーマー





●機首ミサイル

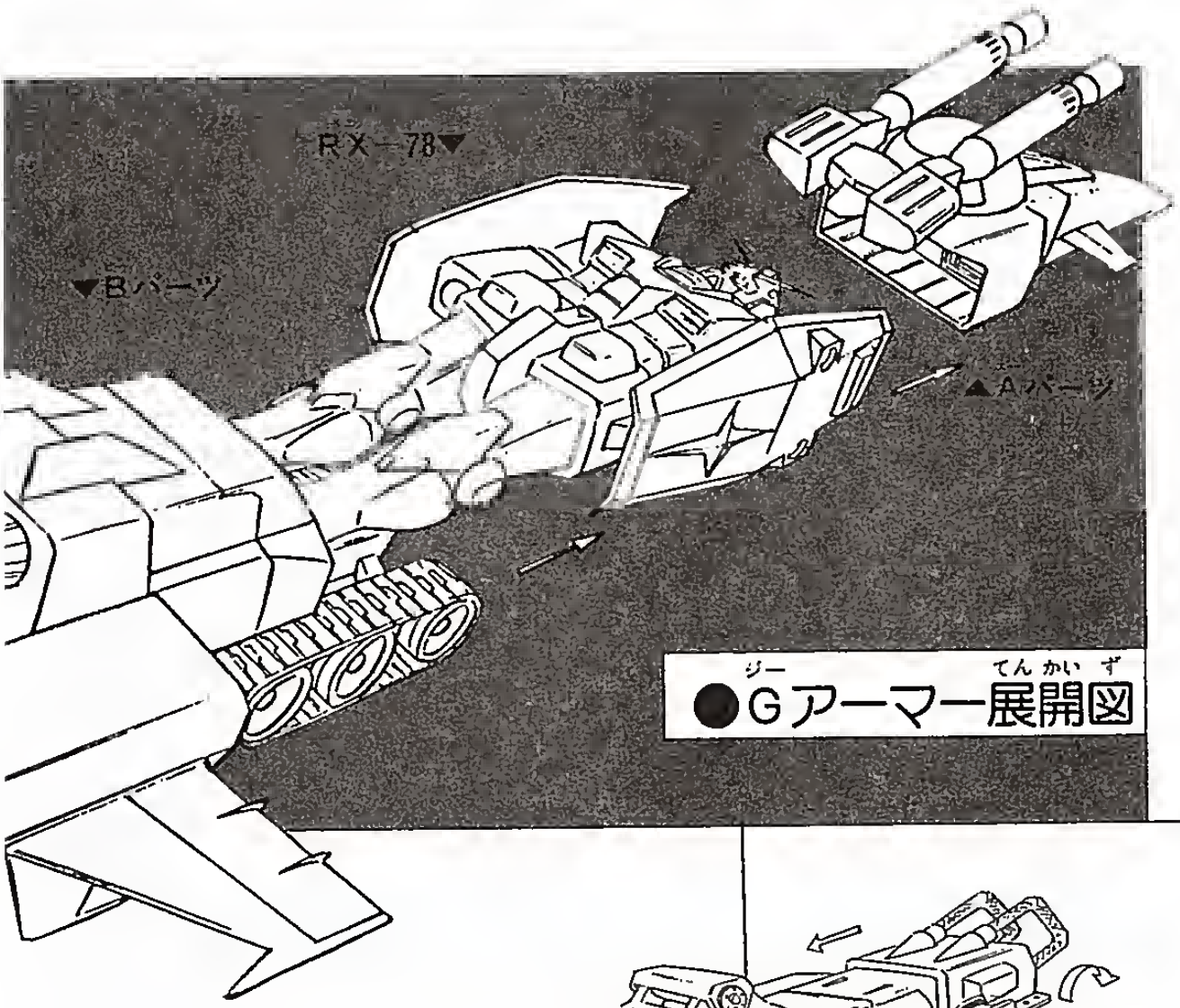
●RX―78搭載時のGアーマー



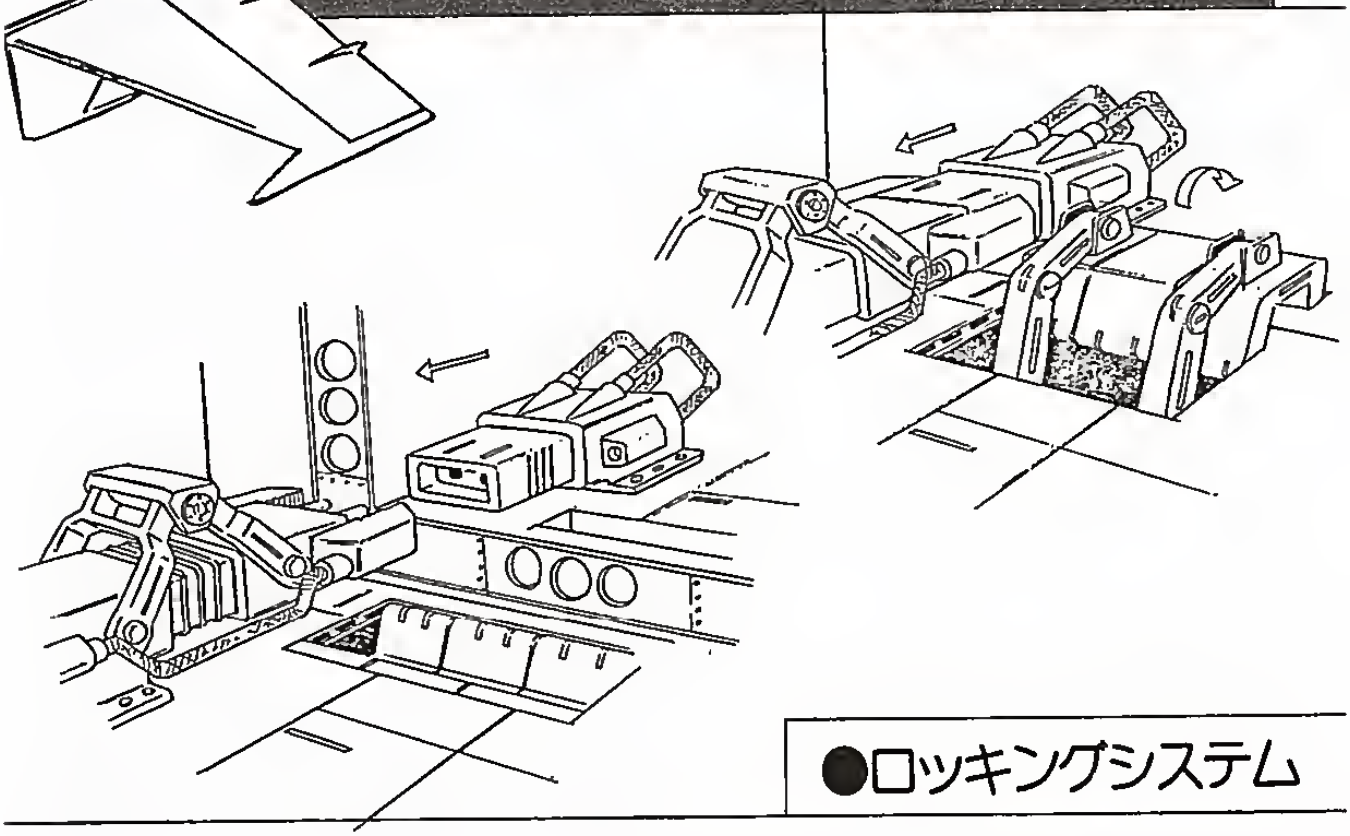
Gメカの開発経緯については不明な点が多いものの、連邦軍のRXモビルスーツ開発班のなかでは、地上でのモビルスーツの機動力の問題や、上空支援などに早くから気がついていたことはたしかだ。このGメカもその解決策の一つで、RX―78一機につきGメカが一セットでバックアップするようになっている。じっさいには、製作開始から実戦配備までわずか二か月というスケジュールのためか、多くの問題点をかかえていたらしい。

Gメカは、基本形をGファイターといい、重戦闘爆撃機としてもちいられ、RX―78と合体した形をGアーマーとよび、重爆撃機として運用された。

Gメカは二機生産されただけだが、ほかに予備パーツとして一機分あったといわれている。



●Gアーマー展開図

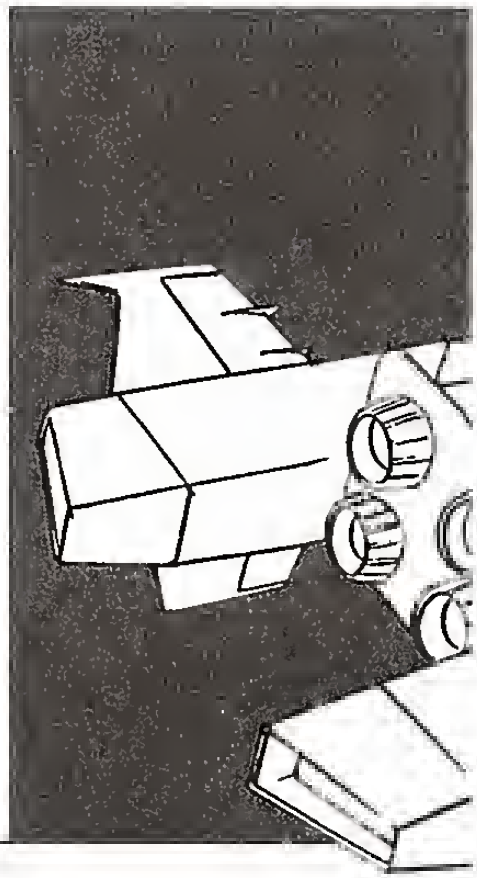


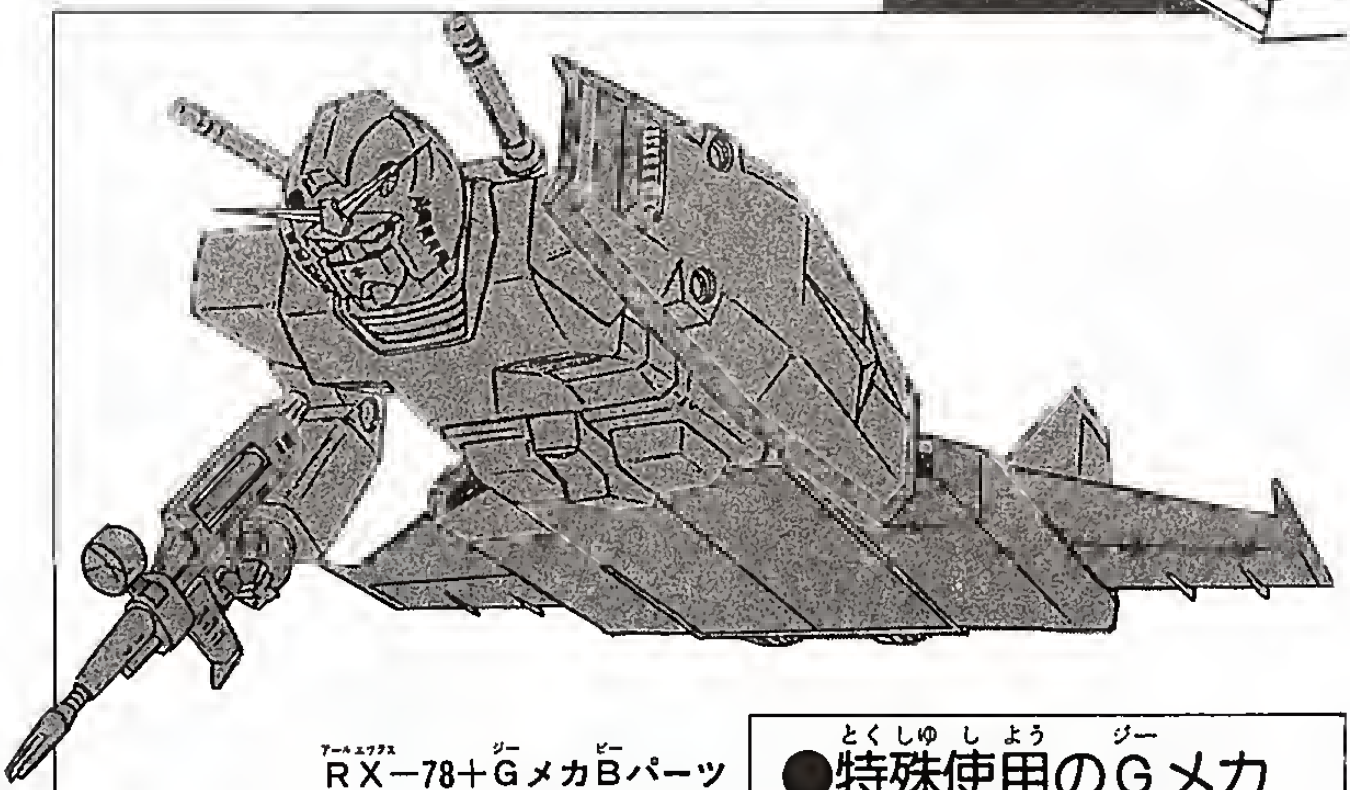
●ロッキングシステム

●モビルスーツバリエーション

MSV G-MECHA

Gメカが、水中はべつとして、あらゆる状況においてRX－78のバックアップができるのは、コアブロックシステム規格による換装部分があったからだ。これにより、GメカはRX－78およびFF－X7と自由にドッキングでき、適合できる状況の幅を広くしている。これには完全なマニュアルがあるわけではなく、ホワイトベース将兵による運用方法の模索が成功したことになる。なかでも、RX－78にGメカのBパーツを装着する方法は、モビルスーツでありながらモビルアーマーなみの機動力をもたせることに成功している。

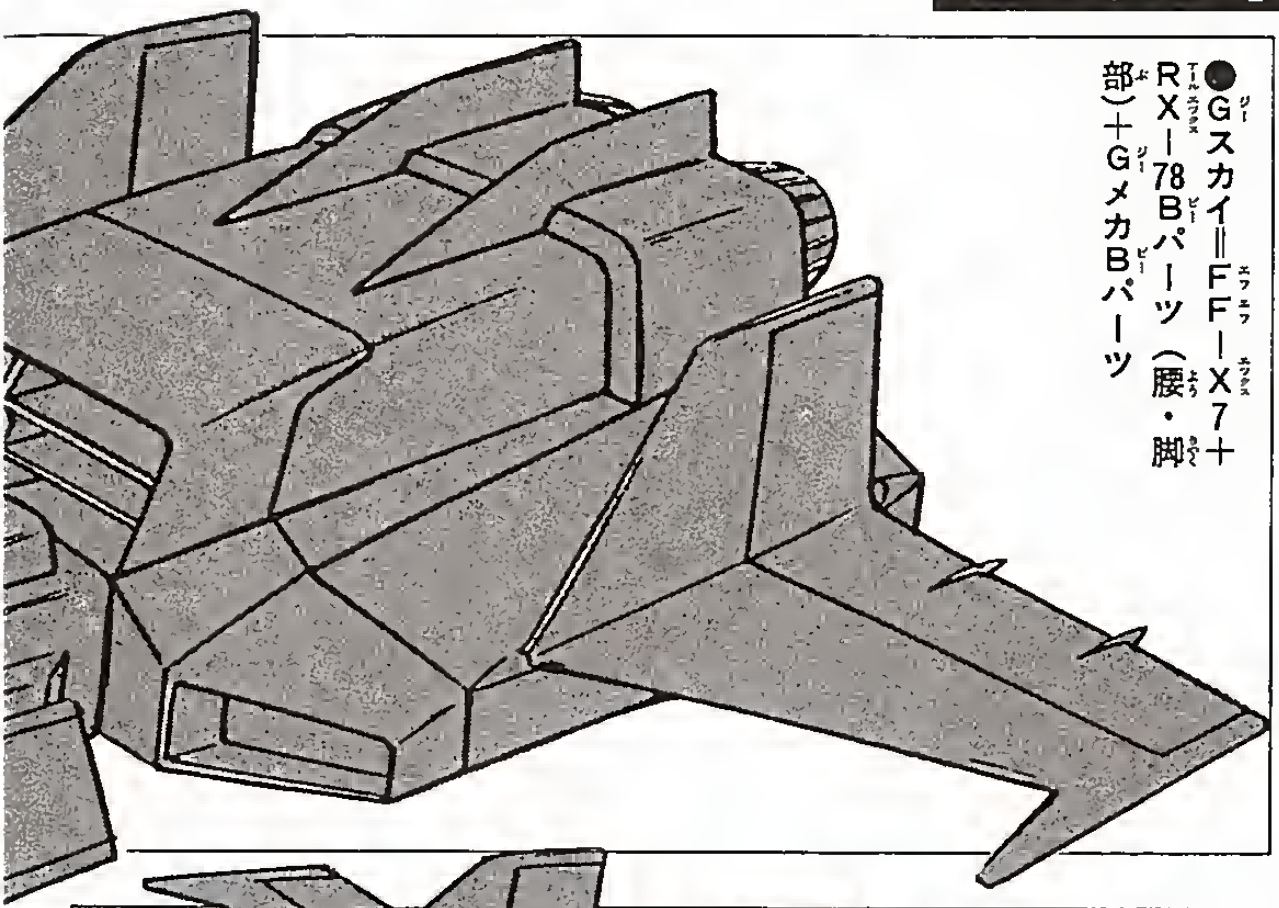




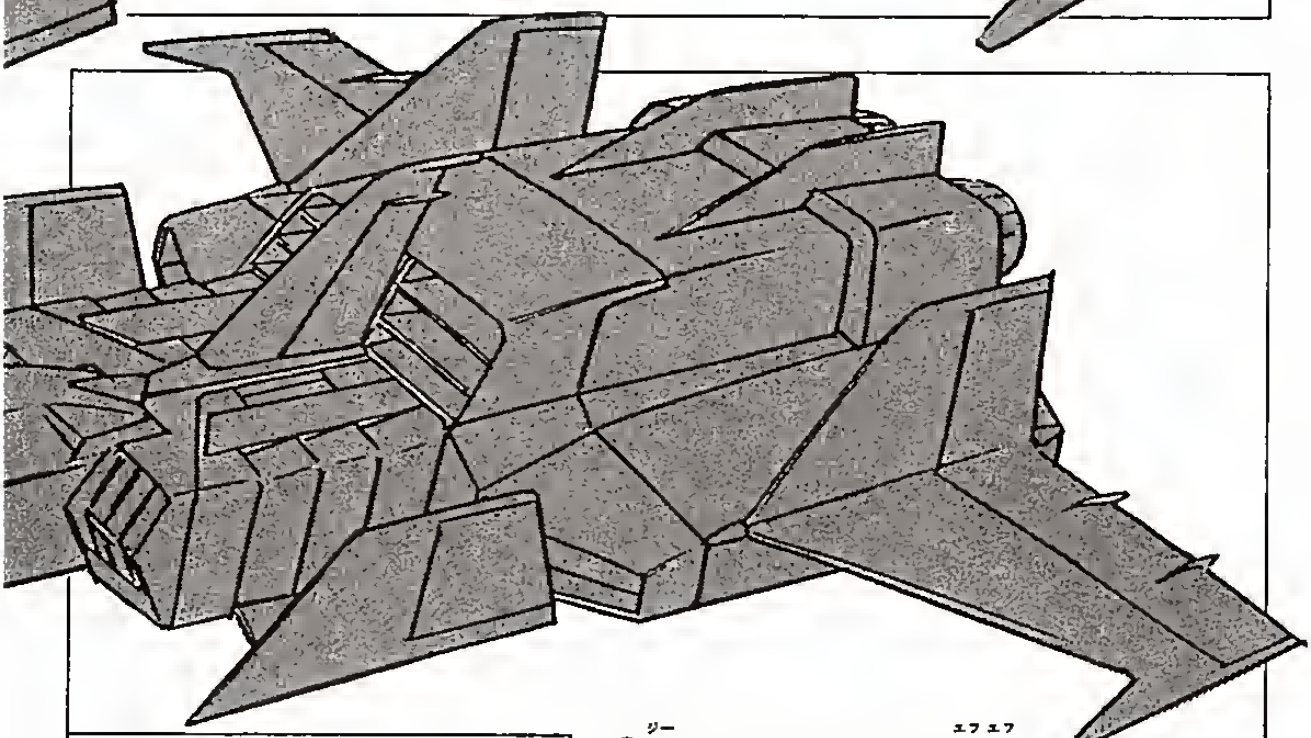
RX－78＋Gメカ Bパーツ

●特殊使用のGメカ

Gスカイ



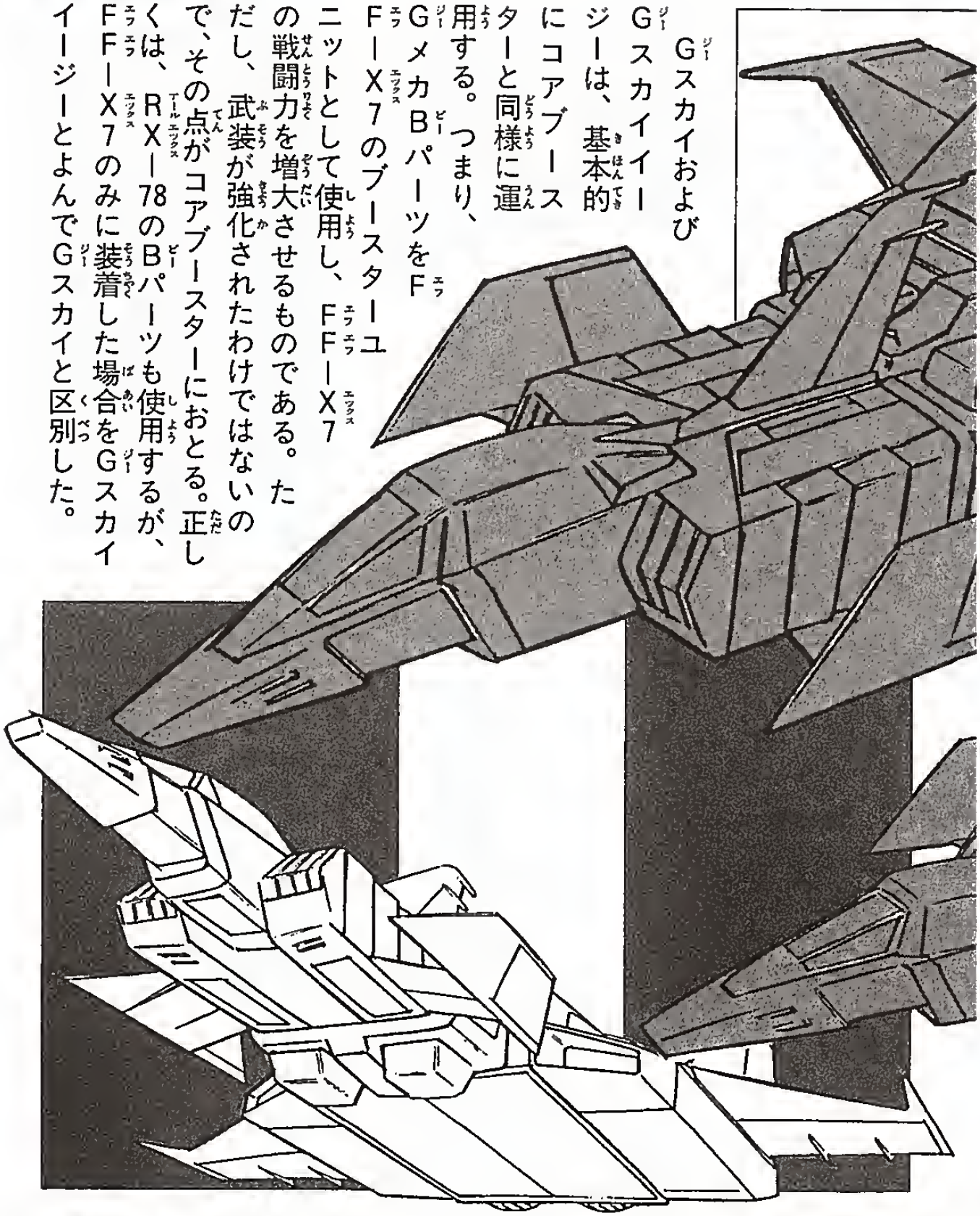
●Gスカイ＝FF－X7＋RX－78Bパーツ（腰・脚部）＋GメカBパーツ



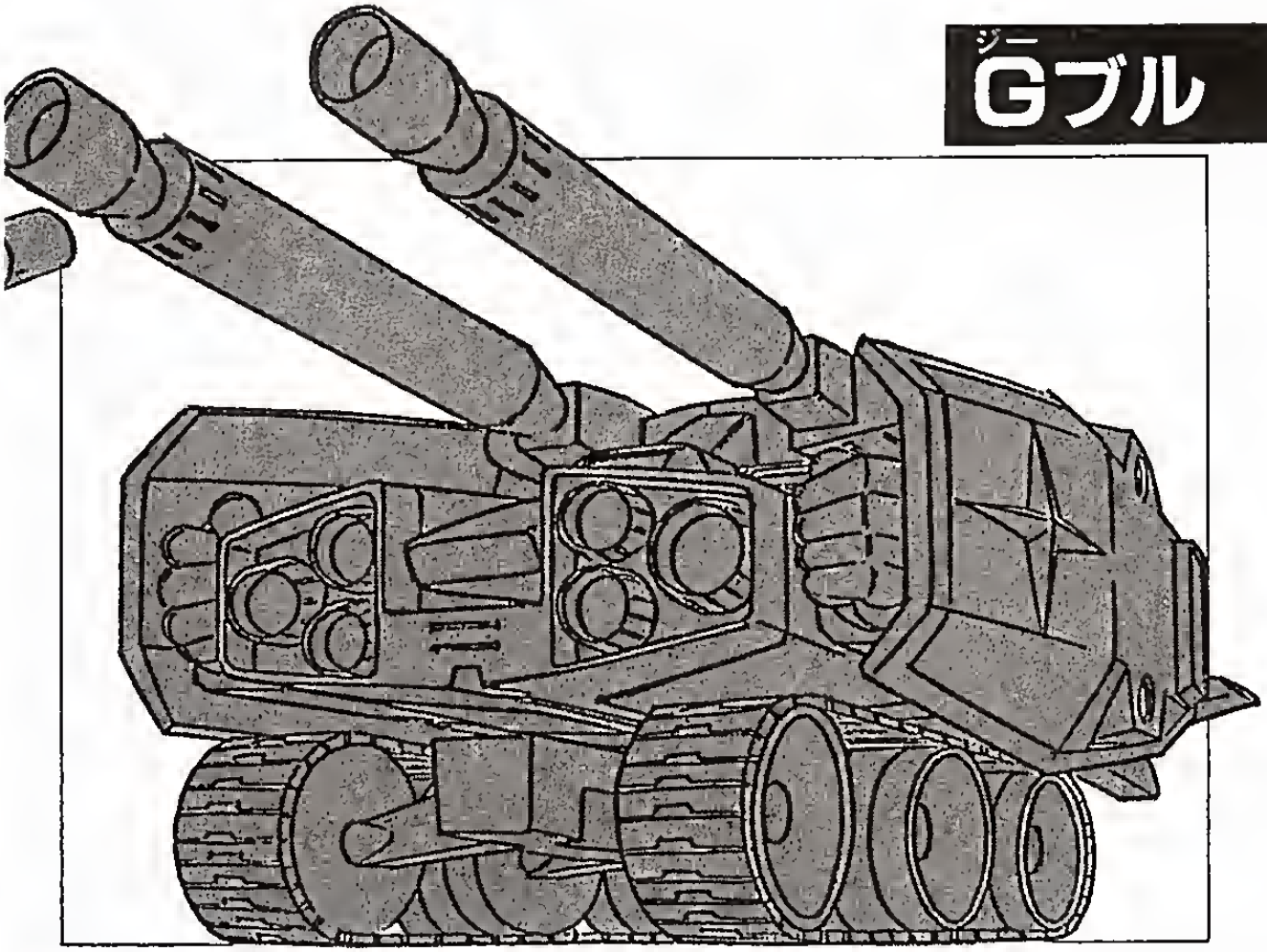
●Gスカイイージー

●GスカイイージーFF－X7＋GメカBパーツ

GスカイおよびGスカイイージーは、基本的にコアブースターと同様に運用する。つまり、GメカBパーツをFF－X7のブースターユニットとして使用し、FF－X7の戦闘力を増大させるものである。ただし、武装が強化されたわけではないので、その点がコアブースターにおとる。正しくは、RX－78のBパーツも使用するが、FF－X7のみに装着した場合をGスカイイージーとよんでGスカイと区別した。

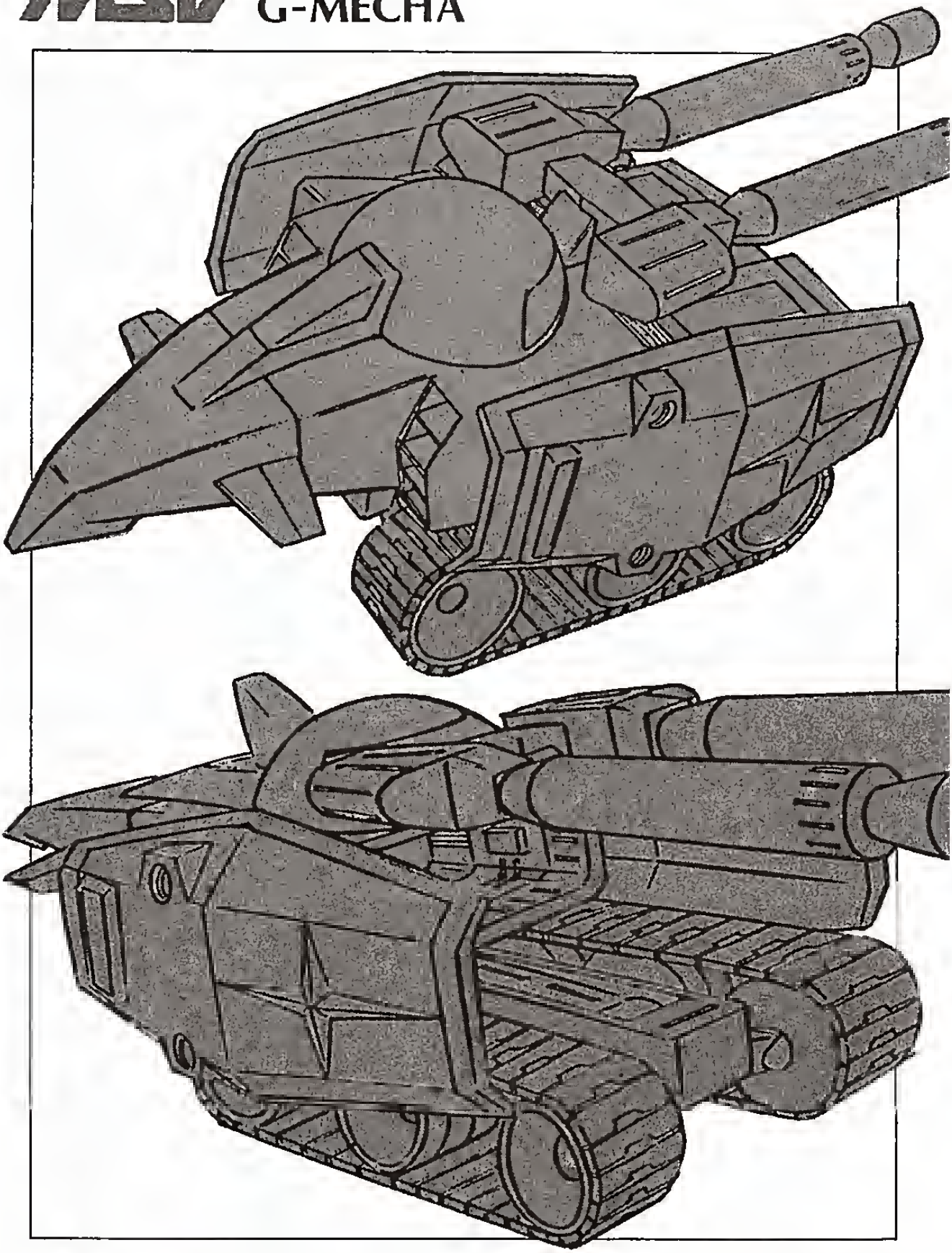


Gブル



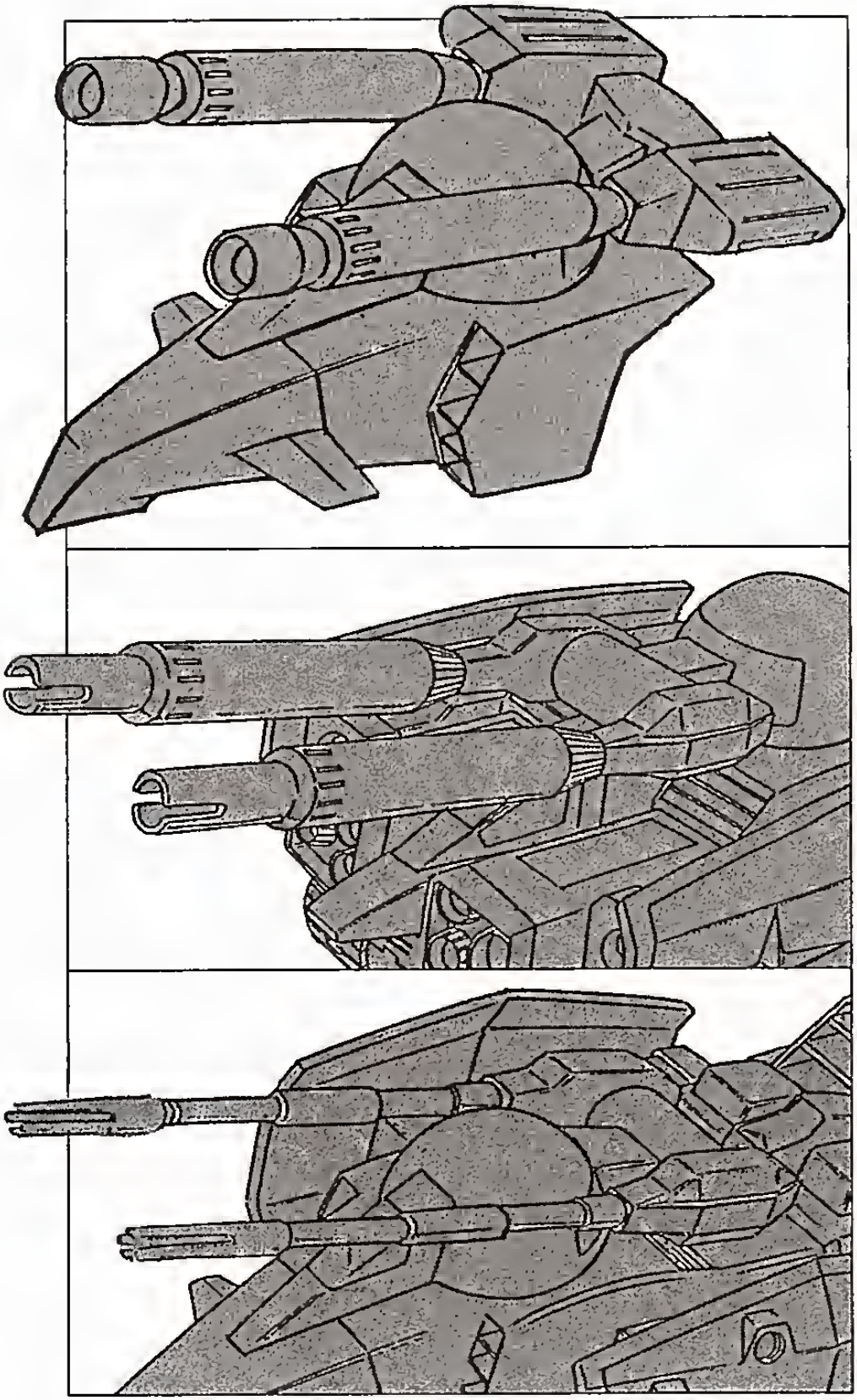
Gブルは陸戦用重戦車で、唯一、RX－78のコクピットからもコントロールできる合体型である。基本的な組みあわせは、Gメカ Aパーツ、RX－78 Aパーツ（頭・胸部）、FF－X7とキャタピラユニットで構成するが、場合によっては、FF－X7なしでも稼働できる。側面の装甲が戦車としては貧弱なので、RX－78用シールドをもちいて側面の補助装甲としていた。この方法は設計プランにはなく、実戦からうまれたもので、Gアーマー時の安定性と飛行特性改善にも役だつものだった。陸戦兵器としてのGブルは、強大なRX－78の反応炉出力を十分に使用でき、二連装大口径ビームキャノンと高い機動力で、無敵の重戦車といえるような怪物だった。ただ、総重量がRTX－44なみだったことで、地形によっては使用できない場合もしばしばあったといわれる。

G-MECHA



Gメカのビームキャノン

Gメカの主要武装であるビームキャノンは、三種類が確認されている。開発途上のキャノンを実験的にとりつけたらしく、射程、出力、ビーム集束度のテストデータはあるのだが、どの時点で、どのタイプの砲が装備されたのかは不明である。



ホワイトベースストーリー

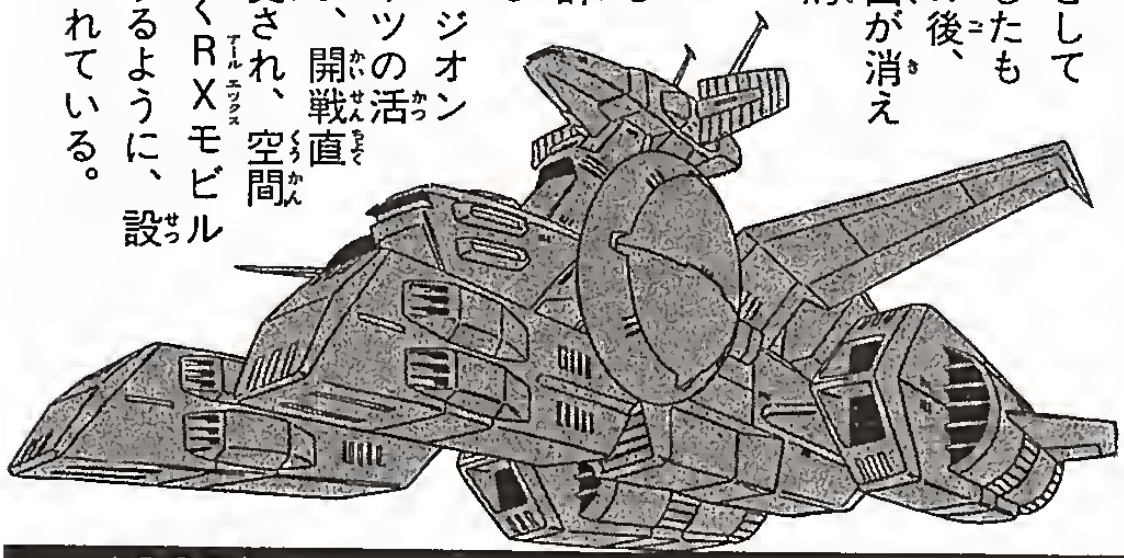
WHITE BASE STORY

SCV－X計画

連邦軍の宇宙艦艇は、大艦巨砲主義へかたむいていた。宇宙空母の必要性を感じながらも、計画すらたてられなかったが、増大するジオン公国の軍事力をみて、連邦軍は、やっと重い腰をあげた。このとき発足したのが、SCV－X計画である。

ホワイトベース誕生

連邦軍が最初に検討したのは、FF－S3を艦載機とする開放型の母艦であったが、これは、当時としては、常軌を逸したものだった。その後、いくつかの計画が消えていき、最終的に、現在ホワイトベース級として知られるSCV－27A計画が実行されることとなった。ジオン軍のモビルスーツの活躍をみたためか、開戦直後に計画が変更され、空間戦闘機ではなくRXモビルスーツを搭載するように、設計が手なおしされている。



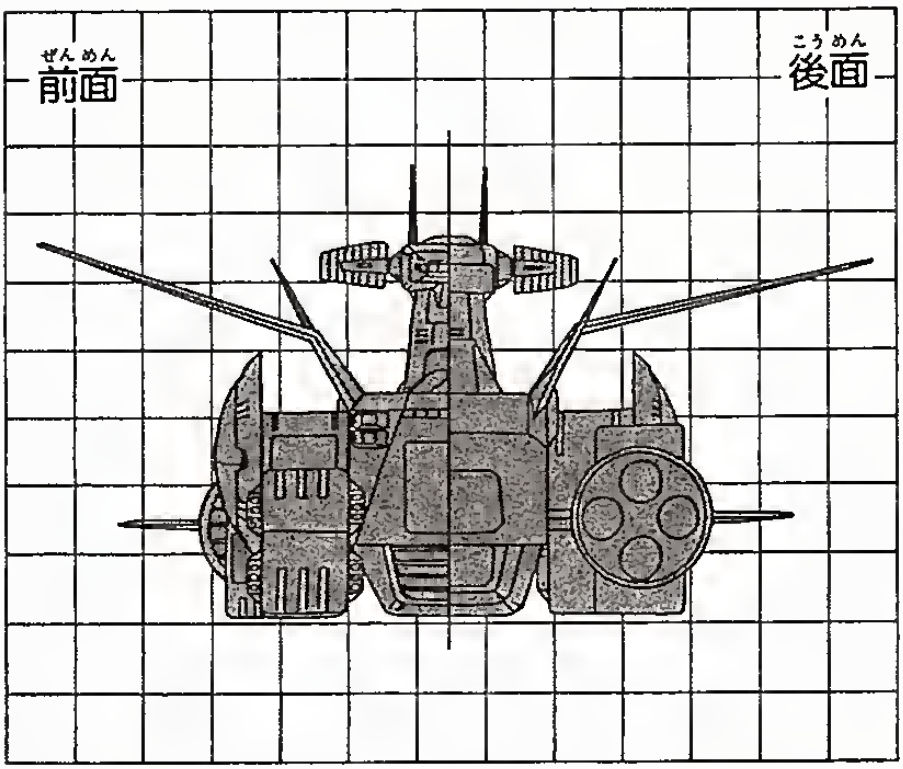
構造と艦内配置

ホワイトベース級宇宙空母は、高度に進歩したブロック工法により建造され、基本的に七個のブロックにわかれる。艦内は、前部中央格納庫、ブリッジおよび居住区、それに機械室と後部着艦ポートの各ブロックがあり、前方左右に二基のメーンハンガー、後方左右にはメーンエンジンがセットされている。これが基本形で、後期の艦には、一見すると別タイプのようにみえるシリーズ艦も建造されている。

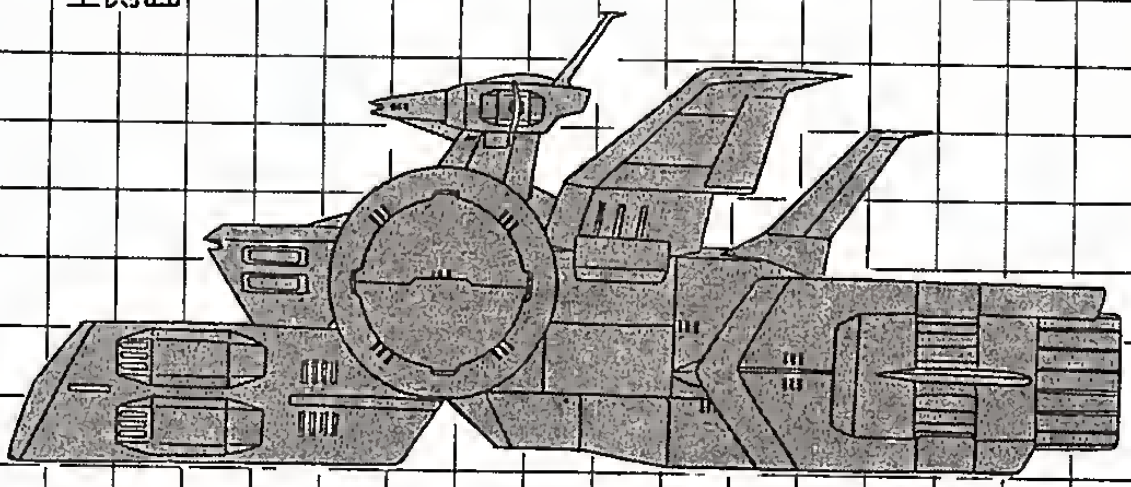
艦内の特色は、居住区エリアがそれまでの艦の二倍になり、人工重力エリアがつくられたことと、艦尾から艦首にぬける全通デッキがつくられたことである。これは、二十世紀後半の水上空母にみられたような運用面と居住性のよさを確保するものであった。その特異なスタイルから、ジオン軍はこのクラスの艦を〝木馬〟とよんでいた。

データ

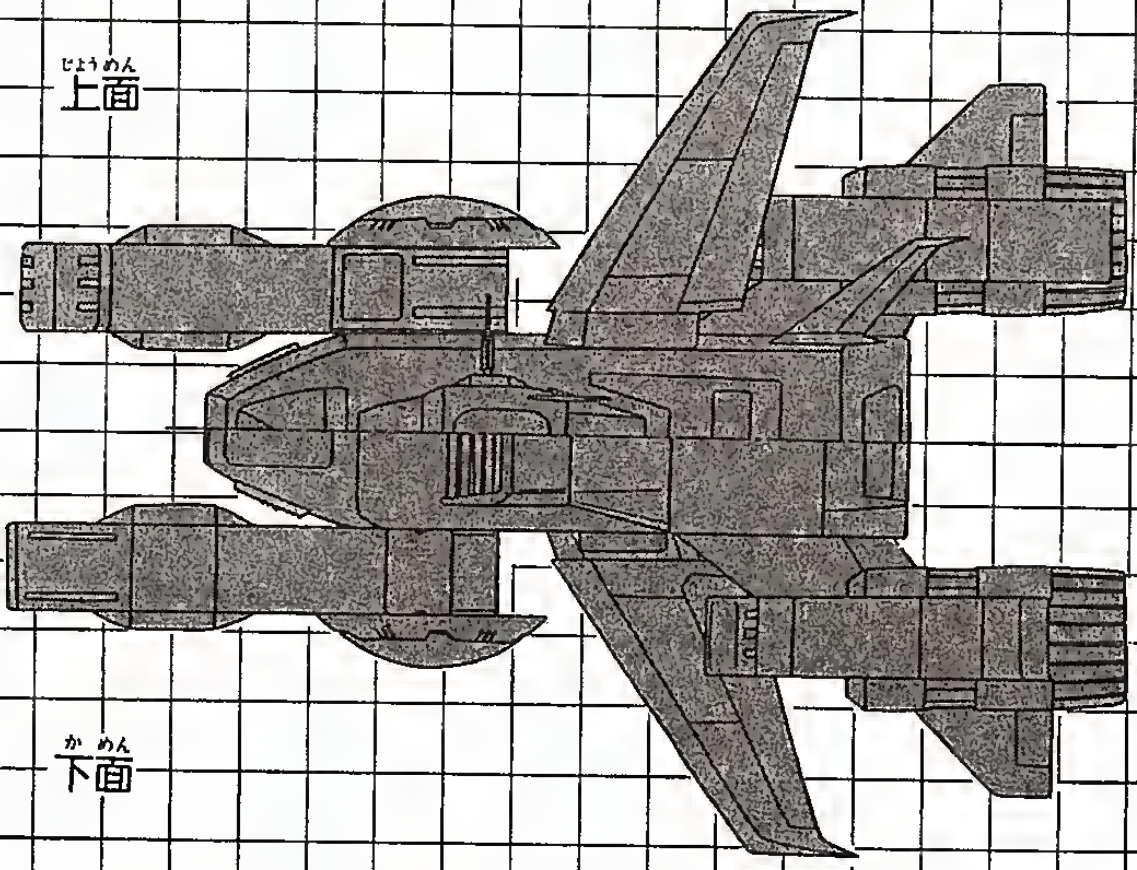
全長／二百五十メートル　全幅／百九十メートル　基準重量／六万八千トン　乗員数（正規）／百二十五名



左側面



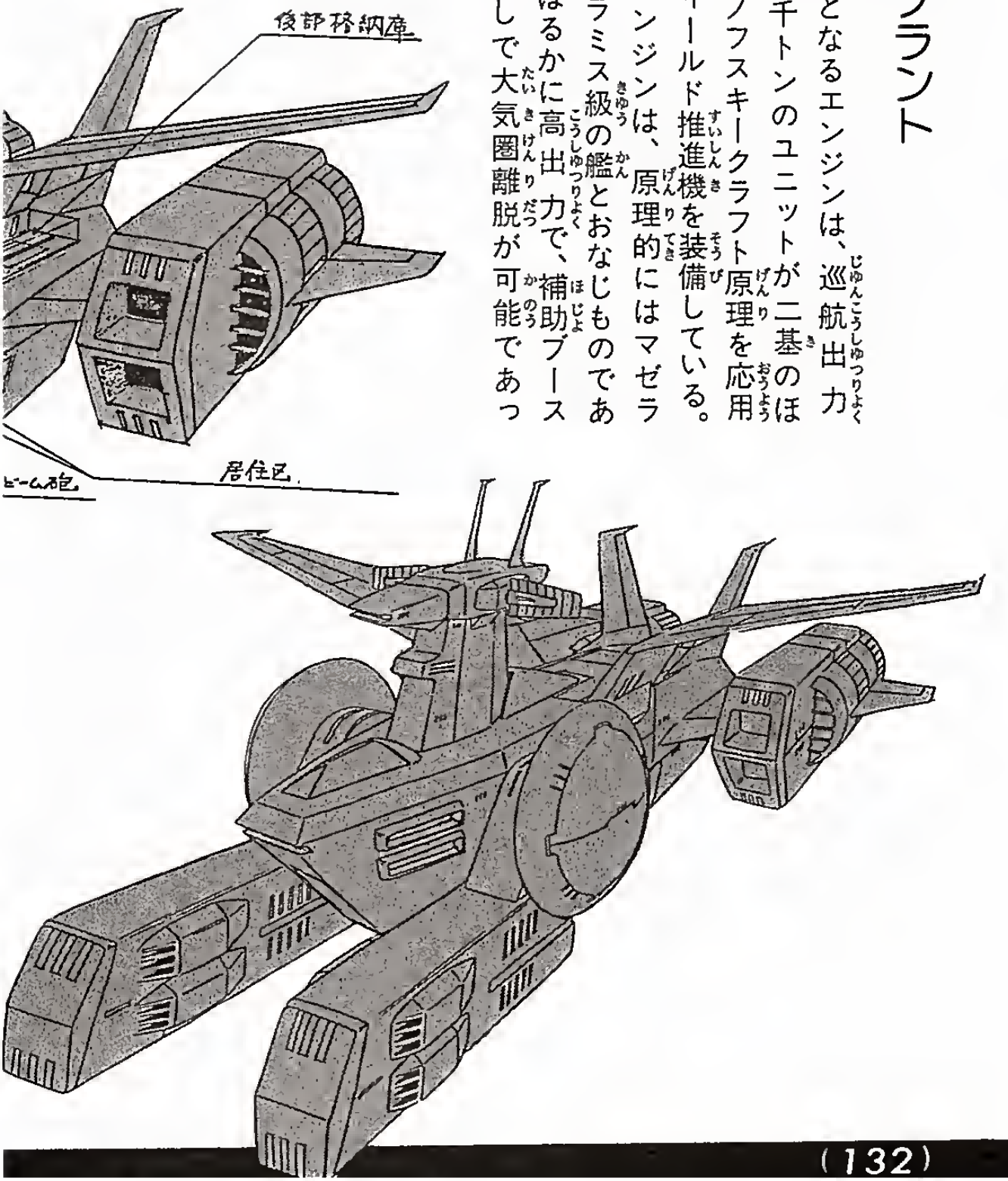
上面

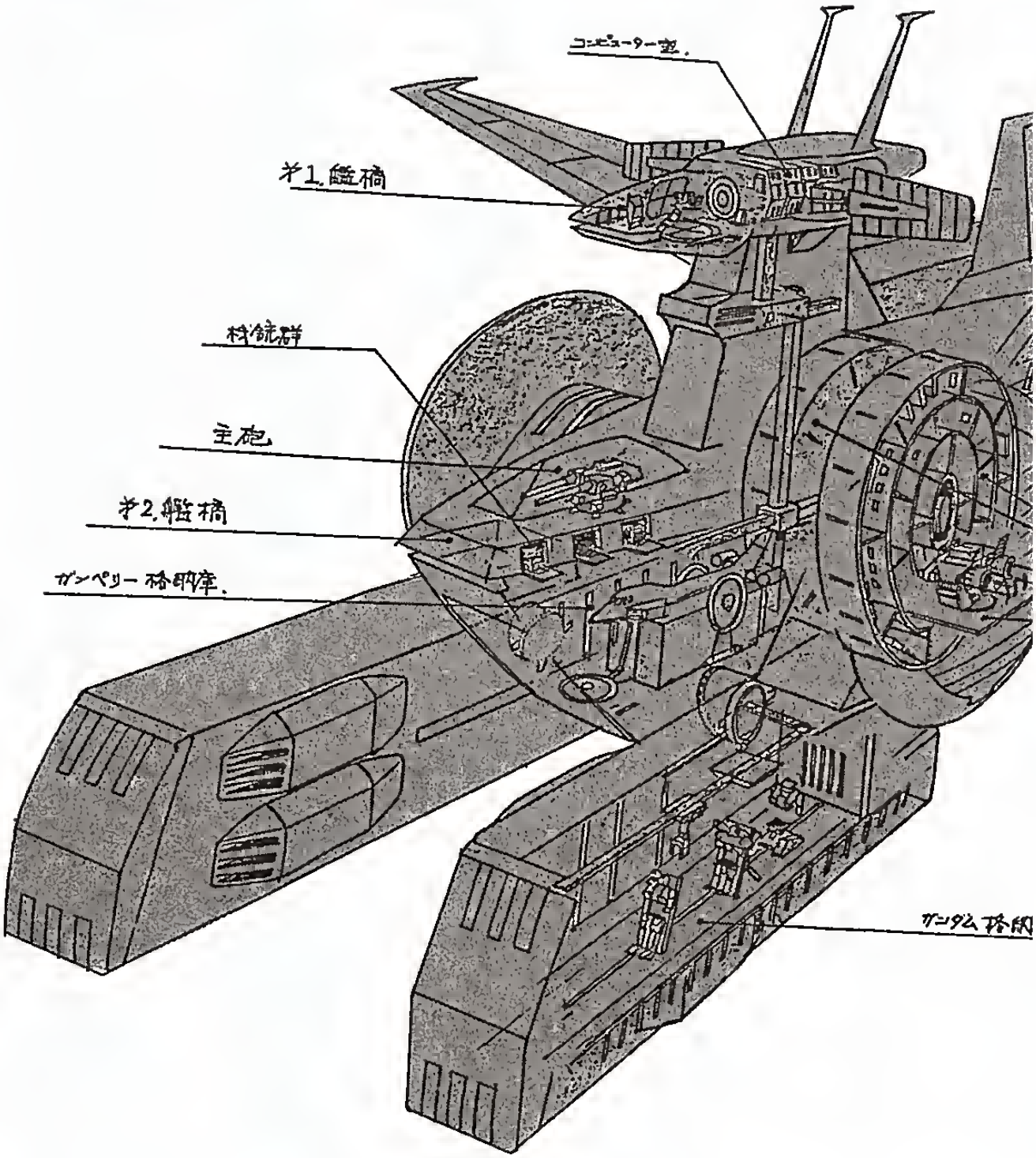


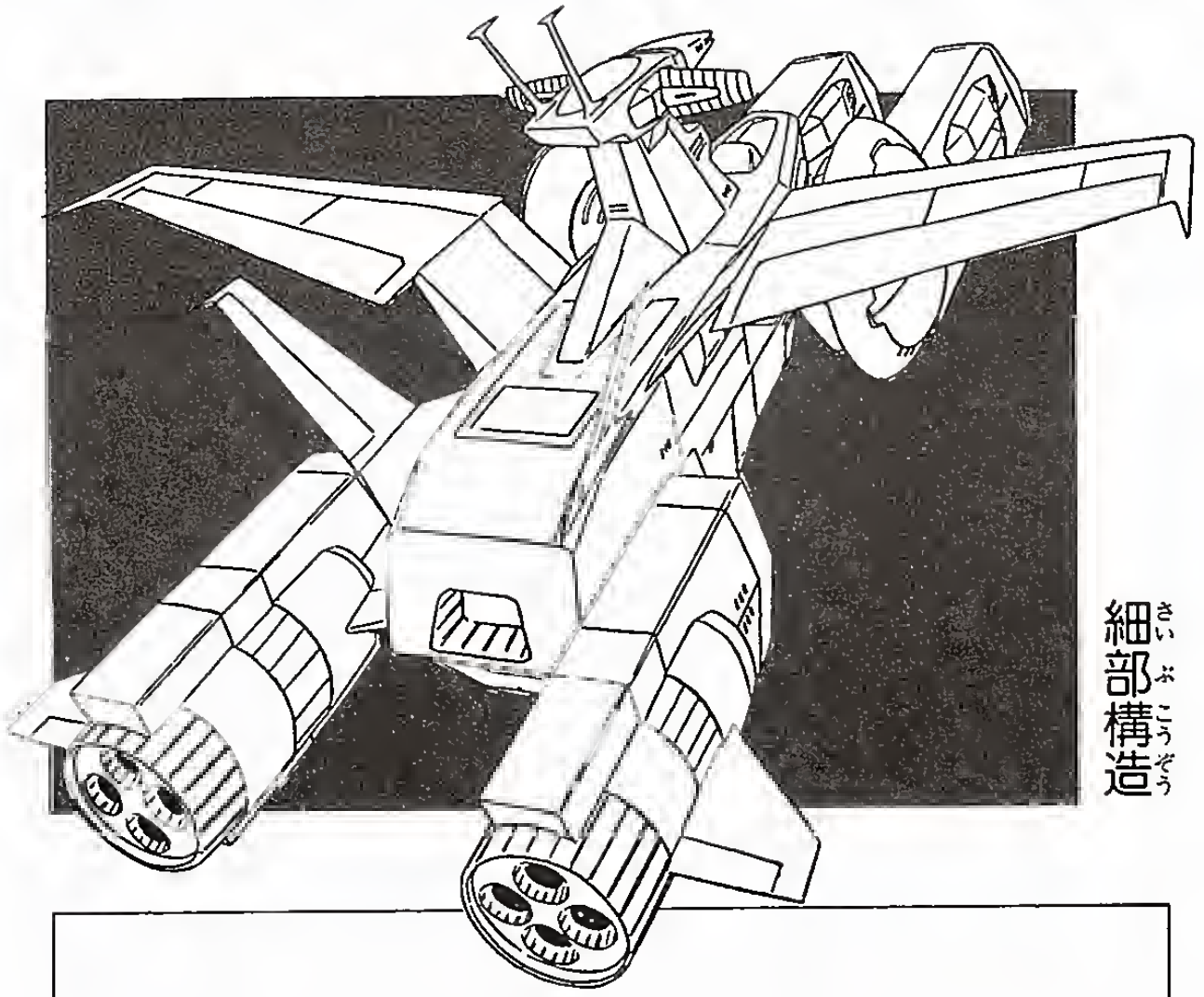
下面

推進プラント

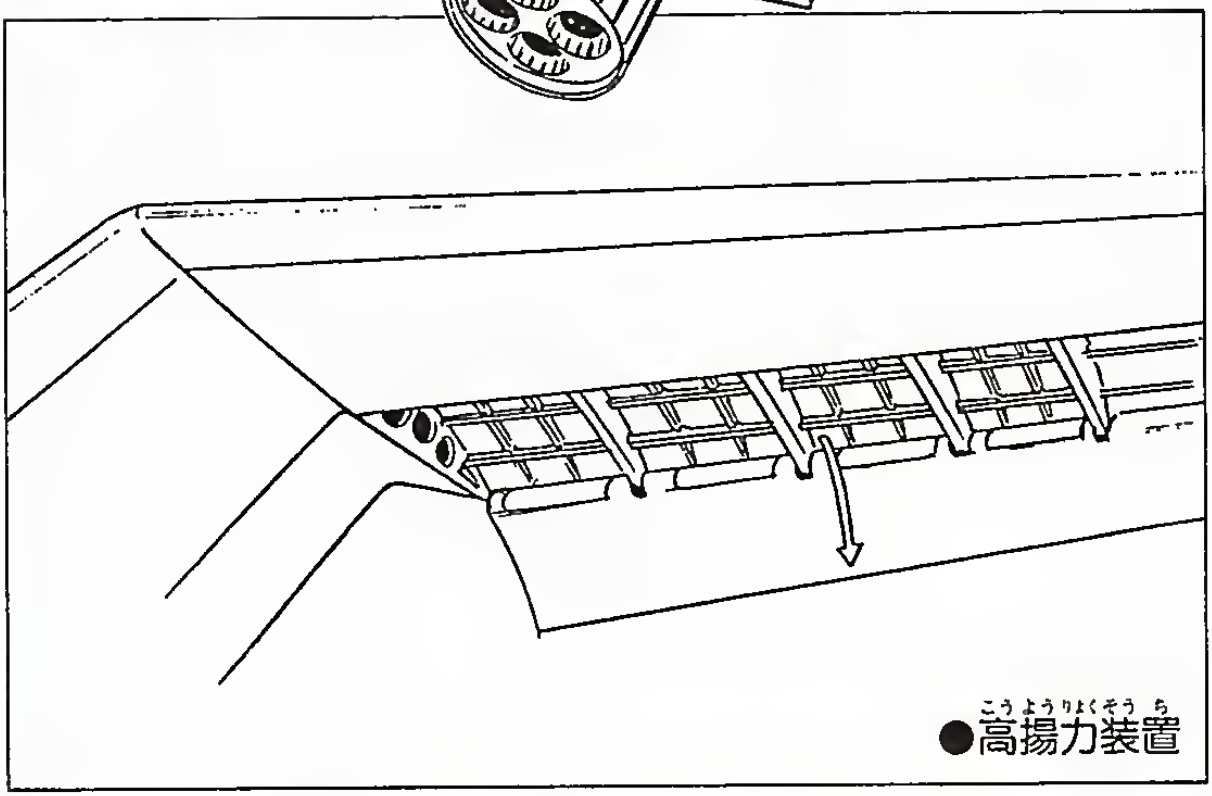
基本となるエンジンは、巡航出力三万二千トンのユニットが二基のほか、ミノフスキークラフト原理を応用したフィールド推進機を装備している。通常エンジンは、原理的にはマゼラン、サラミス級の艦とおなじものであるが、はるかに高出力で、補助ブースターなしで大気圏離脱が可能であった。



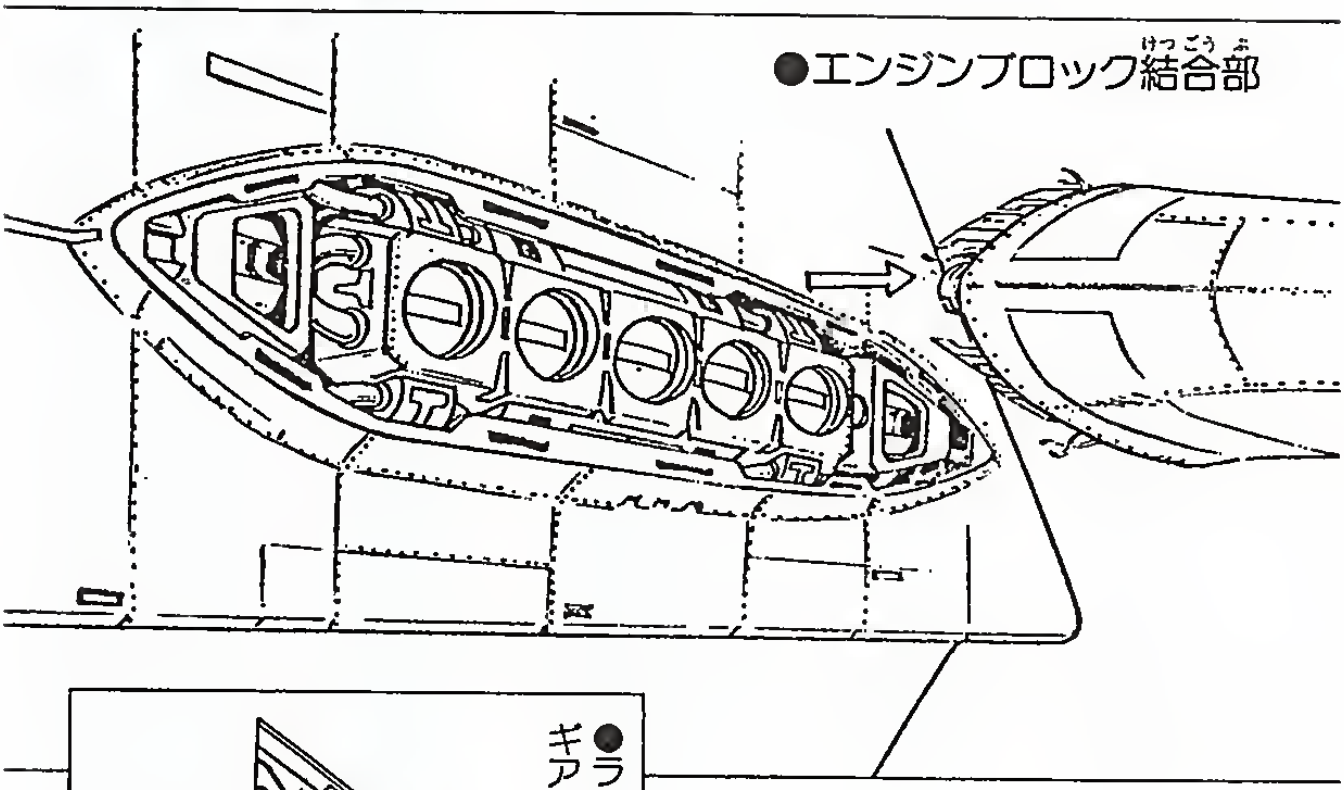

コンピューター室
#1.艦橋
射撃群
主砲
#2.艦橋
ガンペリー格納庫
ガンダム格納

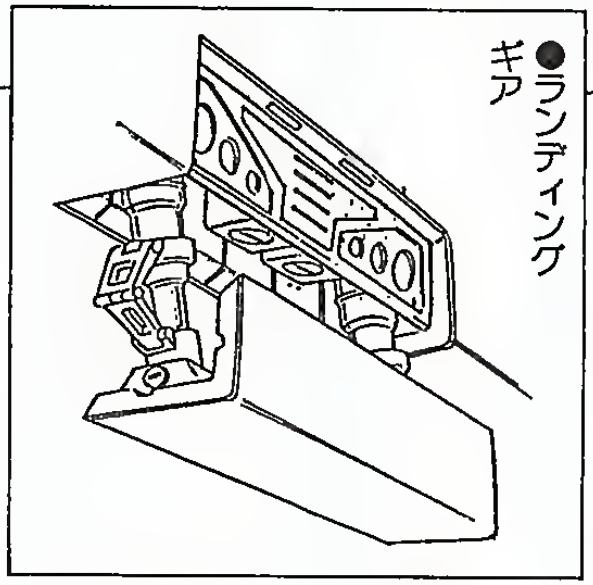


細部構造



●高揚力装置





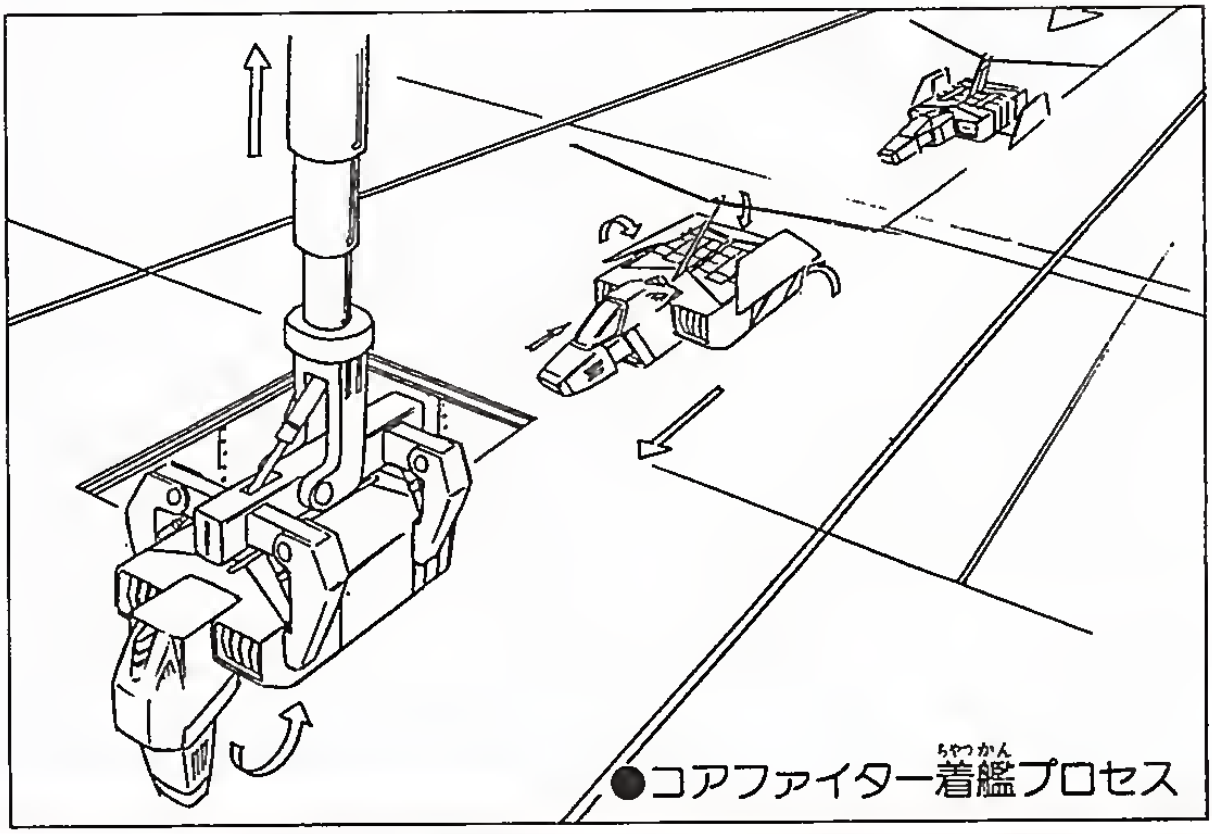
V作戦とホワイトベース

ホワイトベース級宇宙攻撃空母は、設計がRXモビルスーツ搭載艦に変更されたことで、V作戦の一翼をになうこととなった。V作戦は、連邦軍の以後の反攻を左右する重大なもので、ホワイトベースは連邦軍宇宙艦隊の中核として、RXモビルスーツの運用にあたる予定であった。そのため、艦の建造から就役まで、RXモビルスーツとおなじAAA（最高軍事機密）ランクのあつかいをうけていた。が、皮肉なことに、同クラスの一番艦ホワイトベースは、ふとしたことから、正規の軍人以外の人々の手によってうごかされることとなった。

RXモビルスーツ運用システム

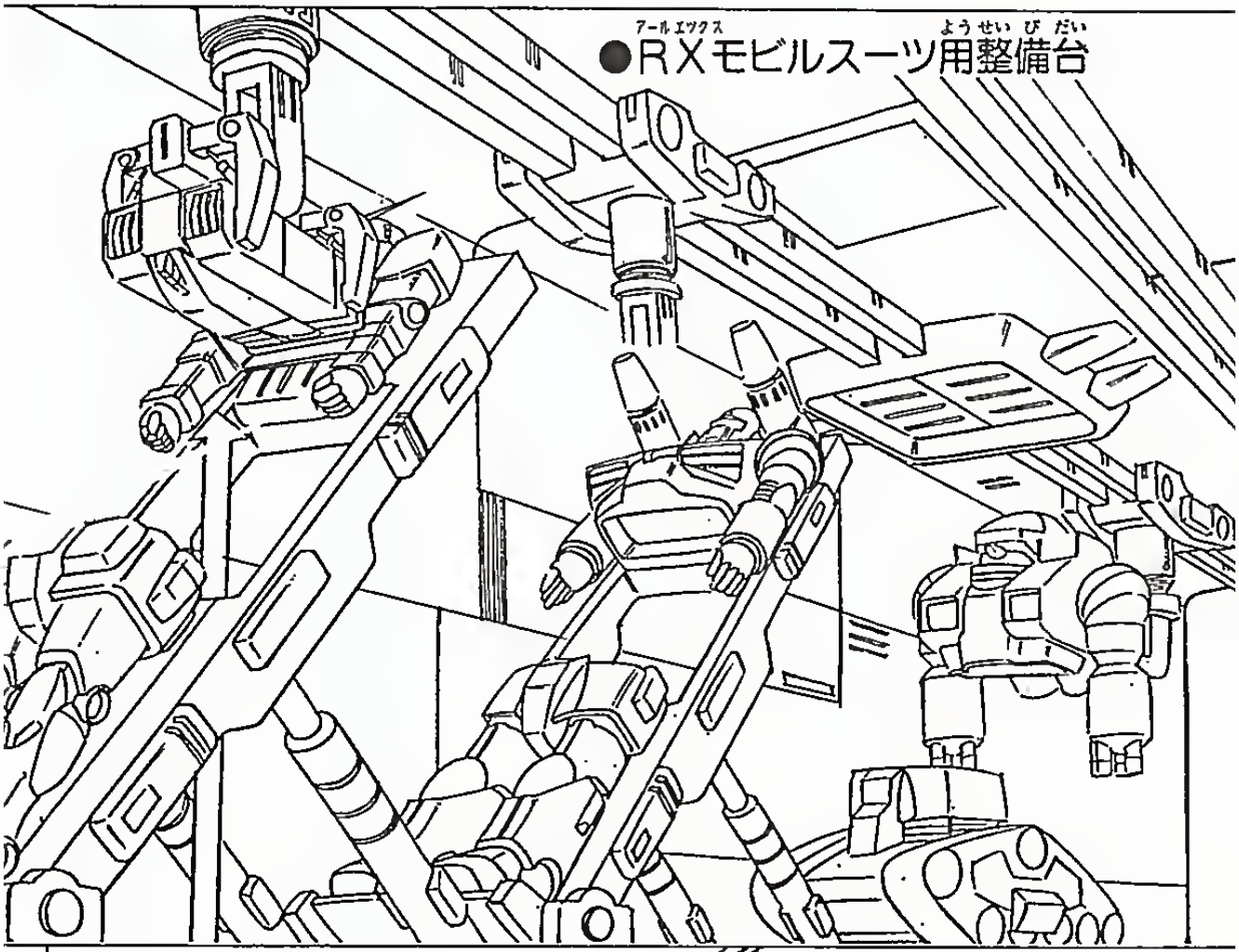
RXモビルスーツの運用システムを知るには、その中核であるFF－X7コアファイターの運用方法を知らなくてはならない。これは、水上空母での航空機運用システムとかたちこそにているが、真空無重力状態ではまったく別物といっていい。運用システムは、FF－X7の着艦システム、RXモビルスーツ換装システムと発艦システムなどの四つのサブシステムと、全体制御用のコンピューターとで構成されている。

着艦システムは、通常、母艦との相対速度をゼロにして着艦するが、FF－X7用のものは艦底にあるアレスティングギア（着艦制動装置）で減速し、収容アームで艦内にとりこむようになっている。

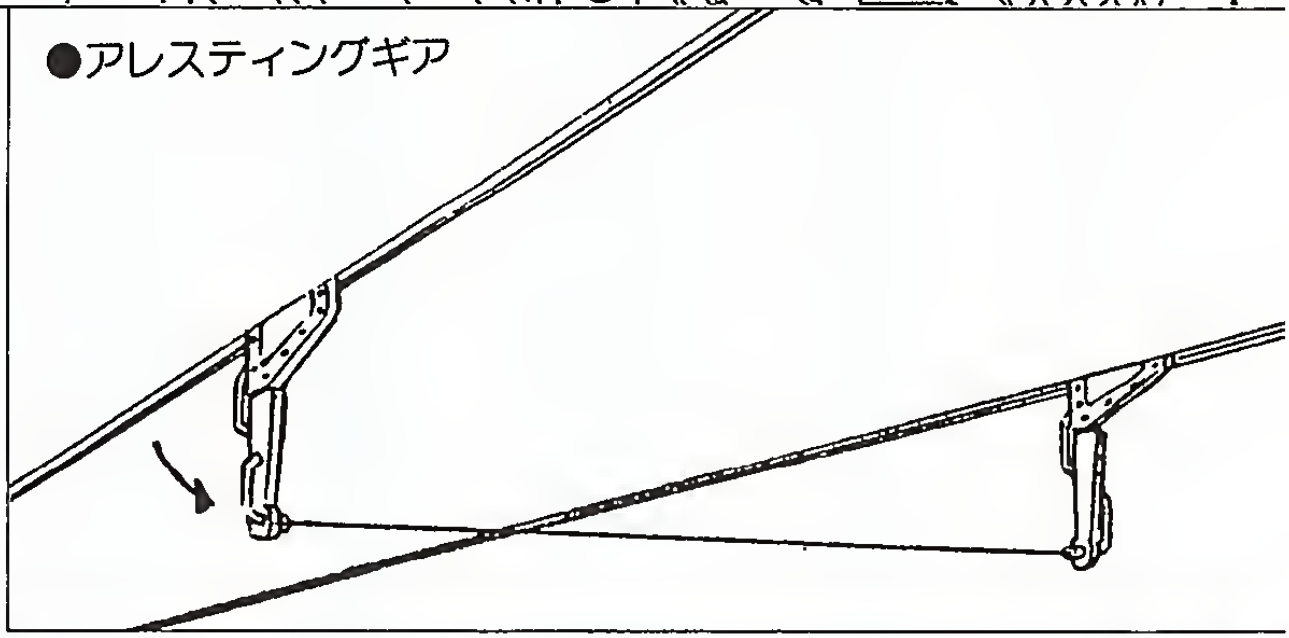


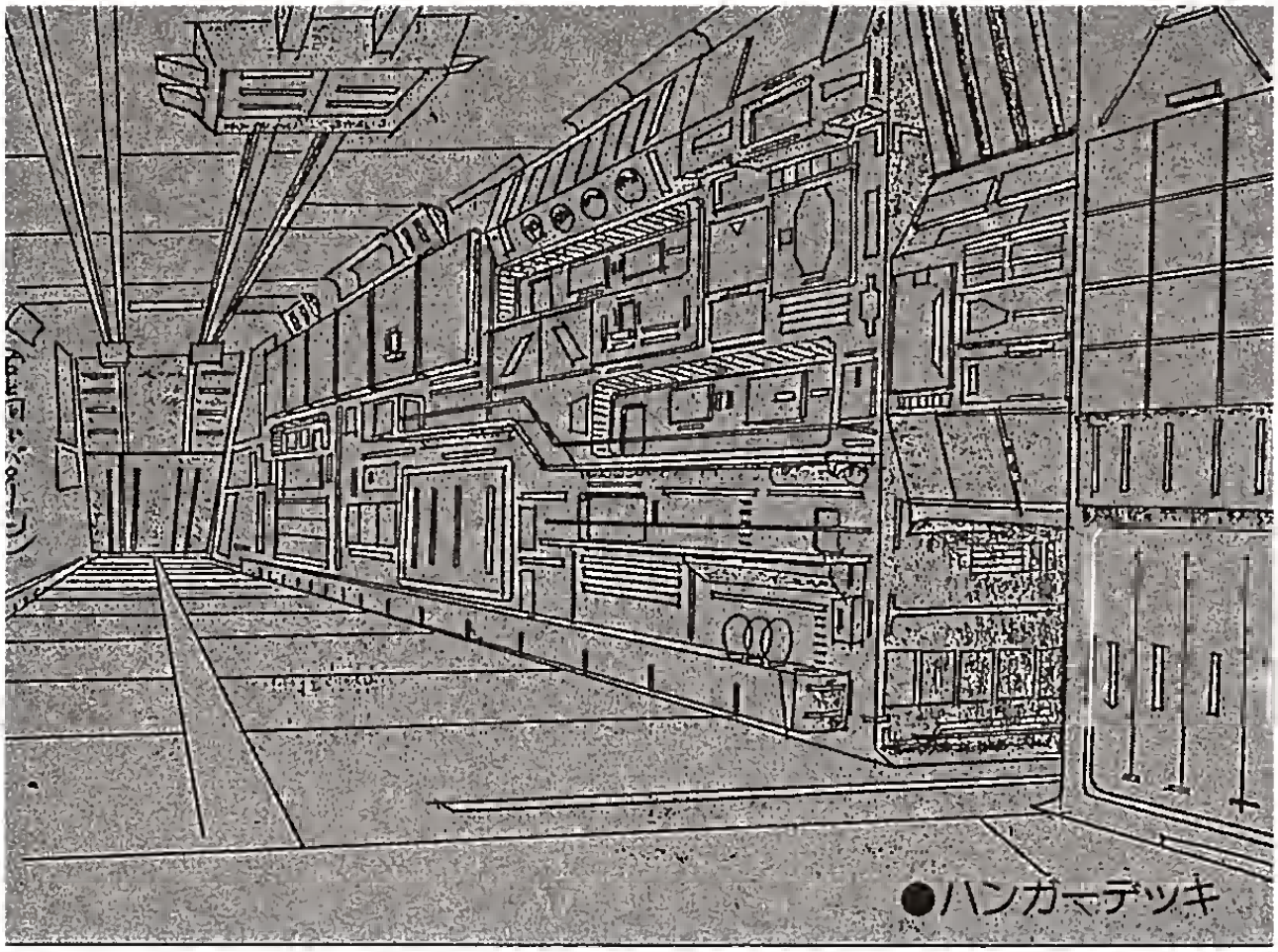
●コアファイター着艦プロセス

●RXモビルスーツ用整備台



●アレスティングギア



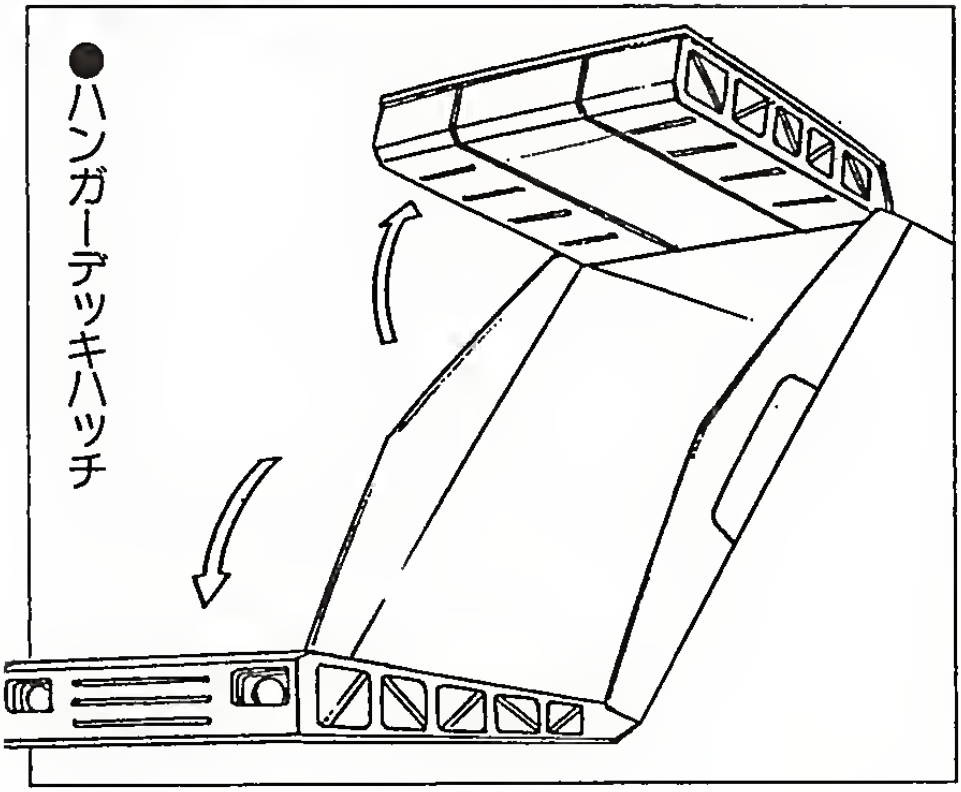


●ハンガーデッキ

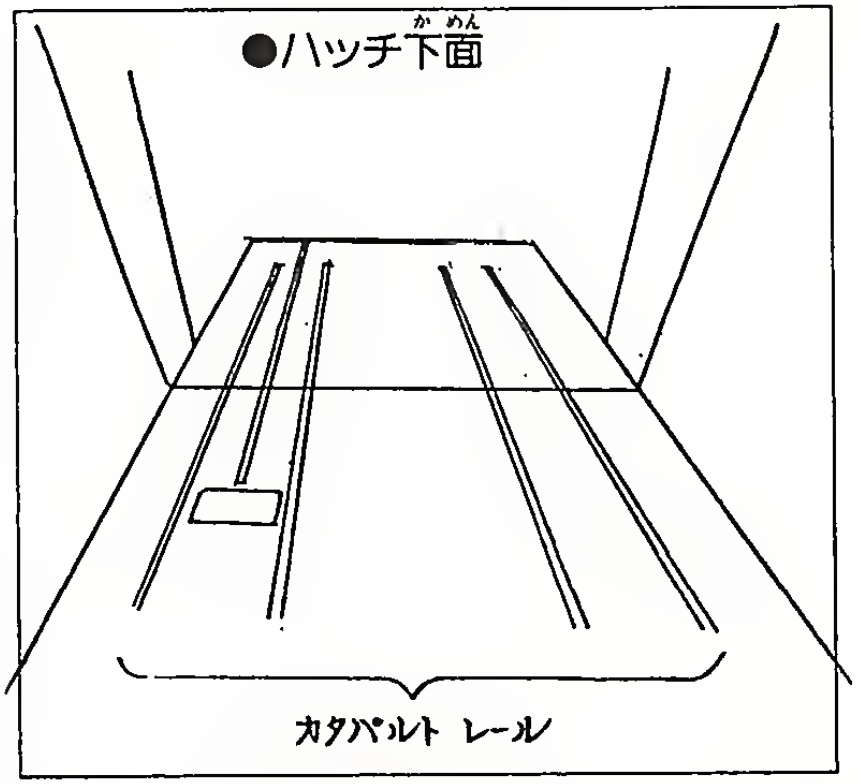
艦内に収容されたFF－X7は、全通デッキをとおり、艦の前方左右にあるハンガーデッキにはいる。移動には収容アームがそのまま使用され、RXモビルスーツへ換装する機は、アームに懸架されたままコアブロックへと変形することができる。

ハンガーデッキ後方には、RXモビルスーツ用整備台があり、RXモビルスーツの整備のほか、コアブロックとの合体もできる。通常、この整備台にRXモビルスーツをおくのは、コアブロックを分離したときか、分解整備をするときである。

整備台の前方、すなわちハンガーデッキ中央部は、パーキングエリアとアーミングエリアとして使用される。通常整備や武装はこのエリアで終了させ、発艦準備がととのった機からハンガーデッキ前方の発艦エリアにむかい、カタパルトで艦外に射出される。パーキングエリアから発艦までは、他の艦載機もおなじプロセスをたどる。



ハンガーデッキの扉は上下分割式で、必要に応じてデッキ内部を与圧空間とすることができる。デッキ内には真空ポンプがないので、ハッチ開放時に大気が放出される。

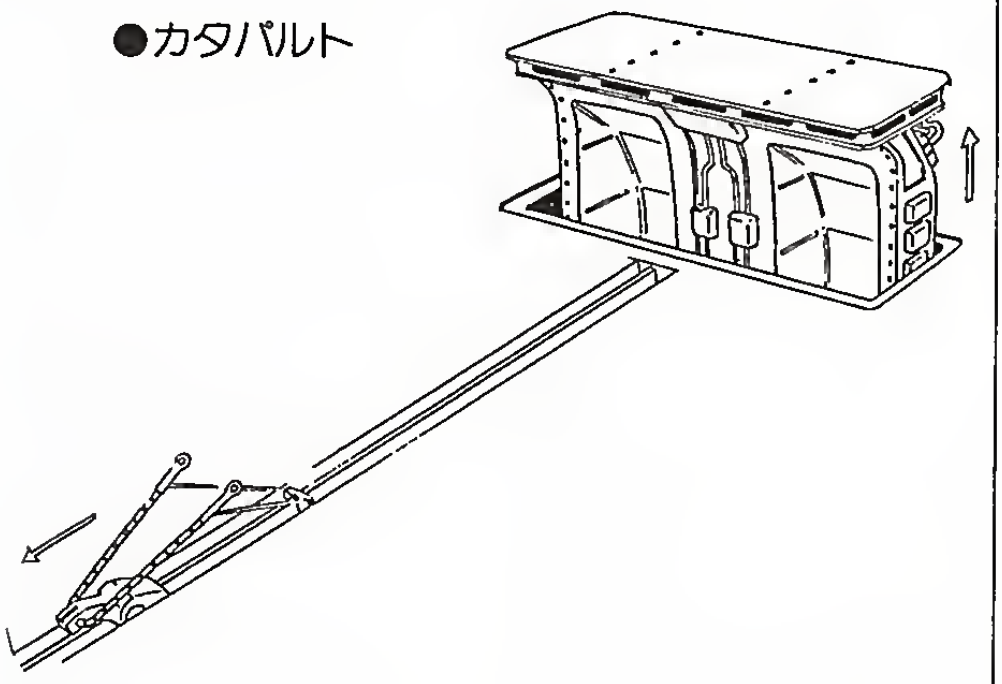


ハッチ下面は、カタパルトレールとブライドルキャッチャーがある。ハンガーデッキの容積にかぎりがあり、長大なスペースを必要とするカタパルトを装備するには、この方法がいちばんよい設計であるといえる。

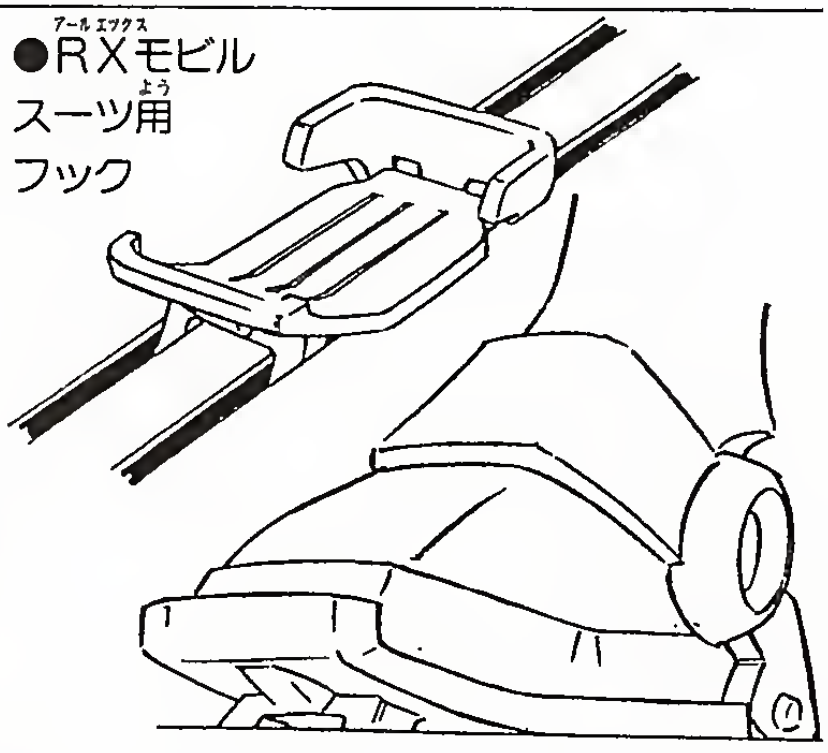
カタパルトシステム

カタパルトは、発艦時の燃料節約のため装備されたもので、リニアモーターで作動する。加速用シャトルには、艦載機用ブライドルと、RXモビルスーツ用フックの二つがセットできるようになっている。カタパルトは一艦あたり四本あり、RXモビルスーツ用は二本である。カタパルト後方には、ブラストディフラクターがある。

●カタパルト



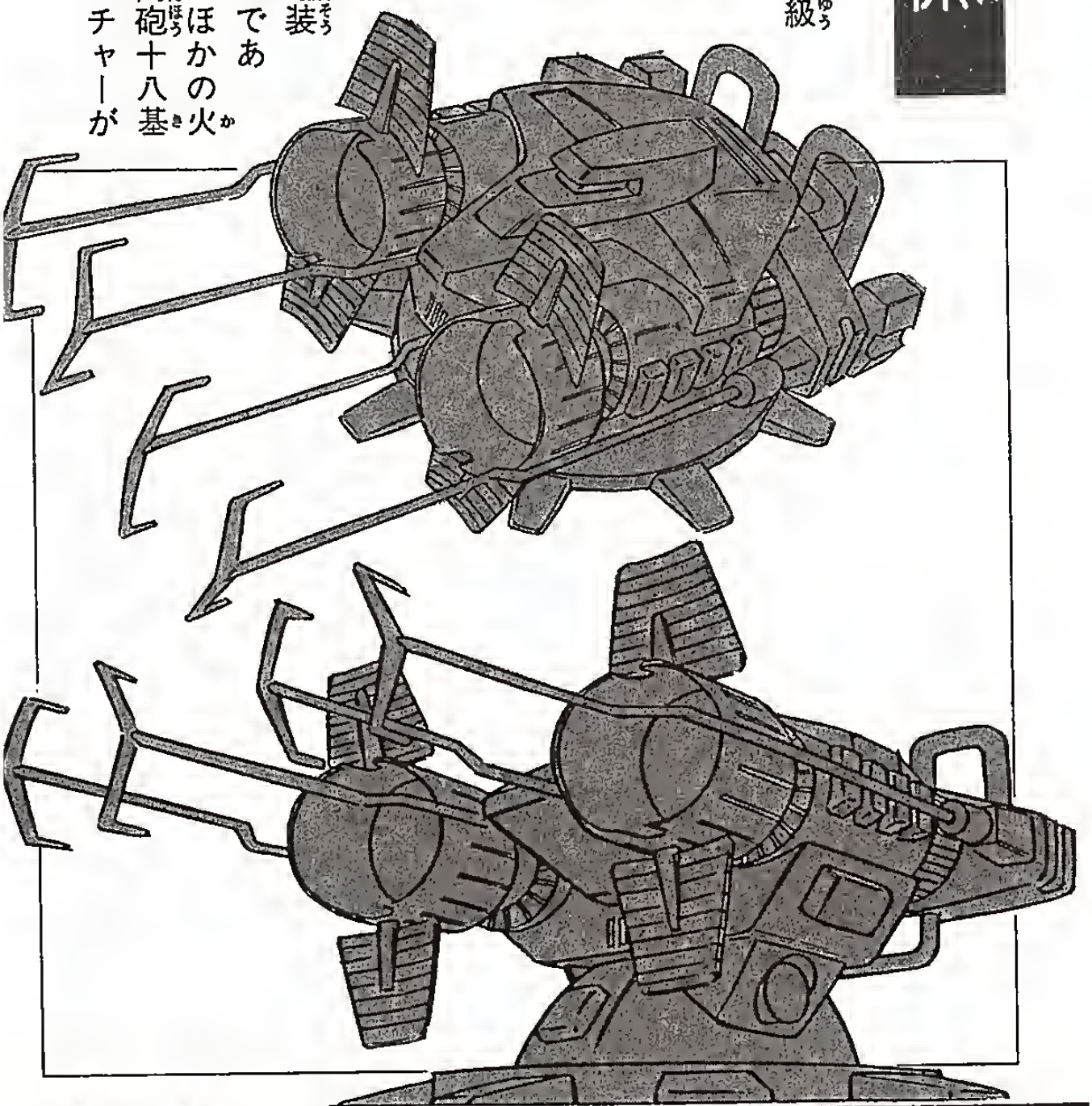
●RXモビルスーツ用フック



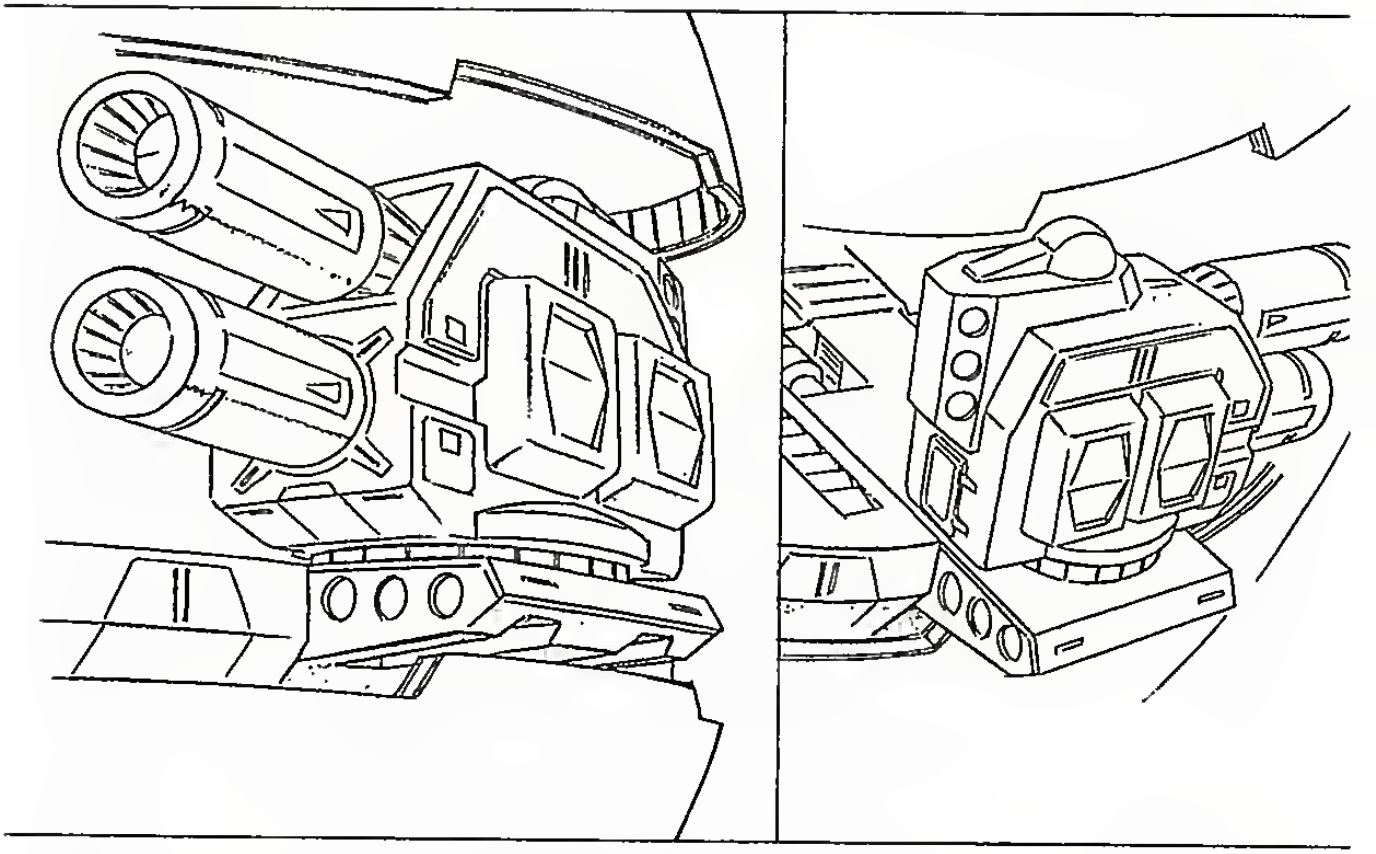
武装関係

ホワイトベース級は、艦の形状により、搭載武器がかなり制限されており、その多くは射程の短い近接防衛兵器である。

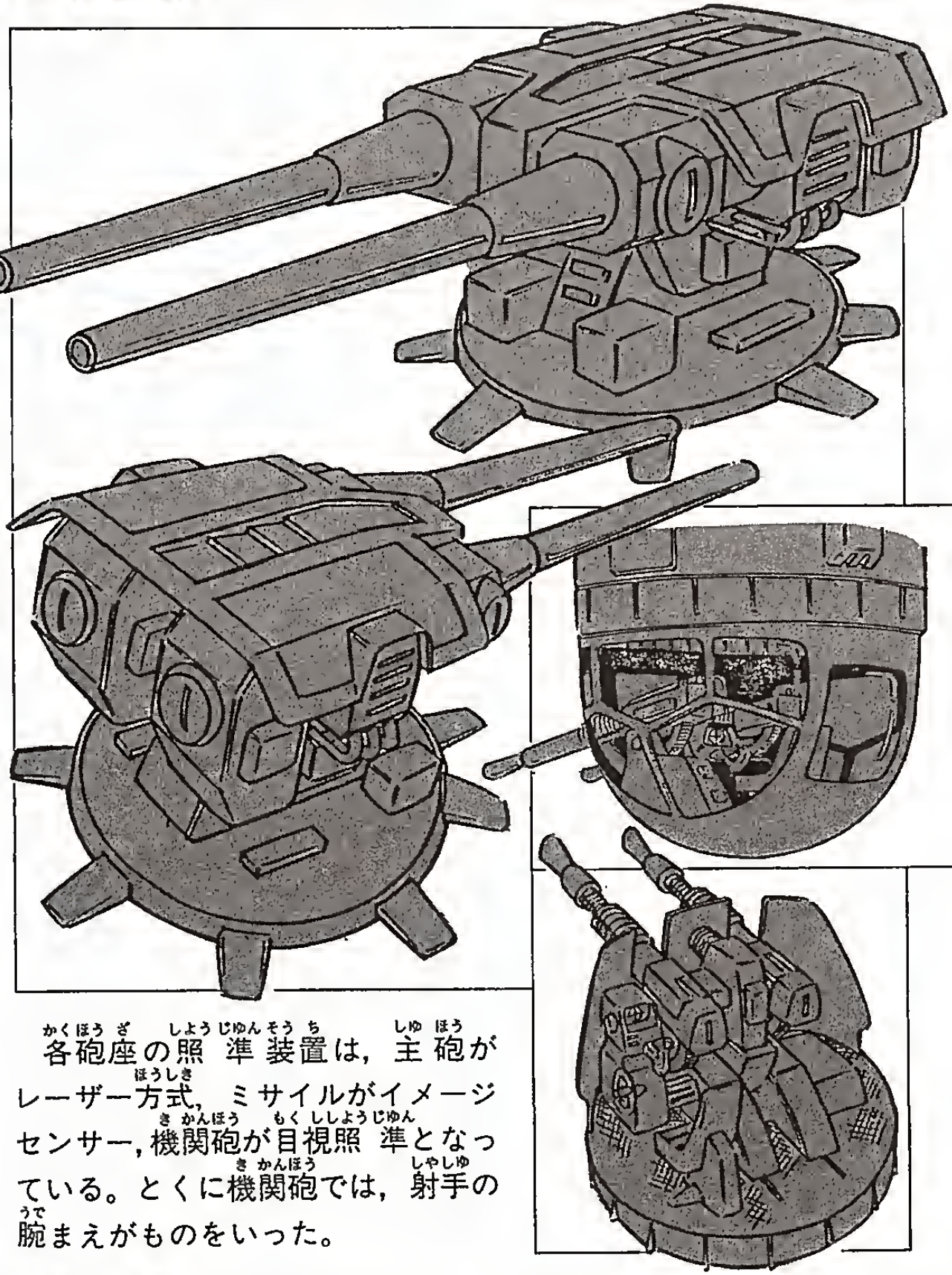
おもな武装は、主砲として五十二センチ火薬式連装砲一基と、連装メガ粒子砲が二基である。副砲はなく、ほかの火器類は、連装機関砲十八基と、ミサイルランチャーが三十二基ある。



メガ粒子砲



同級一番艦で、ネームシップのホワイトベースは、二種類のメガ粒子砲を搭載したといわれる。一つは短砲身で射線センサーつきで左右連装のもの、他方は長砲身で上下連装のものである。どの時期に換装したかはさだかではないが、オデッサ作戦では前者を、サイド6に入港したときは後者を装備していたといわれる。一般には、ジャブローでの特定修理（艦艇のオーバーホール）のさいに換装されたものだと考えられている。一方、火薬式主砲は史上最大の五十二センチという口径をもち、弾頭重量二トン、有効射程七十キロ（地上）におよんだ。これだけの巨大砲は通常の艦艇では搭載不能であり、不必要でもあるが、ジオン軍が対ビーム兵器防衛方法を完成させた場合を考え、ミサイルより威力のある兵器として搭載されたものである。ただ、反動が大きすぎるので、射撃時は、他の火器の使用を制限しなければならなかった。



各砲座の照準装置は，主砲がレーザー方式，ミサイルがイメージセンサー，機関砲が目視照準となっている。とくに機関砲では，射手の腕まえがものをいった。

戦歴

ホワイトベース級宇宙攻撃空母一番艦ホワイトベース（SCV―70）は、宇宙世紀七七年度戦力整備計画において建造が承認され、七八年二月にジャブローAブロック一号ドックで建造が開始された。同時に、二番艦、三番艦が四号、五号ドックで起工されている。一番艦は、翌年の七九年九月一日に竣工した。テストをかねてルナツーへ出航、そのかえりに、サイド7で実用テストの終了したRXモビルスーツを受領し、ジャブローに帰港する予定であった。しかし、サイド7に入港するところをジオン軍の〝赤い彗星〟ことシャア少佐（当時）に発見され、やむなく戦闘となった。このとき、正規の乗員の大半が戦死し、士官候補生と民間人が応戦した。以後、このメンバーにより、同艦は運用されることとなる。

地球に降下したホワイトベースは、地球攻撃軍の攻撃をうけるが、これに反撃、敵の指揮官ガルマ大佐を死にいたらしめた。このののち、Gメカを受領し、オデッサ作戦に参加し、〝黒い三連星〟を撃破するという武運にめぐまれた。同年十一月三日にジャブローに帰港、一か月半をかけて整備がおこなわれた。この間に、乗員はジャブロー攻防戦に参加している。

このあと、第十三独立戦隊として宇宙反攻作戦に転じ、チェンバロ作戦（ソロモン攻略戦）、星一号作戦（アルバオア＝クー攻略戦）に参加している。だが、アルバオア＝クー攻略戦では要塞に接近しすぎ、モビルスーツの攻撃をうけて沈没した。

同型艦

ホワイトベースの同型艦は三隻、準同型艦も三隻（うち一隻は未完成）が建造されている。

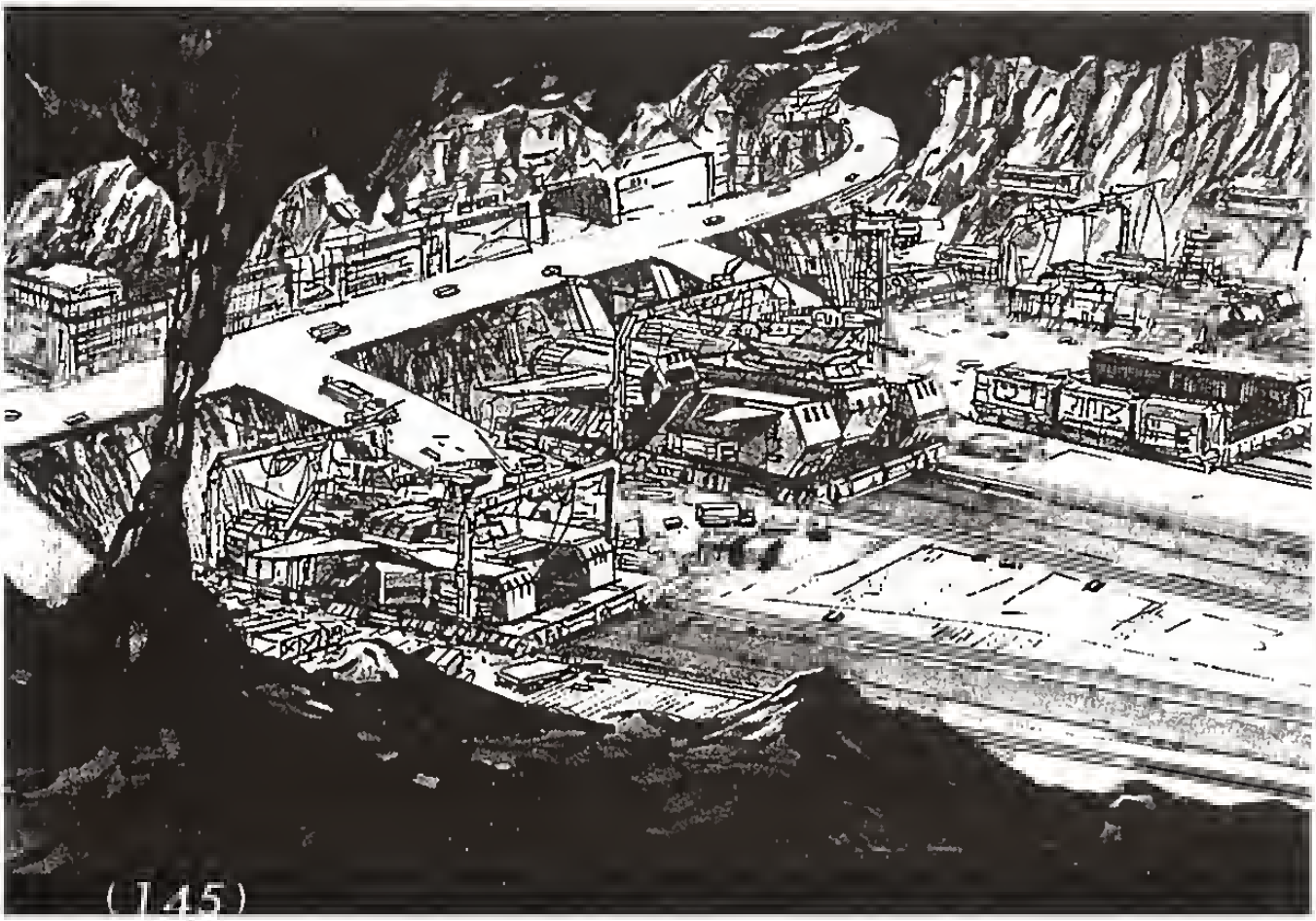
●モビルスーツバリエーション

MSV WB—STORY

ホワイトベース級二番艦（SCV—69）はペガサスと命名され、終戦直前にルナツー艦隊に配属された。戦果はない。同艦は、本来、同級の一番艦になるはずだったが、建造がおくれ、二番艦となった。三番艦ホワイトベースJr.（SCV—71）は終戦直前に竣工、一番艦とおなじ乗員により、ホワイトベース二世として就役している。

準同型艦は、ハンガーデッキを大型化し、エンジンユニットを艦尾に集中させたタイプである。準ホワイトベース級とよばれ、一番艦サラブレッド（SCVA—72）と二番艦トロイホース（SCVA—73）の両艦は、ともに工期を大幅に短縮して就役した。星一号作戦で、物資輸送などに従事したが、実戦参加記録はない。

三番艦（SCVA—74）は、工程の約四十パーセントで建造中止となり、同艦用の資材は、ホワイトベースの特定修理に流用されている。



ジオン公国独立戦争史

●大戦中期

ジオン軍の地球侵攻は、降下作戦後約一か月半にして、当初の目的である、軍事施設および物資の確保に成功した。だが、地球攻撃軍の進撃もここまでで、地上戦力においてまさる連邦軍の組織的反撃に、各地の戦線を維持するのがせいいっぱいであった。一方、連邦軍も、当面、必要以上の戦力投入をさけ、きたるべき全面反攻作戦にそなえて戦力の整備につとめていた。かくして、宇宙空間についで、地球でも戦局は膠着状態となり、以後半年ちかく一進一退の状態がつづいた。この期間が大戦中期で、両軍とも戦力の消耗をさけていた。当時、連邦軍は、実戦タイプのモビルスーツはもっておらず、いまだ実験中という状態だった。もし、この時点で、ジオン軍が連邦にたいし戦力のだしおしみをしていなければ、以後の戦況は連邦軍にとってかなり不利になっていたろう。なにはともあれ、この大戦中期の戦線膠着状態の期間が、国力にまさる連邦軍に有利にはたらき、連邦軍を勝利へとみちびいた。

●連邦軍戦力整備計画

大戦中期に実施された連邦軍の一連の戦力整備計画は、RXモビルスーツの戦力化とその運用母艦であるホワイトベース級宇宙攻撃空母の建造をめざすV作戦、宇宙艦艇および戦闘機の大量生産を目的としたビンソン計画、ならびに兵員増強案の三つがあった。そのうち、V作戦は、決

戦戦力と期待されて、軍事機密の最高ランクであるAAAに指定され、詳細を知る者は連邦軍でもごく一部のみだった。

一方、ビンソン計画と兵員増強案は、きたるべき宇宙反攻作戦にそなえたもので、戦艦を中核に、三百四十隻もの艦艇からなる一大艦隊の編成と、その乗員の養成が目的だった。もっとも、宇宙艦の建造は短時間でできるわけもなく、じっさいに就役したのは二百二十八隻であった。そのうち、かなりの数が改コロンブス級宇宙空母とパブリクタイプ宇宙突撃艇でしかなく、この計画に関していえば成功したとはいいがたい。

●RXモビルスーツ対モビルスーツ

連邦軍のRXモビルスーツは、宇宙世紀七九年四月七日に発令されたV作戦によって、基礎開発から実用化の段階にはいったといえる。こうして完成したRX―75、77、78の三タイプは、コアブロックシステム、学習型コンピューターなど、最新技術の粋をあつめたものであった。十分な開発時間があたえられず、未完成な部分をのこしたまま戦場におくられたとはいえ、この三タイプはジオン軍のモビルスーツとよく戦った。このことは連邦軍の技術陣を勇気づけ、RXモビルスーツの量産化にはずみをつけることとなった。

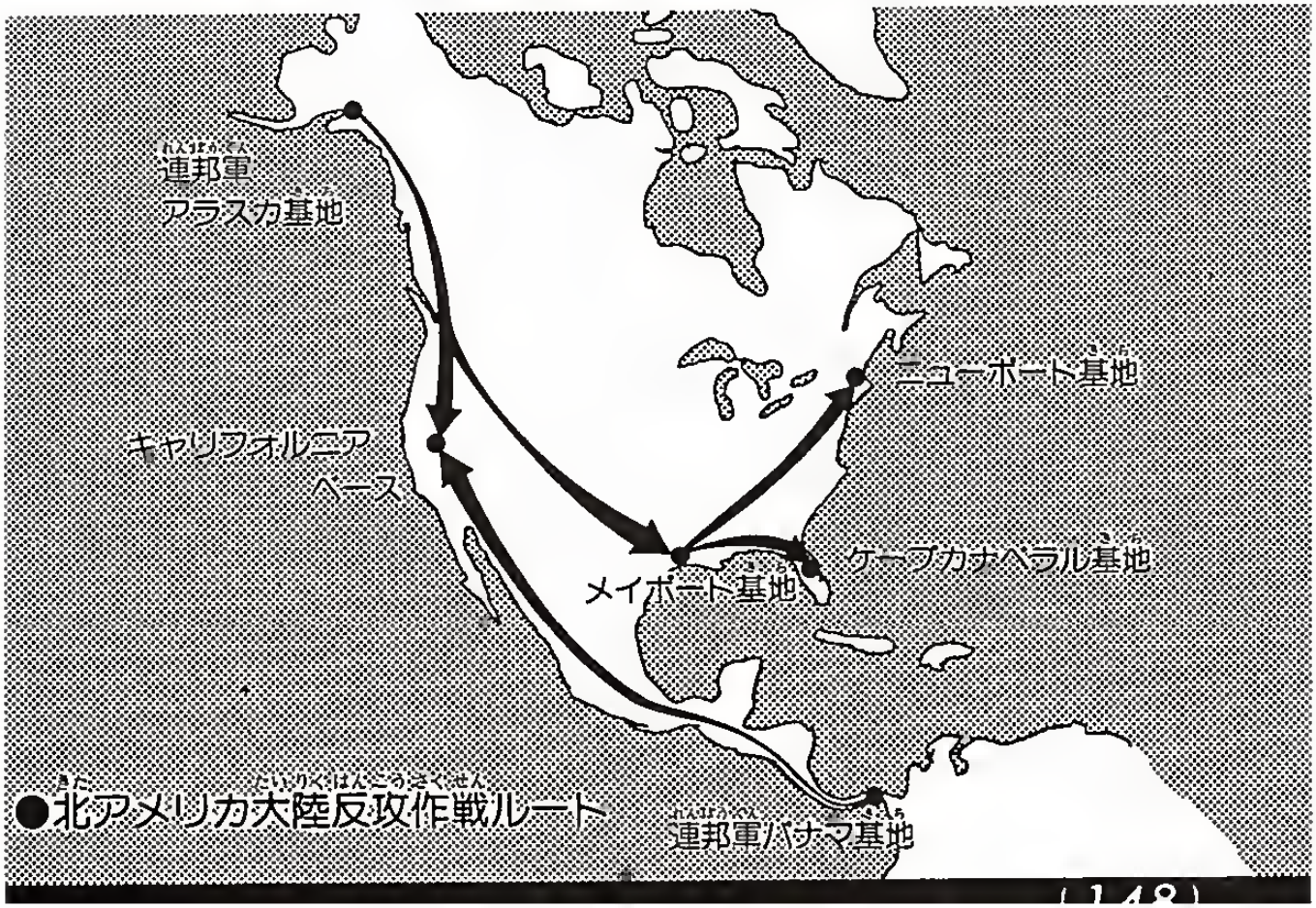
●連邦軍宇宙基地ルナツー

●連邦軍の反撃計画

宇宙世紀七九年八月下旬、さきにたてられた戦力整備計画をふまえ、ジオン軍にたいする全面的な反撃作戦が立案された。当初のプランは、地球全土で同時多発の反攻作戦を展開し、地球攻撃軍の中核をたたき、しかるのちに宇宙空間に主戦場をうつすというものであった。そのさい、RX―78の簡易量産型であるRGM―79を投入するはずであったといわれる。

じっさいには、V作戦のおくれや、戦闘部隊移動に時間が必要だったことで、九月下旬に予定されていた全面反攻は、十月上旬へと計画変更せざるをえなかった。

計画変更された反攻作戦は、両軍の戦闘宇宙域にはいっていない、宇宙のかたすみでおこった一つの戦闘によって、以後の展開が大きく変化することとなった。



●北アメリカ大陸反攻作戦ルート

●ホワイトベース参戦

宇宙世紀七九年九月十八日、ジオン軍では、モビルスーツ三機を失う小規模な宇宙戦闘を記録した。これだけだと、よくある話なのだが、この戦闘において、はじめて連邦軍のRXモビルスーツがそのすがたをあらわしたのである。この、サイド7での戦闘こそ、今次大戦でもっとも勇名をはせた〝ガンダム〟と〝ホワイトベース〟の初陣であった。たいするジオン軍は、宇宙攻撃軍所属で〝赤い彗星〟の異名をとるシャア＝アズナブル少佐(当時)の部隊であった。この戦闘で、シャア少佐の部隊は、まったくのしろうとの操縦するRX―78に、なすすべもなくMS―06FザクII三機とパイロットを失っている。

むろん、RX―78には正規のパイロットがのるはずであったが、戦闘により死亡し、たまたまちかくにいた民間人が搭乗することとなったのである。これは、ホワイトベースも同様で、士官候補生の指揮により、多くの民間人によって運用されていた。のちに、彼らは正式なクルーとしてみとめられるが、この常識はずれの決定は、V作戦の最高司令官レビル将軍の判断によるものだった。将軍は、この民間人のなかに、ニュータイプの芽をみたといわれる。

●ガルマ＝ザビ戦死

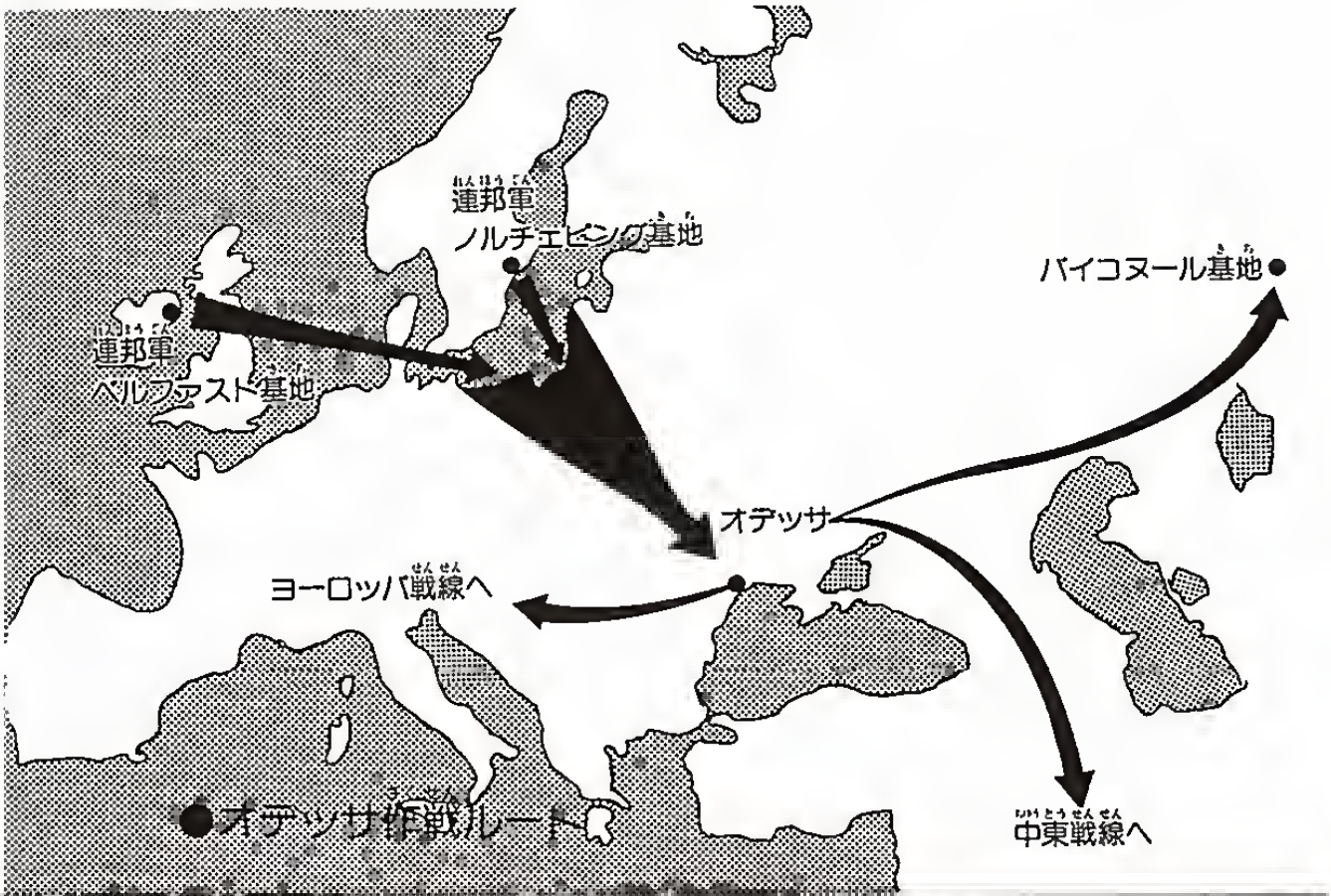
シャア少佐の追撃をふりきったホワイトベースは、地球に降下したものの、地球攻撃軍に攻撃された。北アメリカ大陸での、この一連の戦闘で、ホワイトベースはからくも勝利をえたが、そのなかでも最大の戦果は、地球攻撃軍司令官にしてザビ家の末弟、ガルマ＝ザビ大佐ののるガウ攻撃空母を撃破したことである。これにより、地球攻撃軍は、一時、大混乱におちいった。

●大戦後期

ホワイトベースとRX―78の実戦参加は、大戦後期への序曲だった。そして、ガルマ＝ザビ大佐の戦死が、連邦軍に反撃のいとぐちをあたえた。司令部を失ったジオン軍にたいして、連邦軍はアラスカ、パナマの両基地から大部隊を投入し、南北からキャリフォルニアベースに進撃を開始したのである。つづいての連邦軍の反撃は、ユーラシア大陸中央部で実行された。作戦名は〝オデッサ〟。連邦軍は、この作戦に地上戦力の約三分の一を投入していた。

●戦場は宇宙へ

オデッサ作戦は、連邦軍の一方的勝利におわり、マ＝クベ部隊は撤退し、ジオン軍の戦線は大幅に後退することとなった。この時点で、ジオン地球攻撃軍は、わずかのあ



いだが司令部を失うという失策をおかした。これは、地球に派遣した部隊のあいだに複数の命令系統をおいたためであった。

これ以後、地球では連邦軍が確実に勝利をかさね、宇宙世紀七九年末には主戦場はふたたび宇宙へとうつっていった。

●ジオン軍宇宙要塞ソロモン

●ソロモン攻略戦

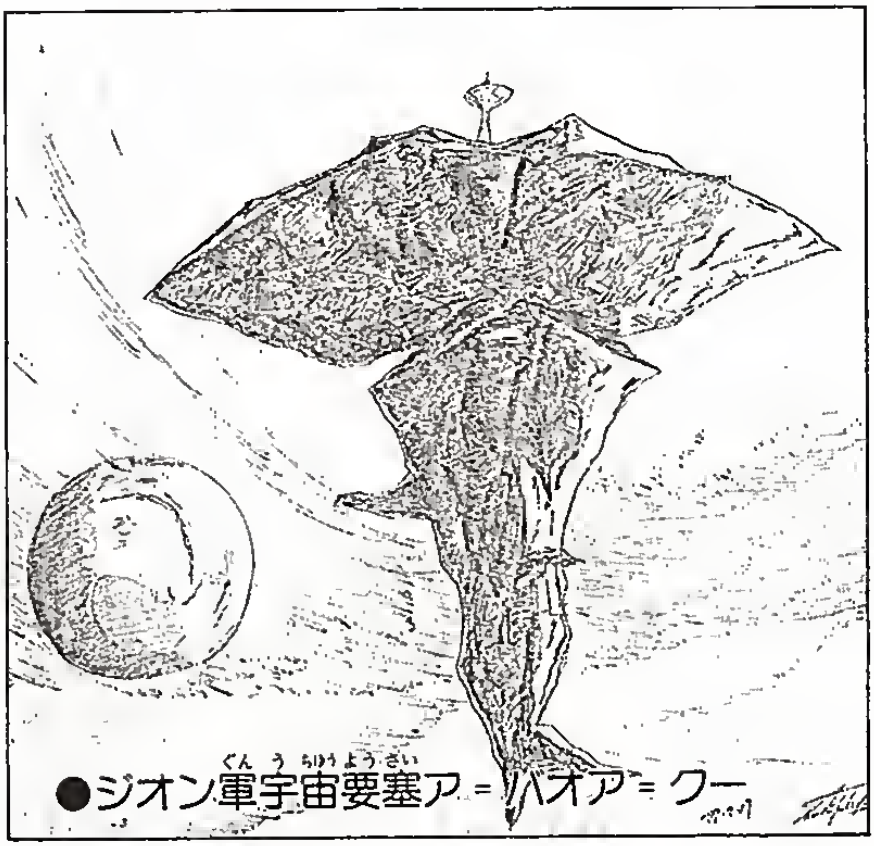
宇宙要塞ソロモン。かつてスペースコロニー、サイドーがあったところにつくられた、ジオン軍の三大拠点の一つであり、ドズル中将の指揮する宇宙攻撃軍の本部でもある。これが連邦軍の宇宙反攻作戦の第一目標となった。宇宙世紀七九年十二月下旬、再建なった連邦軍宇宙艦隊はあいついでジャブローを出撃、ルナツー艦隊と合流していった。連邦軍の戦力は、レビル、テアム、ルナツーの三艦隊あわせて、正規空母十二隻、補助空母三十六隻、戦艦・重巡洋艦百二十八隻、宇宙艇百四十四隻、艦載機やRXモビルスーツ六百機以上という巨大なものだった。たいするジオン宇宙攻撃軍は、巡洋艦と宇宙艇七十九隻、モビルスーツとモビルアーマーが約八百機であった。そして、両軍が対峙するうちに、宇宙世紀八〇年の正月をむかえた。

年があけた宇宙世紀八〇年一月上旬、ついに、連邦軍宇宙反攻作戦の第一段階、ソロモン攻略戦が開始された。戦闘はわずか六時間で終了し、戦力を集中した連邦軍が勝利した。ジオン宇宙攻撃軍は壊滅、司令官のドズル＝ザビ中将は乗機のビグ＝ザムとともに戦場に散った。

なお、この戦闘で連邦軍は、太陽炉の技術を応用した高エネルギー兵器〝ソーラーシステム〟を使用して、ソロモンに直接攻撃をかけることに成功している。

●ア＝バオア＝クー攻防戦

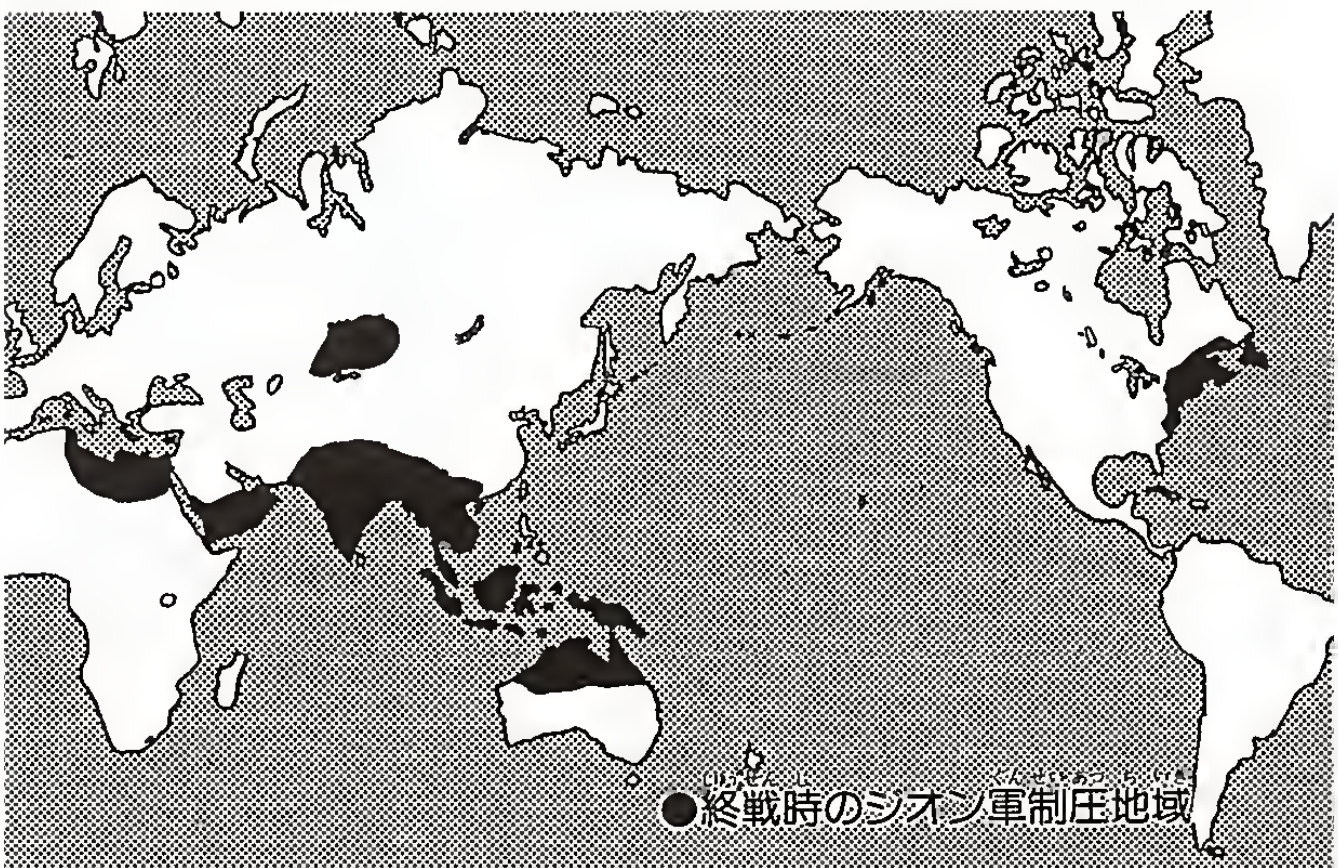
ソロモン攻防戦での両軍の被害は、連邦軍が宇宙戦力の約二十パーセント、ジオン軍が約三十五パーセントだった。作戦直後の連邦軍はルナツーからサイド3への直線ルートにあり、一方のジオン軍は連邦軍の進撃ルートを探知できずに、ア＝バオア＝クーからグラナダまでの宙域に散開していた。時間がたつにつれて連邦軍が陣形をととのえたのにたいし、ジオン軍では、ギレン総帥とキシリア少将の戦力配置についての意見にくいちがいがでていた。



●ジオン軍宇宙要塞ア＝バオア＝クー

そして、もう一つのうごきが、ジオン国内にあらわれた。デギン公王の主張する停戦協定案である。ギレン総帥は、この停戦に否定的で、単独で停戦会議におもむいたデギン公王を、連邦軍レビル艦隊ごと、超巨大レーザー砲〝ソーラレイ〟の標的としてしまった。連邦軍は、その半数ちかい艦艇を失いつつも、アバオアクーへの攻撃を開始することになった。陣形がととのっていないジオン軍と、決定打を欠く連邦軍の最後の決戦は、丸一日つづく、史上最大の激戦となった。連邦軍は、ソロモンを攻略したいきおいにのって、わずかずつではあるが、確実に進攻していく。

戦闘も末期にはいり、モビルスーツ同士の接近戦になったころに、キシリア少将は、父であるデギン公王がギレン総帥の手で殺されたことを知り、みずから、兄であるギレン総帥にむかって引き金をひいた。



●終戦時のジオン軍制圧地域

●終戦

戦闘中にキシリアがギレンを射殺した事件は、司令センター内に動揺をおこした。戦局は、モビルスーツ同士の接近戦へとうつっていたが、あきらかに両軍とも兵力不足であった。そのなかで善戦していたのが、ホワイトベース所属の三機のRXモビルスーツであり、ジオン軍の動揺をみすごさず、アバオアクーへの血路をひらいていった。

アバオアクーは、さながら燃える星と化し、その炎のなかにアムロ少尉のRX―78が、シャア大佐のMSN―02が、そしてホワイトベースが消えた。戦局不利をさとったキシリアは、アバオアクーを脱出し、本国とグラナダにのこる突撃機動軍で戦力の統合・整備をしようとしたが、脱出に失敗し、乗艦ごと爆発してしまった。これがきっかけとなり、アバオアクー攻防戦はかろうじて連邦軍の勝利におわった。しかし、その戦力の大部分を失った連邦軍は、もはや〝軍〟とよべるような状態ではなかった。これはジオン軍も同様で、突撃機動軍は連邦軍以上の戦力をもっていたものの、すべての指揮能力を失い、無力にちかかった。

この戦闘の直後、ジオンは、公王制から再度、共和制を復活させ、地球連邦政府と講和条約を締結。宇宙世紀八〇年一月二十六日、十三か月におよぶ戦争は終了した。

●戦後処理

今次大戦は、歴史上、ジオンの敗戦というかたちで終了した。だが、じっさいには地球連邦のほうが敗戦国というにふさわしかった。それというのも、連邦政府はこの戦争になんとしても勝利するべく、国力のすべてを戦争遂行にふりむけていたから

である。これが、戦後処理をより困難なものとしていた。

さきに締結された講和条約により、両国軍の戦闘行為は禁止されていたが、いぜんとして実戦部隊は戦場にあり、いつまた戦端がひらかれるかわからない状態であった。つぎに戦闘がおこなわれれば、確実に人類絶滅につながると感じた両国首脳は、今次大戦で中立をまもったサイド6をふくめて、三国会議をひらくことにした。

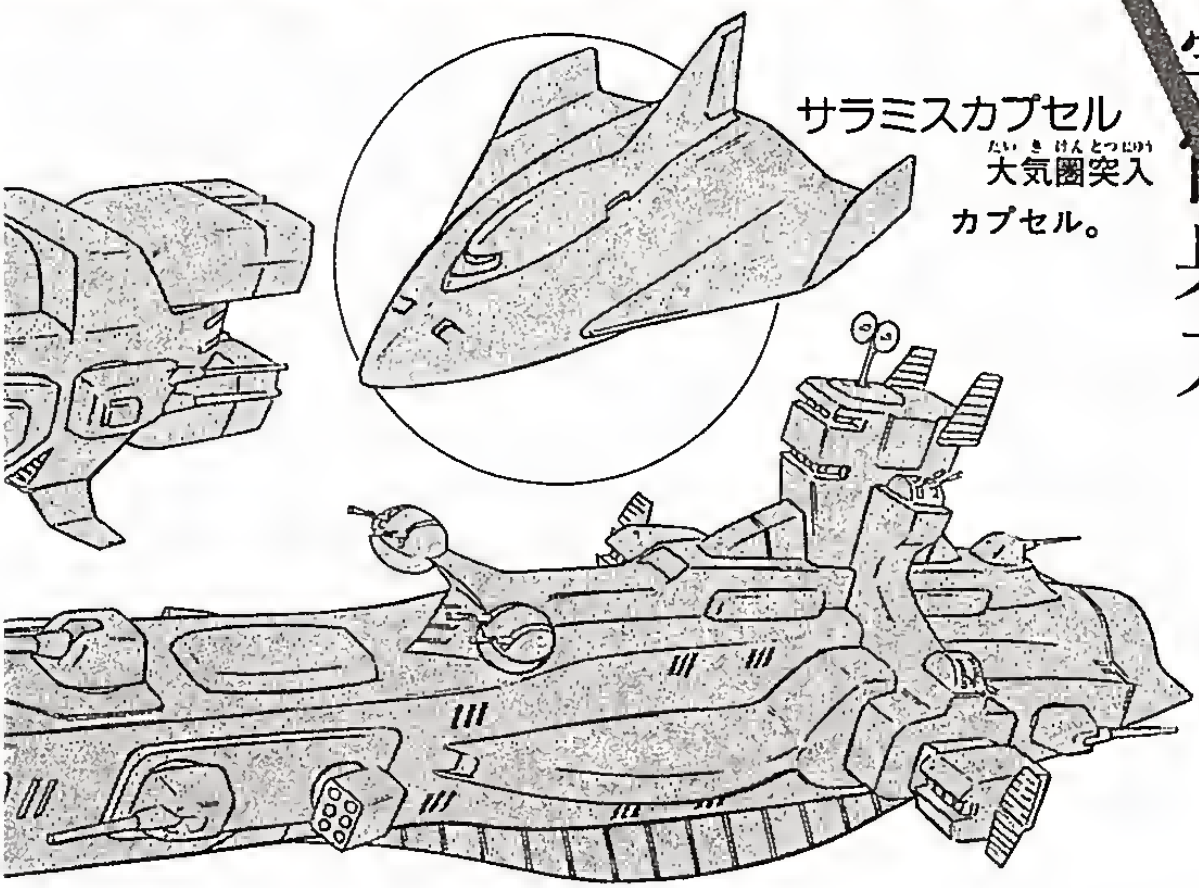
三国会議の最大の懸案は、ジオン・連邦両国軍のすみやかなひきあげと、恒久的平和の早期実現であった。しかし、首脳部と戦場に残留する部隊とのゆきちがいがしばしば発生し、問題解決のむずかしさを、いまさらながら感じさせた。

これとはべつに、宇宙世紀八〇年二月から開始された戦後調査は、開始早々に重大なレポートを両国首脳に提出した。それには、アルバオア＝クー攻防戦直後にグラナダ基地から、グワジン級戦艦ズワメルと十数機のゲルググが行方不明になった事実が記されていた。もし、これが個人的な戦争準備であるならば、一大問題である。しかし、それ以後、ズワメルは発見されず、乗員も不明のまま、いつしか人々からわすれさられていった。

戦後処理はいくつかの曲折をへたものの、ジオン・連邦の両国によるサイド7の開発再開、前戦将兵の帰国問題などは解決の方向にむかった。なお、将兵帰国は宇宙世紀八一年十月に終了している。

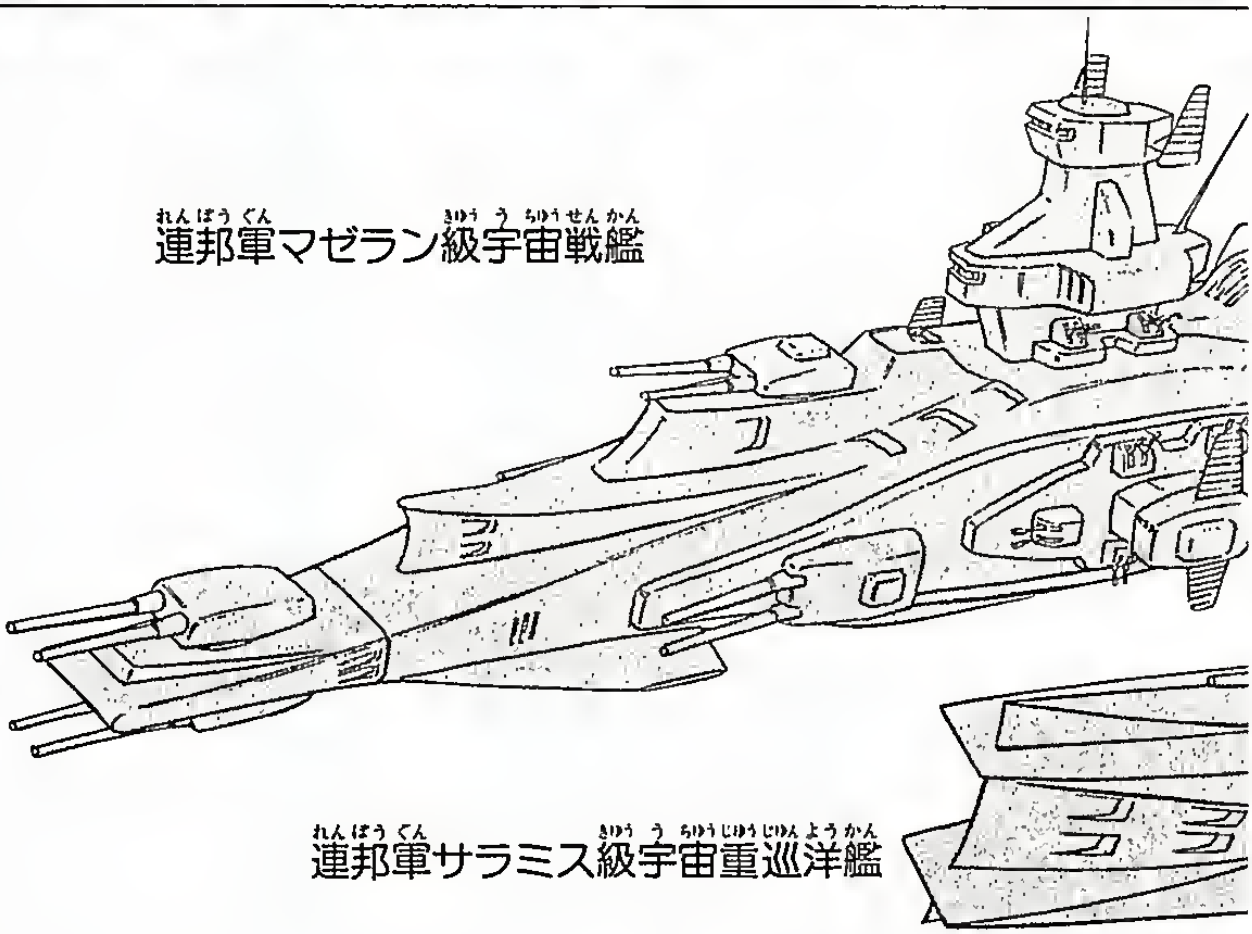
この戦争をさかいに、各スペースコロニーは自治権をかちとり、独立国家としての道をあゆみはじめる。とくに新生ジオン共和国は、大戦に敗れはしたものの、長年の夢であった自由と独立を手にすることができた。だが、人類にとって、その代償はあまりにも大きすぎた。

宇宙兵力



サラミスカプセル
大気圏突入カプセル。

今次大戦の主力戦術兵器は、なんといってもモビルスーツである。だが、モビルスーツのみで戦力を構成するのは不可能であり、したがって通常兵器の質と量が戦力を大きく左右したといっていい。通常兵器を大きくわけると、宇宙、海上・海中、空中、地上の四つに分類することができる。一般的な傾向としては、通常兵器においては連邦軍が圧倒的にまさり、ジオン軍はモビルスーツ戦力においてまさっていたといえる。つまり、局地戦においてはジオン軍に利があるが、総力戦、物量戦になると連邦軍が有利といえる。このことは、大戦後期から末期の一連の連邦軍の反攻作戦で証明されている。



連邦軍マゼラン級宇宙戦艦

連邦軍サラミス級宇宙重巡洋艦

連邦軍

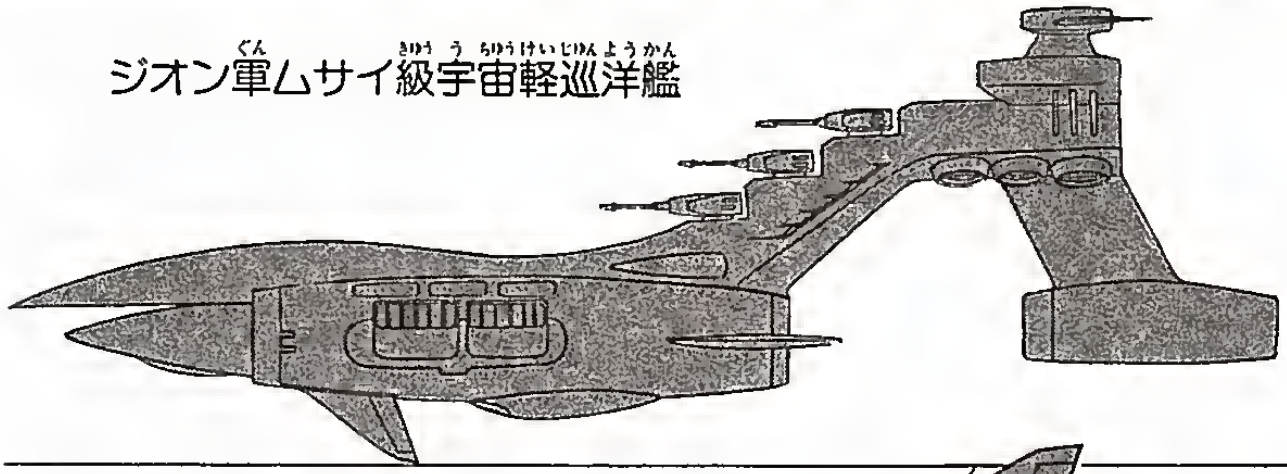
連邦軍とは、地球連邦に所属する部隊の総称で、開戦まえは空軍、海軍、陸軍、宇宙軍の合計四軍から構成されていた。また、補助戦力として、行政地区ごとに州軍が配置されていた。

開戦後はジオン軍からうけた損害のうめあわせのため、州軍を主力部隊に昇格させ、陸海の二軍を地球軍、空・宇宙の二軍を航空宇宙軍として統合し、一大連合部隊としている。また、各地にあった各軍総司令部をジャブローにうつし、統合参謀本部としている。

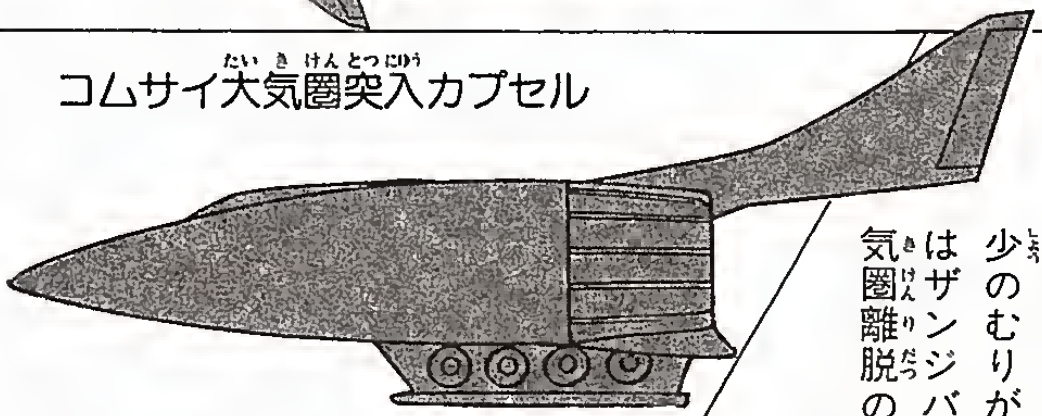
もっとも、宇宙世紀になり、八十年ちかくも実戦経験のない連邦軍は、頭で考えるほどうまくうごかなかったのが現実である。

連邦軍対ジオン軍戦力比較

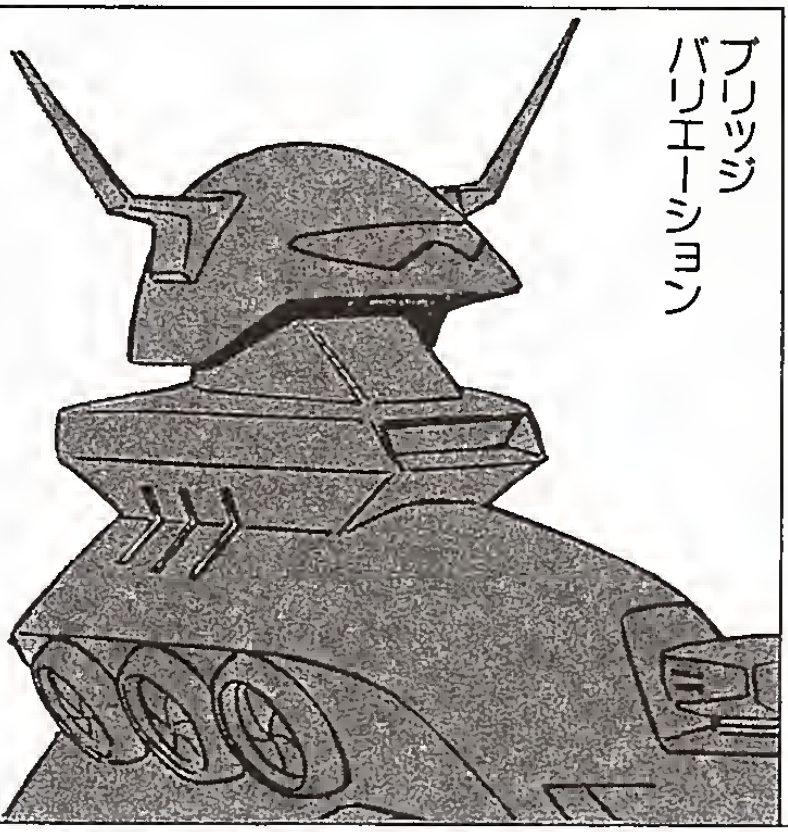
ジオン軍ムサイ級宇宙軽巡洋艦



コムサイ大気圏突入カプセル



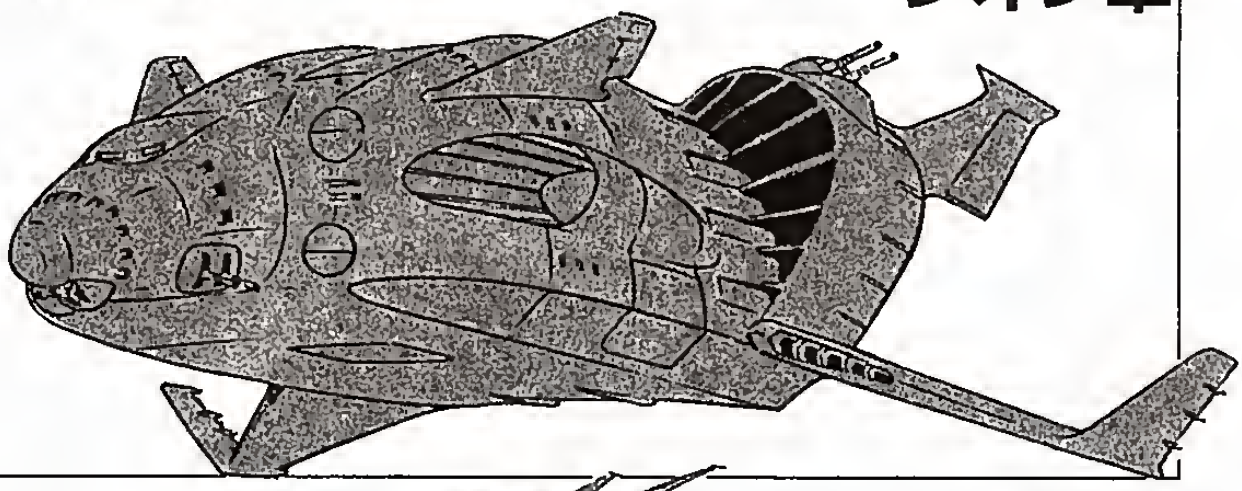
ブリッジ
バリエーション



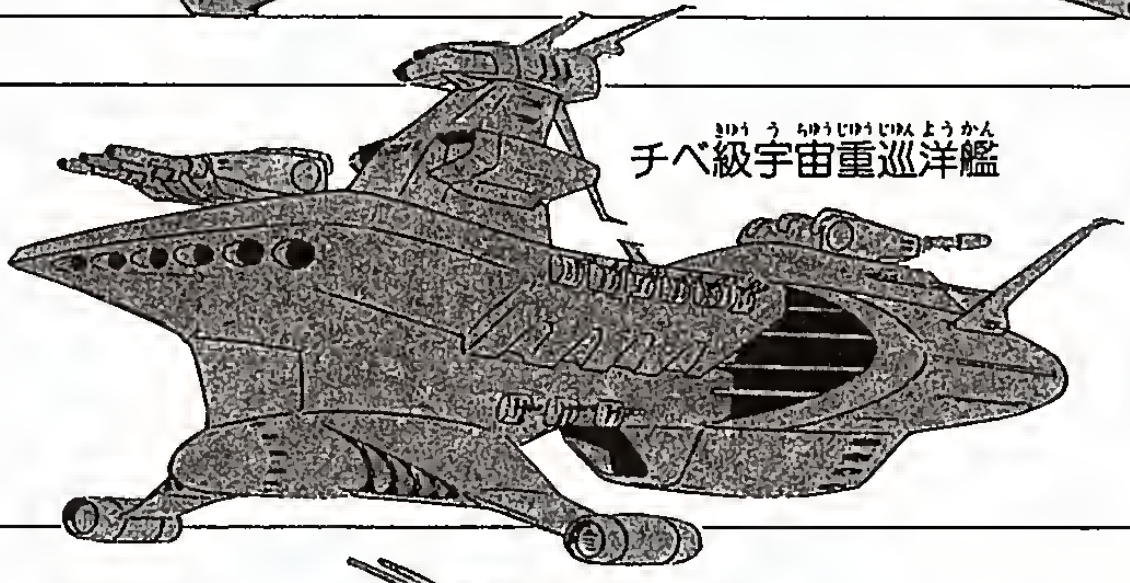
ジオン軍の宇宙艦艇は、連邦とことなり、ほとんどがモビルスーツ運用にむけて設計されている。ただし、チベ級はモビルスーツ完成前の旧式艦なので、運用には多少のむりがある。なお、大気圏突入能力をもっているのはザンジバル級、グワジン級の二タイプで、どちらも大気圏離脱のさいにはブースターを使用する。

ジオン軍

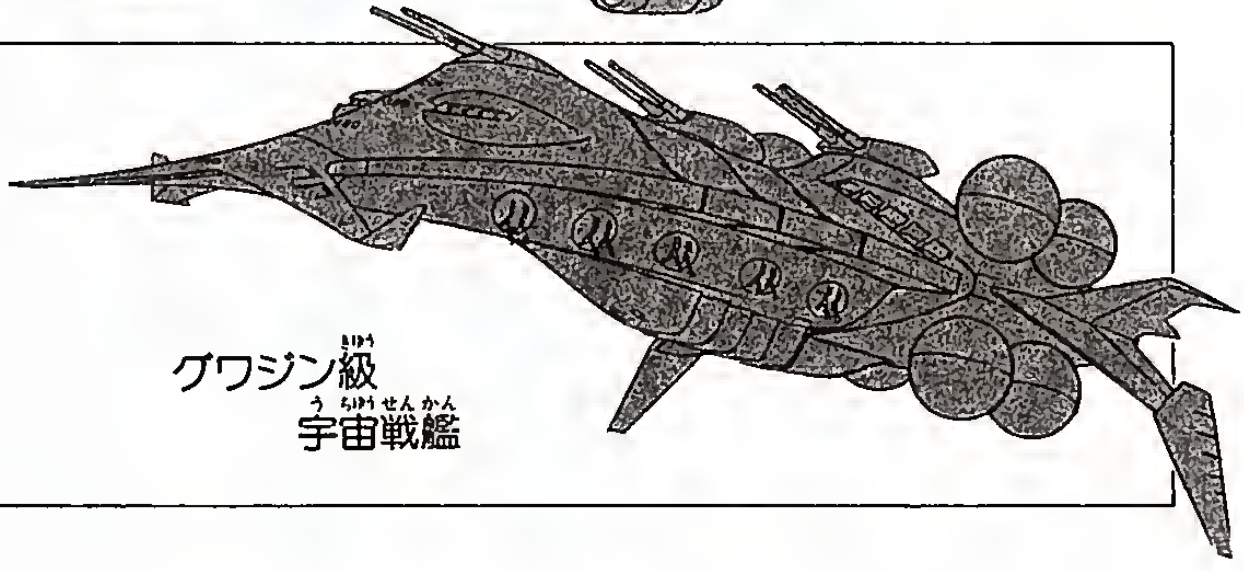
ザンジバル級機動巡洋艦



チベ級宇宙重巡洋艦



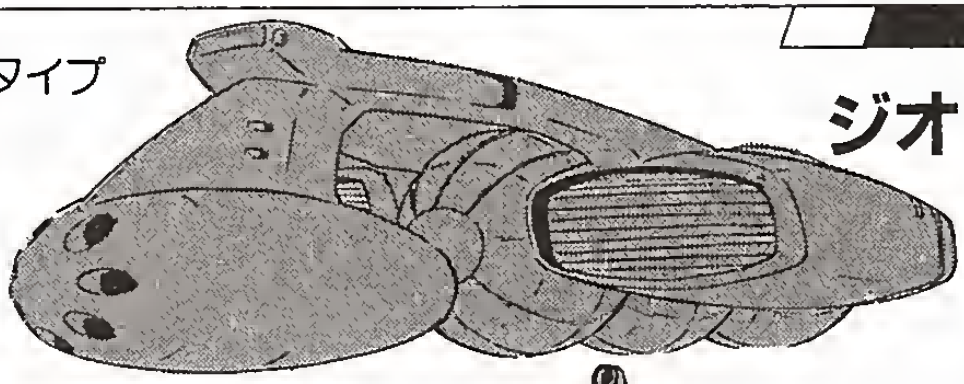
グワジン級宇宙戦艦



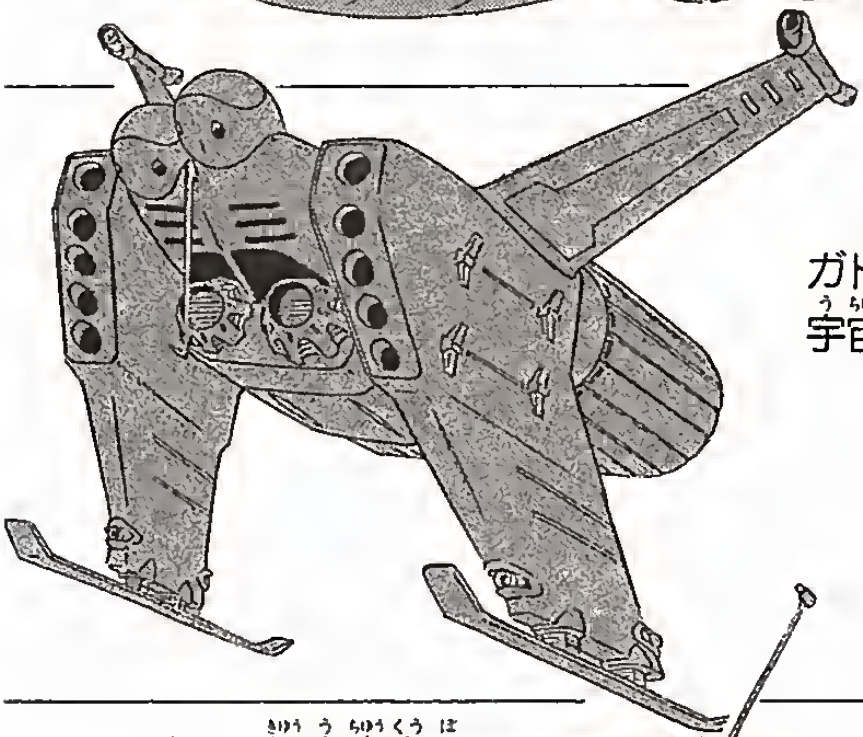
連邦軍対ジオン軍戦力比較

ジオン軍

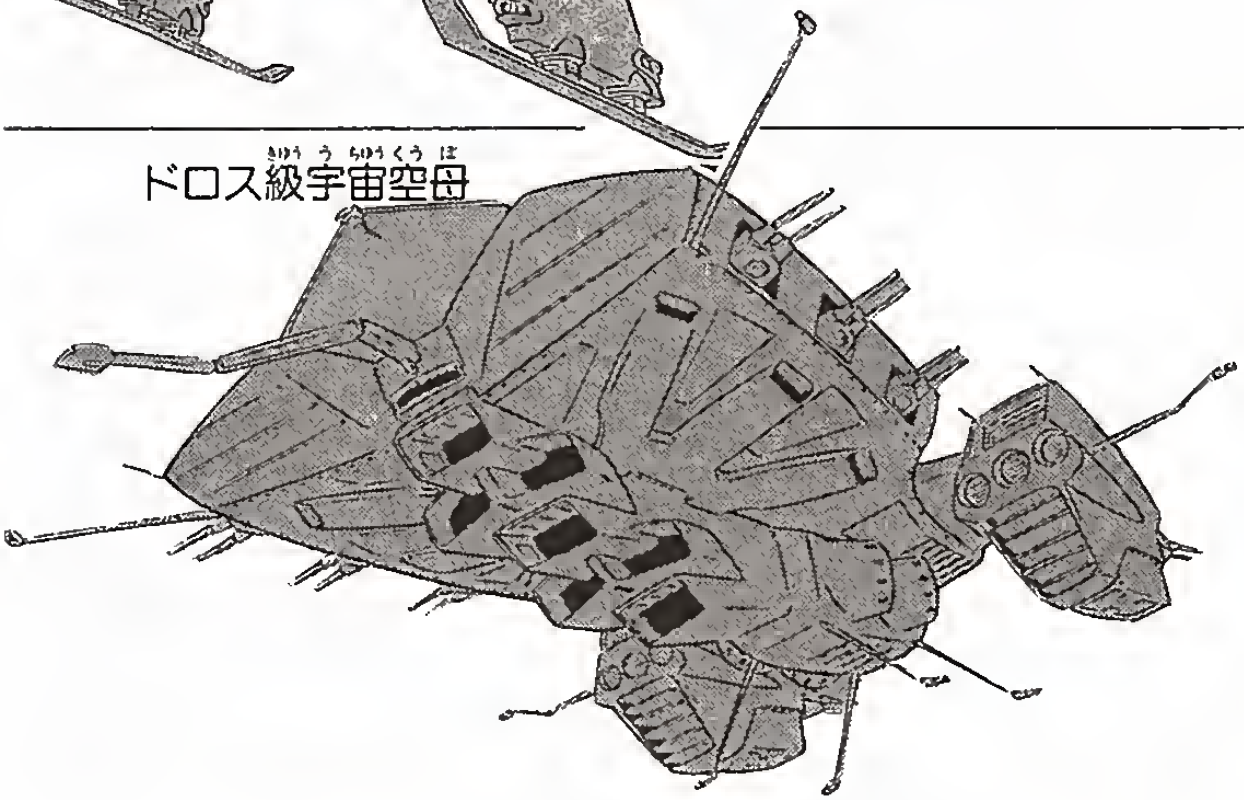
ジッコタイプ
突撃艇



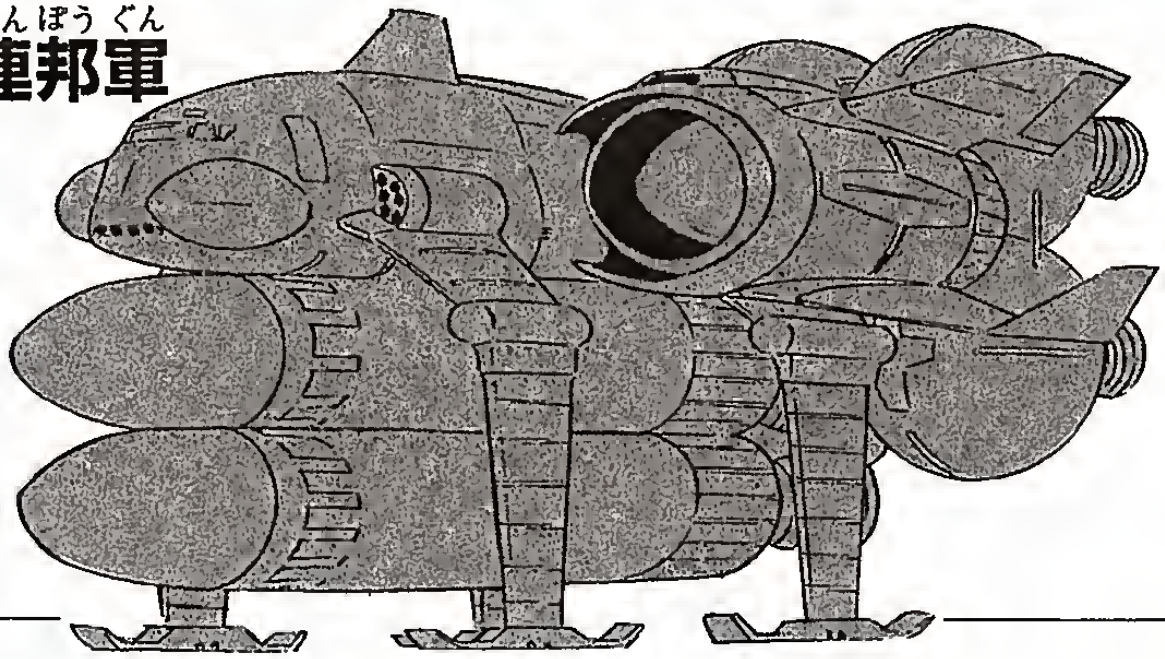
ガトルタイプ
宇宙戦闘機



ドロス級宇宙空母



連邦軍

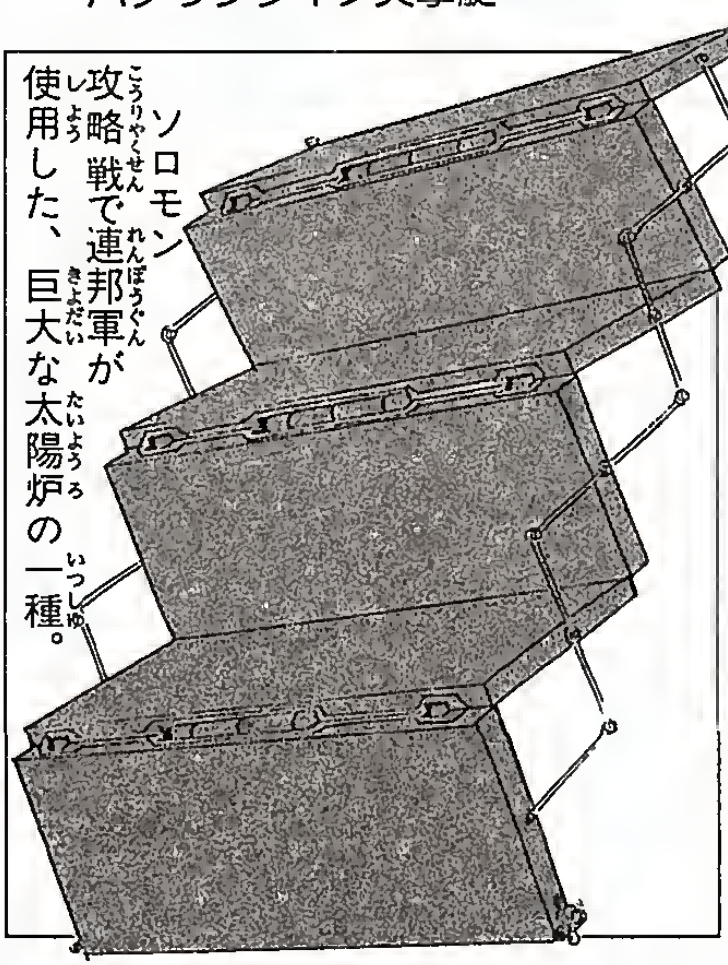


パブリクタイプ突撃艇

宇宙空間戦で主力となる戦術兵器では、両軍に大きなちがいがある。連邦軍はセイバーフッシュやパブリクなどの小型のものが多いが、ジオン軍はモビルスーツの補助に、宇宙艇や戦闘機を使用していた。運用にあたって、ジオン軍は、史上まれなる巨大艦ドロス級を建造したが、実戦参加は二隻のみであった。

ソーラーシステム用ミラー

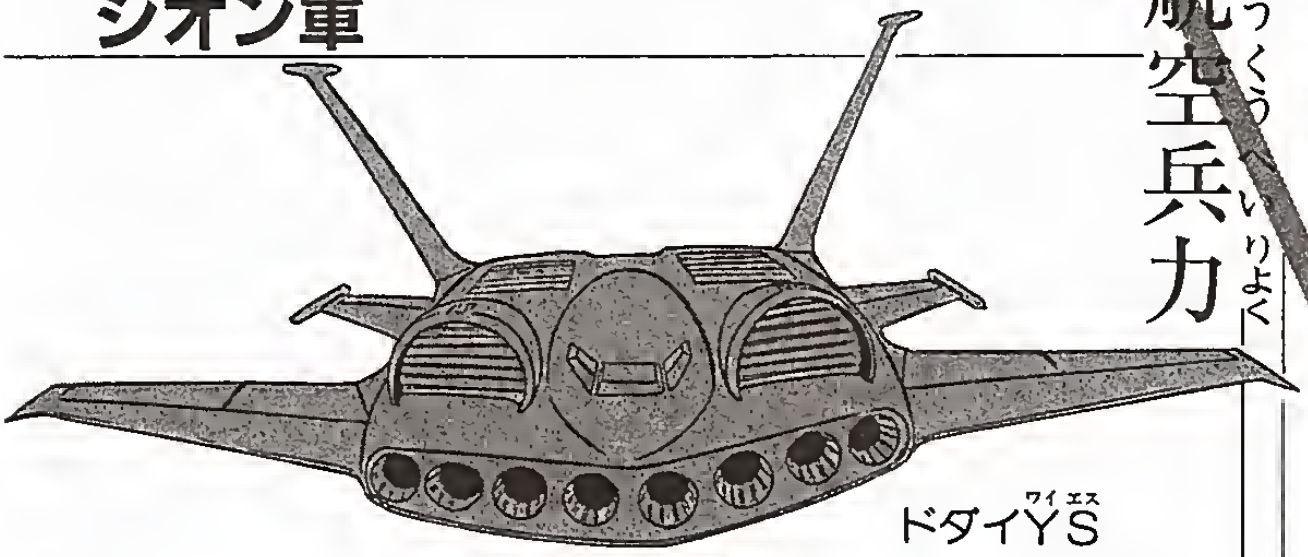
ソロモン攻略戦で連邦軍が使用した、巨大な太陽炉の一種。



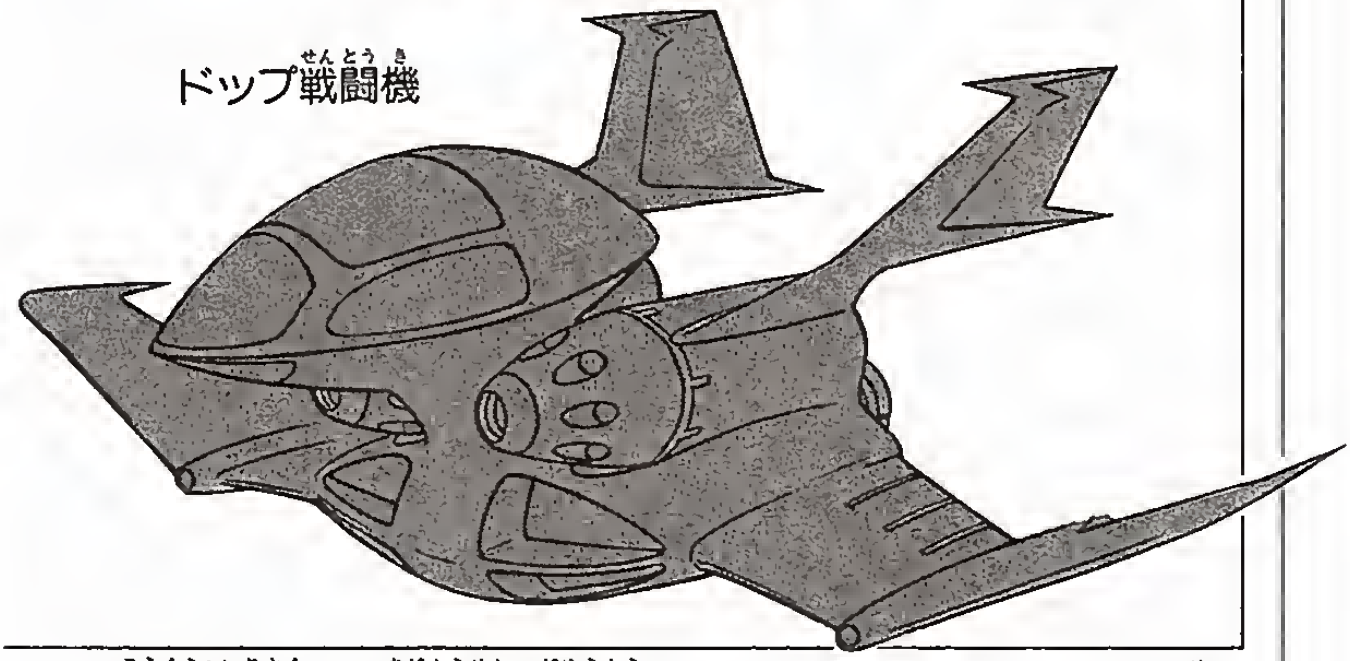
連邦軍対ジオン軍戦力比較

ジオン軍

航空兵力



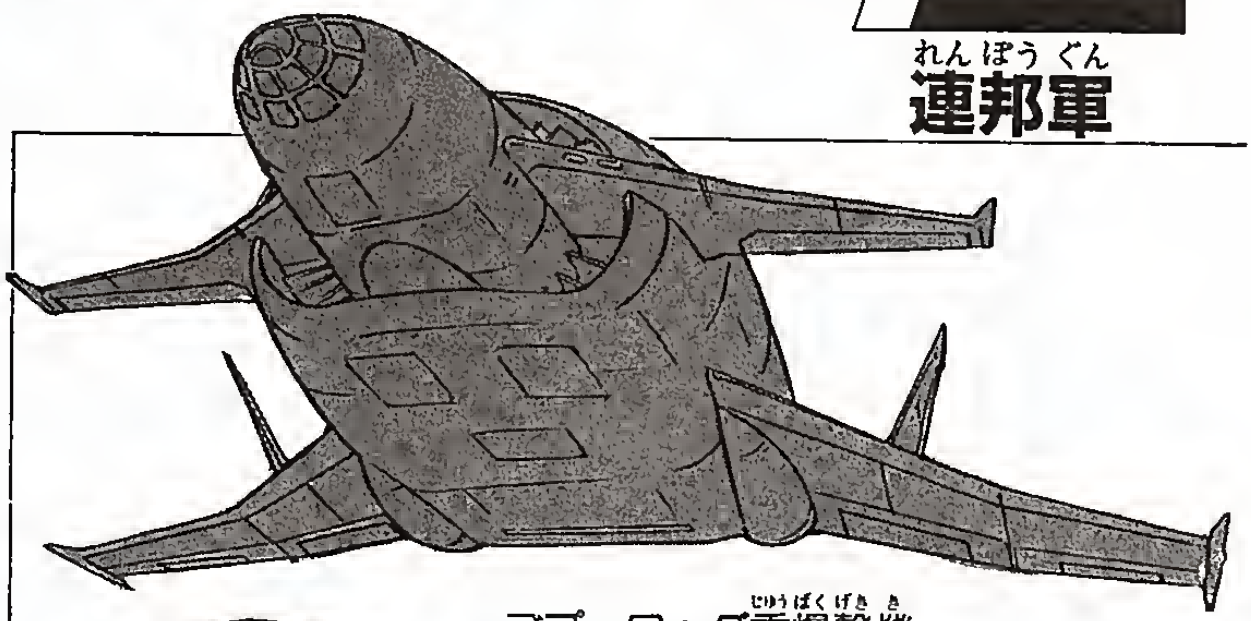
ドダイYS



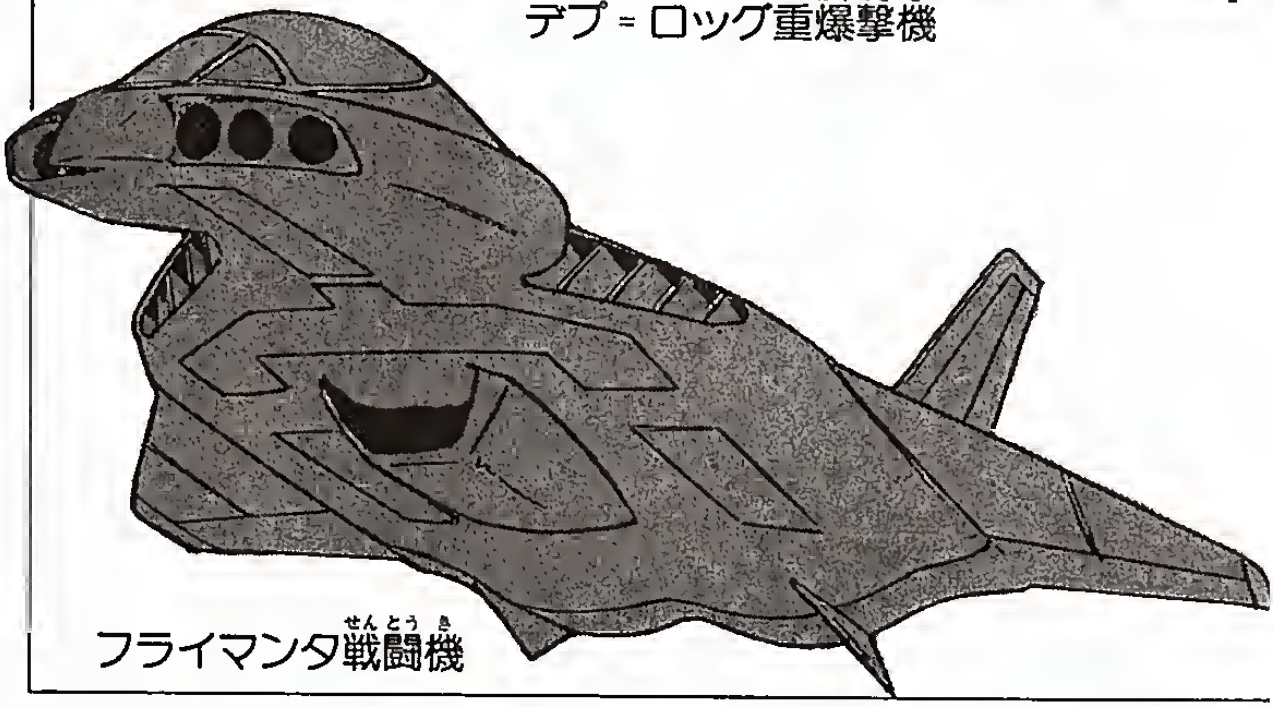
ドップ戦闘機

航空兵力は，地上戦で重要なウエートをしめている。20世紀後半に完成した地上戦戦略論においても，制空権をおさめたほうが勝利を手にすることができるとされている。モビルスーツの登場によって，この戦略論も多少の修正を必要とはしたが，あくまでも基本はかわっていない。じっさいの戦力では，質・量ともに，連邦軍が優勢であった。

連邦軍



デプ＝ロッグ重爆撃機

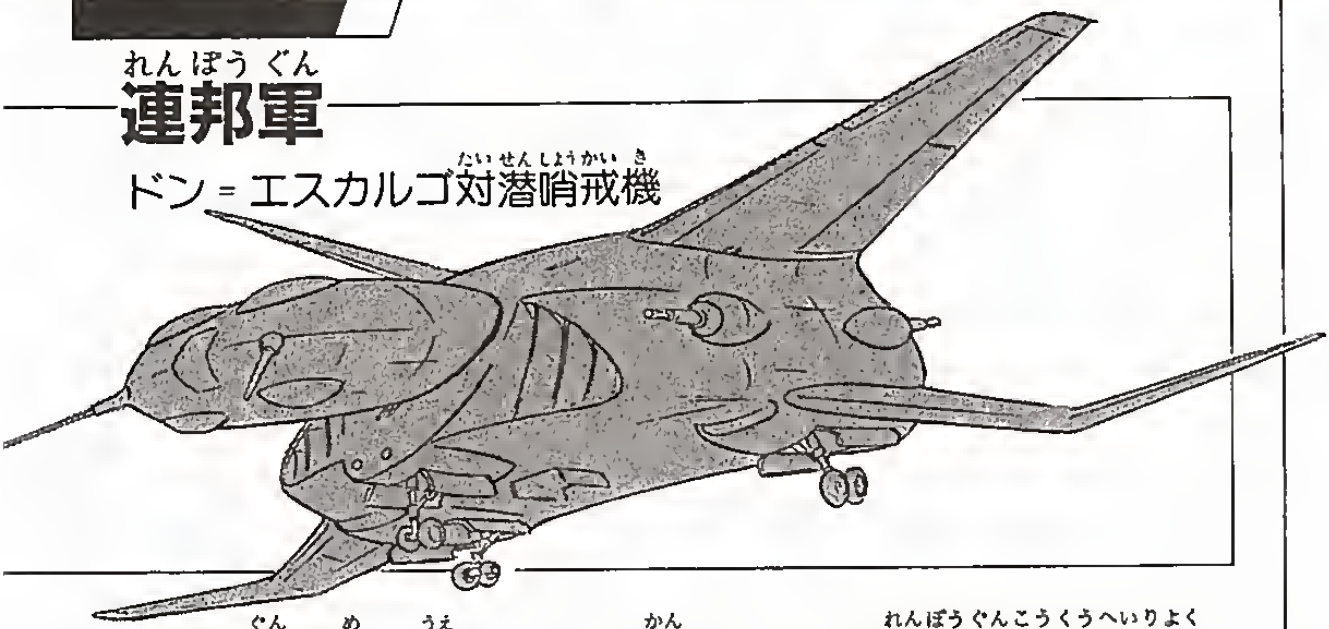


フライマンタ戦闘機

航空戦力でジオン軍が劣勢であった原因として，ジオン公国そのものがコロニーというかぎられた空間にあり，航空機になじまない体質をもっていたことや，モビルスーツの開発を優先させたことなどがあげられる。このため，強大な地上軍をもちながら，守勢に転じたとたん，ジオン軍の戦線は急速に縮小していくこととなった。

連邦軍

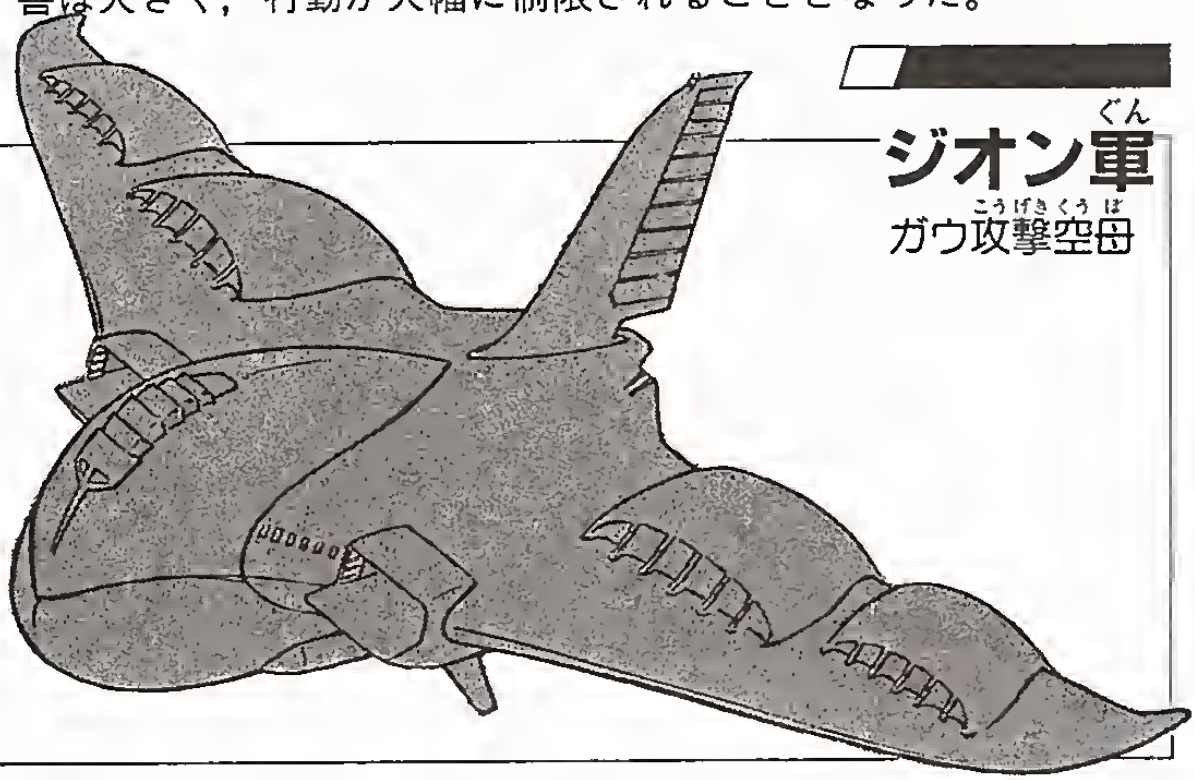
ドン＝エスカルゴ対潜哨戒機



ジオン軍が目の上のこぶと感じていた連邦軍航空兵力の一つに，対潜哨戒機群がある。これは，水上艦を多数もてず，海軍力のほとんどを潜水艦にたよらざるをえなかったジオン軍の弱点であった。これにより，ジオン軍潜水艦隊のうけた被害は大きく，行動が大幅に制限されることとなった。

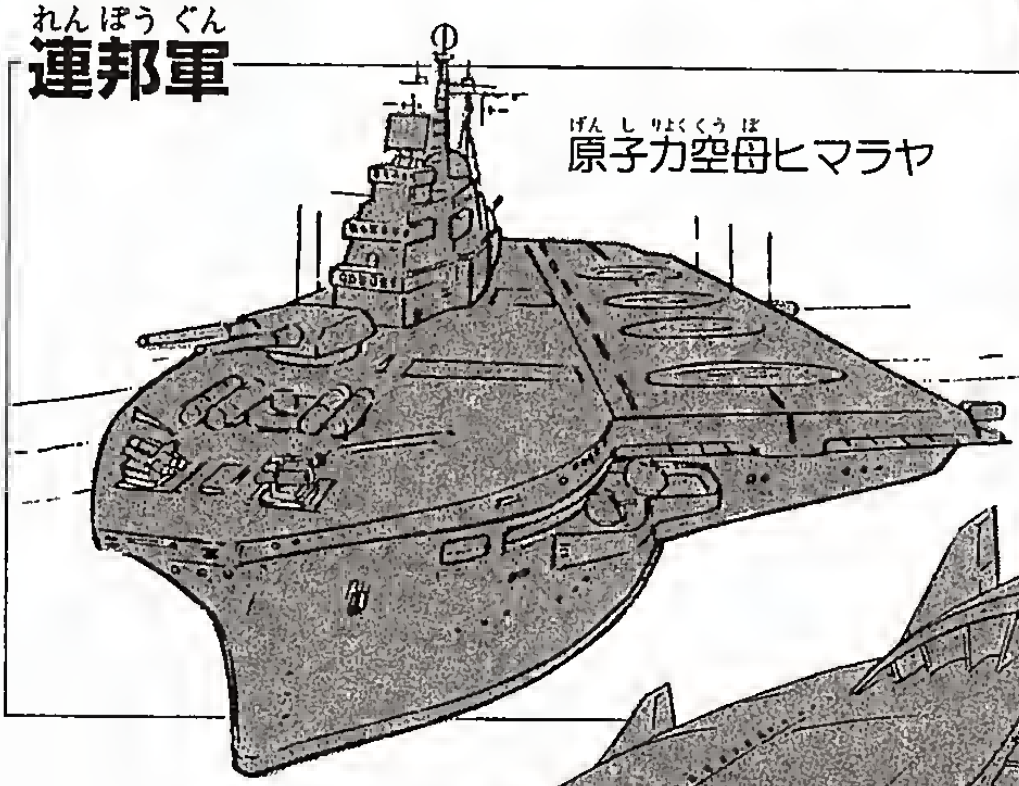
ジオン軍

ガウ攻撃空母

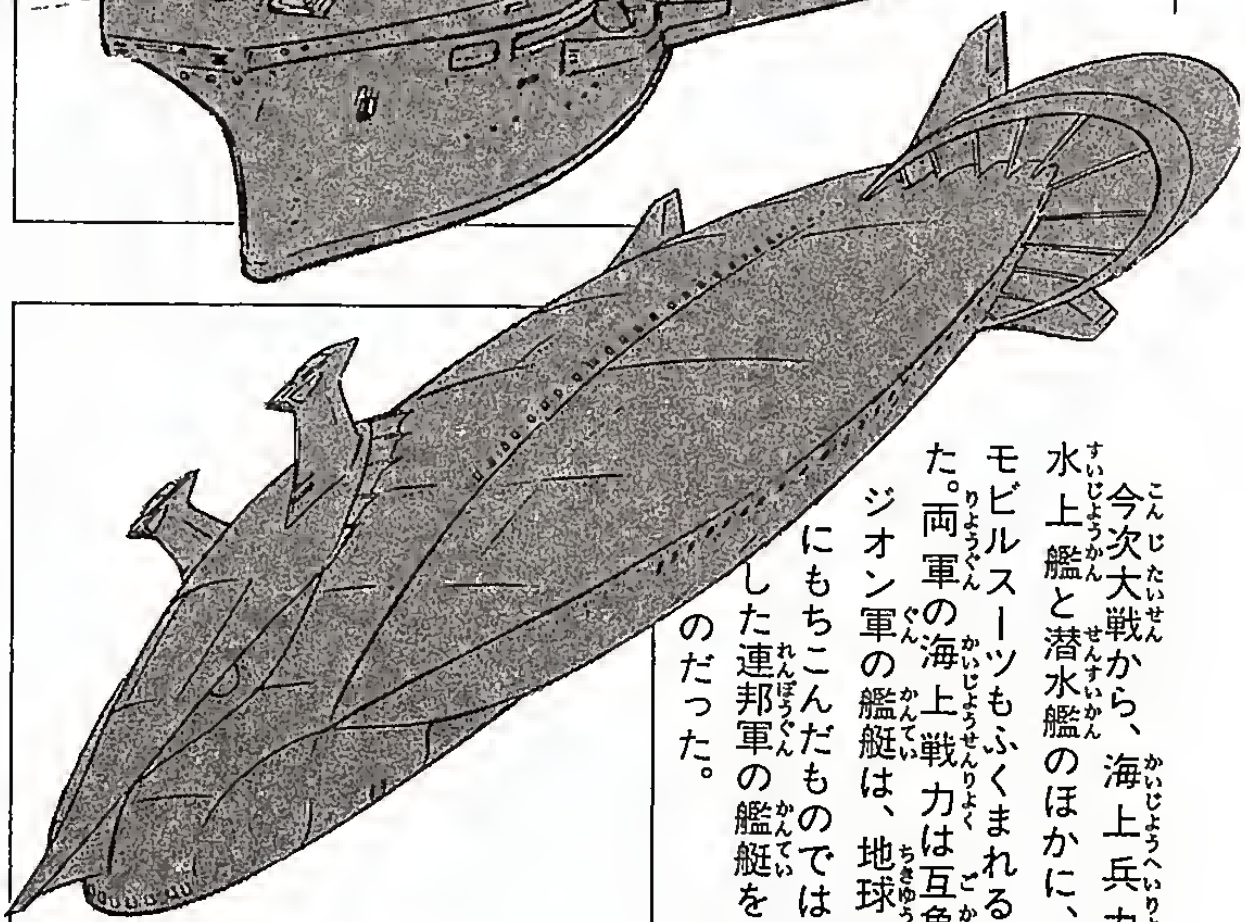


海上兵力

連邦軍



原子力空母ヒマラヤ



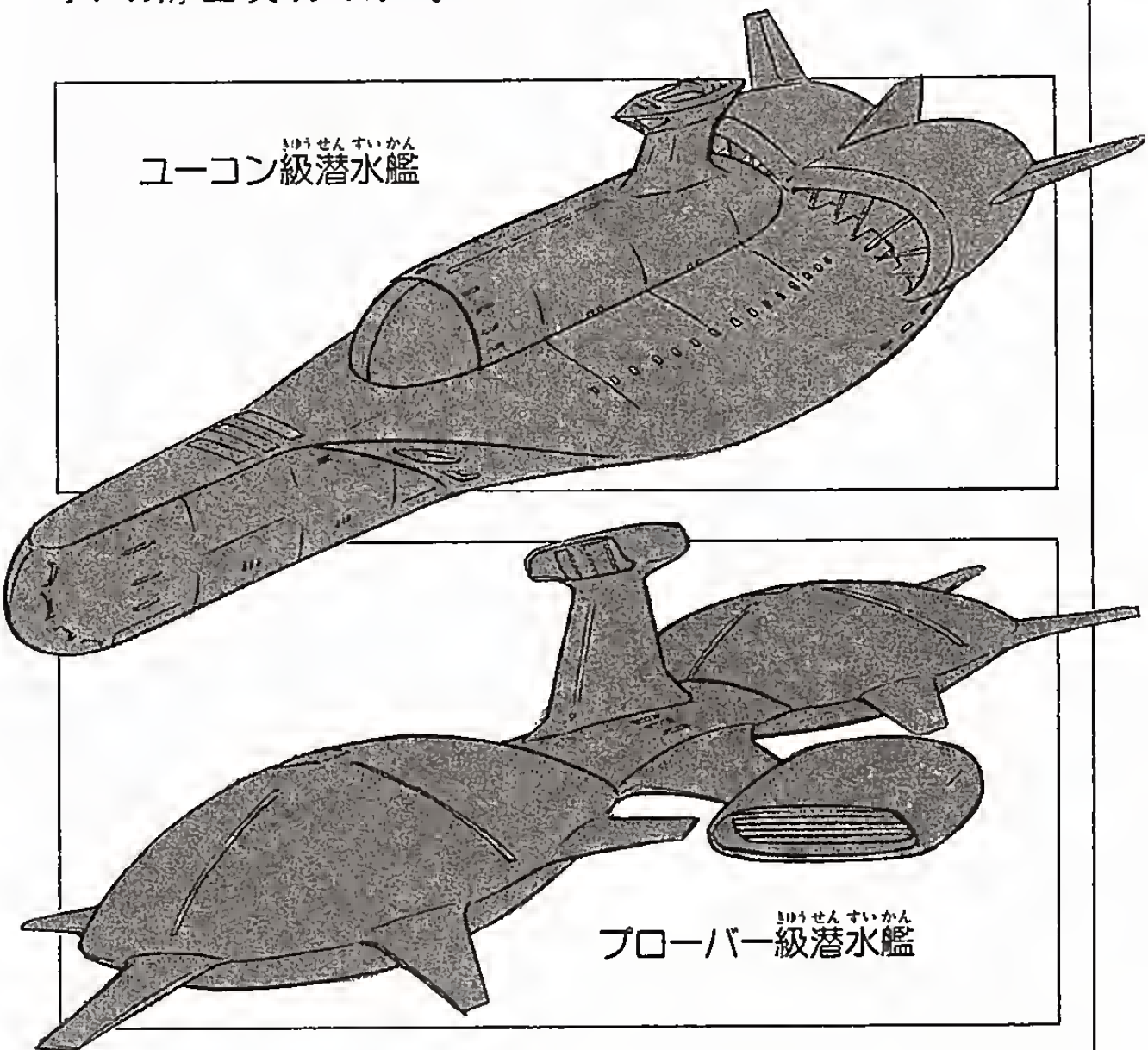
ジオン軍

マッドアングラー級潜水艦

今次大戦から、海上兵力のなかに、水上艦と潜水艦のほかに、水陸両用モビルスーツもふくまれることになった。両軍の海上戦力は互角だったが、ジオン軍の艦艇は、地球侵攻のさいにもちこんだものではなく、拿捕した連邦軍の艦艇を使用したものだった。

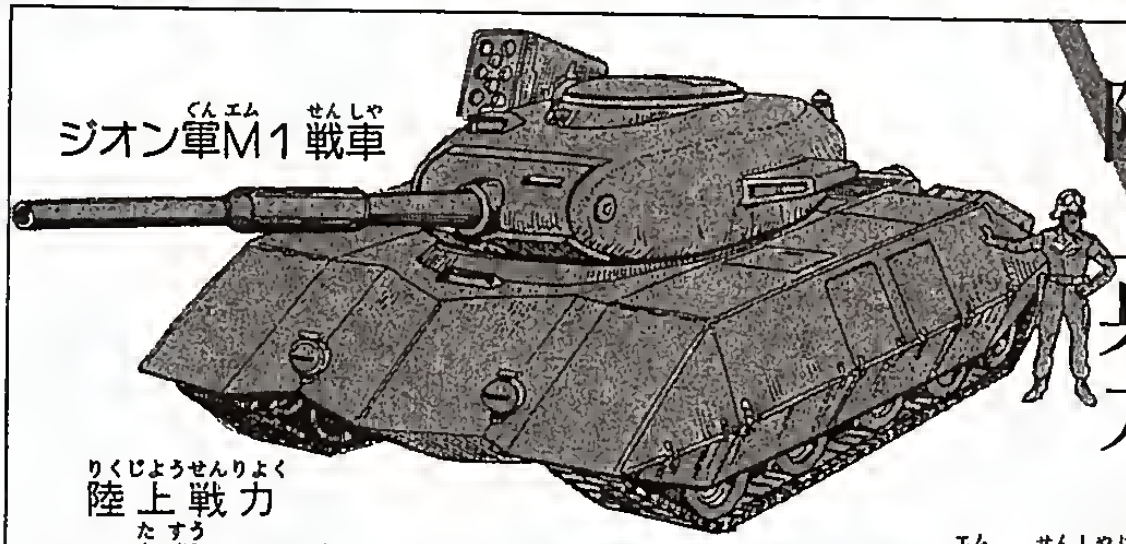
ジオン軍

ジオン軍の主力潜水艦は，ユーコン級の24隻で，ついでマッドアングラー級の8隻であった。どちらも，連邦軍の次期主力潜水艦となる予定で建造がすすめられていた。だが，初期建造計画が終了するころにジオン軍の地球侵攻があり，ほぼ無傷でジオンの手にわたっている。これらを改修して就役させたのが，ジオンの海上兵力である。プローバー級だけはジオン製である。



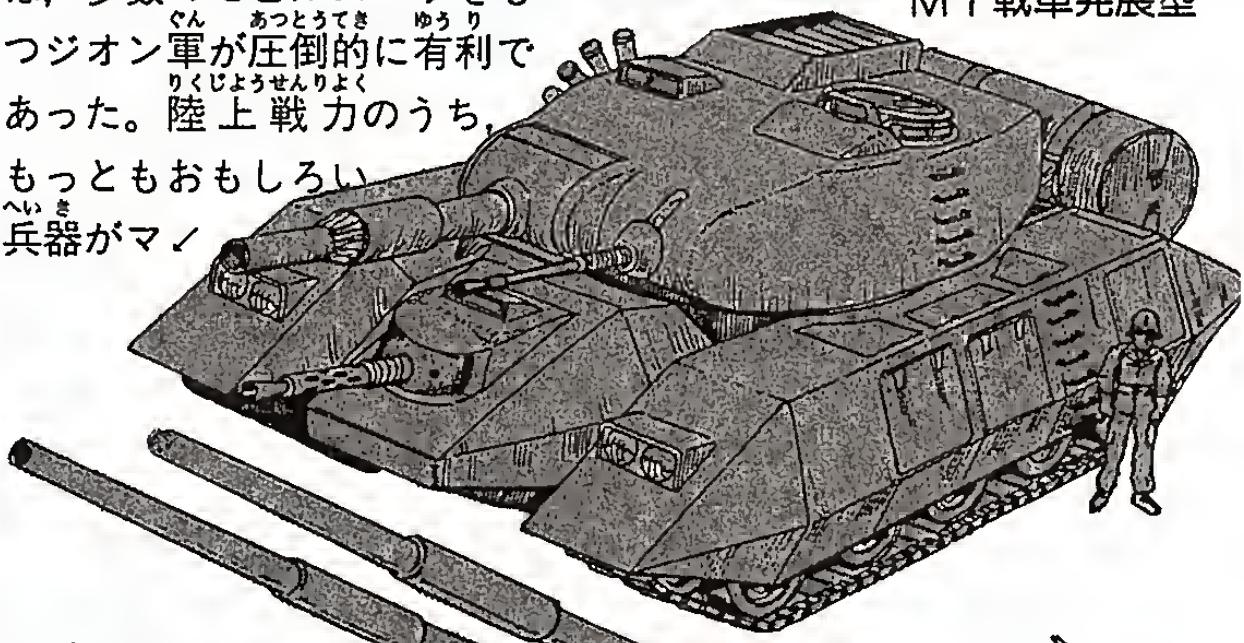
陸上兵力

ジオン軍M1戦車



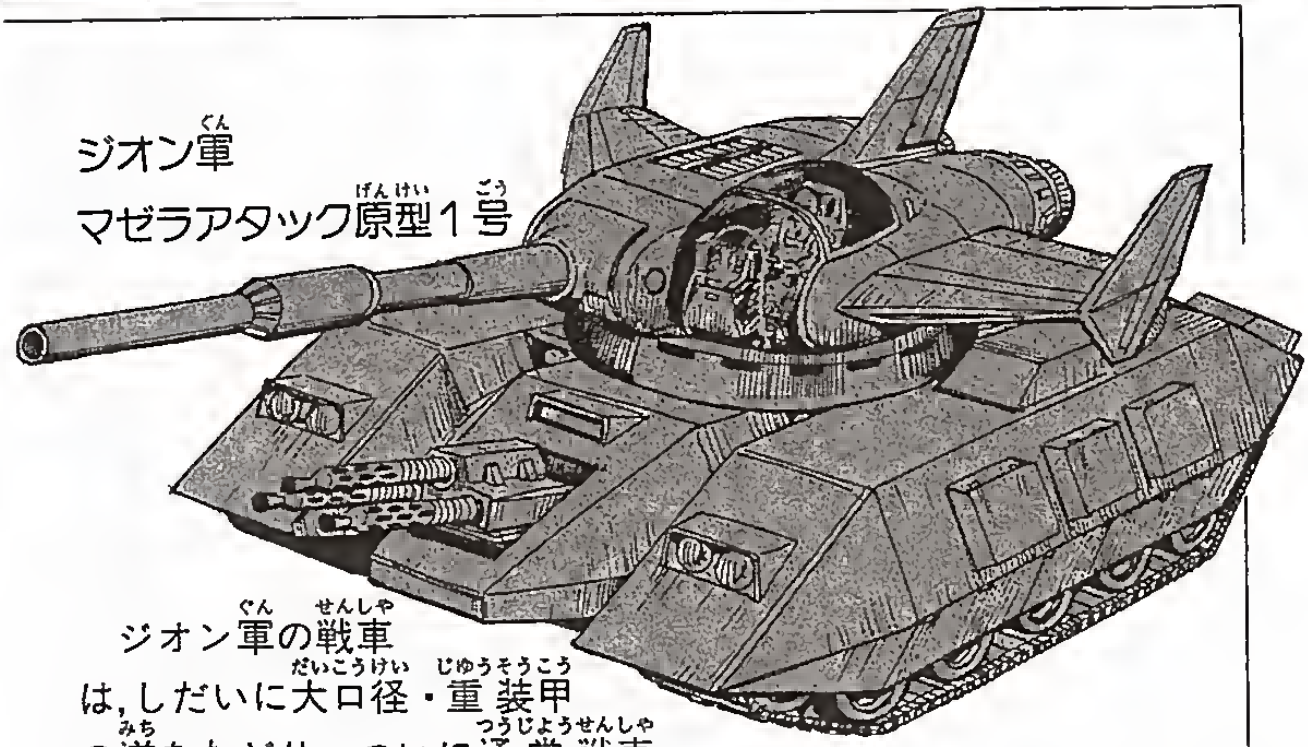
陸上戦力は，多数のモビルスーツをもつジオン軍が圧倒的に有利であった。陸上戦力のうち，もっともおもしろい兵器がマ↙

M1戦車発展型



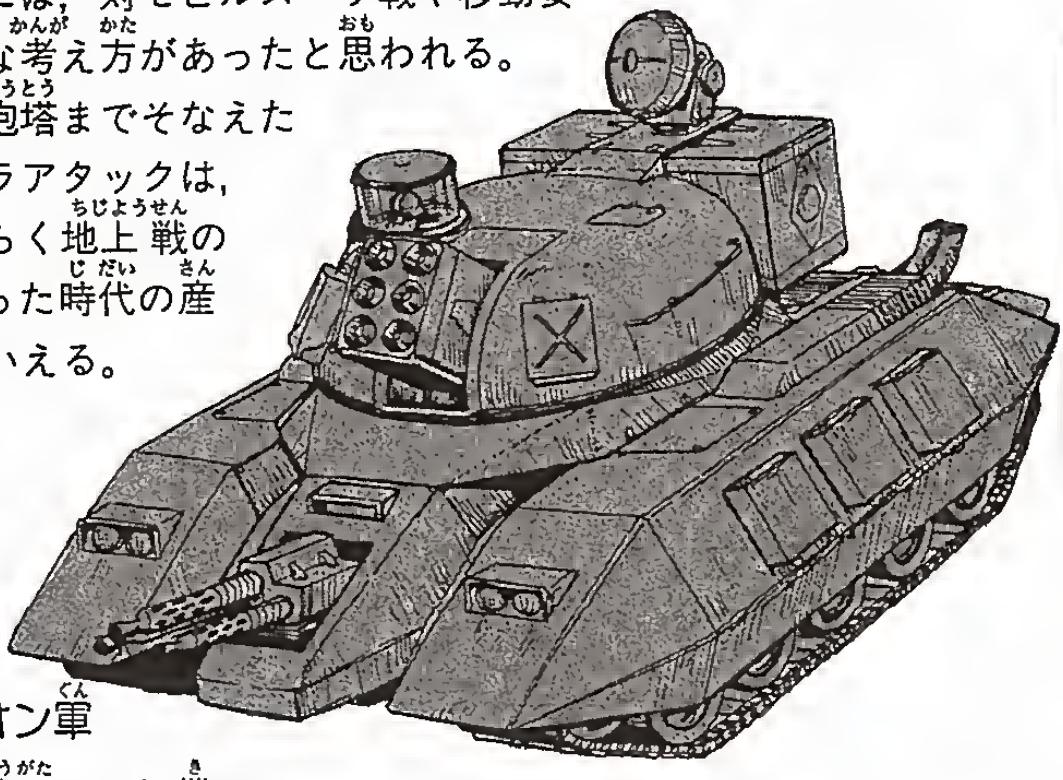
↙ゼラアタックである。ルーツはM1戦車であるが，こちらはきわだった特徴のある戦車ではない。

連邦軍
61式戦車



ジオン軍
マゼラアタック原型1号

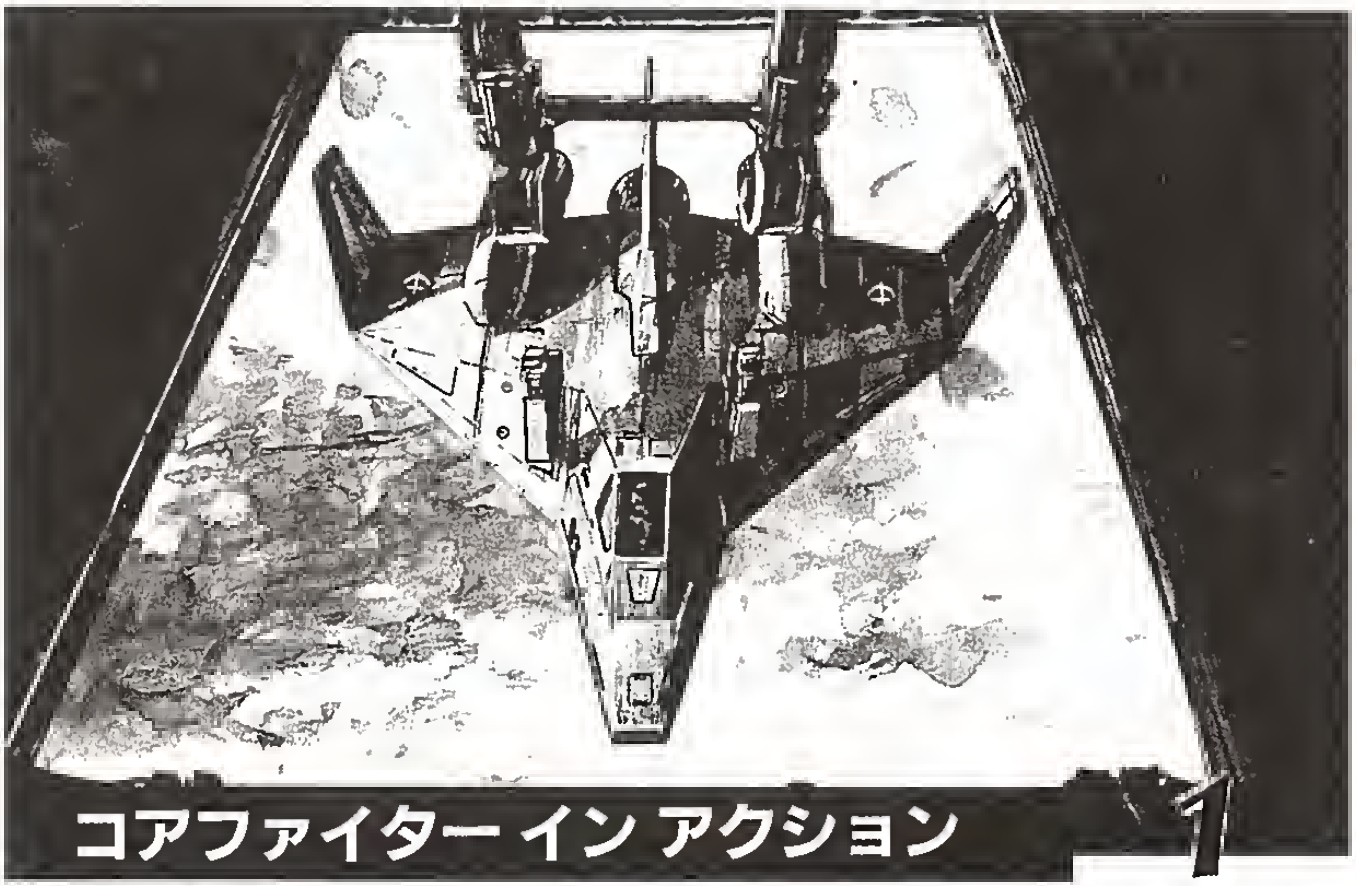
ジオン軍の戦車は，しだいに大口径・重装甲の道をたどり，ついに通常戦車の2倍もの大きさになっていった。このなかには，対モビルスーツ戦や移動要塞的な考え方があったと思われる。飛行砲塔までそなえたマゼラアタックは，ながらく地上戦のなかった時代の産物といえる。



ジオン軍
重装型テスト機

Action Graphic

連邦軍アクショングラフィック



コアファイター イン アクション

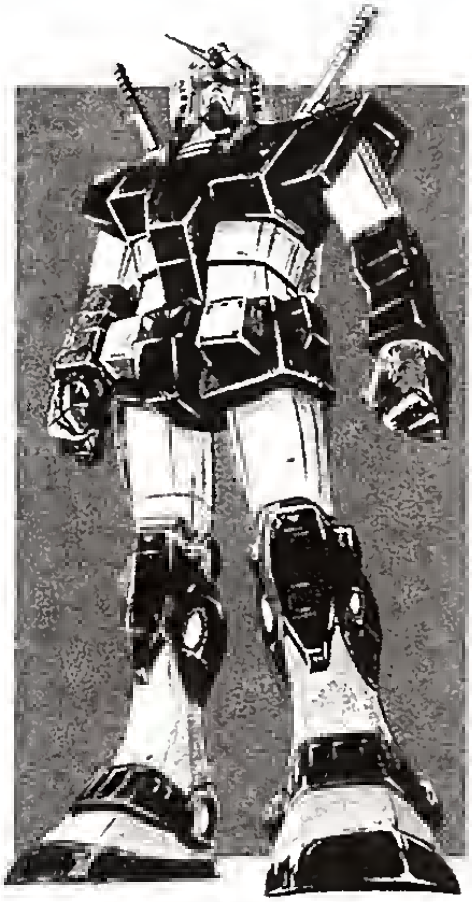
戦時中、連邦軍が各種の発表をおこなうさい、かなり多数のイラストを使用していた。これは軍の機密事項の流出防止のためで、写真の多くは戦後に公開されている。

このイラストは、大戦中期にジオン本国と地球攻撃軍の補給路をたつために、フライダーツ高高度戦闘機を発進させるところである。母機は、連邦軍最大の重爆撃機デプ＝ロッグタイプを空中母機に改修したものである。イラストからでは詳細はわからないが、高度一万メートルくらいからの発進と思われる。

アールエックス
RX—78—1
プロトタイプガンダム

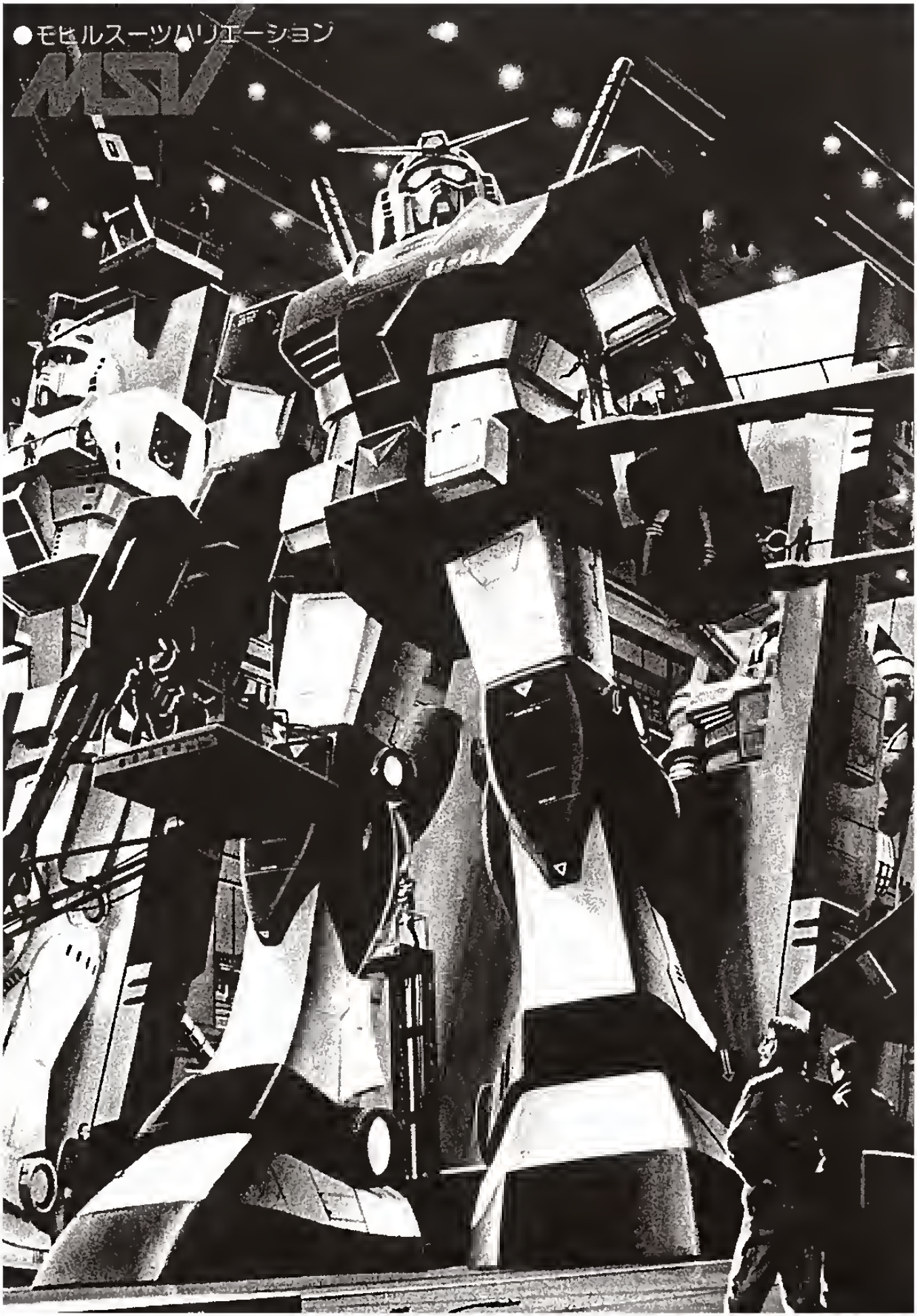
この写真は、戦後、連邦軍広報部より出版された大戦史のうち、RXモビルスーツの部にみられるものである。中央のRXモビルスーツが、ロールアウト直後のRX—78—1の最終号機である。左にあるのは、装甲の形状からみて、RX—78—2の初号機と思われるが、重要なポイントが陰になっているため、確認されてはいない。後方にはRX—77—2があるが、何号機であるかは不明である。撮影の日時・場所については公表されていないが、状況からみるかぎり、宇宙世紀七九年七月下旬、ジャブローの特殊兵器プラント内と思われる。

連邦軍が約半年の研究でMS—06FザクⅡをしのぐ RX モビルスーツを完成させえたのは、CAD＝CAMシステムとよばれる、コンピューター制御の全自動設計・製作システムがあったからである。コンピューターを設計補助のみにまわし、FMSとよばれる可変生産システムにたよったジオン軍は、ここで差をつけられたのである。RX—78—2の設計も、時間的にみて、RX—78—1の試験データをフィードバックしたものではなく、コンピューターによるシミュレーションをもとにおこなわれたと思われる。



●モビルスーツバリエーション

MSV



FA—78—1 フルアーマーガンダム

エフエー

FA—78—1は、最高機密事項として、戦時中はいっさい公表されることがなかった。これは終戦直後もおなじであったが、時がたつにつれて制限もすこしずつゆるくなり、写真集や戦史記録集などが出版されるにつれて、フルアーマーガンダムの写真も散見されるようになった。

この写真は、連邦政府発行の戦史記録集のなかにみられるものだが、実写ではなく、コンピューターシミュレーション画面のハードコピーである。解説はいっさいつけられていないが、画面内容からみて、FA—78—1とジオン軍のMSN—02ジオングの総合性能比較テストだと思われる。

専門家のなかには、この絵は、戦後に広報を目的としてつくられたものだという人たちがいる。その理由として、連邦軍がMSN—02や、バックにうつっているドロス級汎用宇宙空母の設計図や実戦データを入手したのは、戦後かなりたってからであることがあげられている。連邦軍はこの発言を無視しているが、戦時中にジオングやドロスのデータを入手していたことを証明するものはなにもなく、くるしい立場はかくせないようだ。

●モビルスーツバリエーション

MSV

FA—78—1 フルアーマーガンダム

エフエー

この写真は、連邦軍戦勝一周年記念に出版された、一連の記録集に掲載されたものである。今次大戦で連邦軍の切り札であったRX—78に、FSWSとよばれる増加ウェポンシステムを搭載したものである。連邦軍としては、このFA—78—1一機で、在来の宇宙戦艦一隻の戦力を有すると自負しているが、なにぶん、実戦参加例はおろか、実用試験データすら満足に発表されていないのでは、専門家でもどのように判断してよいか、意見がわかれるところである。

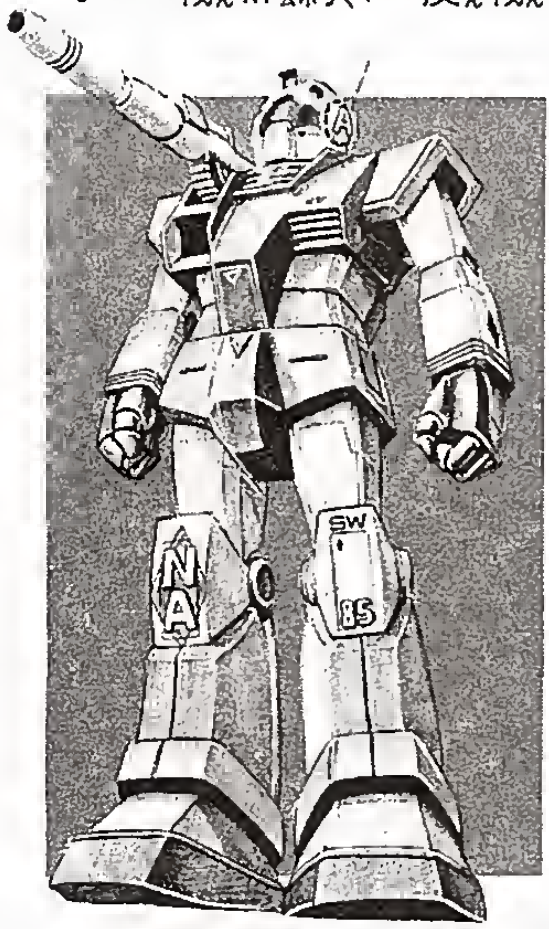
写真の内容から判断できることは、中高度衛星軌道において、FA—78—1の総合性能試験がおこなわれているものと思われる。搭載された武器類は実物らしく、稼働状態にセットされている。後方および下方にいる艦艇は、この試験の支援母艦や指揮艦、それとFA—78—1のチェーサーおよび作業艇だと思われる。また、周囲に哨戒機や護衛機がみられないのは、この試験が戦後におこなわれたからであるといわれている。もっとも、コンピューターシミュレーションによるグラフィック画面という可能性もある。戦後になってからも、じっさいにFA—78—1の研究ないし実験がつづけられたかは、さだかでない。

なお、FA—78—1フルアーマーガンダムの基本塗装は、機体本体がFAグレーとよばれるダークグレー、増加ウェポンシステムがFAグリーンとよばれるダークグリーン系がもちいられている。これは、有視界戦闘時に、敵から発見されにくいことを目的とした低視認塗装である。

FA-78-1
38
38

アールジーシー
RGC—80 ジム GMキャノン

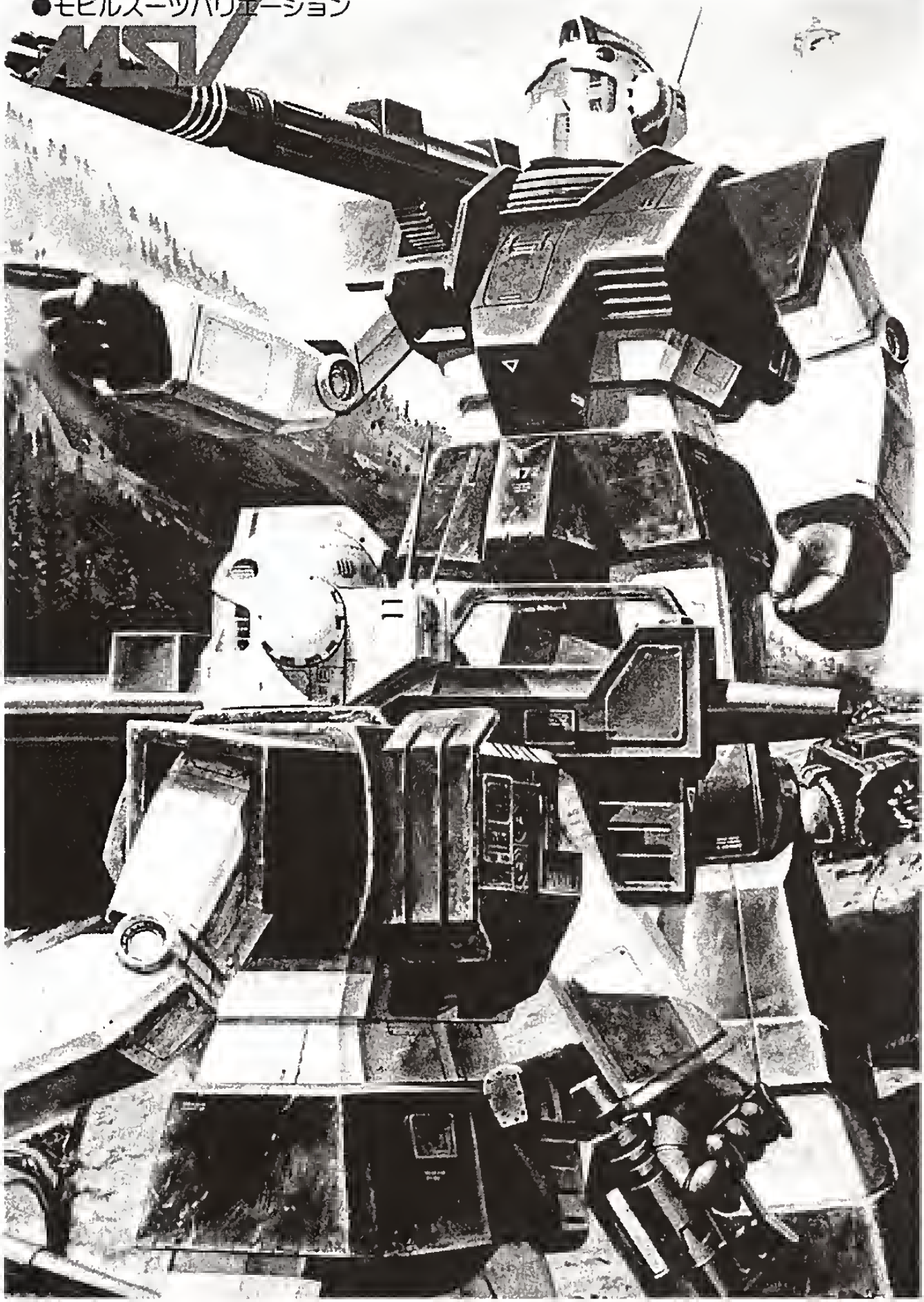
RX—77タイプの量産型であるRGC—80がはじめて実戦参加したのは、大戦後期の北アメリカ戦線であった。当時、北アメリカ戦線では、連邦軍最新鋭艦ホワイトベースとRXモビルスーツの連係プレーにより、強攻策にでたジオンの地球攻撃軍を司令部ごと撃破していた。これに乗じて、連邦軍アラスカ方面部隊が温存していた戦力のすべてを投入し、ジオン軍にたいし反攻作戦にでている。RGC—80が戦線に投入されたのは、反攻が開始されてから約一か月後で、六機のRGC—80がRGM—79との混成部隊を組んだ。この写真は戦時中に公表されたもので、キャリフォルニアベース攻防戦の直前のものと思われる。

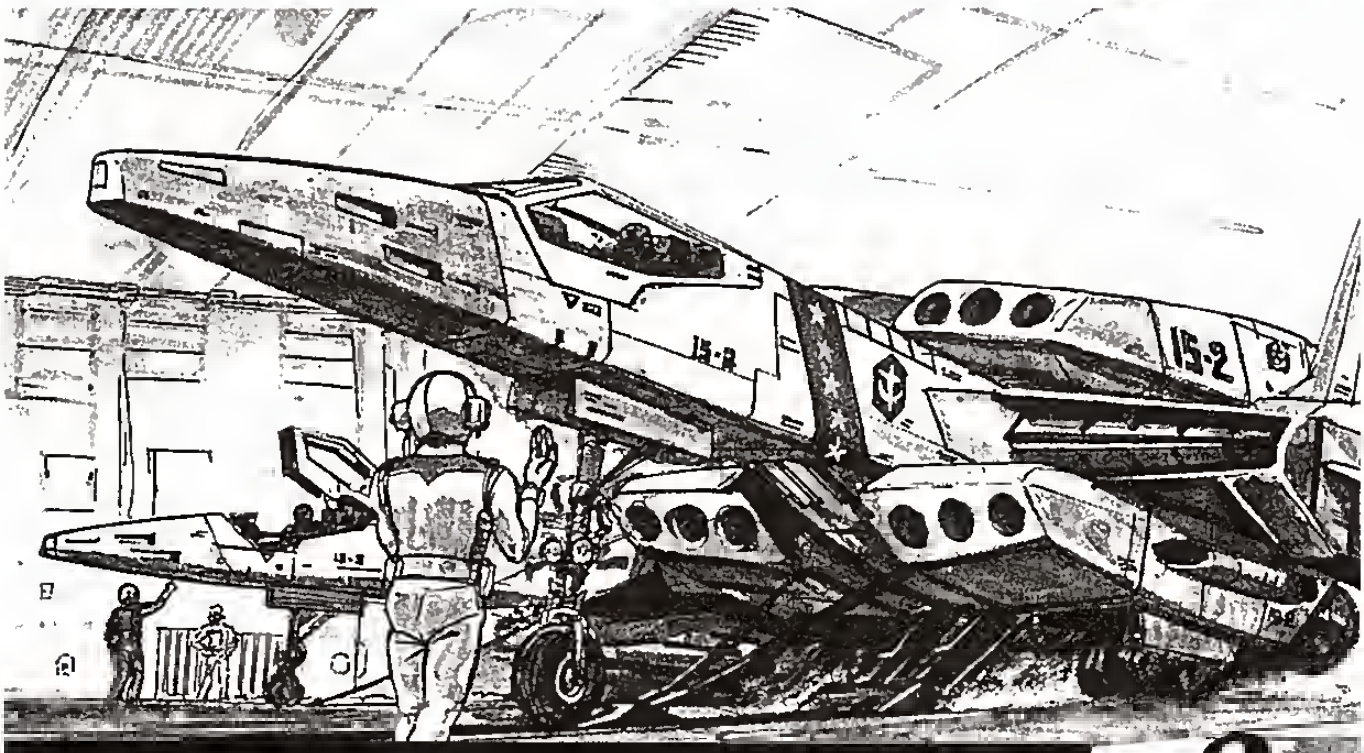


場所は、カスケード山脈南部のシャスタ山付近だといわれている。

RGC—80の塗装は量産初号機とおなじだが、これは、慣熟訓練終了直後に実戦配備されたために、再塗装する時間がなかったためだろう。現在、よく知られるRGC—80のウインター迷彩は、キャリフォルニアベース攻防戦以後、終戦時まで使用されていた。また、同様の塗装は、RGM—79にもほどこされていたといわれているが、確認されてはいない。

●モビルスーツバリエーション





コアファイター イン アクション 2

コアファイターバリエーションのなかでは、さきのフライダーツと同様に発表されたイラストである。ただ、時期や場所についての発表はなされていない。唯一発表されたのは、宇宙艦から迎撃発進準備シーンということだけである。手まえのFF—S3は、すでにブライドルとリニアカタパルトシャトルの固定が終了し、カタパルトオフィサーの発艦指示をまっている。後方の機はつぎの発進機であり、チェックがおこなわれている。この艦の艦名やハルナンバー（艦体番号）、等級などの発表はないが、ハンガーデッキが広く、密閉型であることからみて、改コロンブス級の補助宇宙空母のいずれかと考えられる。人によっては、この改コロンブス級を、一番艦の艦名から、アンティータム級とよんでいる。なお、このイラストがかかれたのは、大戦中期から後期にかけての時期であると思われる。

MILITARY COSTUME & SMALL ARMS COLLECTION

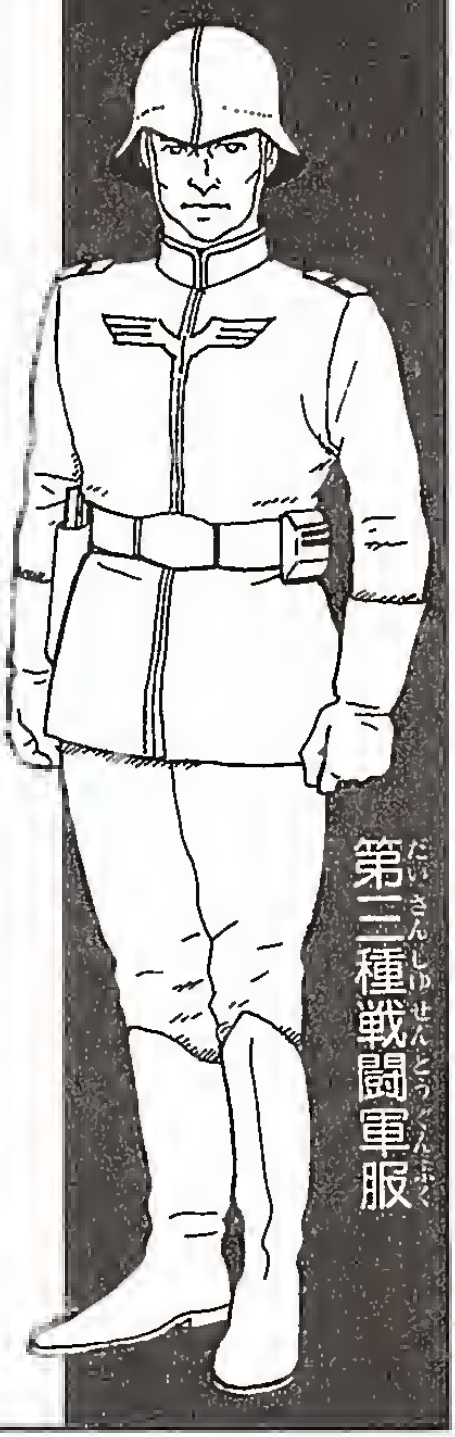
ジオン軍 軍服

軍服は、非戦闘員である民間人と、軍人を区別するため着用する。機能的であることが要求されるが、ステータスシンボル的な意味あいも強い。

軍服には，士官と兵の別や，着用地域によってさまざまなタイプがある。今次大戦では，ジオン軍に多くの軍服のバリエーションがみられた。

一般下士官用

士官用軍服には、戦闘服から、公式の場で着用する礼服まであり、着用には記章をふくめて、こまかい規定があった。



第三種戦闘軍服

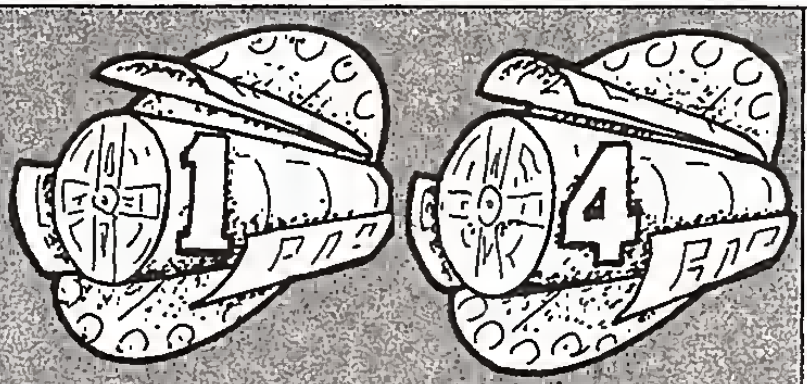
野戦コート着用時

AFRIKA

記章

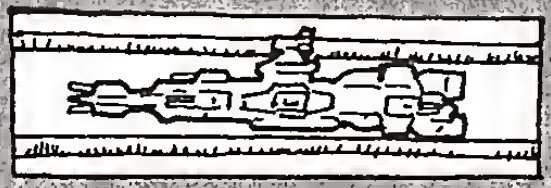
アフリカ戦線
アームバンド

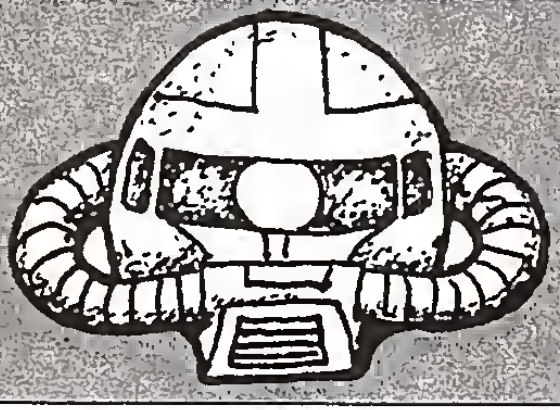
北アフリカ地区に駐留した部隊のみに使用がみとめられたもの。



コロニー派遣部隊章

開戦前後にジオンに入国した，ほかのコロニーの兵士たちの部隊で使用された。





戦艦撃沈章

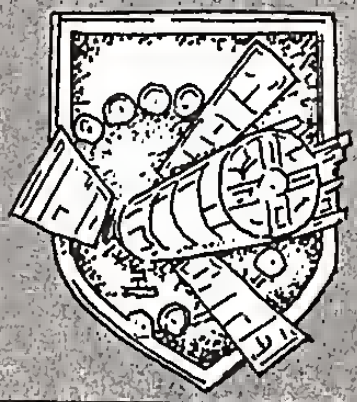
モビルスーツで戦艦を撃沈したパイロットにおくられるもので，黒地に銀でししゅうされていた。1隻につき1本。右ひじ上につける。

モビルスーツパイロット章

正規のモビルスーツ操縦課程をおえたパイロットが着用した。右胸につける。色は兵士と下士官が銀，士官は金色である。

一週間戦争従軍章

開戦時のコロニー制圧およびブリティッシュ作戦に参加した将兵にくばられたもの。右腕につけるワッペンであった。



ルウム戦役従軍章

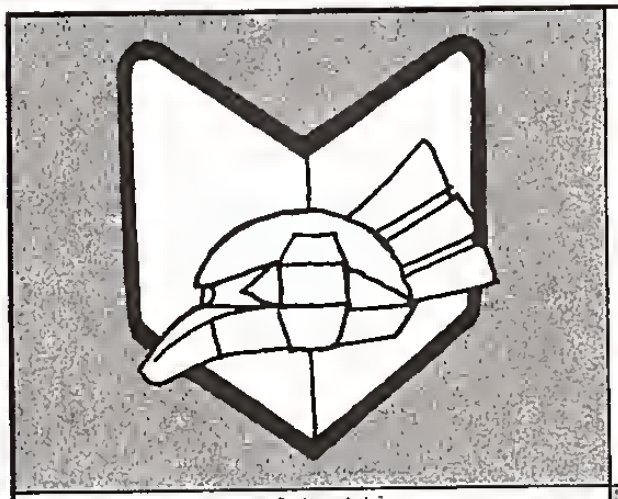
一週間戦争従軍章とおなじで，ルウム戦役に参加した正規のジオン軍将兵にくばられた。右腕につけることになっていた。

降下作戦従軍章

地球に降下した地球攻撃軍の第1～4地上機動師団と，他の実戦部隊の将兵にあたえられた。真鍮のレリーフで，右胸ポケット下につける。

モビルスーツ白兵戦章

モビルスーツによる戦闘に参加したパイロットにあたえられた。銅が15回以上，銀が30回以上，金が50回以上で，右胸ポケット上につけた。

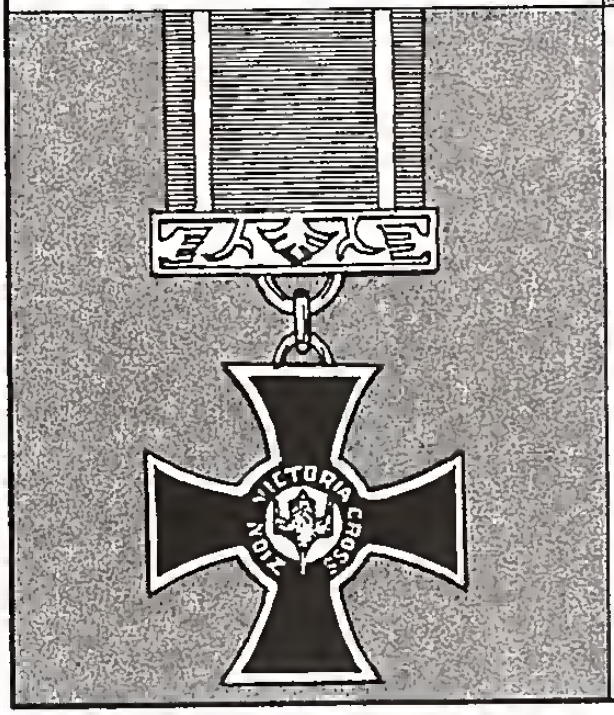


年少モビルスーツパイロット章

大戦末期に速成教育をうけたモビルスーツパイロットにあたえられたもの。彼らがMS—14を乗機としたことから，俗に〝ゲルググ初心者マーク〟とよばれていた。

ジオン勲功大章

ジオン軍最高級の勲章である。1等と2等があり，これをあたえられた者は，ジオン国最高の英雄といえる。大戦中に，わずか数人の者にあたえられたのみである。



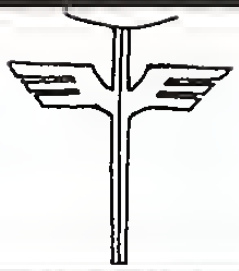
ジオン勲功十字章

個人で，戦闘に多大な功績があった者にあたえられる。1級から3級まであり，左のものは1級である。大戦中期あたりまでは，エースパイロットや優秀な艦長・部隊指揮官にあたえられた。のちに，授賞規定にあえば，民間人にもあたえられるようになった。

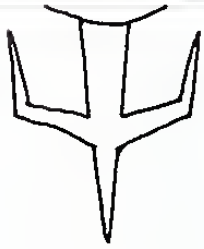
階級章

ジオン軍の階級章は，えり章，軍服(第２種のみ)とマントに，それぞれ標示するよう義務づけられていた。黒の地に黄色が基本だが，将官のみ金色を使用する。

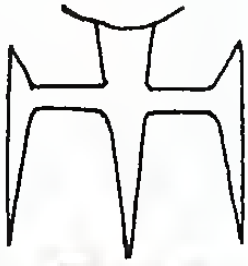
軍服



兵



少尉・中尉

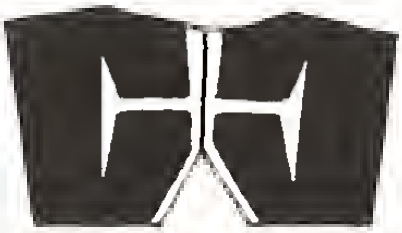


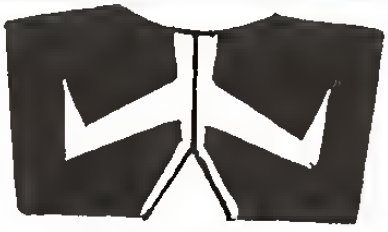
上級中尉

大尉

上級大尉

マント





軍服	マント
少佐	
中佐	
ガルマ＝ザビ大佐	
参謀本部つき大佐	

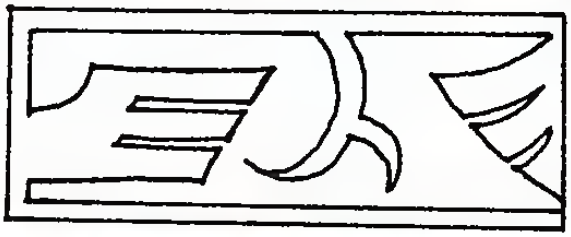
准将	
少将	
ドズル中将	
ギレン大将（総帥）	
デギン公王	

尉官

佐官

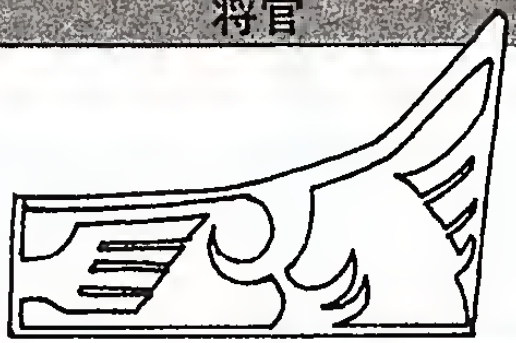
えり章

えり章は階級をあらわすもので，6ランクにわかれている。色は基本的に赤地に黄色のししゅうがほどこされていた。将官と公王は，金糸のししゅうとなっている。なお，尉官であっても部隊長の場合は，特例として佐官用のものを使用していた。

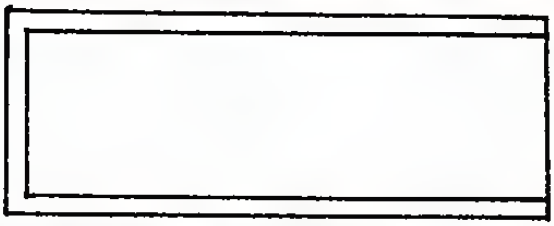


将官

兵

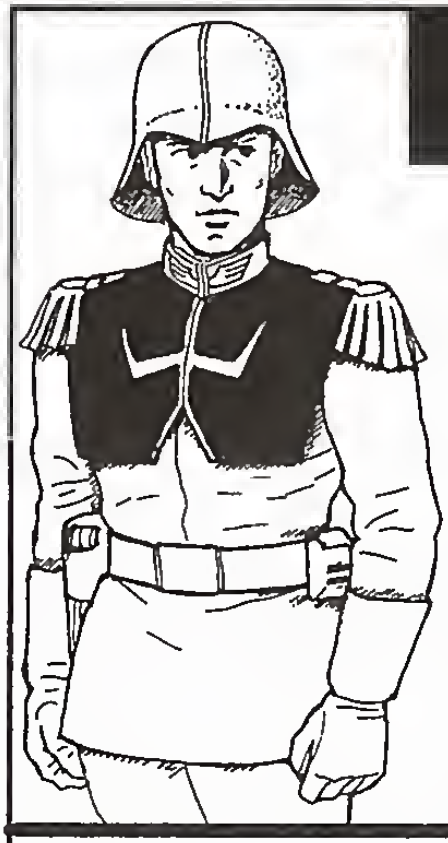


公王

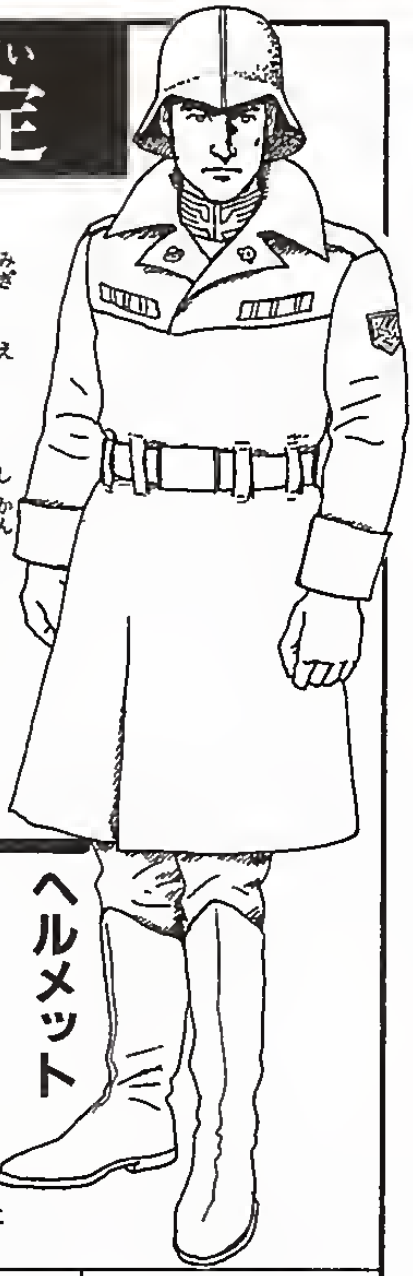


下士官

軍服規定



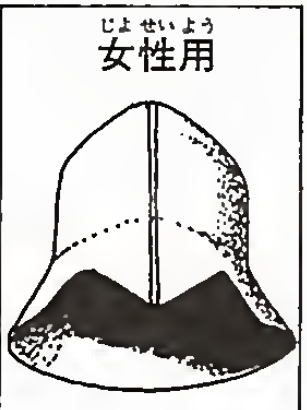
右の絵は、士官のモビルスーツパイロットのものである。コート着用時に、パイロット章と一週間戦争従軍章をつけている。左の第三種戦闘軍服では、記章などはつけないのがふつうであった。



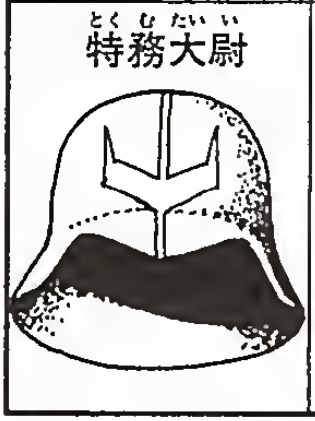
ヘルメット

ヘルメットは、個人のこのみで、特注がゆるされていた。

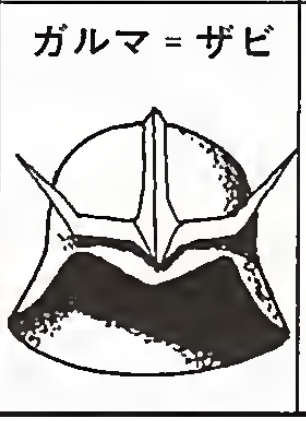
将校用(一般)



女性用



特務大尉

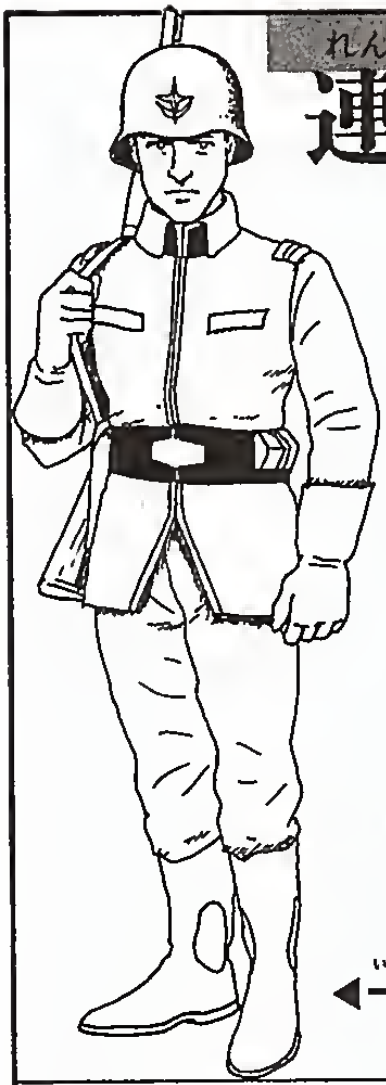


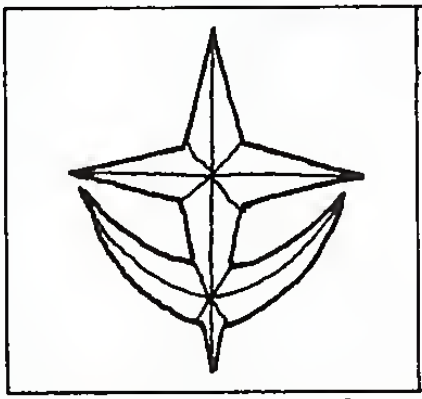
ガルマ＝ザビ

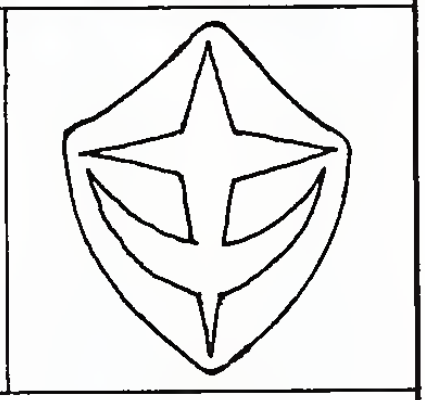
キシリア＝ザビ

シャア＝アズナブル

連邦軍 軍服規定



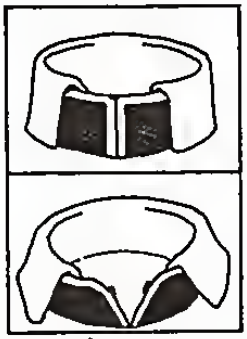




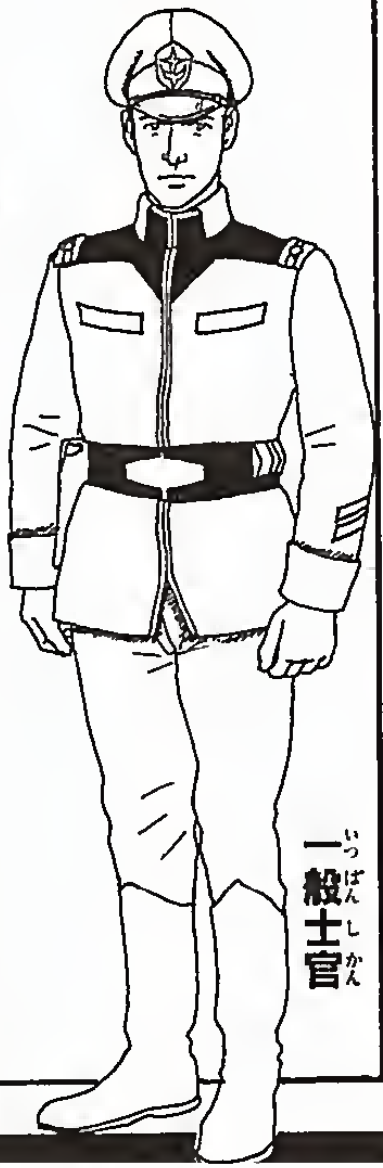
▲ヘルメットマーク

連邦軍の軍服は，20年以上もおなじデザインで，地域別用のものも素材がちがうだけで，デザインはおなじである。

◀一般兵士



公式の場以外では、えりをあけたまま軍服を着るのもみとめられていた。



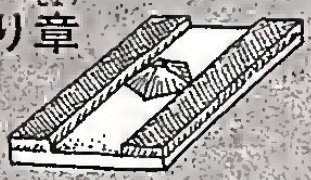
一般士官

少年予備役兵章

年功章

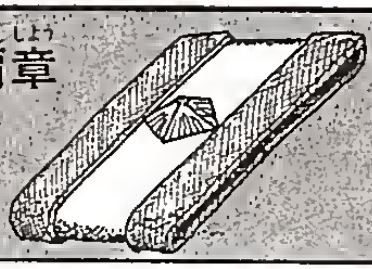
階級章

えり章



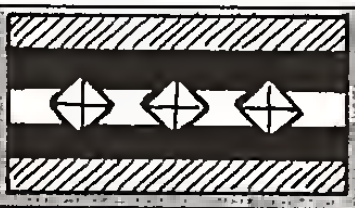
メタル製で，着色されている。

肩章

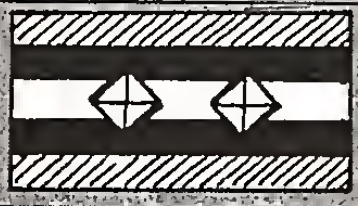


布に色糸のししゅう。中央の星は金属。

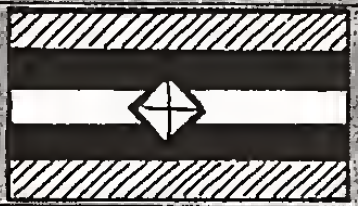
将官



大将



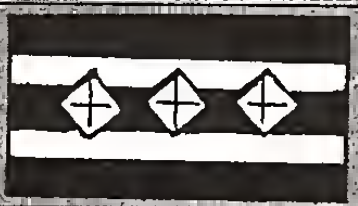
中将



少将

連邦軍の最高階級。階級章の色は，えり章と肩章はおなじで，銀地に青のストライプが2本，中央の星が金色となっている。大将の上に長官がいるが，武官ではないので階級章はない。

佐官



大佐

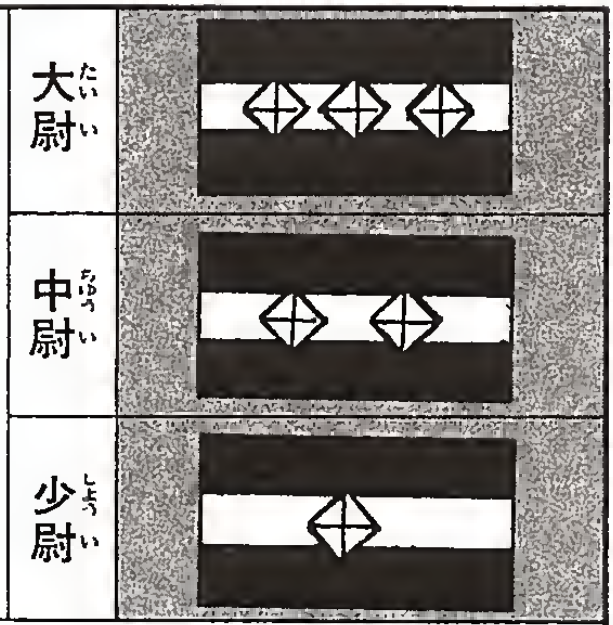
中佐

少佐

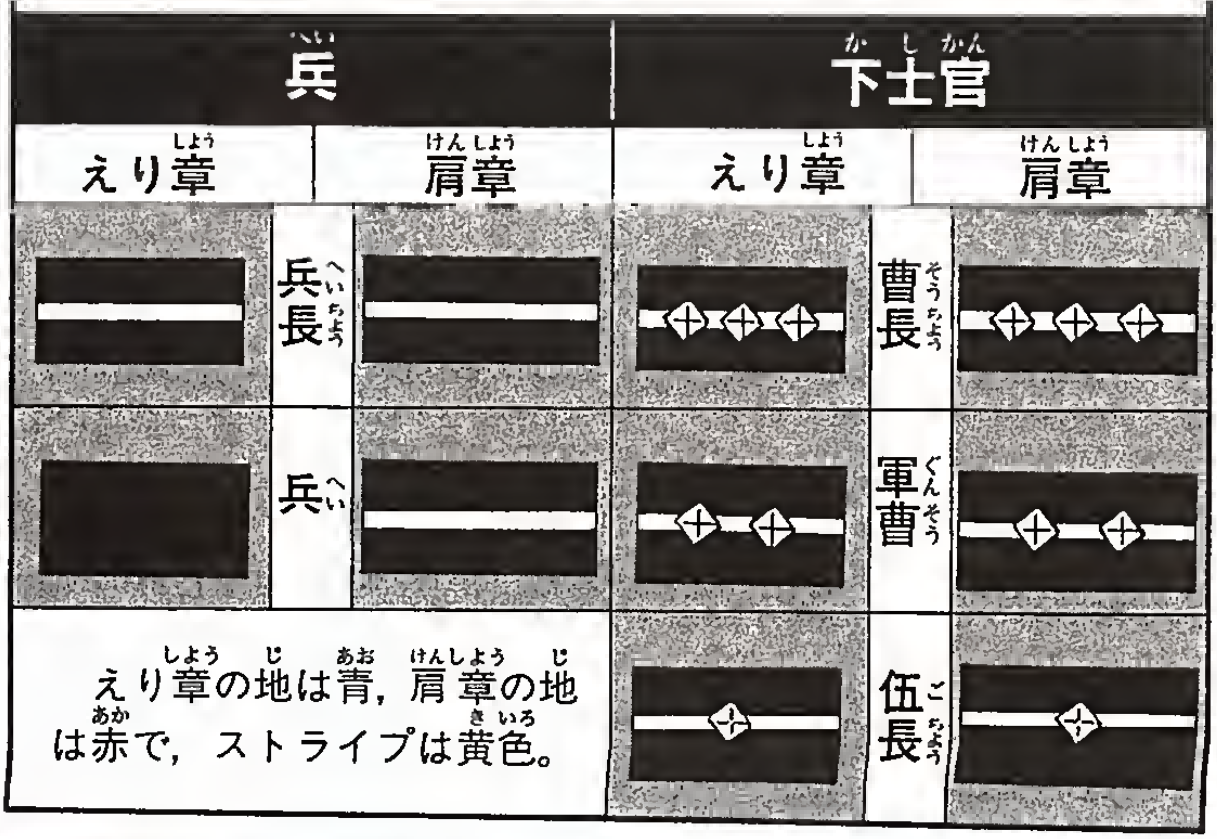
艦長や大隊長の階級で，えり章と肩章はおなじデザイン。えり章は青地に，2本のストライプと中央の星が金色。肩章は地色が赤になるだけで，ストライプと星はおなじ金色である。

尉官

士官としては下級であり，パイロットなどが多い。えり章と肩章は同一デザイン。色も佐官とおなじである。ただし，ストライプは幅の広いもの1本だけである。



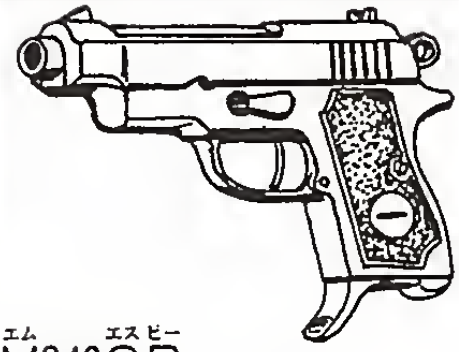
連邦軍士官階級章は，えり章と肩章のデザインに差がない。色は，将官以外，地色が青か赤かのちがいしかない。これは，下士官もおなじ。



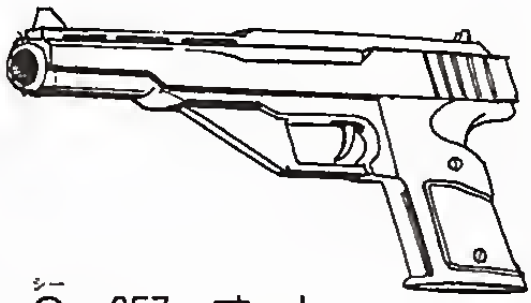
えり章の地は青，肩章の地は赤で，ストライプは黄色。

拳銃

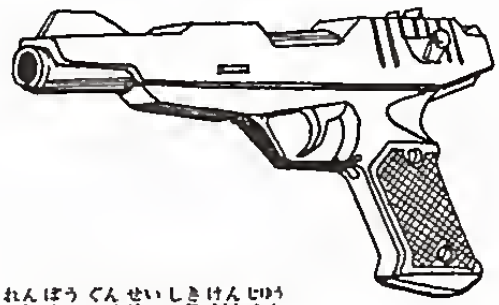
K－38
リボルバー(市販モデル)



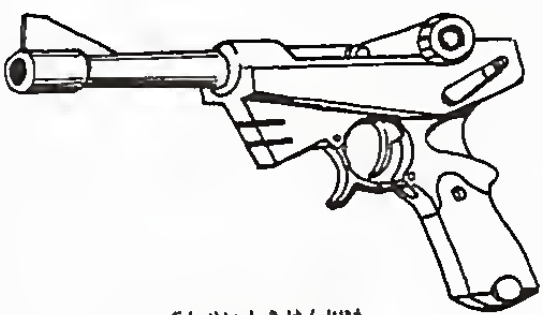
M840SP
オートマチック(市販モデル)



C－357　オート
マグナム(市販モデル)



連邦軍制式拳銃
M－71



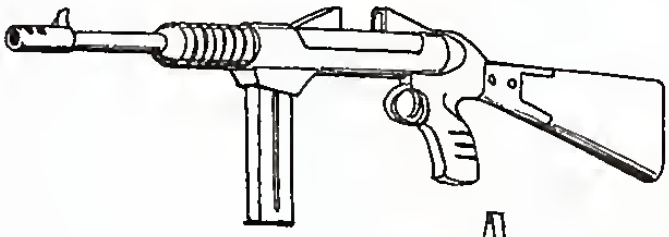
ジオン軍制式拳銃
ナバン61式

今次大戦に使用された両国の制式拳銃は，ともにオートマチックであるが，連邦軍のものは宇宙空間でも使用できた。民間人もライセンスをとれば，自由に拳銃をもてるが，護身用より競技用にもつ人が多かったようだ。

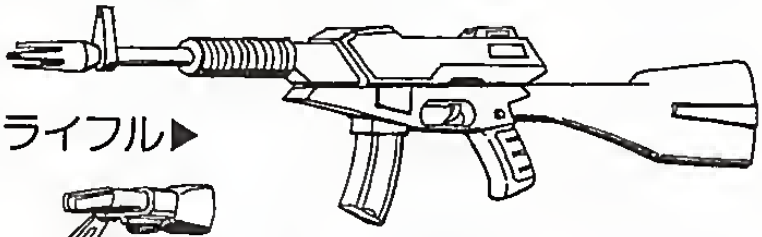
ライフル

今次大戦でライフルというときは，ＳＭＧやハンドレーザーガンなどもふくんでいる。制式銃は，連邦軍は１種類だけだったが，ジオン軍では６種類以上あったようだ。

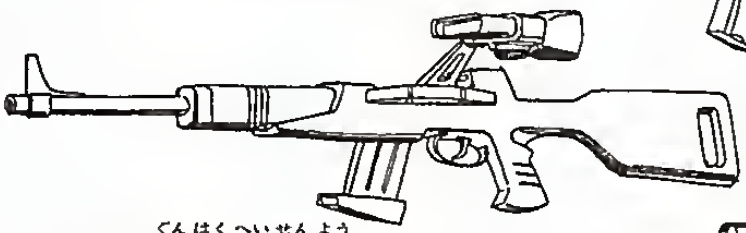
▲ジオン軍白兵戦用SMG



◀ジオン軍タイガー70—R　SMG

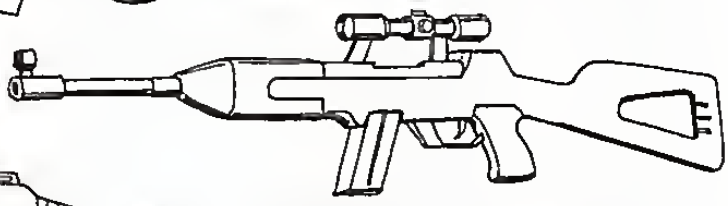


ジオン軍無反動ライフル▶

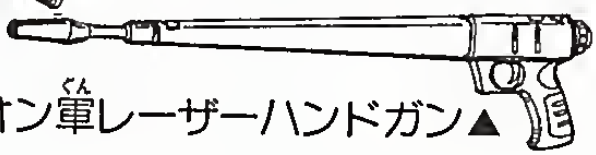


◀ジオン軍スナイパーライフル

ジオン軍白兵戦用自動小銃▼



▲連邦軍制式自動小銃



ジオン軍レーザーハンドガン▲

構成/小田雅弘・石川秀一・小沢勝三
メカニカルデザイン・イラスト/大河原邦男
イラスト/上田信・増尾隆幸・石橋謙一・米田仁志・開田裕治
プラモ製作/小田雅弘・高橋昌也・川口克己・下田一・大河原邦男
レイアウト/藤森尚隆

協力/(株)バンダイ

復刻版装丁協力/エイティ

講談社コミックスKCDX　第2177号
©創通エージェンシー・サンライズ

〈復刻版〉
機動戦士ガンダム モビルスーツバリエーション❸
連邦軍編

2006年7月26日　第1刷発行
2006年9月25日　第2刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者　五十嵐隆夫
発行所　株式会社講談社
〒112-8001東京都文京区音羽2-12-21
☎　編集部　東京(03)5395-3457
販売部　東京(03)5395-3608
印刷所　共同印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
Printed in Japan　N.D.C.726　193p　15cm

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部(電話03-5395-3603)あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせはコミックボンボン編集部あてにお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-372177-9

機動戦士ガンダム

《復刻版》

MSV モビルスーツバリエーション

3 連邦軍編

G-3

テクニカル&ヒストリー

機動戦士ガンダム

《復刻版》

MSV モビルスーツバリエーション

3 連邦軍編

テクニカル&ヒストリー

《復刻版刊行に寄せて》

本書は1984年講談社ポケット百科シリーズとして、MSVを中心とした当時のガンダム研究の成果を3分冊で集大成した『機動戦士ガンダムモビルスーツバリエーション』の完全復刻版です。第1次MSVムーブメントの全貌を語る貴重な原典資料として、ファンの皆様のお役に立てれば幸甚です。

復刻再刊に際し、印刷原版がすでに処分されていたため、やむをえず原本からの複写とさせていただきました。表記についても明らかな誤記、誤植以外は手を加えておりませんので、現在公式とされている設定やデータとは一部相違点があることをあらかじめおことわりさせていただきます。

MOBILESUIT VARIATION ③

9784063721775

1929979008000

雑誌 46295-77

ISBN4-06-372177-9

C9979 ¥800E (0)

講談社

定価：本体800円（税別）

連邦軍の超兵器のすべてを紹介する、MSVシリーズ完結編。ガンダムとホワイトベース開発のV作戦の全貌が、いまあかされる！

©創通エージェンシー・サンライズ　カバーイラスト／上田　信

KCDX

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション

復刻版

3

連邦軍編

講談社

KCDX

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション

復刻版

3

連邦軍編

講談社